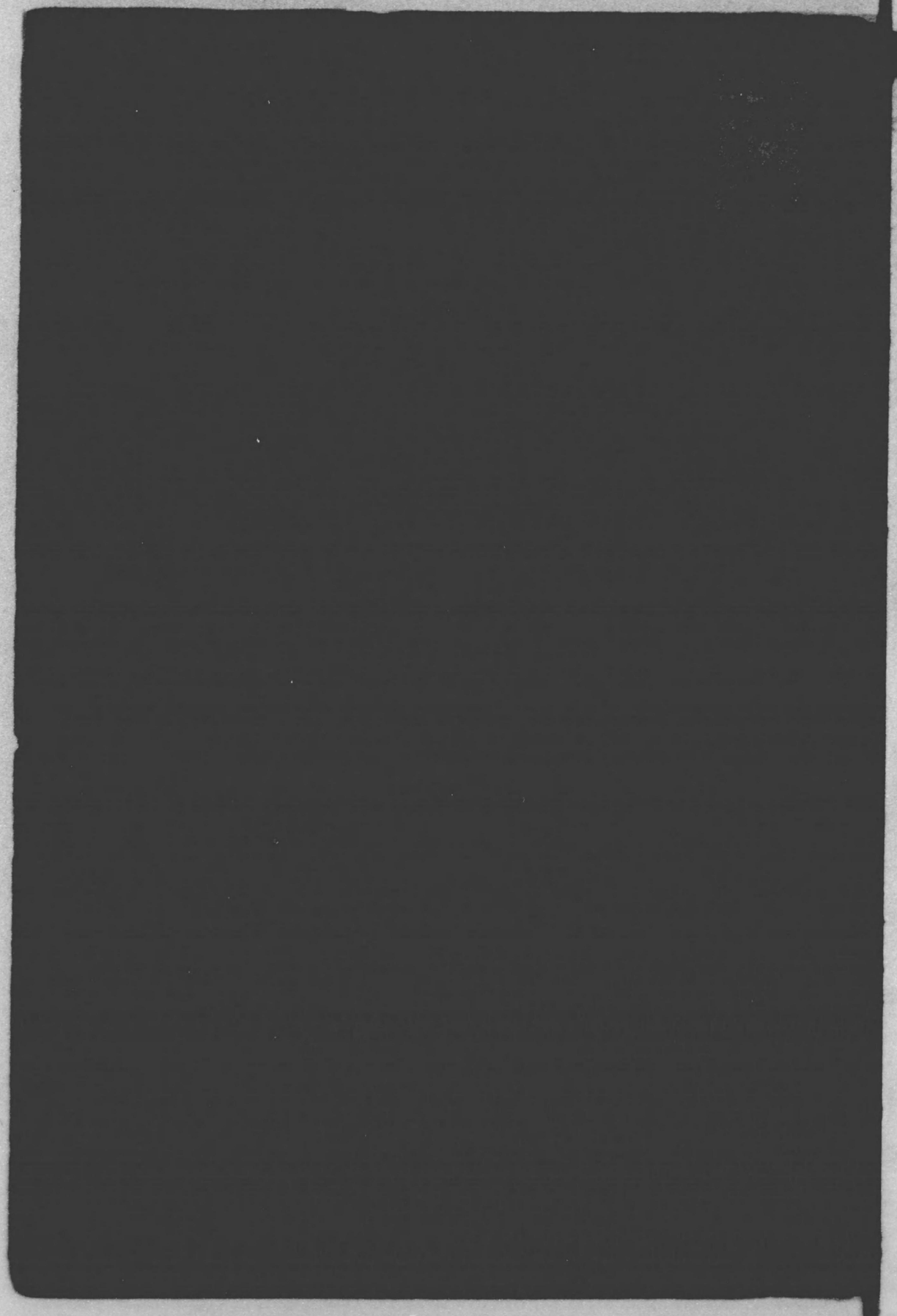


0049692000

0049692-000

特274-609

新修漢文

明治書院・編

明治書院

巻5

第2版
昭和7

AHJ

特274
609

清修文獻
（第二輯）
五卷
教科書類
書

609

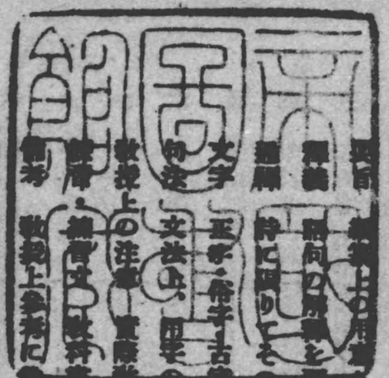
緒言

一、本教授資料は教授者諸賢の實際教授の上に參考資料として多少とも有効ならしめんと欲し、親切と正確とを第一義として編纂したり。

二、資料の項目を左の十一項に分ちて記述せり。

作者　作者の時代を掲げたり。

出典　出所とその書の解題とを掲げたり。



評釋　評釋の出所を明にせり。

三、作者・出典は各卷を通じて一卷毎に初出の際に於て之を掲げ、以下は之を略せり。

四、解義・文字・句法等は必ずしも重出を避けず、教授上の便易を顧慮して各卷を通じて繁簡宜しきを得しめたり。

五、本資料編纂に就ては成るべく懇切と正確とを期したれども、編纂を急ぎたるため、思はざる過誤、活字の誤植等なきを保證し難し。深く編者の遺憾とする所なり。此等は他日之が修正改版を待まさるべし、幸に之を諒せよ。

昭和七・一一・一
帝國圖書

新修漢文（第二版）教授資料　目次

卷五

一　弘道館記……德川齊昭……一
二　孟子抄……德川光圀……一三
三　春夜宴二桃李園一序……李白……一六
四　諸葛孔明傳……二〇
五　前出師表……諸葛亮……二五
六　蜀相……杜甫……三四
七　小學抄……三六
八　留侯論……蘇軾……四一
九　經二下邳圮橋一懷二張子房一……李白……四五
一〇　袁州學記……李翺……四七
一一　師說……韓愈……五三
一二　論語抄……五八
一三　勸學歌……司馬光……六一
一四　重錦堂記……歐陽修……六三
一五　李氏山房藏書記……蘇軾……六七
一六　岳陽樓記……范仲淹……七二
一七　五律二首……七八
一八　范文正公文集序……蘇軾……八〇
一九　孟子抄……八五
二〇　柳子厚墓誌銘……韓愈……八八
二一　始得二西山一宴遊記……柳宗元……九七
二二　捕蛇者說……柳宗元……九九
二三　苛政猛二於虎一……一〇二
二四　傷二田家一……聶夷中……一〇三
二五　賣柑者言……劉基……一〇四
二六　送二薛存義一序……柳宗元……一〇七
二七　種樹郭橐駝傳……柳宗元……一一〇
二八　雜說……韓愈……一一四
二九　送二溫處士赴二河陽軍一序……韓愈……一一七
三〇　祭二十二郎一文……韓愈……一二一

○新修漢文の表紙に就て

東京ノ石川縣下ノ農家ニ於テ發見セラレタル者ニシテ、宋時ニ在リテ日ニ施行セラレタル醫書ナリト謂フ。
書中ノ序文ニ北海ノ孫氏ノ家藏醫書ヲ取リテ之ヲ校正シ、合計七十餘字、名ケテ二新修漢文一ト曰ヘリ。
倫字、命名意義所在ニ三十倫字ヲ增ス。今醫師ノ處方ニ用ヰラルル漢字ハ此ノ時ニ始マルト云フ。
明治四十四年十二月二十日印刷　同年十二月二十五日發行
著作兼發行者　東京市小石川區久堅町百八番地　三矢重松
印刷者　東京市小石川區久堅町百八番地　三矢重松
發行所　東京市小石川區久堅町百八番地　三省堂

版權所有

定價金貳拾錢

三一 左遷至二藍關一示二姪孫湘一…韓 愈…一二六
三二 眞元徴之二書……白 居 易…一二八
三三 香爐峯下新卜二山居一草堂初成 偶題二東壁一五首 其一……白 居 易…一三二
三四 送二兄弟下一歸上書……蘇 軾…一三三
三五 前赤壁賦……蘇 軾…一三九
三六 後赤壁賦……蘇 軾…一四六
三七 七絶二首……一五一
三八 陳情表……李 密…一五三
三九 五古二首……一五九
四〇 張中丞傳後序……韓 愈…一六五
四一 弔二古戰場一文……李 華…一七二
四二 七絶三首……一七八
四三 兵車行……杜 甫…一八〇
四四 孟子抄……一八三
四五 上二高宗一封事……胡 銓…一八九
四六 伯夷頌……韓 愈…一九七
四七 論語抄……二〇〇
四八 文天祥不屈……二〇二
四九 正氣歌……文 天 祥…二〇七
五〇 和文天祥正氣歌……藤 田 彪…二一四
五一 歸去來辭……陶 潛…二二〇
五二 孟子抄……二二八
五三 論語抄……二四一
五四 勸 學……二四七
五五 性 論……二五二
五六 大學抄……二五七
五七 中庸抄……二六四

附 錄

唐宋八大家文抄……二七五
孟子抄……二八八
池州翠微北亭記……曾 鞏…二九四
遷平原作……文 天 祥…二九八
記孔典籍……三〇〇

新修漢文（第二版）教授資料

巻五

一 弘道館記

德川齊昭　水戸侯治紀（所謂武侯）の第三子にして、通稱は敬三郎、字は子信、景山又は潛龍閣と號す。夙に勤王の大志あり。弘道館を興して、藩の文武を奬勵す。安政六年七月、大老井伊直弼と見を異にし、駒籠に幽閉せらる。後、水戸に歸る。萬延元年八月十五日薨す、年六十一。世に烈公といふは、新の人なり。明治三十六年六月正一位を贈らる。

烈公の教育精神　烈公の教育精神を授く。水戸學風の由來を知らしめ、「忠孝無二、文武不岐、學問事業不殊其效」の大精神を學ばしめ、以て修學の目的を明瞭ならしむべし。

【弘道館】　水戸第十一代の藩主德川齊昭が天保十二年七月に建てし學館なり。その當時は文武の二館・學寮・寄宿寮・演武場等悉く布して、規模頗る宏壯なりしも、戊辰の兵燹に罹り、今は玄關・書院・重門等の數字を存するのみ。明治八年その地を公園とせり。論語、衛靈公篇に「人能弘レ道」とあるに取りて名づく。朱註に「弘、廓而大レ之也、人外無レ道、道外無レ人、然人心有レ覺、而道體無レ爲、故人能大二其道一、道不レ能レ大二其人一也」とあり。

【者何】　疑を設けて問ひ質す時に用ふる語。本文は、自問自答の法を用ひたるにて、此の二字甚だ多し。公羊傳、隱公元年に「元年者何」何休の註に「據レ疑問レ所レ不レ知。故曰二者何一」とあり。

【人能弘レ道】　道を世に推し弘めて、天下の人に行はしむるは、人の力に因るなり、道の方より働きかくるに非ずとの意。能の字注意すべし。此の語は論語より取りし事、前の弘道館の條に言へり。會朱註を參看すべし。

序に言はむ、「弘道者何、人能弘レ道也。」の九字は、省略法を用ひたり。正しくは、「弘道者何、人弘レ道也」語云、人能弘レ道」とあるべきなり。然らずんば、能の字、用をなさず。

【天地之大德】　天地に本づける大道をいふ。中庸に「唯天下至誠、爲二能經二綸天下之大經一」朱熹章句に「經常也、大經者五品之人倫」とあり。卽ち大經とは、常に行はざるべからざる

大道の意にて、父子の親、君臣の義、夫婦の別、長幼の序、朋友の信、是なり。

【生民】 人類、人間。書經、旅獒篇に「生民保二厥居一。」とあり。

【不レ可二須臾離一者也】 須臾は頃刻（シバラク）の間なり。中庸に「道也者、不レ可二須臾離一也、可レ離非レ道也」

【弘道之館、何爲而設也】 館は、官衙・學校等、公共の目的に因りて、建てられたるもの。ここは弘道館は、何の爲に設立したかとの意。これ以下「此則館之所二以爲設一也」までは、弘道館建設の理由を説明するなり。

【上古】 神代のこと。

【神聖】 「カミ」のこと。ここは神神と説くべし。孟子、盡心下篇に「大而化レ之之謂レ聖、聖而不レ可レ知レ之之謂レ神」日本書紀巻一に「天先成而地後定。然後神聖生二其中一焉」とあり。

【立レ極】 則るべき道を立つるなり。建極に同じ。書經、洪範「皇建二其有極一」の疏に、「人君爲二民之主一、大自立二其有中之道一」とあり。極は大中至正の道をいふ。大中至正の道を立てて、人民に教へ給ひしなり。

【垂レ統】 王者が繼ぐべき統緒を後に垂るるをいふ。換言すれば、大業の基礎を定め、子孫をして承け繼がしむるなり。孟子、梁惠王下篇に「君子創レ業垂レ統、爲レ可レ繼也」とあり。

【天地位焉萬物育焉】 此の二句、立極垂統の結果をいふなり。神聖極を立て統を垂れられしに因りて、天は高く、地は低く、各、其の所を得、天に在りては、日月星辰、時序を誤らず、地に在りては、山崩れ水竭くるの患なく、世は誠に安泰なり。隨つて萬物皆時を得て、完全に生育を遂ぐとなり。此の二句中庸に在り。章句に「位者、安二其所一也」といひ、楊復所は之を解して「安、如レ無二三辰失レ序、山崩川竭之患一。」といへり。又章句に「育者、遂二其生一也」といひ、楊復所は「遂如レ無二兵亂凶荒・蛕癘・卵殈之厲一。」と說けり。

【其】 神聖の字を承け、神神をいへど、主として天皇を指す。

【照二臨六合一】 「照臨」は猶ほ「君臨」といふが如し。書經、堯典の疏に「照二臨四方一謂二之明一。」「六合」は天地四方をいふ。史記、秦始皇本紀に「履二至尊一而制二一一一」とあり。我が天皇が光華明彩なる聖徳をもて六合に君臨し給ひしをいふなり。

【統御】 「スベラサム」。韻會に「凡天子所レ止曰レ御、前曰二御前一、書曰二御事一、服曰二御服一、皆取レ一二四海之內一」

【宇內】 天が下なり。「宇」は淮南子、齊俗訓に「往古來今、謂二之宙一、四方上下謂二之宇一。」史記、秦紀に「皇帝明レ德、經二理宇內一。」とあり。原文、宇の字、寓の字に作る、古字なり。

【實詐以之】 實詐は、日本書紀に「アマツヒツギ」と訓す。天子の御位なり。周書、宣帝紀に「武歩二實詐一」とあり。「以之」は、新道を以ての義なり。無窮の字、易經、臨封象傳には、「君子以教思无レ窮」とあり。无は無に同じ。

【圖籙】 「クニガラ」漢書、成帝紀に「通二達圖籙一。」

【蒼生】 萬民をいふ。書經、益稷篇に「帝光二天之下一、至二于海隅蒼生一。」の傳に「光二天之下一至二于海隅蒼生一草木言二所レ及莫レ遠。」とあり。また晉書、謝安傳に「安石不レ出、其如二天下一何」と。國語にて「青人草」「民草」といふは之に本づく。

【蠻夷戎狄】 中國に對して四方の夷をいふ。東夷・西戎・南蠻・北狄なり。ここは、三韓の來貢、蝦夷末喎の歸化等をいふ。

【率服】 率は朔律の切、音「ソツ」。相連れだちて來り從ふなり。

【向背、拜奠に「蠻夷——」孔傳に「相率而來服」とあり。

【聖子神孫】 天皇の位に御き給ひし皇子皇孫をたたへていふ。書經、大禹謨に「帝德廣運、乃聖乃神」また韓愈平二淮西一碑に「——、繼二繼承一承於千古一」上古神聖の語に對して、聖子神孫といへる處、作歸の妙を見るべし。

【尙不二肯自足一】 尙はこれでもまだといふ意。神聖の立てられし道に因りて、實詐無窮、國體尊嚴、蒼生安寧、武狄率服等の功績を擧げられたれど、歷代の天皇は、これでもまだ十分なりと御滿足なさらずとの意。

子の御位なり。周書、宣帝紀に「武歩二實詐一」とあり。「以之」は、新道を以ての義なり。無窮の字、易經、臨封象傳には、「君子以教思无レ窮」とあり。无は無に同じ。

【圖籙】 「クニガラ」漢書、成帝紀に「通二達圖籙一。」

【蒼生】 萬民をいふ。書經、益稷篇に「帝光二天之下一、至二于海隅蒼生一草木言二所レ及莫レ遠。」とあり。また晉書、謝安傳に「安石不レ出、其如二天下一何」と。國語にて「青人草」「民草」といふは之に本づく。

【蠻夷戎狄】 中國に對して四方の夷をいふ。東夷・西戎・南蠻・北狄なり。ここは、三韓の來貢、蝦夷末喎の歸化等をいふ。

【率服】 率は朔律の切、音「ソツ」。相連れだちて來り從ふなり。

【向背、拜奠に「蠻夷——」孔傳に「相率而來服」とあり。

【聖子神孫】 天皇の位に御き給ひし皇子皇孫をたたへていふ。書經、大禹謨に「帝德廣運、乃聖乃神」また韓愈平二淮西一碑に「——、繼二繼承一承於千古一」上古神聖の語に對して、聖子神孫といへる處、作歸の妙を見るべし。

【尙不二肯自足一】 尙はこれでもまだといふ意。神聖の立てられし道に因りて、實詐無窮、國體尊嚴、蒼生安寧、武狄率服等の功績を擧げられたれど、歷代の天皇は、これでもまだ十分なりと御滿足なさらずとの意。

【樂取二於人一以爲レ善】 樂は好むの最も甚しきをいふ。人の長處を取りて我が短處を補ふを樂しむ義。孟子、公孫丑上篇に「大舜有大レ焉、善與レ人同、舍レ己從レ人、樂取二於人一以爲レ善」とあり。

【西土】 我が國より支那を斥していふ。

【唐虞】 唐は堯なり。堯初め唐(今ノ山西太原府)侯と爲り、後、高國に仰がれて天子と爲り、陶に都す。故に陶唐氏と號す。虞は舜なり。虞(今ノ山西蒲州府)の人なり。故に有虞氏と曰ふ。

【三代】 夏・殷・周なり。論語、衛靈公篇に「所民也、三代之所二以直道而行一也」とあり。

【治教】 人を治め民を敎ふるの道なり。今の政治敎育といふが如し。

【資二皇猷一】 「資」は助け成すなり。「皇」は君なり。「猷」は道なり、謀なり。「皇猷」は天皇の天下を治めたまふ大道なり。北史、牛弘傳に「皇猷遐闡、化覃二海外一。」唐書、戴至德傳に「仗二忠貞一、資二皇猷一。」とあり。

【無二復尙一焉】 この上にまた增し加ふべきなしといふ意。すべて物の理想通りになりし時に使ふ。論語、里仁篇に「好レ仁者無二以尙レ之」とあり。

【中世】 普通に奈良平安二朝をいへども、ここは佛敎渡來以後、

卽ち欽明天皇以降を指すが如し。

【異端邪說】 聖人の道と異端を異にする無說。論語、爲政篇に「子曰、攻二乎——一斯害也已」とあり。「邪說」は「ヨコシマ」なる說なり。孟子、滕文公下篇に「世衰道微、——邪行有作」とあり。宋史、道學傳に「辨二異端一闢二邪說一。」とあり。ここの異端邪說は、主として佛敎をさしていふ。

【蒙レ民】 民を欺くなり。孟子、滕文公下篇に「邪說誣レ民」胡明儒曰く「誣是欺罔意」

【俗儒】 見識淺く心卑しき學者。荀子、儒效篇に「其窮也、俗儒笑レ之」論衡に「——好二長レ古而短レ今」

【曲學】 正說を枉げて時世に媚ぶる學者。史記、儒林傳に「務二正學一以言、無二——以阿一レ世」とあり。但し本文の曲學は時世に迎合する學者、史記の方は、時世に迎合する學問をいふ。

【舍レ此從レ彼】 此は圖幕をさす。多くの解釋に聖人の道とあれど、如何あらむ。彼は佛敎は勿論、支那の風をも指すなるべし。勝田東湖の弘道館記述義に、舍レ此從レ彼に古傳眞僞・安危仲庶二人を擧げて繁說を加へたり。但し眞僞が玄昉の姦を知れども沈默して言はず、又羣臣を率るて道義の前に拜賀せしは、十二分に繁說を加ふべし。仲庶の唐に留まりしに至りては事情誠に已むを得ざるものあり。且つ仲庶呂により

て國人の文學的技倆を彼に知らしめたる事を思へば、少しは其の罪を恕して可なり。編者は水戸學派の仲庶呂論を以て賠論と爲すものなり。

【皇化】 天皇の敎化なり。

【陵夷】 丘陵の漸く平夷になる如く、勢力の次第に衰頽するをいふ。漢書、成帝紀に「帝王之道日以——」とあり。但し、王室は、陵も夷も共に平の意なりといへり。今、姑く前說に從ふ。

【講レ亂相踵】 講亂は兵講戰亂をいふ。左傳、襄公十一年に「恤二講亂一」とあり。兵講・戰亂の絶え間なく起ること。ここは保元の亂より足利時代までの事實を言ふ。

【我東照宮】 我は親しむ意なり。東照宮は、勿論德川家康をいふ。元和二年四月十七日、家康薨ず。三年二月二十一日、勅して號を東照大權現と賜ふ。正保二年十一月三日、宮號を賜ひて東照宮と曰ふ。

【撥レ亂反レ正】 亂を治め正に反す也。公羊傳、哀公十四年に、「撥二亂世一反二諸正一、莫レ近二於春秋一」とあり。

【允文允武】 「允」は「マコト」なり。誠に文武の德を兼ね備ふるをいふ。君主の德を稱歎する語。詩經、魯頌、泮水篇に「——昭二假一烈祖一」とあり。家康の武功は、言ふを要せむ。其

の文德に就いて言へば、關原信玄を聘して經書を講ぜしめ、林羅山を用ひて制度を定めしめしが如き、是なり。

【掌王道興】 掌王は天子を掌どるなり。史記、太史公自序に「佐二文帝一、卒爲二賢相一。」建興は、興狄をはらふなり。太史公自序に「外攘二興狄一、內修二法度一。」とあり。弘道館記述義に「我東照公既撥二於關原一也、上奏二供御之地一。亦增二廷臣食邑一。其爲二大將軍一也、爰二尺天劍一。膺二討叛旨一。蓬蓬場レ功。唯恐レ不レ堪二其任一。後水尾帝之卽レ位也、東照宮命二諸侯一、營二上皇宮一、多置二供御之地一。既而又大修二皇居一、增二廣規制一。又嘗招二來伶官一、以復二雅樂一。朝廷嘉二其功一、嘗褒以二相國一。而不二敢當一也。賜以二朝覲儀注之間、外寓譏諷、乘二我政敎廢弛一、乃敢布二其妖敎一。豐臣氏嘗褒レ之。至二於東照宮一、更大設二祿令一、授二宋天下一、悉歸二其帝一。帝二其德一。後關機遂不レ動。於レ是外寓之防、妖敎之禁、永爲二國法第一義一。其果決明斷、豈二除寓狄一者能如レ此」とあり。

【威公】 德川頼房をいふ。家康の第十一子。小字は鍋松丸、慶長十四年十二月水戸に封ぜらる。權中納言に任じ、正三位に敍せらる。寬文五年八月薨ず、年五十九。その子頼重・光圀・頼元あり。

【東土】 常陸國を斥す。地關東に在ればしかいふ。

【墓二日本武尊之葬一人】 弘道館記述義に 我威公夙受二東陸之重寄一、其地皆皇子餘烈所レ存。而皇子之薨、葬在二水戸之南郊一。（帰二吉田神社一。延喜式所レ謂名神大者。古木蒼鬱。屹與二府城一相峙。則愾然感慨與二欽墓之情一者、倩有レ以也」とあり。偉人は性行と解すべし。此の語、性行に就いて言ふ場合と、容貌體格に就いて言ふ場合とあり、ここは性行と見るべし。

【神道】 我が國固有の宗敎。初め天祖・天神の敎示に原本し、神祇を敬ひ祭祀を愼むことなりしが、儒・佛の影響を受けて、一の宗敎的のものとなれり。其の神祇を崇び祭祀を愼むは甚だ好ければど、其の偏固なるものに至りては、實に改め除きものあり。（平田篤胤や熊本神風連の徒に此の弊あり、但し其の德ゆるが如き愛國の精神は勿論敬服に堪へず）水戸の神道には、毫も此の弊なかりき。

【修】 修なり。「ツクロヒ」修むるなり。詩經に「修二甲治一兵」等註に「繕之言、善也」とあり。

【繼述】 父祖の志を承けつぎてよく其の事をのぶるをいふ。中庸に「夫孝者善繼二人之志一、善述二人之事一者也」とあり。

【設二郡於爽齋一】 伯夷と叔齊とは殷の諸侯孤竹の君の子なり。父叔齊を立てんと欲す。父卒して、叔齊・伯夷に讓る。伯夷

曰く、父の命なりと。遂に逃れ去る。叔齊亦立つことを肯んぜずして逃る。國人その中子を立つ。事は史記伯夷傳に詳かなり。義公に兄あり。頼重（英公ト號ス）といふ。その庶子なるを以て高松藩主となる。義公長じて嗣となるに及び、史記を讀みて、伯夷・叔齊の事に感じ、早く退隱の志を抱けり。乃ち頼重の子綱條（肅公ト號ス）を養ひて子とし、その長ずるを待ちて國を讓り、自ら久慈郡太田の西山に隱栖し、西山隱士と號せり。元祿十三年十二月薨ず、年七十三。明治三十三年十一月十六日、正一位を贈らる。顯莊義公の條を參看せよ。

【明ニ倫】 五倫を明にするなり。倫は序なり。五倫とは君臣の義、父子の親、長幼の序、夫婦の別、朋友の信をいふ。孟子、滕文公上篇に「夏曰ヒ校、殷曰ヒ序、周曰ヒ庠、學則三代共ニ之、皆所ニ以明ニ人倫一也。人倫明ニ於上一、小民親ニ於下一。」とあり。

【正ニ名】 君臣父子の名分を正すなり。論語、子路篇に「必也正ニ名乎」」とあり。朱註に「是時出公不ニ父ニ其父一而禮ニ其祖一、名實紊矣。故孔子以ニ正ニ名ヲ一爲ニ先。謝氏曰正ニ名、雖ニ爲ニ衞君一而言ニ然爲ニ政之道、皆當ニ以ニ此爲ニ先一」とあり。弘道館記述義に、「義公既以ニ孝弟一事ニ父兄一、友ニ愛諸弟一、篤ニ誼國門一。其所ニ以明ニ倫理一者至矣。其於ニ正ニ名之義一、又深致ニ意焉。蓋公生ニ於亂臣之後一、而大猷公方紹ニ遠先志一。顧業益隆。天下之事莫ニ復足一レ患者。但戰國餘習、未ニ盡除一。肇王之道、正名之義、實或闕焉。苟非ニ明ニ其道義一、以植ニ風敎一、則安知ニ異日反亂之徒、不ニ復籍ニ口於北條・足利一。此公之所ニ深慮一而修史之業、所ニ以篤自任一也」とあり。以て公の明倫正名の實を知るべし。

【溥ニ胖於國家一】 四方の「マガキ」となりて、本家を「オホフ」義。因りて諸侯の稱とす。左傳、僖公二十四年に「封ニ建親戚一、以ニ蕃ニ屏周一」とあり。國家は我が國をいふ。書經、立政篇に「相ニ我國家一」とあり。ここは我が國の守護（幕府の守護と見ずして）となれりと見るべし。

【遺緒】 先祖の遺業を云ふ。書經、君牙篇に「惟予小子、嗣守ニ文武成康ニ遺緒一」

【沐浴恩澤】 「沐」は髮を洗ひ、「浴」は身を洗ふなり。轉じて恩を蒙りて生息する義。「恩」は說文に「惠也」。國家の「メグミ」なり。「澤」は潤澤なり。ここは水戸藩が朝廷及び幕府より大恩を被りしを言ふ。詩經の序に「夫婦正、則恩澤深」とあり。

【臣子】 臣下をいふ。

【宣揚】 「オコシアグ」。禮記、禮器篇に「君ニ子ニ臣一、臣ニ事ニ其物一」

【先德】 「先」は祖先なり。舊房・光圀などの如き祖先の德行をいふ。

【此則館之所ニ以營設一也】 始の方に「弘道之館、何爲而設也」と問を發し、之に對して、「表惟、上古神聖、立ニ極垂ニ統一」と說き出してより、ここまでが、其の說明にて、實に本文中の眼目なり、又精神なり。敎授者宜しく注意すべし。

【建御雷】 「タケミカヅチ」と訓む。武甕槌とも書く。又の名を建布都、豐布都神と申す。天尾羽張神の子なり。天孫彦、瓊瓊杵尊を征して還らず。高皇產靈神及び天照大神議して、八意思兼神の議を納れ、天尾羽張神を召して天孫彦に代らしむ。天尾羽張更に建御雷を薦む。乃ち天鳥船神と共に中國に至りて之を平ぐ。常陸國鹿島神社（官幣大社）に記れる神これなり。「亮天功於草昧創業於兹土」といふはこれをいふなり。烈公常に鹿島神宮を崇敬し、弘道館創設の當時、神靈を此處（今館ノ西ニ在リ）に勸請す。社殿の北に向へる神形・樂劍・要石などあるは、皆鹿島神宮に模擬せしなり。要石に烈公の和歌を刻す。曰く、

行末も踏みな迷へそ鎭まりの
大和の道ぞ要なりける。

【亮ニ天功一】 「亮」は「タスク」と訓ず。書經、泰誓に「亮相也」また畢命に「弼ニ亮四世一」とあり。書經、舜典に「欽哉、惟時ニ亮ニ天功一」とあり。天祖の功業を相け成すなり。

【草昧】 建國草創の始めをいふ。易經、屯卦の彖辭に「天造草昧」とあり。正義に「草ハ草創ヲ謂ヒ、昧ハ冥昧ヲ謂フ」

【威靈】 あらたかなる御威光の義。山海經に「長ニ黃帝之威靈一也」

【原ニ其始一報ニ其本一】 我が國の開かれたる始は實に建御雷の力なることを原ね知り、その本源たる神の恩德に報いんとの意なり。易經、繫辭傳に「原ニ始要ニ終」」疏記、鄭特牲に「報ハ本反ニ始」の註に「謝ニ其恩一之謂ニ報、酬ニ其功一之謂ニ反」とあり。

【所ニ以來一】 「ユヱ」は由なり。「ヨリテ」と訓む。由來の意。

【孔子廟】 湯島昌平坂にこの館を創建するに當り、書て光圀の朱之瑜に命じ、大成殿の模型を作らしめ其の規制に準じて、聖廟を館側に建て、先聖の像を安置し、親ら孔子神位の四字を題す。今弘道館書院の北の方に在り。

【折ニ衷於此一】 「衷」は中に同じ。「折」は斷なり。衷は事を斷するに、一方に偏せずして中正を得るなり。史記、孔子世家に「自ニ天子王侯一中國言ニ六藝一者折ニ中於夫子一可レ謂ニ至聖一矣」とあり。ここは、堯舜禹湯文武周公の道が、孔子によりて中正の處に定められたるを言ふ。此の字は孔子を指す。

【欽ニ其德一貴ニ其敎一】 欽は敬なり、欽慕すること。貴は取り入るること。孔子の德を欽慕し、孔子の敎を取り入るる義。修

にいふ、本文、欽の字の上に敬の字あれど、こは甚だ當を得ず、宜しく、其敬の字の直下に置くべきなり。敬授書若し此の說を採はば、何ぞ述義の文を讀まざる。述義には欽に其德に實に其敬とは、過去の事實を說きてあり。されば敬の字は決して此の六字に當到せざるなり。斯の文の起草者は、實は藤田東湖なり。(實明に非ず)而して水戸藩の碩儒各〻之に意見を加へたり。さるにかかる誤謬あるは、誠に歎ずべきなり。

【偶然】期せずして然ること。列子、黃帝篇に「范氏之富、以富二偶然一」

【國中】齊明の領內をいふ。

【夙夜匪レ解】早く起き夜半に寢ねて事を勉むる義。詩經、大雅烝民篇に「――――レ一、以事二一人一」解は懈に同じ。

【實二四土之敎一】支那の儒敎を取り入れて、參考にすること。

【忠孝无レ二】忠と孝とは、一本にして二物に非ずとなり。記文には无レ二とあれども、述義には、無レ二に作れり。无は無に通ずる故に、無に改めたるなるべし。述義に「進而事レ君、全二其大義一乃所二以孝二於親一也。中略退而養レ親、助二其眞敎一乃所二以忠二於君一也。忠之與レ孝、固不レ二二其本一。在二所レ施何如一耳」とあり。

【文武不レ墜】候は分なり。正しくは歧に作る。文と武とは、一本道にして、相分るることなきなり。唐太宗の齊明、維文論に「文武二途。捨レ一不可」

【學問事業不レ殊二其敎一】學問と事業とは、其の敎用を一にして、相離るべからざる性質のものなり。卽ち學問は事業を行はむ爲にして、事業は、學問の實現したるものなり。

【敬レ神崇レ儒、無レ有二偏黨一】神州の道を敬ひ(述義に據るに)儒敎を崇び、一方に偏黨することなしとの意。偏は偏倚なり、黨は阿黨なり。敬神又は崇儒の一方に偏黨せざるなり。齊明、洪範に「無レ偏無レ黨、王道蕩蕩」とあり。當時の國學者は、只管儒敎を誹謗して、我が神州の道を崇び、又儒學者は儒敎に心醉して、神州の道を知らず。齊明及び水戸學派は、深く其の弊を憂ひ、偏せず、黨せず、共に其の崇敬すべきを說けり。誠に公平の見と謂ふべし。

【集二衆思一宜二集力一】多人數の思考を集め、大勢の力を結集して、經綸に施す意。

【祖宗】祖は儀房卽ち威公、宗は光圀卽ち義公。

【弗レ墜】すたらぬこと。論語、子張篇に「文武之道、未レ墜二於地一、在レ人」杜預の春秋左氏傳序に「文武之勝不レ墜」墜は墜に同じ。

【神皇】天照大神及び神武天皇以下歷代皇天子のこと。

【皇業】皇りみそなはすこと。詩經、正月、雨無正の毛傳に「自レ上降二罪罰一曰レ疹、上帝臨レ下有レ赫二上天一。」

【其治敎】帝國の敎治、敎育といふこと。實は上の新館を承くるに非ず、其の事をいふなり。

第一大段、弘道の意義を說く。

第二大段、弘道の由來する所を述べて臣子たるもの奮、之を弘大にすべきを說き、弘道館開敎の理由を明かにす。

第一小段、新道の意、大に意明、かになりし由を述ぶ。

第二小段、中世以後、皇運の衰頽と俱に新道も衰へし由を述ぶ。

第三小段、德川氏に至り、新道再び明かになり、水戸の新道實踐を任とせしをいふ。

第四小段、建物營辦を記り、造營を告みし所以を敍す。

第三大段、弘道の實行方法及び其の效果を述べ、學徒を規す。

第一小段、新の館に出入する者の心得を云ふ。

第二小段、館主を點出して文を結ぶ。筆力萬鈞。

この文の初稿は藤田東湖の弘道館記述義に存なり。

德川時代に創設したる諸藩は甚だ多く、皆それぞれ其の目的を述べたれど、未だ此の文の如く、開史開發を基礎として、大中至正の皇道を敎したるものあらず。文亦甚だ雄大、典雅莊嚴、實に比ぐ水戸藩の本領を發揮せるものと謂ふべし。但し、敎の字の創設は、敎旨とはいへ、ふへナガへナも感しなべし。

此のほかに求る時に據れば、移轉當時の先生、皆て「水戸學」と稱して其官歷下今上陛下に御進講せらるるや全館此の文を以て講ぜられたりと云ふ。齊明在天の靈前に感泣すべし。

本書の「弘道館記」の文は、藤烏帥書の七、凡そ三十分許の八部堂の碑文によりたるものにして、碑は高さ一丈二尺、幅三尺八寸、厚さ二尺の堅水石にて、「天保八年歲次戊酉三月、齊明謹記書及篆額」とあり。

本館を參るに臨みて一言せむ。齊明・東湖等は學敎を以て興國安民と德業し去りたれど、先聖は決して然らず、先聖とても敎或館術の書や、由緖なき寺院は、それぞれ相當の處分を施したれど、聖堂の尤敎や、明の心館には多大の尊敬を表し、又書館にある經籍の處分には、百方保護を加へたり。最も日本主義を崇び、大日本史の名稱の如きも、儒學者の記錄錄として一定せざりしが、先聖は、日本の小歷古物書中の「小歷古の人、大日本國に事せ來る」の語に感激して、斷然大日本史と命名せり。其の尊王主義も、實は日本の敎旨より來る所多かりしなり。是れ決して儒者の私見に非ず、敎授者其の

評論を知らむと欲せば、日本及日本人、載する所の、塚本柳青君の「水戸義公と日蓮上人」松崎蕙瑳君の「水戸義公の家法」等と一読せらるべし。

弘道館の書は宮内による。

説明を要せざるべし。

(一)　弘道館賞梅花

【弘道館】 水戸の藩學なり。今は其の近傍を公園とす。梅の由來は、前の記文に詳かなり。

【一株梅】 一株の梅といふこと。

【馥郁】 香氣の盛んなる貌。

【好文】 梅の異名を好文木といふ。書の題居の注に「晉武好文、則衆臣、皆學則篤不倦」とあるに本づく。また後楽園に好文亭あり。

新の詩は、烈公及び弘道館の梅花を賞して作る所。一株の梅が清香を發して十分に開きぬ。さて梅は好文と異名せらるれども、文のみにて威武の方は豈に無からむや。雪を冒して春を占め、天下の魁と爲るは、威武に非ずんば能はずと。暗に水戸の教學、文武兩道を兼ぬるを言ひしなり。孚修次補。

(二)　道一而已矣

人の履むべき道は、唯一つあるのみ。和漢古今に因りて異ならざること、猶日月の如しとの意。淮南子、繆稱に「道出二一原一、通二九門一散二六衝一。」論語、里仁篇に「子曰、參乎、吾道一以貫レ之」とあるに同じ。

【非二一國所一レ私有一也】 一國の私有物とすべきに非ずとの意。

【父子、君臣、夫婦】 五倫の中、三つを擧げたるは、五倫を代表せしめたるなり。五倫は、此の外、長幼、朋友あり。

【無二國無一レ之】 國として、五倫の無き國は無しとの意。之の字は、上の父子、君臣、夫婦を承くるなり。新る修辭は漢文特有の修辭。

【有レ別不レ能】 夫は其の妻を妻として他の女に關係せず、妻は其の夫を夫として他の男子を見ざるを、別といふ。不レ能とは、明女別ありて無婚せざる義。之を夫は外事を行ひ、妻は内政を治して、其の事に別ある意に解くは非なり。

【非レ有レ待二於人作一也】 父子、君臣、夫婦の道は、皆人の作爲に因りて來たるに非ずとの義。

【保レ民如レ子】 書經、康誥に「若レ保二赤子一、惟民其康乂」とあり。

【唐虞三代】 堯・舜・夏・殷・周を言ふ。記文中に說けり。

【經典】 聖人の教を載せる書。

【日本政記】 頼山陽の著、十六卷あり。神武天皇より後陽成天皇に至るまでの歴代の治亂興亡を敍し、之に所所論文を加へたるもの。山陽晩年疾重く、辛うじて本書の稿を脱して逝けり。世人或は外史を貴んじて本書を輕んずるものあれども、論文の痛切、深刻は、本書を以て優れりとすべし。乃木大將の如きは、最も本書を愛讀せられたりと云ふ。

此の論は、鹿神天皇の條に繋けたるものの一節なり。以て山陽の識見を知るべし。

(三)　學　則

記文に因み、子弟修學の要を知らしめ、常に精神を緊張せしむべし。是れ實に、藤正自重の男子たらしむる所以なり。

【先生】 師。已より先に生まれて學德深高なりとの義。拿昭旁名に、「古者稱レ師曰二——一」

【温恭自虚云云】 温順、恭敬、心を虚しくして、私見を挟まず、先生の教を受けて、十分に其の奥義を究む。温恭は外貌に就きていひ、自虚は内心に就いていふ。尹知章云ふ「必虚二其心一、然後有レ所レ容也、楊倞レ註二其本源一」

【聞レ義則服】 道を聞けば行ふこと。服は行ふなり。

【温柔孝弟】 温和柔和にして父母に孝に、又善く兄及び年長者に事ふるをいふ。論語、學而篇に「孝弟而好レ犯レ上者鮮矣」

【恃レ力】 自ら勇力をたのむ。勇力を自負すれば、必ず人を凌犯傷する驕慢の心起る、故にいふ。

【志】 心の之く所を志といふ。ここは「心ダテ、心ガラ」などと解すべし。志望、志願などと解すべからず。

【虚邪有常】 虚偽、邪僻。正直ならぬなり。

【遊居有常】 行きて遊ぶ所、止まりて居る所、一定するなり。非違の地を踏まず、又悪交せぬをいふ。

【有徳】 有徳の君子なり。仁者なり。遊居を受けていふ。讀註を見よ。

【必式】 「ツツシム」と訓む。其の心放逸ならず、敬なること。

【朝夕暮習】 朝に新なる教を請ひ受けて、夕に之を反覆習熟するなり。註に「朝請二新益一暮習二熟之一」但し必ずしも朝夕に拘らず。

【實践】 長敬語慣の說。「小心——」はその之を失はんことを忘

るるなり。

【一に此】 以上の事を專一にすること。

【弟子職】 管子中の篇名。管子、二十四卷、法家に屬す。周の管仲の著と稱すれども、多く管仲死後の事をいふ。後人の竄入する所にかかる。一人一時の作にあらず。その記する所、頗る功利の見にして、能く世運の趨勢に應じ、常を變じ、時を通ぜり。弟子職は小學中にも收む。

二 孟子抄

孟子七篇　周の孟軻撰す。孟子は孔子に後るること百餘年、鄒國(今の山東省)に生れて、業を子思の門人に受く。戰國の亂れたる時に出でたれば、其の論ずる所切實なれども之を用ふる雲なく、遂に施す所なく、門人萬章の徒と書七篇を作ると云ふ。其の說、性善の二字を本とし、仁義王道を行ふを主張せり。後漢の趙岐始めて此の書の註を作り、篇上下に析ち、合せて十四卷と爲し、且つ章毎に其の大意を揭げて章指と名づく。四書に列せしは宋の朱熹にて、朱熹は、孟子集註七卷を著せり。

仁人心也

此の章、人人皆に其の心を收斂して、放失すべからざるを云ふ。蓋し、仁義は人の固有する所の本心にして、學問の道は此の本心を求むる所以なることをいふなり。孔子の「仁遠乎哉。我欲仁、斯仁至矣」の語と并せ看るべし。

【仁人心也義人路也】「仁」は人の天より稟け得たる心の德なり。「人心」とは此の身體に關係するの主と爲りて須臾も失ふべからざるを見るべきなり。「義」は行事の宜きなり。「人路」とは出入往來必ず由るの路と爲りて、須臾も舍つべからざるを見るべきなり。仁義は人の一日も離るべからざるものにして、仁は四端を統べ、萬善を兼ぬる人の心なり。義は是非を裁斷し、可否を揆度し、行事の準を爲す人の路なり。路といひ心といふは、皆人に存し、身に切なるをいふ。

【舍二其路一而弗レ由云云】「舍」は上聲。棄てて之に由らざるなり。「放」は出でて歸らざるなり。「其說」は朱子曰く「二字、最も宜シク詳カニ味フベシ、人ヲシテ恍然トシテ深省スル處アラシム。」と、夫れ仁は人心と謂ふ、人宜しく操守すべし。義は人路と謂ふ、人宜しく遵由すべし。何ぞ世人の其行皆違して由るべきの大路を舍置し、徒に徇ひ、理を忘れ、其の本心を放出して之を已に反求することを知らず、其の人たる所以の道を失ふや。亦哀むべきの甚しきにあらずやとの意なり。

【人有二雞犬放一云云】 朱註に「程子曰、心至貴、雞犬至輕。雞犬放則知レ求レ之、心放則不レ知レ求。豈愛二其至輕一而忘二其至重一哉。弗レ思而已矣。學問、上求二吾仁義一而已矣在二其中一矣」

【學問之道無レ他云云】「無他」とは別樣の方法なきをいふ。學

間の道は敬知力行誠信忘咲等其の事一ならずと雖も、要するに倫法なし、其の放心を求めて内に収め、誠意言動皆一心に能治し、心正しくして仁義其の中に存す、苟くも放心を収めずんば、何者か事間の道となすに足らんやとなり。朱註に「事間之事、固非一端。然其道則在於求其放心而已。蓋能如此、則志氣清明、義理明著、而可以上達。不然、則昏昧放逸、雖日從事於事間、而終不能有所發明矣。故程子曰、聖賢千言萬語、只是欲人將已放之心、約之使反復入於身來。自能等向上去、下章前上達也。此乃孟子開示切要之言。程子又發明之、曲盡其指。學者宜服膺而勿失也」とあり。

無名之指

此の章人の心を治むるに味きを警醒するなり。孟子時人善治の深くして明瞭しがたきを思ふや、故に多く譬を設けて之を開く。山木・桑犬・桔槹・拭瞽の類の如き、一にして足らず。學士を開ふるの意、深切なりと謂ふべし。

【無名之指】 手の第四指なり。和名「クスリユビ」。趙註に「雖以二餘指皆有レ名、無名指者、非二手之用指一也」

【信】 伸と同じ。曲縮せるを伸びしむるなり。

【不レ遠二秦楚之路一】 秦・楚の國、西と南とに僻在し、齊魯より隔れば、路甚遠なり。されど以て善しと爲さずして往くなり。王應麟曰く「不レ遠二秦楚一謂レ不レ以二秦楚一爲レ遠。不二是自レ棄之レ楚自レ楚之レ秦」

【心不レ若レ人】 心、物欲の爲に蔽して人に若かざること。

【此之謂レ不レ知レ類也】 「類」は比なり。「クラブル」意、輕重を比較するなり。「不レ知レ類」は輕き所を貴んじ、貴き所を輕んずるをいふ。朱註に「言其不レ知二輕重之等一也」とあり。此の一句を以て此の文を結ぶ。庶肉とや謂はむ、珍膳とや謂はむ。

拱把之桐梓

【拱把之桐梓】 「拱」は兩手の圍む所なり。「ヒトカカヘ」といふこと。「把」は一手の握る所なり。「ヒトニギリ」といふこと。「桐」は桐樹、「梓」は和名「アヅサ」、楸の類、白色にして子を生ずるもの。二木共に良材なり。

【欲レ生レ之】 其の材の美を愛し、之を培養して其の生長せんことを欲するなり。

【知所以養之者】 培養灌漑して之を養ふ所以の道を盡すを知れりとの意。

【不レ知二所一以養二之者一】 肉は其の心を養ひ、外は其の體を養ふ所以を知らざるなり。被定宇曰く「之ヲ養フノ道ハ心ヲ養ヒテ以テ其ノ内ヲ養ヒ、九容ノ類ヲ體ミテ以テ其ノ外ヲ養ヒ、吾ガ身ヲシテ仁義體膚、心ニ根シ面ニ見ハレ、背ニ發ルノ身ト爲ラシム。徒ニ其ノ口體血氣ノ身ヲ養フノミニ非ザルナリ。此ノ章、身ノ字、内心ヲ包ネ、外肢體ヲ包ネテ兩シテ言フナリ」

【弗レ思甚也】 心、物慾に蔽はれて、恩を輕重の間に救さざるの甚しきをいふ。思の字の下、又一の甚の字を加へて其の大いに思はざるを見はすなり。深慨を致すの意あり。

水哉水哉

本章は、實行の貴に務むべくして、虚名の久しく保ち難き所以を示し、徐子等を諷へ學を干むるの病を戒む。

【徐子】 徐辭なり。孟子の門人。

【仲尼亟稱二於水一】 「亟」は音「キ」、數、なり。稱は讃美なり。これ盡し論語に「子在二川上一曰、逝者如レ斯夫。不レ舍二晝夜一」とあるを指すか。

【何取二於水一也】 水に就いて何を取る所ありて斯くは讃美せられたるかとなり。

【原泉混混】 「原」は源の古字、註疏本、源に作る。「原泉」は源ある水なり。「混混」は滾滾に同じく、水の流るる貌なり。

【不レ舍二晝夜一】 晝夜間斷なく流るること。

【盈レ科】 「盈」は滿なり、「科」は坎なり。地の窪くして空隙ある處をいふ。

【放】 至るなり。

【是之取爾】 仲尼の水を讃美せし所以は、此の義を取れるなり。

【篤レ無レ本】 本源なき水となさばの義。「無レ本」は人の實行なきに喩ふ。

【七八月之間】 周の七八月は、夏時(陰曆)五六月なり。

【涔渚】 田間の水道、「涔」は小にして、「渚」は大なり。

【涸】 音「コ」乾きて竭くるなり。

【聲聞過レ情】 名聲が實行よりも過ぐるを言ふ。所謂虚名譽巷なり。

全篇唯是れ水に就いて說き去り、結末一句始めて主意は見はし、徐子をして猶然反省せしむ。妙と謂ふべし。

三　春夜宴桃李園序

李白　字は太白、青蓮と號す。杜甫と並び稱せられて、李杜と曰ふ。詩集三十卷、開集六卷あり、文章甚だ少なし。

新の篇は、春夜に實弟・從弟等が桃李の花咲ける園に會して、宴を張り詩を賦し、一册の集と爲ししにより、李白爲に作りし所の序なり。

序は、文章の一體にして、敍と同じ。事實の儘を敍する意なり。左傳、正義に「序其ノ敍昔義同。謂推尋鉤云、敍緒也。然則事ニ其緒業ニ若ニ論之抽ヅ緒」

此の篇、宴樂の趣を敍するに在り。而して宴場の敍語、言外に超然たり。以て此の老の境界を窺るべし。

【天地者萬物之逆旅、光陰者百代之過客。】　天地は、譬へば人畜草木萬物の宿屋の如き者、光陰は、譬へば百世の間を過ぎ去る客人の如き者なりとの義。逆旅は宿屋のこと。莊子、山木篇に「陽子之ノ宋、宿ニ於逆旅ニ。」とあり。旅客を迎ふる意なりと云ふ。

【浮生若ノ夢、爲ノ歡幾何。】　浮生は、莊子、刻意篇に「其生若ノ浮。其死若ノ休」とあるに出づ。句意は、もろき人生は、夢幻の如く、其の中に喜ばしきことは幾何かある、殆んどこれ無しとなり。

【古人秉ノ燭夜遊。良有ノ以也】　良は「マコトニ」と訓む。以は「ユエ」と訓む。古人の、晝短くして、遊ぶ間も無ければ、夜燭を立てて遊宴せしは、誠に故ある事なりとの意。魏武帝の短歌行に曰く、「生年不ノ滿ノ百、常懷ニ千歲憂ニ晝短苦ニ夜長ニ。何不ニ秉ノ燭遊ニ云云」又、魏文帝與ニ吳質ニ書に曰く「年一過往、何可ニ秉ノ燭夜遊ニ。良有ノ以也」とあり。李白が古人といひしは、魏武父子を指すならむ。但し燭を乘りて遊びし人が、既に魏武以前にも在りしことは、文帝の文を見て知るべし。

【陽春】　陽は火に取りて温かなれば、春を陽春といふ。沈休文の詩に「陽春布ニ德澤ニ萬物生ニ光輝ニ。」とあり。

【以ニ煙景ニ】　煙景は春景色なり。陽春は煙霞の美景を惠らして我を招くとなり。

【大塊】　天地の意。莊子、大宗師篇に「大塊載ノ我以ノ形、勞ノ我以ノ生、息ノ我以ノ死」とあり。一說に萬物者の義とす。今、姑く前說に從はむ。

【以ニ文章ニ】　天地は我等に假すに文章の才を以てせりとの意。

卽ち人間は、天地より詩文を作るの才能を與へられたりとなり。

【芳園】　花多くして香ふ園なり。

【序ニ天倫之樂事ニ】　序は舒なり、のぶるなり。天倫は兄弟なり。晉栗傳、隱公元年に「兄弟天倫也」范甯の註に「兄先弟後、天之倫也」とあり。兄弟會して十分に遊宴の樂をのべ行ふとなり。但し今、此に集まるものは、必ずしも李白の兄弟のみに非ざれども、何れも親類なれば、其の中にて年兄年弟を以て兄弟といへるなるべし。況關春より、此の句までは、一氣に讀むべし。況の字は此の句までに係ればなり。

【羣季俊秀、皆爲ニ惠連ニ】　羣季は、諸弟と同じ。季は、伯仲叔季の季にて、すゑなり、卽ち弟の義。此處にては、李白の實弟・從弟、其の他親類の子弟を指す。惠連は、謝惠連のことにて、劉宋の謝靈運の弟、(一說に族弟なりともいふ。)高逸統譜に云く「謝惠連方明子。十歲能ノ屬ノ文。族兄靈運嘗ニ賞之ニ云、每ノ有ニ篇章ニ對ニ惠連ニ輒得ニ佳句ニ。嘗於ニ永嘉西堂ニ思ノ詩。竟日不ノ就。夢ノ見ニ惠連ニ。卽得ニ池塘生ニ春草ニ、大以爲ノ工」とあり。ここの文意は、此の諸々の若き輩は、何れも皆秀逸抜羣の才子にして、其の詩文は、惠連の如き者なりとの意。

【吾人詠歌獨慚ニ康樂ニ】　詠歌は詩歌を作り詠ふこと。故に作詩の義となる。康樂は前にいへる謝靈運なり。康樂侯に封ぜられたるを以て、世人稱して謝康樂と曰ふ。晉の名將謝玄の孫にして、少より學を好み、博く書籍を覽、書に工に筆に妙に文章に至りては、江左第一と稱せらる。宋の少帝の時、永嘉の太守となりしが、既にして志を得ず。意を放逸に肆にし、常に謝惠連・何長瑜・荀雍・羊璿之の徒と山澤の遊を爲し、到る處意を風詠に敍す。後、廣州に徙り、偶々其の反意を疑するを告ぐる者あるに因り、同地に棄市せらる。ここの文意は、羣弟達は、皆惠連の才あるに、我は獨り康樂たる能はず。誠に慚愧に堪へずと感遁したるなり。吾人とあれど、李白一人のこと。

【幽賞】　靜に風景を賞玩すること。

【高談轉清】　高談は高尚なる物語にて、名利を口にせざるなり。轉は愈々益々の意。

【開ニ瓊筵ニ以坐ノ花】　瓊は玉の美なるもの、瓊筵は美しき宴席を言ふ。美しき宴席を開いて、花に對して坐すること。

【羽觴】　酒杯の一種。觴は爵、爵は雀なり、雀に象つて羽翼の形を附したる杯を言ふ。杯を飛ばす義に取りしものなりと云ふ。琉球紓の賦に「酌ニ羽觴ノ兮飛ノ雲」とあり。

【不ノ有ニ佳作ニ何伸ニ雅懷ニ】　佳詩を作る能はずんば、何ぞ今夕の

風流の情懐を満足せしむるを得むやとの義。

【詞旅ニ金谷酒数ヘ】　金谷は地名、古の河陽、今の河南省懐慶府に在り。晉の荊州の刺史石崇嘗て遠使商客を劫して富を致すこと貲られず。河陽に別墅を築き、王詡・潘岳の徒と酒を飲み詩を賦し、被して二十四友と曰へり。一日客を會して緋花の宴を開き、詩を賦し、詩成らずんば、罰として酒三杯を飲ましめたり。此の罰杯を金谷酒数といふ。序にいふ、三杯とは三斗なり、三斗の最詳かならず、我が三升位の意ならむか。

新の篇分ちて二大段と爲す。冒頭より「序ニ天倫之樂事ニ」までを、第一大段とし、今日此處に會合するものは、宜しく十二分に樂しむべきを言ひ、次段、宴事を敍するの地と作す。「會季桃秀」より結末までを、第二大段とし、宴席の事を敍す。

新の篇、筆致圓滑、意思調貫すべく玩ぶべし。然れども細かに看れば四六の病あり、且つ初めは「天地者萬物之逆旅」などと事事しく言出し、終りは、罰依ニ金谷酒数ニと止めたるは、前虎頭尾の如し、さはれ、況・召我・使レ我・坐レ花・酔レ月等佳句多く、文質頗ぶる相應なるは、賞せざらむと欲するも得べけんや。

七絶　三首

(一)春夜

【値】　價なり。

【金貲】　物資しきこと。一本「黄金」に作れり。

【籬落】　かきねにて圍みたる座敷。蓆は居のこと。

【沈沈】　夜の更くる貌。

春の宵は、花には清香あり、月には陰ありて、一刻千金の價あり。絃管には歌管の聲寂しく絶え、籬落には鞦韆の影かに至れて夜も漸くに更け行くなりと。眼前の即景を敍して、詩も亦一字千金の價あり。平聲侵韻。

(二)題憲宗春江晩景圖

【蘆葉】　蘆蘭萬花谷に「宋の金僧、工に蘆雁蘭荳を畫き、尤も小景に工なり」と。

【蓴羹】　和名「カハラヨモギ」。陸機の説に「其の莖は艾に似て白色、(中略)水邊及び渚中に生ず。正月根芽を生ず。正白なり。之を生食す、香しくして鹽美なり」と。

【河豚】　和名「フグ」。蘇東坡詩に「河豚は水族の奇物、亦能く人を害す。蓋蓋等を被りて死する者あり。吳人は之を珍とし、其の腹を目して西施乳と爲す」洪駒父が河豚西施乳を詠する詩に「蓴羹鱸鱠尋常物、正是河豚欲上時、不美莼鱸三千子乳、吳王當日未曾知。」と。那一に舘に作る。

【起承二句】　竹外より桃花の三兩枝が斜に出でたるは、得も言へぬ風情あり。下に流るる春の江は、水もぬるみて暖かになりたるは、水禽の鴨が一番先きに之を知るならむ。

【轉結二句】　さて蓴羹は岸邊の地に青青と滿ちて、蠶の如き蓴の芽は短く生ぜり。正に是れ河豚の楊子江に上らむとする好時節とはなりぬ。平聲支韻。

(三)折楊柳

【折楊柳】　一本には「楊柳枝」に作れり。其の色の黄綠なるに喩へたるなり。

水邊の楊柳初め萌え出づる時は、その黄綠色の芽を附けたる枝の美しさに、誰く馬を駐めて、家苞にせん爲に一枝を折れば、この楊柳を春風の惜しむやらん、我が手中に向つてねんごろに吹き來るなり。平聲支韻。

四 諸葛孔明傳

孔明一生の事蹟を概括し、其の智謀忠誠、古今希に見るの人傑たるを知らしむ。

本文は十八史略に出でたる傳を訓歩したるもの、教授者は教授に先だち、本文と原文とを併せ讀むべし。

【自比二管仲・樂毅一】 自ら古の偉人管仲や樂毅に比較し、二偉人を氣取ること。

【劉備訪二士於司馬徽一】 劉備字は玄德、漢の景帝の子の中山靖王勝の後。所謂劉漢の昭烈皇帝是なり。諸葛孔明は實に斯の人に臣事したるなり。訪は問なり。劉備、一日司馬徽に向ひて、當世の名士は誰なるかと問ひしとなり。

【識二時務一者在二俊傑一】 時勢に對する務を知る者は、俊傑の士なりとの意。此の語は、後世の文章家、英雄豪傑を論ずる時、好んで引用する語なり。注意すべし。

【此間自有二伏龍鳳雛一】 此間は此の附近の意。伏龍は、未だ眞實を得ずして深淵に潛める龍。臥龍に同じ。以て孔明に比す。鳳雛は鳳凰の乳子、成長すれば善く羣鳥を服するに足る鳥。以て士元に比す。二人は俊傑なれども、未だ名實に用ひられざる故、伏龍といひ、鳳雛といひしなり。

【問レ策】 天下統一の策を問ひしなり。

【民附】 人民心服して附き從ふこと。

【可二與爲一レ援、而不レ可レ圖】 此の人は、互に身方として援け合ふべく、決して之が侵略を圖るべからずとの義。

【用レ武之國】 武を用ふるに適當の國といふこと。

【險塞】 四方險阻を以て圍まるとなり。

【沃野】 肥沃の原野。

【跨有】 二州に跨りて之を領有すること。

【孰不二簞食壺漿以迎一將軍一乎】 簞は竹にて造れる器、食は飯なり。壺は瓢なり、漿は飲み物。簞食壺漿を用意して將軍を迎へむとの意。孟子、梁惠王下篇に「以二萬乘之國一、伐二萬乘之國一。簞食壺漿、以迎二王師一。豈有レ他哉。避二水火一也」とあり。

【孤】 王侯自ら謙稱して孤と曰ふ。

【猶二魚之有レ水也】 魚の水あるが如く、離るる能はずとの義。此の語は、後世の文人、君臣の親密を敍する慣用語と爲せり。生徒に注意すべし。

【曹操進二軍江陵一、東下】 曹操軍を江陵府に進め、遂に江に沿うて東に下り、あくまでも劉備を攻めむとするなり。

【曹丕篡立】 曹丕は曹操の子。操の卒後、漢の孝獻皇帝に迫つて位を禪らしめ、帝を以て山陽公と爲す。

【備即二帝位於武擔之南一】 蜀中の人人相傳へて曰く、魏の曹丕、漢の帝位を奪ひて自ら天子と爲り、漢帝已に害に遭ふと。是に於て劉備は漢の天子の爲に喪を發し、自ら衰服を着用し、並かに漢帝を諡して孝愍皇帝と曰ふ。而して其の歳の夏四月、自ら皇帝の位に武擔山の南に即けりとなり。曹丕篡立する以上、漢の景帝の子中山靖王勝の後たる劉備の、位に即くこと亦た差支なきなり。武擔は山の名、成都の西北にあり。

【丞相】 宰相をいふ。丞は承なり、相は助くるなり、君主の意を承け助くる義。史記、秦紀に「悼武王二年、初置二丞相一」

【給定二大事一】 終に天下統一の大事を定め得べしとなり。

【嗣子】 名は諱、字は公嗣、昭烈皇帝の子、即ち漢の後皇帝なり。

【若可二自取一】 君自ら帝位に即きて、我が志を繼がれよとなり。

【勿以二惡小一而爲レ之。勿以二善小一而不レ爲】 解釋を要せじ。但、上の勿は以二惡小一而爲レ之の句全體を禁止し、下の勿は、以二善小一而不レ爲の句全體を禁止するに注意すべし。又、此の二句が格言として傳へらるることも授くべし。尙、此の語は十八史略になし。編者が通鑑より補へるなり。

【蜀有二重險之固一、吳有二三江之阻一】 重險之固とは、外には針谷・銘谷・子午谷の險あり、內には劍閣の險あり、內外二重の要害あるを言ふ。三江之阻とは、松江・東江・婁江の險阻をいふ。

【共爲二脣齒一】 兩國互に相倚りて親密の關係を爲すこと。脣に脣破るれば齒寒しといへり。脣と齒とは、互に相倚りて其の用を爲す故、親密の意に喩へたるなり。

【可二鼎足而立一】 鼎は三足のある器、「カナヘ」なり。三人對立することなれども、ここは吳と漢と魏と對立して鼎足の勢をなす義。

【吳越和】 蜀漢の昭烈皇帝は漢室なり。故に蜀を漢と曰ふ。

【南夷叛】 南方の夷が漢に叛けるなり。

【爲二先漢所一レ服】 孟獲は、南夷は勿論、漢人までも、平素より其の勇猛に長れ服せりとなり。

【生致レ獲】 獲を生きながらとらへたるなり。生獲は生擒に同じ。

【使レ觀二營陳之間一】 自由に兵營陳伍の中を觀せたりとなり。

【縱使二更戰一】 縱は「ハナツ」又は「ユルス」と訓む。はなちて其の陣營に歸り、再び戰はしめたりとの意。其の大度想ふべし。

【七縱七禽】 之を禽にしては又之をはなち、之をはなちては又之を禽にすること、前後七回に及べりとなり。禽は擒に同じ。

べし。貪は愼に同じ。

【上疏】 名高き前出師表なり。十八史略には、大要を出したれども、本書には、次課に全文を掲げたれば、ここには「陳ニ出師之由一、告レ帝以ニ政事之要一」この十二字に約し、其の他一切之を省略せり。

【武侯整齊】 兵法軍陣の整然として亂れず、よく齊ひ揃ふ義。

【寂然無レ聞】 ひつそりとして聲なきこと。

【嗚】 「オヽ」と訓む、殆なり。

【帷中籌畫】 閣中即ち幕に於いては、幾の物を籌はすが如く勘考したりとの義。

【親主如ニ長安一】 如は「ユク」と訓む、往なり。

【節度】 節制・法度なり。換言すれば指揮命令のこと。

【遂賊不ニ兩立一】 賊は敵なり。漢と敵とは、決して兩立する能はずとなり。此の句より「非ニ臣所ニ能逆覩一也」までは、後出師表の骨子なり。

【王業不ニ偏安一】 偏安は、一方に片寄りて安んずること。帝王の事業は、益州の如き一地方に片寄り、そこに安んずべき者に非ず。必ずや敵を滅ぼして天下を統一し、以て王業を中原に樹てざる可からずとなり。

【駑劣乘力、死而後已】 駑劣は頭註に出づ。駑劣して心力を盡し、斃れて後已むの覺悟なりとの義。是れ古來、人人の感美する語なり。

【至ニ於成敗利鈍一非ニ臣所ニ能逆覩一也】 成敗は、王業の成ると否となり。利鈍は、兵戰の勝敗のこと。逆覩は、豫め見るなり。事を爲さざる前に、豫め其の成否を知る意。其の事業の成否及び兵戰の勝敗は、臣愚にして、能く豫め知る所に非ざるなり。臣は唯一意大謀とする所に向つて邁進せむのみとの義。

「駑劣乘力」よりここまで、能く大忠臣の心事を見はす、千古不朽の名言と謂ふべし。或は後出師表を以て僞作とするものあり。(最近にては山田孝雄の說あり)されど此の語の如きは、斷じて僞作者の製作し得る所に非ざるなり。

【引レ兵出ニ散關一】 兵を引いて散關を出づとの意、散關に出づとの義には非ず。

【先遣讀】 先、張郃を遣へて之と戰へりとなり。遣は「ムカフ」と訓む。

【伏誓】 伏誅してある弓弩、即ち豫め兵士に弓弩を持たせて置くなり。

【木牛流馬】 木牛も流馬も共に兵糧を運搬する車にて、其の形は牛馬に似たり。舊註に「先製ニ社叔・胡忠二作レ之。象ニ牛馬狀一。貯ニ米於其中一。前機巧使レ可レ行以運レ糧」とあり。又、事物紀原に「先始造ニ木牛流馬一以運レ餉。蓋巴蜀道狹、使ニ登陟一故耳。木牛即今小車之有ニ脚腹一者、流馬即今獨推者是也」とあり。以てその形を推すべし。

【治ニ道開一】 道開は米を藏する倉庫の異名。治は、此の倉庫を修理すること。

【悉ニ衆十萬一】 悉は「フクス」と訓む、全部出すこと。十萬の大軍を全部出すなり。

【渭南】 渭水の南。

【亮以ニ前者數出、皆運糧不レ繼、使ニ己志不レ伸】 前者は「サキニ」と訓む。先きになり。數は「シバシバ」と訓む。屢なり。亮は、是まで屢出陣したれど、皆糧食の運送が續かざる爲に、己れの志を十分に伸ばす能はざりしに懲りての意。

【屯田】 兵士が要害の地を守りつつ、農業に從事すること。周禮、冬官に「有ニ屯部一、今曰ニ屯田司一。」漢書、趙充國傳に「乃詣ニ金城一上ニ屯田奏一。開ニ羅ニ騎兵一、留ニ步兵萬餘一分屯ニ要害處一。條ニ不レ出レ兵留田便宜十二事一。」

【安堵】 堵は墻なり、民の安んじて勤務せざること猶墻の動かざるが如き義。

【軍無レ私焉】 亮の軍隊の規律嚴肅にして、掠奪などをするものなしとなり。

【巾幗】 婦人のかみかざりを言ふ。轉じて婦人の義にも用ふ。詳、頭註を參看すべし。

【問ニ其飯食及事煩簡一】 司馬懿が亮の使者に、亮の飯食の摸樣及び事務の煩劇か閑散かを問ひしとなり。

【夜事】 軍職の事の意。

【夙興夜寐】 朝は早く起き、夜は遲く寐ねて、其の職を勉むるなり。詩經、小雅、小宛篇に「夙興夜寐、無レ忝ニ爾所生一。」とあり。

【罰二十以上皆親覽】 軍人の罰、杖罪二十以上の者は、皆親ら省覽して、判決を下すとなり。

【噉食】 噉、音「タン」、啖と同じ、くらふこと。

【不レ至ニ數升一】 漢の一升は、凡そ我が一合一勺餘なり。不レ至ニ數升一とは、我が三四合なるべし。其の食の少きを言ふ。

【其能久乎】 共れ能く長く壯健なるを得べけんや、得られじとなり。是れ司馬懿喜悅の言なり。

【有ニ大星一赤而芒。壘ニ光營中一。】 芒は光芒なり、長く尾を引くをいふ。壘は落なり。天に大なる星出現し、赤くして光芒あり、俄かに亮の陣中に落ちたりとなり。大偉人の死、或は國家に不祥ある時は、斯かる前兆あるものなり。

【長史楊儀】 長史の官の楊儀といふこと。長史は、漢の朝廷及

相、又は三公の属官。魏晉以後、王公府の属官。後世は刺史の副官。ここは亮の属官と解すべし。

【死葛亮、走生仲達】 仲達は、司馬懿の字なり。ここは解釋を要せじ。但此の語は名高き諺なり。生徒に注意すべし。

【吾能料レ生、不レ能レ料レ死】 吾れ能く彼れが生ける間には之を料り知れども、死しての後は、反りて料り知ることは能ずとなり。

【推二演兵法一作二八陣圖一】 推演は推し廣むること。亮曾て古の兵法を推し廣めて、天・地・風・雲・龍・虎・鳥・蛇といふ八門の陣形てを作り、變化自在。故に敵寇ふこと能はずとなり。

【案行其營壘一】 營壘は、陣營壘壁なり。案行はしらべあるくなり。

【馬謖素爲二亮所一レ知】 素は平素なり、平生なり、固と異なり。知は知遇なり、知己なり、一面識の意に非ず。馬謖は平生より亮の知遇を受けたりとなり。

【卽二其後一】 其の遺言をおはれみ、厚く世話したりとの意。頭註を參看せよ。

【李平・廖立皆爲二亮所一レ廢】 李平・廖立の二人は皆曾て亮に廢せられて庶人となりしとなり。

【表二於後主一】 後主帝に上表するとの意。

【薄田十五頃】 薄田は瘠田なり。一頃は田百畝の稱、十五頃は、それを十五倍したるものなり。

【不二別治一レ生以長二尺寸一】 尺寸は僅かの身代をいふ。別に生計を治めて、子孫の爲に少しの身代を殘すことをせずとの義。

【餘帛】 餘れる布帛。

【餘財】 餘も餘なり、餘れる財貨をいふ。

「臣成都有二桑八百株薄田十五頃一」より、「以負二陛下一」までの言、全體王大、眼中唯天子と國家とありて、一點の私心ながりしを知るべし。乃木大將、曾て慨然として曰く(明治四十二年)「今の大臣大將の中には眼ッて龍を掛けてやつてよい奴等が澤らもある」と。態度なる大將にして、此の放語をなす、是れ果して何の放ぞ。嗚呼孔明の如きは、欽慕せざらむと欲するも、得べけむや。

諸葛亮　字は孔明、瑯琊陽都の人。劉備の三顧を受け、蜀を出で、蜀の爲に策を建て、君臣水魚の交をなす。遂に丞相となり、備の崩後、その委託によりて忠貞の節を後主に效ししが、事成らずして病んで陣中に卒す、年五十四。謚して忠武侯といふ。詳細の事蹟は、前集に出せり。

文章軌範・古文眞寶等に出づ。

漢室を興復せむと欲せば、必ず宮に先帝の遺德を追ふべし。先帝の遺德を追はむと欲せば、賢臣を親しみ、小人を遠ざけ、刑賞を公平にするに在りと。則ち全く後主を誡むるを以て主意と爲す。第一大段「誠宜下開二張聖聽一以光二先帝遺德一恢中弘志士之氣上。不レ宜下妄自菲薄引レ喻失レ義以塞中忠諫之路上也」の一節は、先づ主意を揭げたるなり。第三大段「親二賢臣一遠二小人一、此先漢所二以興隆一也。親二小人一遠二賢臣一、此後漢所二以傾頹一也」の一節は主意を斷言せるなり。第六大段「宜下自謀以諮二諏善道一、察二納雅言一深追中先帝遺詔上。」の一節は、主意歸宿の處なり。言言皇、句句誠。正に是れ文は人なる者、宜しく熟讀玩味せしむべし。

【出師表】 「出」は所領の切、音「スキ」。此の表は後主の建興五年、諸葛亮が發するに臨み、上りしもの。世にこれを出師表といふ。前後二回表を奉りし故に、之をば前出師表といふ。

【出師】 「出」は自動詞の時は、音「シュツ」、他動詞の時は、音「スキ」なり。ここは他動詞なれば「スキ」の音を用ふ。出奔・出納・出巡等これなり。然れども、出兵・出金等他動詞の時に、「シュツ」と音することもあれば、同一に非し能きを知らしめたし。

【表】 文體の名稱。下より上にたてまつるものなり。轉じて云ふ、「下官二於上一曰レ表」。また文選卷三十七、表の註に「李善曰、表者、明也標也。如二物之標表一。言標二著事序一使二之明白一。以喩二主上一。得レ垂二其忠一曰レ表。三王已前謂二之敷奏一。故尚書云、敷奏以言、是也。至二秦并二天下一改爲レ表。蔡有二四品一。一曰章、謝レ恩曰レ章。二曰表、陳レ事曰レ表。三曰奏、劾二敗政事一曰レ奏。四曰駁、推覈平論、有二異事一進レ之曰レ駁。六國及秦漢、皆謂二之上書一。行二此五事一至二漢魏已來一謂曰レ表。進二之天子一謂レ之表、進二諸侯一謂二上疏一。魏已前、天子亦得二上疏一。」とあり。

【先帝】 劉漢の昭烈皇帝なり。章武元年(皇紀八百八十一年)位に即き、成都に都す。吳の孫權と戰ひ、漢賊不兩立す。章武

恨病みて崩ず。在位僅かに三年。斯の篇、先帝の字を用ふこと十三、恰も喪年、殿父を引いて愛見を訓戒するが如し。悪意揣側、人をして其の忠誠に泣かしむ。

【中道】 論語、雍也篇に「力不レ足者、——而廃」とあり。中道は半途なり。帝位に即き、三年にして崩ず。

【創業】 創は始なり、造也。基業を前に始むるなり。孟子、梁恵王下篇に「君子創レ業垂レ統為レ可レ継也」朱註に「君子造二基業於前一、而垂二統緒於後一」とあり。

【崩殂】 崩御なり。崩は礼記、曲礼下篇に「天子死曰レ崩、諸侯曰レ薨、大夫曰レ卒、庶人曰レ死」とあり。殂は「ユク」と訓み、亦天子の死に用ふ。尚書、舜典に「帝乃殂落」。孟伝に「殂落、死也。死者魂気歸二于天一、故曰レ殂。体魄歸二于地一、故曰レ落」。

【光二先帝遺徳一】 「光」は明なり、大なり。堯法に「能明二俊徳一、以親二九族一、既睦、平二章百姓一、百姓昭明、協二和万邦一、黎民於変時雍」。

【侍衛之臣】 天子の左右に侍りて之を護衛する臣。

【不レ懈二於内一】 「懈」は説文に「怠也」動の反、心気ゆるむなり。精を出さざるなり。解に作る、同じ。詩経、大雅に「夙夜匪レ解」とあり。呂延済曰く「内宮中也」

【忘二身於外一】 外は戦地を指す。呂延済曰く「忘レ身謂二以レ身許二国於遠難一也」

【殊遇】 特別のあつき待遇なり。元板蜀本文選並びに「先帝之遇」に作る。李善曰く「遇謂二以レ恩相接一」と。

【開二張聖聴一】 天子の善く諫臣の諫言をきき納るる意。漢書、谷永伝上書に「王法納二予違諫一」漢聴は天子の御耳といふが如し。ここ下文の「察二納雅言一」を伏す。

【光二先帝遺徳一】 「光」は明なり、大なり。堯法に「能明二俊徳一、以親二九族一、既睦、平二章百姓一、百姓昭明、協二和万邦一、黎民於変時雍」。

【恢弘】 創良曰く「恢ハ大ナリ」書経序に「典謨訓誥誓命之文、凡百篇所レ以恢二弘王道一示二人主一以二軌範一也」

【志士】 節義の士。孟子、滕文公下篇に「志士不レ忘二在レ溝壑一」

【妄自菲薄】 「菲」は貶「と」。論語、泰伯篇に「菲二飲食一」。何晏曰く「菲薄也」妄りに自ら己を軽んじて不徳に安んずるをいふ。

【引レ喩失レ義】 古漢籍の訓喩の言を引き、本義を失ひ曲解して、己の非を飾はんとするなり。又、林西仲曰く「自安二於不義一、引二遠近之説一、以為レ己解レ過、非レ義理一」と。楓氏曰く「蓋し当時既に事を中原に生ずるを慮ひ、或は口を貴紹・劉表等の後図の事に藉いて之を拒むものありしなり」と。此の説、穿ち得て中れるが如し。

【宮中・府中】 宮中は禁中「オクムキ」なり。府中は大将軍の幕府「オモテムキ」なり。文選註に「李周翰曰、宮中、禁中也。府中、大将軍幕府也」とあり。古文眞寶の註には「宮中、宮官女子所レ出。府中、大臣宰相所レ居」とあり。文章軌範、呉楚材の評に云く「宮中親近、府中疏遠。師を出して表を進む。著意全く此の一段に在り」と。即ち、宮府となすの説従ふべきが如し。

【陟罰】 善行は賞めて官位を昇し、悪行は刑罰を加ふ。

【臧否】 善悪なり。詩経、大雅抑篇に「於乎小子、未レ知二臧否一。」下文の「作レ姦」「為二忠善一」に應ず。

【不レ宜二異同一】 日知録に曰く「異同、異也」。呉志、孫皓伝の註に「漢二異同一如レ反レ掌」。晉書、王彬伝に「江州當二人強盛時一、能立二異同一」。又曰く「憂情情也、得失失也、利害害也、疑念念也、成敗敗也、同異異也、順逆逆也、古人之詞、實緩不レ迫也」と。ここは、宮中・府中に於いて、賞罰を異にすべからずとなり。

【作レ姦犯レ科】 奸悪をなし罪科を犯す。

【付二有司一】 官吏に引渡すこと。官吏には各〻其の事司あり、故に官吏を有司といふ。付は託なり、委なり、帰と異なり。

【平明之治】 公平明白の政治なり。上文「異同」の字の反對。治一に理に作る。

【不レ宜二偏私使二内外異レ法】 「偏私」は「エコヒイキ」。李周翰曰く「偏私謂二執レ情不レ均」と。「内外」の「内」は「宮中」に應じ、「外」は「府中」に應ず。

【侍中侍郎郭攸之・費禕・董允】 後漢書、百官志に曰く「侍中比二二千石一、掌二侍左右一贊二導衆事一、顧問応対、拾遺補闕、及諸王朝二見於殿中一引レ王就レ座」と。李善曰く「並皆先賢傳曰、郭攸之南陽人、以二器業一知二名於時一」とあり。三國志には傳なし。蜀志に曰く「費禕字ハ文偉、江夏人也。後主襲レ位、亮上レ疏曰、侍中郭攸之、費禕ト、董允ト、然レバ則チ攸ト、禕ト、倶ニ侍中タルナリ」と。又曰く「董允字休昭、後主嗣レ位、遷二黄門侍郎一、於レ是丞相亮方二欲レ北伐一、以二允兼二内外一、欲下令二宿衛之臣一、解二其情一、以二允兼二内外一、欲下令二宿衛之臣一、解二其情一、以

宰相出ㇾ征、遂解ㇾ帶貰ㇾ誅、厚相結納」

【後値ニ傾覆ニ云云】　日知錄に「敗軍乃書ㇾ國長阪之敗、其言ㇾ奉ㇾ命、則求ニ救於江東ニ也。通鑑註以爲ニ文帝黃初四年事ㇾ非」と。この說從ふべし。詳しくは三國志・貫治通鑑を看よ。

【率ニ命於危難之間ニ】　林西仲曰く「按ㇾ鑑、獻帝建安十三年、曹操將ニ東下ニ。先日事急矣。則率ㇾ命求ニ救於孫權ニ。則率ニ命於危難ニ、指ㇾ此無ㇾ疑。坊本作ニ先主留ㇾ荊州ニ、何說」「受ㇾ任云云」と「率ㇾ命云云」とは、一つの事を對句に言ひしなり。

【建興二年】　建安十三年より、建安二十五年まで十三年、先主の章武三年後主の建興五年、通計二十一年間なり。此の一句無說の說話。

【先帝知ニ臣謹愼ニ】　解釋を要せじ。文章軌範の林西仲の評に曰く「謹愼二字、是孔明一生本領」故本城問亭（次人坂本物の號ニ齋言の友）の遺ニ山川圖之之ニ南師ニ序の一節に曰く「夫以ニ先主之雄委英略ニ臨ニ上游ニ而制ニ天下ニ、因ニ於白帝ニ卽ㇾ恨以沒者、非ㇾ以ㇾ不ㇾ忍ニ小忿ニ而壞ニ成予。丞相之以ニ書生ニ策ニ三分ニ、遂受ニ遺命ニ、進ㇾ吳圖ㇾ劉者、非ㇾ以ニ其能謹愼ニ予」參考の爲、ここに擧ぐ。

【崩ㇾ殂告ニ臣以ニ大事ニ】　大事とは、討賊興復の事を謂ふ。告は告託するなり。蜀志に「昭烈帝臨ㇾ終謂ㇾ亮曰、君才十ニ倍曹丕ニ、必能安ニ國家ニ、終定ニ大事ニ。嗣子可ㇾ輔ㇾ之。如其不才、君可ニ自取ニ。亮聞泣曰、臣敢不ㇾ盡ニ股肱之力ニ、效ニ忠貞之節ニ、繼ㇾ之以ㇾ死」後の遺詔の句を伏す。

【付託不ㇾ效】　委任せられたる事業の效果の見はれざること。付託を三國志に託付に作る。

【傷ニ先帝之明ニ】　明は人物を識別する眼識なり。亮若し討賊興復の事業成らずんば、先帝が亮を信任したるは、全く誤となり、隨つて其の眼識を傷つくるに至るべしとなり。

【五月渡ㇾ瀘】　水經の註に「瀘爲ニ朱提郡ニ、距ニ八十里有ニ瀘津ニ、水廣六七百步、深十數丈、多ニ瘴氣ニ。鮮ㇾ有ニ行者ニ」と。諸註を見よ。後主の建興三年五月なり。

【深入ニ不毛ニ】　草木生ぜず、五穀實らざる地を不毛といふ。魚半傳、宣公十二年の註に「燒殤ニシテ五穀ヲ生ゼザルヲ不毛トイフ」とあり。文選の註に「李周翰曰ク、草木ヲ生ゼザルヲ謂フ」とあり。是れ孟獲を征伐せし時の事を斥す。蜀志に、「建興三年、南夷叛ㇾ漢。先往平ㇾ之。七擒七縱。南夷不ニ復反矣」深の副詞、其の艱苦を見はせり。輕讀すべからず。

【兵甲】　甲冑と兵器となり。

【奬率】　奬は勸なり、率は、帥なり。卽ち勵まし率ゐる義。但し此の字は文選には「帥將」とあり、文章軌範には「率將」に、古文眞實には「奬率」に作る。舊書は古文眞實に從へり。

【三軍】　周禮の制によれば、天子は六軍・諸侯の大國は三軍・次國は二軍、小國は一軍。而して小國は一萬二千五百人なり。故に三軍は三萬七千五百人なれど、後世はすべて大軍の意に用ふ。ここも然り。

【中原】　黃河の左右卽ち洛陽・長安を中心とせる河南・陝西等の地方を言ふ。此の時は魏を指す。文選註にも「張銑曰、中原卽ㇾ魏也」とあり。

【攘分】　職務の本分をいふ。相は計謀を存することを謀り、將は境土を開拓することを計る。亮一身にして相將を兼ぬ。故に攘分といふ。此の字に就いて、後に川路柳虹の逸話を擧ぐべし。

【姦凶】　曹丕を斥す。

【興ニ復漢室ニ云云】　劉備は中山王の後なりといふ。故に興ニ復漢室ニといふ。舊都は雒洛二州を謂ふ。西漢の都、長安は雍州に在り。洛は洛陽なり。東漢の都。

【討賊】　取りて用ふること。國語、周語に「脩文修ㇾ之、而後王討賊焉」註に「討、取。賊、行也」とあり。呂氏春秋の高誘の註には「討賊取ニ其害ニ者ニ而行」といへり。

【損益】　利害・可否・輕重を通當に取舍增減するなり。論語、爲政篇に「殷因ニ於夏禮ニ所ニ損益ニ可ㇾ知也」

【治ニ臣之罪ニ】　治は罪をしらべ正すなり。

【與ニ陛之言ニ】　芳徳を與す忠言の意。

【諮ニ詢善道ニ】　善き政道を人人に相談するなり。詩經、小雅、周爰咨爾ニ度の毛傳に「咨ニ謀於善ニ爲ㇾ咨者」又、左傳、襄公四年「咨ㇾ事爲ㇾ謀」とあり。咨は諮に同じ。

【察ニ納雅言ニ】　雅言は正言なり。（論語ノ「子所ニ雅言ニ」ノ雅言トハ異ナリ）正言をよく察して之れを納ㇾ言「イルル」なり。

【追ニ先帝遺詔ニ】　遺詔とは、先帝崩ずるに臨み、後主を勉めて曰く「惡は小なるを以て之を爲す勿れ。善は小なるを以て爲さざる勿れ。惟れ賢、惟れ德、能く人を服す」と。是れなり。（前の孔明傳に見ゆ）追とは追念して實行に現はすべきを言ふ。

【不ㇾ知ㇾ所ㇾ云】　文選の註に「劉良曰、言不ㇾ勝ニ受ㇾ顧之重ニ、內部ニ於候ニ、今當ニ進別ニ恐情失ㇾ次。故不ㇾ知ㇾ所ㇾ云」

【前】　音「キャウ」なれど、「カウ」の慣用多し。尙、並には「シャウ」、名には「キャウ」と發音すること前にいへり。

【試用於昔日】　「試用セラレ」と後彼相に訓ずる所以を考察せしむべし。

「未嘗不……」は「未ダ嘗テ……セズンバアラズ」と訓

み、常に何何なりの意に解著す。二重打消の時は、本來の肯定に解し、「常ニ」又は「嘗」に改むれば、其の意明白なり。されば「未嘗不歎ニ息痛恨於桓靈一也」は、「常に桓靈に歎息痛恨す」との意なり。然れども「未ダ嘗テ――セズンバアラズ」と用ひ、「常に――す」との意に復ることは、初めより單に「常に――す」と作るよりもその意に於て、甚だ强しと知るべし。

【開張聖之聽云云】「開」字の上に「能」字の在るべきことを文理上より推察せしむ。

一段

第一大段、國家の危機に際し、忠諫を開張して忠諫の路を塞ぐ可からざることを直言す。

第二大段、刑賞を嚴正にして、小人を遠ざけ、賢臣を任用すべきことを述ぶ。

第一小段、宮中・府中の賞罰を異にすべからざるの理由を論ず。

第二小段、宮中の政は、郭攸之・費禕・董允等に任すべきをいふ。

第三小段、府中の政は、向寵等に任すべきをいふ。

第三大段、前漢興廢の分るる所以を論じて感嘆とし、侍中侍郎參軍等を親任すべきをいふ。

第四大段、自ら出陣の事を奏して、其の覺悟に及ぶ。

第一小段、自己の出處と先帝の賜託とをいふ。

第二小段、自ら賜託に報ゆる責任を明にし、郭攸之・費禕等の責任につきて尊說す。

第五大段、責任の歸着する所を明にして、自己及び郭・費の勿につき、其の成否を責むべきをいふ。

第六大段、君も宜しく忠諫の言を納るべきをいひ、最後に進別の哀意を敍す。

一段

舊說評して曰く「孔明出師二表、皆ニ忠ヲ盡セリ、皆ニ誠ヲ竭ナラズ、大ナルカナ言ヤ。伊周、訓命ト相表裏ス、崇禎以下、皆ニ事ヘテ悅ヲ爲ス者ノ、能ク至ル所ニ非ザルナリ」と。また安子順の評に「讀ニ孔明出師表一、而不ト泣シ誤者其人多不忠、讀ニ令伯陳情表一而不ト泣シ誤者其人多不孝、讀ニ韓文公與ニ十二郎一文一而不ト泣シ誤者、其人多不友」

眞山民評して曰く「公者一個眞情人也。人陣節制亦可ニ以見ニ之」。故文忠用ニ告先之事一。可ト謂ニ整齊嚴肅一者。○公之行文、如ニ其筆意、節ニ節可ト觀。然讀者要シ看ニ其節節轉換處一。又要シ看ニ其每節之陣、往來離合一」と。評し得て何等の巧妙。

故步趨直明先生が今上陛下に帝王學を進講せしは其人の知る所なるが、先生は最も孔明を崇拜し、其に倣じて前の文を講ずること數々なりき。されば人の孔明を講ずるものあれば、千人の身方を得たるが如く喜び、覺しこきながら「ム、ム、本當か、本當か」と問へりとぞ。

最分の二字に關する川島澄藏の逸話は、故本朝資氏の逸話逸事に出づ。之を左に掲げむ。

逸話曰く「諸葛孔明出師表の首に此日之所ト以報ニ先帝一而忠ニ陛下一之最分也の最分二字。宜ニ尤著ト眼。蓋我ト身亡レ家。以報ニ君國一。是士人最分耳。前ニ後之論ト最鍾之否ト。無ト不レ是時ト也。方今士人不ニ以ニ最ニ分一而以ニ最分一不レ得レ已。故我ニ徳忠小節一。亂ニ最最手者ニ得ニ色一。嗚呼最最不レ可レ欺矣。

逸話は本來有數の外交家にして、又帝王家なり。乃木大將・佐佐木高行伯等は深く逸話を崇拜せり。今の人。本來の名士といへば、指を屈田東湖・吉田松陰・横田雲濱等に屈し、逸話の功業・人格を疑ずるも餘なし。疑ずべきかな。

六　蜀　相

杜甫　唐代の詩人。字は子美、少陵と號す。本襄陽の人。後河南の鞏縣に遷る。開元二十三年進士の試に應じて第せず。天寶十年集賢院に待制し、十四年西河尉に擢でられしも拜せず。右衛率府胄曹參軍に改められる。祿山の亂に長安の城中に在ること一年。至德二年亡げて鳳翔に至り、帝に行在所に謁して左拾遺に拜せらる。後果官して劍南工部員外郎と爲る。大曆五年卒す、年五十九。其の詩雄渾沈痛にして忠厚の情を見る。李白と詩名と齊うし、李杜といふ。

杜工部集　二十卷、古來評註本極めて多く、仇兆鰲の詳註、沈德潛の偶評、錢謙益の箋註等名あり。

首聯に因みて、武侯祠堂の詩を按く。題籤の間、宜しく作人に私淑する所あらしむべし。

【丞相】　卽ち蜀の丞相、諸葛孔明なり。

【丞相祠堂】　宋宇記に「先主廟在二成都府西八里一」また成都記に「先主廟西院卽武侯廟、前有二劉大白一古柏可レ愛」とあり。方輿勝覽に「孔明祠堂在二府城西北二里一武侯初亡之時、百姓遥二

節朔一各私祭二于道中一李雄滅二蜀於晉之時一始作二廟於少城內一、桓溫平レ蜀、爲二少城一之時、猶存二孔明廟一」と。今四川省成都府の南門外に在り。

【丞相二句】　丞相の祠廟は、何の處に尋ね求めて詣でんか、正に錦官城外、老柏の森森たる處に在り。

【映レ階二句】　祠堂に入るの感慨を敍す。さて、祠廟は荒れはてて「キザハシ」は萋萋たる雜草に映れり。草は自ら春色、鳥は空しく好音、而も侯が音容は聞見するを得ず。妙は「自」「空」二字に在り。

【隔葉】　生ひ茂れる柏の葉「ガクレ」をいふ。

【黃鸝】　「ウグヒス」一名黃鳥、また倉庚といふ。鸝、音「リ」。但し我が邦のとは異なり。

【三顧以下四句】　先主、侯を草廬に顧みること、凡そ三たび。是の如く頻繁にして、實に謀るに天下を恢復する大計を以てす。侯すでに先主に事へ、又後主に事へ、兩朝を開濟し、天下を以て己が任と爲す。その言に曰く、「竭二駑鈍之力一效二中貞之節一繼レ之以レ死」と。眞に老臣の誠心を見るべし。大衆を悉し、斜谷を出で、司馬懿と、渭南に對壘するに及び、懿の侯を畏るる虎の如く、恢復の計、宛然として目前に在り。相持すること百餘日、軍中に卒す。長く、天下後世の英雄をし

て、涕淚滂沱業する能はざらしむ。蓋ぞ痛惋に勝へんとの意。長成に一字、一淚といふべし。

「森」「鎖」「音」「心」「禁」は下平十二侵の韻なり。

「隔葉」、一本「隔葉」に作る。この解釋を明瞭にかけて說くこと前注の如くすると、武侯にかけて「三度草廬ヲ訪ハレケレバ、其ノ誠ニ感ジテ、天下ノ計ヲナス」と解するもあり。評註閒の杜詩註解には「司馬懿評レ人、謂其侯全少事業、其能久乎。又孔明下レ教有レ閒二於心一布二公道一與二衆見一與二忠益一等語。此所レ謂隔葉黃鸝者也」とありて孔明の事とせり。

七小學抄

諸葛武侯戒子書

君子の行は、靜以て身を修め、儉以て德を養ふに在るを說く。斯の文、三國志に出づ。

【諸葛武侯】諸葛は姓、名は亮、字は孔明、忠武は諡にして、侯爵なりき。

【子】諸葛亮の子瞻をいふ。瞻字は思遠。亮嘗て兄瑾に與ふる書中に「瞻八歲而聰慧可レ愛」と言へり。鄧艾の蜀を伐つに及び、瞻を誘ひ、降さむと欲す。瞻其の使を斬り、戰つて死す。

【君子之行】行は道なり。

【靜以修レ身】靜は心のさわがざるなり。修レ身とは、一身を齊へて行儀をくづさざる義。

【儉以養レ德】儉とは、身のつづまやかにして奢らざるを言ふ。養レ德とは、德性を育てて傷はざる義。

【澹泊】泰欲にして恬淡なること。章句に「澹泊修之至也。奢侈必逐二於貨利一。澹泊故無二貪鄙一而志慮明也。德之所二以養一也」

【非レ靜無以致レ遠】其の志堅固にして遠大なる任に堪ふること。

【才須レ學也】已に才能ありと雖も、之を廣むるには、學問を必要とすとの意。

【慆慢則不レ能レ研レ精】慆慢はほしいままにして怠ること。研レ精は精微の道理を研究すること。章句に「慆猶二淫也一。慆慢情也。慆慢則心昏荒、而識レ昔遺レ事、不レ能レ研二究精微之理一。」

【險躁則不レ能レ理レ性】心の平靜ならずしてけはしきこと。理レ性は、性質の偏僻を正し治めて中正に歸せしむるなり。章句に「險傾危也、躁猶浮也。險躁則心狂妄。而日用之間、不レ能レ治二其性之偏一。」

【年與レ時馳、意與レ歲去】年は年齡なり、意は意志なり。學ぶべき年齡は、時節と俱に馳せ行き、學ばむと欲する意志は、歲月と俱に過ぎ去る義。章句に「可レ學之年、與レ時而馳、欲レ學之意、與レ歲而往。學既不レ成、才必不レ廣、所レ見所レ行、與二鄉里等常之人一無レ異」

【成二枯落一】草木と枯落を同じくする義。章句に「枯落言レ將二老死一也」

【寓】貧窮者の住む小屋。

大唐中興、共の良心調制記に於いて、命の文を批判し、敎戒せり。敎授者取いて一讀せば益る所多かるべし。又、名古屋の老儒服部宇三郎の東洋道德敍論中に、諸葛亮を論じて、老子の感化を受くる所多しと曰へり。奇なるが如くにして而も尤れり。切に敎授者の一讀を勸む。

張文節公爲レ相

儉より奢に入るは易く、奢より儉に入るは難きを說く。言凡にして旨正し。輕輕に觀るべからず。斯の文、溫公家範より取る。

【自奉如二河陽掌書記時一】自奉は、衣食等の、自ら奉養するものをいふ。河陽は、今の愼慶府孟縣なり。掌書記は、府の佐官、文書を掌る。自ら奉養すること儉素にして、河陽の掌書記時代の如しとなり。

【所親或規レ之】親しき所のもの或は之を忠告すとの義。規は「タダス」と訓む。忠告すること。

【自信清約】清約は、物欲にあはくして奢侈をなさぬこと。

「自ラ清約ナリト信ズ」と訓み、自分にて清約なりと信ずとの意。

【外人頗有二公孫布被之譏一】外人は他人なり、又世人なり。公孫は姓、名は弘、西漢の人、丞相と爲りしが、名を求めむとして、布の被服を製して著用せり。汲黯、朝廷に於て之を見、責めて曰く、弘、俸祿多くして布の被を爲るは、此れ詐なりと。今、公も宰相と爲りて、斯く儉約するは、亦名を求めむ爲のみとの譏ありとの意。

【宜二少從一レ衆】宜しく少しく衆人の意に從ひて奉養をあつくせよとなり。

【飾二次王食一】美衣美食。

【一旦異二於今日一】一旦念に身終り祿絕えて、今日の富貴に異ならむ時にはとの意。

【失レ所】立場を失ふこと。

【如二一日一】一日の如く變らぬ生活をする義。

張子可レ敎

劉邦の謀臣張良青年時の傳を授く。敎愼心並に忍耐心の涵養を學ばしめ、後來事を成さんとする修養に資せしむ。

【擣子】 幼嬰の子をいふ。因りて老人が幼兒を呼ぶ稱とす。禮記檀弓に「見レ有ニ――墓者一」とあり。豎子とは義自ら別なり。

【留侯張良】 史記正義に曰く、「括地志ニ云フ、故ノ留城ハ兗州沛縣ノ東南五十五里ニ在リ。今城内ニ張良ノ廟アリ」と。

【先】 先祖。

【周】 周の武王の子韓侯の後、晉に事へて韓氏と爲る。景侯虔に至りて侯に列す。十世の後、王安に至り、秦に滅ぼさる。韓初め平陽(今ノ山西平陽府治)に都し、後、新鄭(今の河南開封府新鄭縣)に遷る。

【大父開地】 「大父」は祖父、「開地」は名。

【官事】 「官」は官に仕ふること。多く動詞として用ふ。「事」もワカフルなり。

【家僮三百人】 僕從をいふ。家來下僕等なり。三百人は、其の多數を示したるなり。

【五世相レ韓】 前に言へる如く、開地が昭侯、宣惠王、襄王の宰相と爲り、平が悼王掉王の宰相と爲りしこと。相は宰相なり。

【淮陽】 史記正義に曰く、「今陳州也」と。河南省陳州府に屬す。

【倉海君】 漢の武帝元年東夷の濊君南閭等降る。倉海郡と爲す。その君長なり。顔師古曰く「倉海君者常時貰若之號也、良既見レ之、因而求ニ得力士一」と。

【鎚擊】 鎚の「ツチ」なり。椎は說文に「擊也」とあり。動詞に用ふれば、「ウツ」の義となり、名詞に用ふれば、物を擊つの具、即ち「ツチ」の意となる。槌と同義。

【秦皇帝】 名は政。莊襄王の子なり。六國を亡ぼし、天下を一統し、封建を廢し郡縣となす。在位三十七年にして崩ず。始皇帝にて詔して曰く、朕を始皇帝と爲し、萬世に至り、之を無窮に傳へんとすと。故に始皇帝といふ。

【博浪沙】 今の河南省懷慶府陽武縣の東南に在り。輿地志曰く、「地ハ陽武ノ南ニ在リ。按ズルニ今ノ浚儀ノ西北四十里ニ博浪城アリ」。陽武は河南省鄭州府の屬縣なり。

【狙】 漢晉「シヨ」、吳音「ソ」、伺なり、「ネラフ」義。

【副車】 漢官儀に、「天子ハ屬車三十六乘」とあり。屬車は即ち副車なり。

【大怒、大索:天下一】 索は、「モトム」と訓む。求め捜すなり。二つの大の字甚だ力あり。注意すべし。

【閒從容步】 「閒」は閑なり。「從容」はゆつたりとおちつく皃。安なり。其の容止に從ひ任せて矜莊ならざるをいふ。

【下邳圮上】 「下邳」は縣の名。東海に屬す。「圮」は土の崩なり。頭註を見よ。

【衣レ褐】 褐は粗末なる毛布、卽ち賤者の衣を着たること。

【直】 「クダチニ」と訓む。スグニと譯す。但し之を「コトサラニ」と訓むものあり。こは崔浩の「直、猶レ故也」の說を取れるものならむ。又、「マサニ」と訓むものあり。こは索隱の「直、正也」の說に從へるなるべし。されど「クダチニ」と訓みて差支無からん。

【毆】 「ウツ」と訓す。擊撲するなり。

【曾忍下取レ履】 曾忍は心に忍び强きを强ひて忍びて爲すなり。史記下取レ履、正義曰く、「曾忍下取レ履、正擬當抄處、流書創レ之、可ニ以親ニ張良使ニ勞一」

【乘勢取レ履】 「乘」は「スヂニ」と訓す。猶ほ先にと訓ふが如し。張良が先に已に履に取る。故に途に跪きて之を履かしむるなり。

【長跪】 體を伸ばしてひざまづくなり。胡源に曰く、「人安坐則悉跪、敬則小跪、事レ體若レ加レ長焉。故曰ニ長跪一」

【平明】 ヨアケなり。平旦なり。五更をいふ。

【與ニ老人一期後何也。去。曰、】 期は、時刻を定めて會合を約することと。此の前後の「去」皆老人に係りたりとして、「去曰」と訓ぜる本あり。されど猶ほ「去」と訓すべし。「何也」を句點とせるは、「何也」と詰問し、書く反省せしめたる後、「去」と命ずる方、語氣力あり。故に本書は句點を用ひたるなり。曰の字は、「去レ」と一喝し、さて更に詞を改めて曰くの意なり。此の字無限の味あり。

【鷄鳴】 四更。夜の二時頃。

【夜未レ半】 夜半前。夜半は三更。

【一編書】 黄石公の三略といふもの是れなり。但し今存する三略は僞書なり。

【後十年興】 この後、正に十年にして沛公に遇ひ、帝業の興となれるを斥していふなり。

【穀城山】 一名黄山、濟州東阿縣の東に在り。濟州は故の濟北郡なり。

【黄石】 黄色の石。

【太公兵法】 正義に「七錄ニ云フ、兵公ノ兵法一帙三卷、太公ハ姜子牙、周ノ文王ノ師、齊侯ニ封ゼラル」

【異レ之】 之を不思議に思ふこと。

【圮】 音「イ」土橋なり。

【圮】 音「ヒ」毀なり。

【毆】 以レ杖擊也と註す。

【毆】 「毆」の古文なり。

【敵】「仇」なり。或は「讎」に作る。又「讐」と通ず。挌撃なり。

第一段、張良の家系を述べて、報仇の由を叙す。
第二段、張良秦皇を狙撃せしことを叙す。
第三段、圮上にて一老父にあひ兵法書を授かりし事を叙す。

黄石公の事に就いては前漢芸文志、兵の権謀者流十八史略に論じて曰く、「黄石公記、三略其人有耳。非二黄帝一也」と。

八留侯論

蘇軾　字は子瞻、東坡と號す。洵の長子也。宋の文章家として九も著はる。時除乞罷歸養次。哲宗の時翰林學士兼侍讀に至りしも　又出でて杭州に歴任し、徽宗の建中靖國元年郴に貶せらる、年六十。文忠と諡す。

張子房は圮上の老人の教を受け、能く人の忍ぶ能はざる所を忍び、終に漢の高祖を輔けて、王業を成就せりと。これ前の篇の要旨。忍の字一篇の主眼。前の篇、直抜得意の作。宜しく熟讀して其の妙を知るべし。

【有二過レ人之節一】　常人に立超えたる節操ありとの意。
【人情有二所レ不レ能レ忍者一】　衆様の士の胸中には、普通の人情にては、到底忍び得ざる事を忍ぶことありとの義。「有」の字と、「人情」の字を強めむ爲なり。
【匹夫見レ辱、拔レ劍而起、挺レ身而鬪】　匹夫は庶人なり。「挺レ身」は身を抜出すなり。說文に「挺、拔也。」とあり。鬪は、「タタカフ」と訓めども、戰と異なり、「ワカミアフ」と訓す。戰は兵を擧げ陣を張りてたたかふなり。匹夫なるものは、少しく人より辱められるれば、直ちに劍を拔いて起ち上り、己れの身を抜き出してたたかふとの義。ここは、孟子、梁惠王下篇に、「夫撫レ劍疾視曰、彼惡敢當レ我哉。此匹夫之勇。敵二一人一者也。」より調案し來ること疑なし。
【卒然臨レ之】　卒然はにはかなるさま。全篇のさま。「臨レ之」は大勇の人にし掛け來むこと。
【無レ故加レ之】　故なくして大勇の人に無禮を加ふること。論語、里仁篇に、「不レ使二不仁者一加二乎其身一。」馬融の註に「加、陵也」
【所二以持一者】　胸中にさしはさみ持つ所の度量。
【安知二其非一populace之能有二謀君子者一、出而試レ之。】　「其」は其の事を指す。謀君子は、謀れたる君子、世に知られざる君子のこと。何うして其の事が、衆の世に謀君子なる者ありて、出でて張子房の人物を試驗したのでないと云ふ事が知れようか、知れない。即ち恐らく謀君子が出でて試驗したのであらうとの義。ここ漢文特有の修辭。宜しく注意して辨ずべし。
【徵見二其意一】　老人が履を圮下に取らしめ、又期に後れたるを責めたるは、謀約の間に忍辱の必要を見はしたるなりとの意。
【孟賁相與瞋視之義】　忍の一字は、古來孟賁相與に瞋視して守

る道なりとの意。

【以爲二鬼物一亦已過矣。】　世人圯上の老人を以て精怪となすは、甚だ過てりとの義。「已」には甚だなり。史記、留侯世家贊に、「太史公曰、學者多言レ無二鬼神一。然言有レ物。至レ如二留侯所レ見老父子一者、亦可レ怪矣」と同意に、「物謂二精怪一矣」とあり。

【其意不レ在レ書】　老人の目的は、一冊の一字を教ふるに在りて、太公の兵書を教ふるに非すとなり。

【以二刀鋸鼎鑊一待二天下之士一】　四者は皆刑具。最も重き刑を以て天下の士を遇する意。刀は斬罪、鋸は足切り、鼎鑊は大小の差あるのみにて、所謂「釜ニ煮」なり。

【夷滅】　夷は「タヒラグ」と訓む。一人の罪によりて親族まで誅せらるること。所謂「夷二九族一」是なり。

【誰レ有二賁育一無レ所レ懾レ施】　古の孟賁・夏育の如き勇者ありとも、手の下すべき方法も無しとの意。孟賁・夏育は共に戰國時代衛の勇者。史記、袁盎傳に、「袁二賁育之勇一、不レ及二陛下一。」註に「孟康曰、孟賁・夏育皆古勇者也」と。索隱に曰く、「尸子云、孟賁、水行不レ避二蛟龍一、陸行不レ避二虎兕一。」史記、范雎傳の註に、「夏育衛人、力拳二千鈞一」と。

【持レ法太急】　急は嚴なり。法を取り持つこと甚だ嚴念なりとの意。

【鉗】　項不レ能レ容レ髮】　其の危險なること、髮一本を容るる隙間なきを言ふ。枚乘、諫二吳王一書に、「變化生二於天一、不レ可二復鉗一。臣入二淮圍一、髮二以復出一。其出不レ出、間不レ容レ髮。」とあり。（臣は吾りのこと。）

【千金之子、不レ死二於盜賊一】　解釋を要せじ。史記、貨殖傳に、「千金之子、不レ死二於市一。」とあり。

【伊尹・太公】　伊尹、莘は伊、字は尹、名は摯、殷湯王を相けて夏桀王を亡ぼし、天下を定む。嗣太甲立ち、不明なり。乃ち之を桐宮に放ち、倏ゆるを待ちて位に復せしむ。太公は勿論太公望呂尙をいふ。周文王・武王に用ひらる。

【荊軻・秦政】　二人皆戰國の時の刺客。荊軻は衛の人。燕の太子丹の客となり、其の命を奉じて秦に赴き、秦王を刺さむとし、果さずして殺さる。杉浦先生常に曰く、「荊軻志成らずと雖も、其の壯烈、僧夫を興起せしむるに足る。」と。秦政は周の釐の人。秦陽の呂仲子、韓の宰相俠累と讐あり。政の勇を聞き、黄金を以て其の母の壽を爲して招く。政母の在るを以て許さず。母歿するに及び、仲子の爲に俠累を殺して死す。亦快男子なり。

【沛公】　高祖なり。

【遽】　遑は快なり、思ふ存分なり。

【間不レ能レ容レ髮】　其の危險なること、髮一本を容るる隙間なきを言ふ。枚乘、諫二吳王一書に、「變化生二於天一、不レ可二復鉗一。臣入二淮圍一、髮二以復出一。其出不レ出、間不レ容レ髮。」とあり。（臣は吾りのこと。）

【千金之子、不レ死二於盜賊一】　解釋を要せじ。史記、貨殖傳に、「千金之子、不レ死二於市一。」とあり。

【伊尹・太公】　伊尹、莘は伊、字は尹、名は摯、殷湯王を相けて夏桀王を亡ぼし、天下を定む。嗣太甲立ち、不明なり。乃ち之を桐宮に放ち、悔ゆるを待ちて位に復せしむ。太公は勿論太公望呂尙をいふ。周文王・武王に用ひらる。

【荊軻・秦政】　二人皆戰國の時の刺客。荊軻は衛の人。燕の太子丹の客となり、其の命を奉じて秦に赴き、秦王を刺さむとし、果さずして殺さる。杉浦先生常に曰く、「荊軻志成らずと雖も、其の壯烈、僧夫を興起せしむるに足る。」と。秦政は周の釐の人。秦陽の呂仲子、韓の宰相俠累と讐あり。政の勇を聞き、黄金を以て其の母の壽を爲して招く。政母の在るを以て許さず。母歿するに及び、仲子の爲に俠累を殺して死す。亦快男子なり。

【使二伴於不レ死】　子房が冒險して始皇を擊ちながら、而もまぐれ當りにも生を得むとすとの意。

【倜儻許與】　倜儻は共に「オゴル」と訓む、不遜の意。許は者、與は厚、自ら尊厚にすること、卽ち尊大ぶるを云ふ。

【莊王化レ鄭】　莊王、楚叔敖を以て相と爲し、遂に諸侯に覇たり。周定王十年、鄭を討ちて之に克てり。此の事左傳、宣公十二年に見ゆ。名高き文なれども、覺る長ければ之を擧げず。

【鄭伯肉袒牽レ羊以迎】　鄭は春秋列國の一、伯爵の國なり、故に鄭伯と稱す。ここは鄭襄公を指す。肉袒はは裼をぬぐこと。古の支那の謝罪の風俗。「牽レ羊以迎」は、左傳、杜註に、「示二服爲二臣僕一也」

【必能信二用其民一矣】　必ず能く誠信を以て其の國民を使用するならむとの意。必能の訓詞力あり。

【合レ之】　斬る人は之を伐つに忍びずとて、合したりとなり。合は「ユルス」なり。

【臣妻於吳者三年】　十八史略卷一に、「周敬王二十六年、吳王夫差逼敗二越子夫槩一。越王句踐以二餘兵一棲二會稽山一、請二身爲レ臣。妻爲レ妾。」とあり。

【平生之素】　平生よりの知合。

【油然而不レ覺】　油然は自得の貌。孟子、公孫丑上篇に、「由由然與レ此俱、而不二自失一」趙註に、「由由浩浩之貌」朱註に「由由自得之貌」とあり。油は由と相通ずるなり。張子房が老人の無禮に對して、油然として少しも怪しまずとの義。

【秦皇之所レ不レ能レ驚、而項籍之所レ不レ能レ忍也】　張子房の此の忍耐は、秦始皇の暴虐を以ても驚かすこと能はず、項籍の勇悍を以ても怒らすこと能はざる所なりとの義。項籍は、楚の項羽。

【待二其罷一】　項籍の疲れ挫くるを待つとの意。

【淮陰破レ齊云云】　淮陰は韓信を指す。信、漢の高祖を輔けて、淮陰侯に封ぜらる。史記、淮陰侯傳に曰く、「韓信卒子レ齊、使人言二漢王一曰、爲二假王一以鎭レ齊。韓信使者至。發レ書。漢王大怒罵曰、吾困二於此一、且暮望二若來佐一レ我、乃欲二自立爲一レ王。」とあり。「困於此」とは、高祖此の時楚の爲に滎陽に圍まれしをいふ。

【非二子房一其誰全レ之】　右の淮陰侯傳の次に曰く、「張良陳平躡二漢王足一、因附レ耳語曰、漢方不レ利、事能禁二信之王一乎。不レ如二因而立善遇レ之、使二自爲守一。不レ然變生。漢王亦悟、因復罵曰、大丈夫定二諸侯一、卽爲二眞王一耳。何以レ假爲。乃遣二張良一往立レ信爲二齊王一。」とあり。

【太史公】　史記の著者司馬遷なり。

【異二子房一云云】 史記、留侯世家贊に「余以爲其人計魁梧奇偉。至レ見二其圖一狀貌如二婦人好女一。」とあるに據るなり。

【魁梧奇偉】 魁梧は身體の逞しく大なること。奇偉は身體の逞しくすぐれてえらきさまをしたること。

【狀貌乃如二婦人女子一】 此の乃は「カヘツテ」の意。「ソコデ」の意に非ず。

【不レ將二其志氣一】 あれ程の大事業を成しし志と氣象とにつり合はずとの意。將は「カナフ」と訓む。

【嗚呼此其所レ以爲二子房一歟】 其の字は、婦人女子の如き狀貌を指す。此の一結烟波千里、妙趣きす。宜しく玩味すべし。

■

見落は文中に記けり。因つて改めて說かず。黃石山、圯山勝等の批評を掲げて、前の說を參へむ。

圯山勝曰く、「且其意不レ在レ書、此一句祖也。言レ勝二下邳一讀レ。此下直說二不レ在レ書之由一耳、與二前後一。特就二說中一點出「此處有レ異」二字又入レ論主也。是故借二師弟一云云、直使二代作一老人口角一、非二且其意不レ在レ書句意一。蓋レ此借二不意一又屈二折開一一層一、文勢一變、一洗二全身一、無復拔。後中如二老人云云一、更二須臾不レ見レ丘、此處直敍二正意一、第二後遇一。即三後期說、大意去書說二青天一」と。評し得て何ぞ明快なる。山勝ならでは下し得ざる所なり。

九　經二下邳圯橋一懷二張子房一

■　前課と相對照して、此の詩を授け、張子房の智勇と英氣とを欽慕せしむべし。之を背誦せしむるを要す。

■

【未二成嘯一】 未だ勢力を得て活動せざるに喩ふ。「虎嘯」は君臣際遇の盛んなるにいふ。王褒の意主得二賢臣一頌に「虎嘯而谷風列」

【天地皆震動】 漢高、張良傳に「良レ韓報二仇强秦一、天下震動」とあるに本づく。

【碧流水】 又、「碧水流」。唐詩品彙に「碧玕水」に作る。

【此人】 張子房を斥す。

【徐泗】 「徐」は地名、「泗」は水名。泗水は山東省泗水縣の西南に出で、徐州を過ぎ、又東南して邳州を過ぎて、淮水に入る。

■

【子房去二四句一】 張良の始皇帝を狙撃せしを叙す。是れ其の勇。さて張子房の未だ漢高の謀臣として、勳績を建つるに至らざる以前、何とかして韓の仇を報いんものと、財を散じて天下の士と結び、一家を治むることを顧みず、滄海君の力に依りて、一勇士を得、一大鐵椎を以て始皇帝をば博浪沙に狙撃せり。

【報韓云云四句】 張良の智勇を歎ぜるを叙す（巧に潛匿せしは是れその智）力士の拋ちたる鐵椎は始皇に中らずして、報仇の本意を遂ぐる能はざりしも、是れ實に驚天動地の快擧にして、これが動機となりて、やがて陳勝吳廣も起り、沛公、項羽も出でて、遂に秦を滅することを得たり。かく天下を震ひ動かす程の大事を爲しながら、そつと身を潛めて下邳に匿れしは、實に勇と智とを兼備せる人物ならずや。

【我來云云六句】 圯上懷古の感を叙す。吾は此の土橋の上に來りて、古の張良の事蹟を懷ひて、そぞろに英雄の偉風を欽慕す。されど今は唯碧水の流るるのみにて、黃石公共の人も見えず。而して誠に歎息に堪へざるは、此の人即ち張良が世を去りし後は、絶えて之に續いで起る英雄もなく、徐泗の間の土地は蕭條と物淋しき心地せらるる事なり。李白天才英特、任俠を好み、財を輕んじて施を好み、功名を成さむとするの志あり。其の張良の古蹟を過ぎ、感慨淋漓、此の詩を賦することは、誠に偶然に非ざるなり。

「家」「沙」は下平六麻の韻、「動」は上聲一董、「勇」は上聲二腫の韻（普通用）「風」と「公」と「空」は上聲一東の韻。

一〇 袁州州學記

李觏 字は泰伯、宋の盱江の人。歴史に通じ、文章を以て名を知らる。教學する者常に數百人。平生孟子を喜ばず。曰く、孔子は王を尊ぶ。孟子は乃ち諸侯をして王たらしむと。嘗て制舉に試みられ、六論中其の一を得ず。嘗へらく、われ書に於いて讀まざるなし。これ必ず孟子の註疏ならむと。筆を投じて出づ。人爲に檢覈すれば果して然り。遂に第に中らず。李觏、吉州録兵の參に選ず。建昌・昌黎・明堂書を著し、世に行はる。范仲淹の推薦に因り、大學助教と爲り、大學說書を以て卒す。年五十一。文集を退居類稿・盱江集といふ。

支那上代教學と治亂との關係を說きて、教學の要旨を知らしめ、臣民の本分を牢記せしむ。會政務結構を授け、應學句を書取らしむべし。

【袁州】 宋の江南西路の州名、今の江西省袁州府。此の記は州學を新に建てし時、作りたるなり。

【州學】 體記、學記に「古之教者、家有ㇾ塾、黨有ㇾ庠、術有ㇾ序」とあり。體記の體記集說に「術者ㇾ遂ノ州、萬二千五百家爲ㇾ州、州之學曰ㇾ序」と見ゆ。

【皇帝二十有三年云云】 眞註の體靜四年の條を承く。皇帝は仁宗なり。宋の第四代の天子。名は禎・眞宗の第六子。在位四十六年。年五十四にして崩ず。有は又と通ず。此の十三字起し得て莊重。

【制詔】 天子の命令なり。史記、秦始皇本紀に「命爲ㇾ制、令爲ㇾ詔」とあり。顧炎武曰、秦王之言、出ㇾ法度ㇾ以制ㇾ人曰ㇾ制、詩論之語、若ㇾ日月之至焉曰ㇾ詔、制詔上告ㇾ下也」

【惟時】 「コレコノ」と訓ず。書經、舜典に「惟時亮ㇾ天功」「惟」は發端の辭、「時」は是なり。わざわざ「惟時」と云ふは、書經を學び、故らに文を古雅にせるなり。

【守令】 州の長官太守と、縣の長官令なり。

【吾】 袁州の人。

【有ㇾ厲ㇾ力禦ㇾ患捍ㇾ難】 「厲」は竭なり。盡なり。禦も盡なり。「捍」は敬なり、「難患」は國家天子民を愛するの旨意なり。力を竭し、盡を盡して、敬みて天子の御意に關ふものあり。厲・禦・捍の字、皆た古雅。ここ上文「有ㇾ術」を承く。

【假ㇾ官借ㇾ師】 官は學校長、師は教授なり。假も借も「カル」なり。眞に學校長や教授を置かず、唯名義だけ置くなり。林間

仲いふ「言ハ治ムル所以、師ハ教フル所以ナリ。皆名色ヲ假借シ、事ニ任ズルノ實ナシ。惟都且ニ文書ヲ具シ、以テ制詔ヲ準ジ、上聞スルノミ」と。ここ上文「有ル集」を承く。一本官を官に作るは非なり。

【荷具ニ文書ニ】　徒らに幅揆のみを具へて己の責を塞ぐなり。漢書、宣帝紀に「計簿具ル文而已」とあり。顔師古曰く「其ノ文アリト雖モ、而カモ實詢ハザルナリ」と。この四字下文の「弄ニ筆墨ニ」と呼應す。

【雖絃歌】　詩歌を誦し琴瑟に合する聲なり。論語、陽貨篇の「聞ニ弦歌之聲ヲ」の朱註に「弦琴瑟也、以ニ證樂ニ歌、故邑人皆弦歌也」と記、文王世子に「春誦夏弦、秋學ル禮、冬讀ル書」とあり。誦は徒となふるなり。「武城ニ弦歌ニ亡ニ論絃聲ニ」の一句、州と言はずして城といふ。語を下すこと、論語の武城絃歌に本づく。

【雖前不ル相】　上唱へても下和せざるなり。「倡」は唱に通ず。「トナフル」なり。

【敎化不レ行】　敎化の道の止まりて天下に行はれざる意。尼は止なり。孟子、梁惠王下篇に「止或レ尼レ之」尼は捉と通じて「トドマル」と訓む。

○以上第一段は、先づ職官の未だ整らざる以前に於ける教育の有様を敍す。

【三十有三年】　仁宗至和二年。

【諏君無擇】　諏は姓、無擇は名、字を擇之といふ。君は敬稱。

上蔡の人、進士高第を以て直集賢院を歷て、出でて袁州に知たり。首として學官を建つ。郡圖紘謂の撃、此に由りて始めて盛なり。

【知】　知州にして郡の兵戎民政の一切を總ぶ。

【始至】　新に至るといふこと。初は事の最初に測りて述ぶるなり、ここは決して初を用ふべからず。

【進諸生ニ知學官關狀ニ】　この八字、古文句解・古今文海には並に無し。古文集成・文章軌範には並にあり。進は引見なり。また「官」を一本「宮」に作る。「學官」は學ぶところ校舍なり。學官に二あり、一は敎官をいひ、一は校舍をいふ。ここは校舍のこと。漢書に「文翁爲ニ蜀郡守ニ修ニ起學官於成都市中ニ」ここはここと同じ。關は廢壞の義。

【脩效關疎】　儒者の敎育が迂遠にして、實效の集らざるをいふ。荀子、脩效篇の註に「效功也」。論衡に「周注關疎、不レ可レ閑」一本に「關疎」に作る。

【通判】　文獻通考に「唐置、五代諸鎭ノ牙ニ倣リ、諸州ノ通判ヲ置キ、長吏ト體ヲ均シクセシム。凡ソ兵民錢穀戸口賦役獄訟聽斷ノ事ヲ可否裁決シテ守ト通簽シテ之ヲ行フ」とあり。

【瀕川陳君佐】　「瀕川」は郡名、河南省に在り。陳佐の鄕里。君は敬稱。陳佐の事未だ明かならず。

【相ニ喬夫子廟ニ】　從前の孔子廟を見るとの意。相は地形をしらぶること。書經、洛誥に「來相ニ宅」

【庳陋】　地形の狹きなり。詩經の註に「猶地――」。また史記、李斯傳に「遂ニ棄地――ニ」。庳は音「ケフ」、一音「カフ」、陝に同じ。

【治之東ニ】　州廳の東に學校を建築すること。治は、地方長官の居る處。

【辰土塡閒】　その土地は乾燥して堅固なるなり。「辰土塡閒、辰位面レ陽辰材孔良」は其の土地の吉と用材の美とを記す。辰の字、故らに古雅の字を用ひしなり。

【殿堂門廡】　殿堂は校舍をさす。或は大成殿と講堂とをいはんか。殿と堂とには、大小の差あれど、ここは熟語として同一に用ふ。門廡は門及び門の兩側にある長廊なり。群書に「堂下周廡、亦謂ニ之廊ニ」とあり、又「廊、堂邊廡也」と注す。劉克莊の詩に「門廡無レ人殿未レ開、白頭敎吏久徘徊」

【黝堊】　「黝」は「アラグロシ」「堊」は「イロツチ」、黝堊は青黑色に堂を塗るなり。禮記、喪大記に「飾詳黝堊」とあり。

【丹楹】　丹は赤色なり、楹は漆を施せる黑色を言ふ。

【法敎】　舊法故事の略。禮記、月令に「染ニ禾黝黝文章ニ、必以ニ法故ニ」とあり。「フルキ」法度なり、先例なり。一本、敎の字を下句に屬して讀む者あれど、非なり。此の段は作者故らに四字句を用ひたればなり。

【生師】　「生」は諸生、「師」は敎官なり。

【有レ舍】　生徒に寄宿舍あり、敎師に官舍あること。

【庖廩有レ次】　庖は廚なり、廩所のこと。廩は米藏なり。有レ次は、順序次第ありて、すべて整齊せること。

【百爾】　詩經、邶風雄雉篇に「百爾君子、不レ知ニ德行ニ」とあり。「百」は凡なり、百爾は多くの意、爾は語助なり。

【並レ手僧作】　皆皆が手を並べ、一齊になりて普請に從事する義。

【工善吏勤】　大工左官は上手にして、係りの吏員は勤勉すとの意。

【舍菜】　釋菜なり、孔子の祭の名。禮記、文王世子に「始立ニ學者、釐ニ爵レ器、用レ幣、然後釋菜」とあり。舍は釋なり、陳なり、菜は藻蘩の屬なり。

【且レ有レ日】　釋菜の期日は、まさに何日と定まらむとすとの意。且の字、將の字と略同一なれど、意稍輕し。「舍菜且レ有レ日」の一句、上を承け下を起す。注意すべし。

【諮ニ於衆ニ日】　諮は告ぐるなり、多くの生徒に告げて曰くの意。

【四代之學考二諸經一可レ見已】「四代之學」とは、虞夏商周の學をいふ。禮記、王制に「有虞氏、國老ヲ上庠ニ養ヒ、庶老ヲ下庠ニ養フ。夏后氏、國老ヲ東序ニ養ヒ、庶老ヲ西序ニ養フ。殷人、國老ヲ右學ニ養ヒ、庶老ヲ左學ニ養フ。周人、國老ヲ東膠ニ養ヒ、庶老ヲ虞庠ニ養フ」と。鄭註に「皆學ノ名ナリ、異ナルモノハ四代相變ズル耳」とあり。「考二諸經一可レ見已」は、虞夏商周の學校の事は、之を經書を以て考ふれば、知らるべしとなり。以下學校の沿革を述ぶるに先たち、上代の事を此の一句を以て道破す。筆力高古。

【山西】太行及び崤函以西、即ち秦國を斥す。

【鏖】音「アウ」、「ミナゴロシニス」と訓ず。漢書、霍去病傳註に「鏖謂二苦撃而多殺一也」とあり。

【六國】韓・魏・燕・趙・齊・楚。

【欲レ帝二萬世一】史記、秦始皇本紀に「朕爲二始皇帝一、後世以計レ數、二世三世、至二于萬世一、傳二之無窮一。」とあり。

【劉氏一呼云云】「劉氏」は前漢の高祖劉邦を斥す。高祖武關を破りて關中に入り、遂に秦を滅せるをいふ。

【武夫】兵士のこと。詩經、兎罝篇に「赳赳武夫、公侯干城」

【孝武乘二豐富一】前漢の孝武皇帝、名は徹、景帝の子なり。初め位に即くや、國家無事、府庫貨財を餘し、富國强兵の極なりき。

【世祖出二戎行一】世祖は、後漢の光武皇帝、姓は劉、名は秀、舂陵より兵を起し、昆陽に王莽等の兵を擊破し、王莽を平げ、都を洛陽に奠めて遂に天下を有つ。「出二戎行一」は、軍行なり、行は陣なり。軍人の仲間より出づるなり。晉書、陸機傳に「拔二呂蒙於戎行一、試二潘濬於係虜一」とあり。

【皆孳二學術一】皆は、孝武、世祖何れもの意。孝武皇帝御位の初年、賢良の士を擧げ、親ら策問し、五經博士を置く。光武皇帝は心を文治に用ひ、大學を起し禮樂を修明し、總政の餘暇には公卿郎將と經義を講論し、晩年には、明堂辟雍等を建て、文物典章燦然たり。「孳孳」は勤めて止まざるの貌。禮記、表記に「俛焉日有二孳孳一」の註に「勤勉ノ貌」とあり。孜孜に同じ。汲汲に同義。

【俗化】風俗教化なり。上に倣つて人民の風俗が次第によくなること。

【延二于靈獻一】後漢の末の靈帝・獻帝にまで及ぶとの意。靈帝は第十二主、諱は宏、肅宗の玄孫。獻帝は第十三主、諱は協、靈帝の仲子。光武帝大いに名節を奬勵せしかば、後漢の世は、淸節の士彬彬輩出せり。靈・獻の時、淸節の士と宦官と相衝突して、遂に黨人の禍を起し、後漢衰亡の原因と爲れり。

【草茅危言者折レ首而不レ悔】民間の直言する者、己の首を折かれても後悔せざるなり。論語、憲問篇に「國有レ道危レ言危レ行」。註に「危ハ高言、行ヲ高峻ニスルナリ」。「草茅」は草莽に同じ。淮南子、修務訓に「寡君失二社稷一、越在二草茅一」とあり。「折首」は易、離卦の字面。首をくじかるること。頭註の黨錮諸人とは、竇武・陳蕃・李膺・杜密・郭泰・范滂・張儉・王章等を謂ふ。

【功烈震レ主】功業威烈を以て主君を震ひ懼れしむるものにて、曹操・劉備・孫堅の徒を斥す。史記、淮陰侯傳に「勇略震レ主者身危、功蓋二天下一者不レ賞」とあり。

【姦雄】曹操・袁紹・袁術・孫策・劉表等をさす。

【相顧不三敢去二臣位一】多くの英雄は互に睨みあひをして、誰も敢て人臣の位を去つて僭竊の行動をなさずとの義。

【敎道之結二人心一如レ此】以上秦漢の事を引いて國家學を立つるの益を證す。此の一句緊束し得て十二分の筆力。

【今代遵二聖神一】筆を收めて今代に入る。これ篇首に應ずるなり。甚だ佳。聖神は仁宗を指す。孟子、盡心下篇に「大而化レ之之謂二之聖一、聖而不レ可レ知レ之、謂二之神一。」とあり。以て天子の德を見はす。

【爾袁得二賢君一】「爾袁」とは「汝等袁ノ人民ドモヨ」と呼びかけていふなり。書經、大誥に「猷爾多邦」とあるに倣へるなるべし。賢君は祖無擇を指す。

【庠序】學校なり。孟子、滕文公上篇に「夏曰レ校、殷曰レ序、周曰レ庠、學者三代共レ之」とあり。

【踐二古人之迹一】古の聖賢君子が仁義を行へる迹を踐むこと。論語、先進篇に「不レ踐レ迹」朱註に「踐レ迹、如レ言下循二途守一レ轍上」といへり。

【譚】談に同じ。是れ亦古雅の字を用ひしなり。

【陶二吾民一】吾が州民を教化すとの義。陶は「ネバツチ」を器械にて燒き、以て陶器を作るを言ふ。轉じて教化の意に用ふ。

【一有二不幸一】萬一不幸にして戰亂あらばとの意。

【仗二大節一】國家の事變に際して固く節義を守ること。仗は憑倚なり、即ちもたれかかる意なり。轉じて固く守ること。論語、泰伯篇に「曾子曰、可三以託二六尺之孤一、可三以寄二百里之命一、臨二大節一而不レ可レ奪也。君子人與、君子人也」何晏の註に「大節安二國家一定二社稷一」とあり。蔡虛齋も「大節以二事變一言」と說けり。

【是惟朝家敎學之意】朝家は朝廷なり。これが朝廷學校を建つるの本意なりとの義。古文析義に曰く「已上論二朱大旨一。蓋以二治亂一分提、語意重在二仗レ節一邊一、與二上文秦漢一對針。諸生皆有二出身加レ民之責一。故告以レ此」と。

【子之筆也】　筆を削げて言辞を飾ること。舞文に同じ。

【徹二利達一】　「徹」は要と通ず、「モトム」と訓す。利祿顯達をもとむるなり。左傳、昭公二年に「徹二諸於大公一」註に「徹猶レ取也」とあり。但し「達」、一本「諫」に作れり。

【二三子】　諸生を斥して云ふ。論語、述而篇に「子曰――以レ我爲レ隱乎」

【抑亦爲レ開者之蔽】　爲は「ラサム」と訓す。さて亦國を治むる天子大臣たる者の蔽なりとの意。此の句、蔓の下に、也の字も矣の字も添へず。筆勢開勁古雄、此の大文章を結ぶにふさはし　宜しく玩味すべし。

【考二諸經一可レ見已一】　不レ關二義蔽耳一―徹二利達一而已】　何れも「ノミ」と訓するもの、而して前二者は單なる斷辭として用ひたるものなれば「バカリ」と訓せぬことに注意せしむ。

本文の押註參照。

師皇山曰く「宋朝大儒作二事記一多矣。三百年來、人稱二實錄一、實州學記。非レ曰二筆端有二氣力一、有二光燄一、組織不凡也。其立レ論高遠宏大、不レ論二人心天理一、實千載有レ用之物也。蓋水心有レ云、舞レ文不レ足レ關二世教一、勝レ工無レ益レ也。可レ與二知者一道レ。

方輿勝覽卷の十九、貴州の部にいふ、「州學唐天寶五載太守勝增始立二夫子廟於城北門外五十步一、國朝皇祐（宋仁宗年號）五年、郡守祖無擇以二書屋隘陋一、乃改營二於州治之東一、今學是也、學後盱江李泰伯無レ記、京兆章友直篆額、柯東柳淇書、晉陵二王銍一」

西仲曰く「筆力矯健、落句如レ飛、絕無二宋人委茶之習一。惟是作二學記一、苦讀レ不レ得二先王教化委頓一、若把二司徒典樂陳祥道禮一填入、徒增二腐爛頭巾氣一耳。此却把二四代之學一、輕輕提過、便倒二入泰漢得失一、發レ議以徹聞、筆法作二收入文字一、不レ說不レ粘、說化レ俗爲レ無妙手。末歸二本忠孝大節一。是何關係レ調鼎等。儒生自勝。貴著二國家養レ士正旨一、今處二生活一。且以二天下治亂一分提、不レ關二時局一、用二反筆一作レ結、最佳耐レ人不二敢開一之口。其識其識、高哉二絕頂一。」

【韓愈】　字は退之、昌黎（直隸通州の東）の人なり。三歲にして孤となり、嫂鄭氏に養はる。長ずるに及び、六經百家の學に通じ、進士に及第す。憲宗佛骨を迎へて宮中に入るるや、有名なる「論二佛骨一表」を奉りて忌諱に觸れ、刑部侍郎より潮州刺史に貶せらる。後復召されて朝に還り、兵部侍郎・吏部侍郎となり、長慶四年卒す、年五十七。謚して文と云ふ。著書には昌黎集四十卷・外集十卷あり。

【解】　人生、師のなかるべからざる所以を說き、以て吾人の生を此の世に享けたる以上は、知能を啓發し人格を完成せざるべからざる所以を知了せしむ。

【說】　文體の名なり。事に就きて發明する所あり以て之が意見を述ぶ、之を說と謂ふ。或は道に就いて立つるものあり、或は物に就いて立つるものあり。物に就いて立つるものは、第二二課の「雜說」及び文章軌範載する所の「雜說」是なり。道に就いて立つものは、「師說」の如き是なり。

【筆者】　筆者に二義あり、一は學問を爲す者、一は學問の深き者、ここは前者。古の字、古は師あり、今は無しの意を含む。

【必有レ師】　事類全書前集卷二十にいふ「黃帝師二風后一、顓頊師二老彭一、帝嚳師二記誦一、堯師二務成昭一、舜師二紀后一、禹師二墨如一、湯師二伊尹一、文武師二姜尚一、周公師二庶秀一、孔子師二老聃一、此十一君皆聖人也。猶待レ學而一」また王符の潛夫論に「成云、黃帝師二力牧一、顓頊師二綽謁一、帝嚳師二赤松子一、此三皇蓋學。堯學二於君疇一、舜學二於務成昭一、禹學二於西王國一」

【師】　周禮に「爲二人之長一、訓二物之視一、名二師長一」とあり。又、揚子法言、卷一學行篇に「師者人之模範也」

【傳レ道授レ業解レ惑】　道は先王之道、卽ち敎知倫物、誠意正心、齊家、治國、平天下の道、業は六經、禮樂、文學の業、惑とは胸中疑惑あれども未だ開明せざるをいふ。

【人非二生而知レ之者一】　人は生れながらにして道を知る者に非ず、學びて後に知るとなり。論語、述而篇に「子曰、我非二生而知レ之者一、好レ古敏以求レ之者也」とあるは是なり。

【聞道】　道理を聞き知る事。論語、里仁篇に「朝レ聞道、夕死可矣」

【夫庸二云云】　庸は「ナンゾ」又は「イヅクンゾ」と訓む。さて何うして其の人の年齡の吾より先に生るる、後に生るる等の事を知る必要があらうか、決して無い、卽ち年齡などは、已より長ずるも少きも、固より問ふ所に非ずとの意。

【道之所ㇾ存、師之所ㇾ存也】道を會得せる人は、貴賤長少に論なく、吾が師なりとの意。

【衆人】凡庸の人をいふ。史記、劉客傳に「范・中行氏衆人遇ㇾ我、我故衆人報ㇾ之」とあり。

【衰絰者冕袞者】史記、袁盎傳に曰く「上日聞ㇾ所ㇾ不ㇾ聞、明ㇾ所ㇾ不ㇾ知、日袞者智。君今自閉ニ絶天下之口一、而日袞者。」

【出ニ於此一乎】衆人と聖人との別を生ずるは、師に就いて學ぶと否とに因るとなり。

【句讀】句讀或は句投・句逗に作る。文章の句ぎりをいふ。讀會學要に「凡ソ經書、成文、語絶ユル處、之ヲ句ト謂ヒ、語未ダ絶エズシテ、之ヲ點分シ以テ誦詠ニ便ス、之ヲ讀ト謂フ」「習ニ句讀一」とは、素讀を授くることなり。

【句讀之不ㇾ知……或不ㇾ焉】童子の句讀を知らざる、小事には師を辱んで學ばしむるも、已の惑の解けざる大事には、師に就いて學ぶことをせずとなり。

【小學而大遺】句讀の小事は學ばしむるも、惑の解けざる大事をば等閑に付すとなり。

【巫醫】「巫」は鬼神に事ふるもの、「ミコ」なり。「醫」は疾病を治むるもの。論語、子路篇の「子曰、南人有ㇾ言。曰、人而無ㇾ恆、不ㇾ可ㇾ以作ニ巫醫一。善夫」の朱註に「巫所ㇾ以交ニ鬼神一、醫所ㇾ以

ㇾ生ニ死生一。故雖ニ賤技一而尤不ㇾ可ニ以無一。」とあり。

【樂師】音樂家なり。樂師の字、周禮に出づ。音樂の音樂を美する者。

【百工】すべての工匠技術家。論語、子路篇に「子貢曰、百工居ㇾ肆以成ニ其事一。」

【士大夫】白虎通に云ふ、「士者事也、任ㇾ事之稱也。故傳曰、躬ニ古今一、辨ニ然否一、謂ニ之事一。大夫之爲ㇾ言、大扶ニ進人一者也。故傳云、進ㇾ賢達ㇾ能、謂ニ之大夫一也」

【問之】何故に笑ひたるかを問ふなり。

【彼與ㇾ彼云云】師たる人と弟子なる者との年齒及び學問修養の程度相近似せりとなり。

【位卑則云云】師たる人の地位卑ければ、之を師と仰ぎて道を問ふは羞づべしとなし、師の官位大なれば、之に從ひ學ぶは諂諛に近ければなすまじとなり。

【師道之不ㇾ復】師道の古に復らざること。

【君子鄙ㇾ之】君子は地位を以ていふ。「鄙」は「イヤシム」と訓ず。

【可ㇾ怪也歟】誠に怪しむべきかなとの意。何等の冷語。妙と謂ふべし。「也歟」は感歎詞に解すべし。

【聖人無ニ常師一】聖人には一定の師なし、己に優る所あれば、如何なる人をも師となすとの義。論語、子張篇に「衛公孫朝問ニ於子貢一曰、仲尼焉學。子貢曰、文武之道未ㇾ墜ニ於地一、在ㇾ人。賢者識ニ其大者一、不賢者識ニ其小者一。莫ㇾ不ㇾ有ニ文武之道一焉。夫子焉不ㇾ學。而亦何常師之有」

【師ニ郯子萇弘・師襄・老聃一】左傳、昭公十七年に「秋郯子來朝、公與ㇾ之宴。昭子問曰、少皞氏以ㇾ鳥名ㇾ官、何故也。郯子曰、吾祖也。吾知ㇾ之。仲尼聞ㇾ之、見ニ於郯子一而學ㇾ之。既而告ㇾ人曰、吾聞ㇾ之、天子失ㇾ官、學在ニ四夷一。猶信」と見ゆ。

孔子家語、卷四辯物第十六にも之と同じ事見ゆ。又孔子家語、卷二致思第八に「孔子之ㇾ郯、遭ニ程子於塗一、傾ㇾ蓋而語、終日若ニ相親一。云云」と見ゆ。

萇弘は周の大夫なり。孔子此の人に就いて音樂を問へり。禮記、樂記に「子曰、唯丘之聞ニ諸萇弘一、亦若ニ吾子之言一、是也」と見え、孔子家語、卷八辯樂解第三十五にも同語あり、同書卷三觀周第十一にも訪ㇾ樂のこと見ゆ。

史記、孔子世家に「孔子學ニ鼓ㇾ琴于師襄子一」と見ゆ。論語、微子第十八に「擊磬襄入ニ於海一」とある裏これなり。孔子世家卷八錯樂解第三十五にも孔子琴を師襄子に學ぶこと見ゆ。參照せられたし。

老聃は姓は李、名は耳、字は伯陽、諡して聃といふ。孔子之

のなり。

【術業有二專攻一】 學科に專門の攻究ありとなり。術業は學科といふに同じ。揚子法言、學行篇に「學有二術業一。」とあり。專攻は專門に攻究するなり。韻府に「攻、治也」とあり。

【李氏子蟠】 姓は李、名は蟠、唐の德宗の貞元十九年の進士なり。「李氏子」といへるは、其の年少なるが故なり。

【古文】 一句中の字數に制限なし、對句をも要せず、平仄押韻等にも拘はらざる文をいふ。後世に起れる四六文に對して古代の文體なる故、古文とはいふなり。ここは古代に作りし文といふ意にはあらずして、蘇東坡の韓愈の文を稱して、「起二八代之衰一」といひし唐代に復興せし古文をいふなり。「不レ拘二於時一」に應じて見るべし。

【六藝】 禮・樂・射・御・書・數をいふ。又六經と同義に用ひて、詩・書・易・春秋・禮・樂をいふことあり。後說に從ふべきが如し。

【經傳】 瑯琊代酔卷九に「聖人制作日レ經、賢者著述日レ傳」と見ゆ。卽ち六經の經文と傳文の意と見たり。或は經書史傳と見たる說あり。

【古道】 古の聖賢の道なり。長野豐山曰く「古道二字、卽韓詩二敬首句第一字一」と。

【貽】 遺也、「オクル」と訓ず。

必不。不必。「必不」は其の然らざることを決定す。「不必」は其の通りにもあり、又然らざることもありて、一概に言はれね場合なり。「不必不」の場合亦同じ。

第一段 道の存する所は師の存する所なるを說く。

第二段 古今師道の相違を敍す。

第三段 今の師道の頽敗を慨す。

第四段 聖人は常師なきことを言ふ。

第五段 道を聞くの先後、專攻する所の術業により師弟の優劣必ずしも一定せざることを言ふ。

第六段 李蟠の古道を行ふを勵して本文制作の由に及ぶ。

韓愈の文は長江大河の洋洋として注輸し、魚龍鼓舞萬怪憧憧するが如く、而して抑遏蔽拂して自ら奔はざるも、人笑の諂諛たる光、者然たる道を望み見て、本自ら長進して敢て迫り觀ざるなり。實に歷代古文の一大宗なり。唐宋以還作者ありと雖も、一人の能く之と

與に京するなし。

【師說】 韓愈、時に國子監四門博士たり。當時の士大夫、師弟の道を重んずる者を目して異人と爲し、譁笑之に及ぐ。韓愈、今所の篇と作せしむと雖も、其の禍に罹るを恐れて止む。

韓愈作像は歷史畫術書見當眞帖の所載に據る。

一二 論語抄

温故而知新

此の章は、人の師たる者の甚だ難きを述べたるなり。

【温】 鄭玄の中庸の註に「温は謂みて學温の温の如し、故之を學ぶこと熟し、後、時に之を習ふ、之を温といふ」とあり。左傳、哀公十二年に「子貢對曰、盟可ㇾ寒也、赤可ㇾ燠也」の賈逵註に「寒は温なり、燠、故食を温煮する如きなり」と。寒と燠と古字通用す。ここは温習また研究の義なり。

【故】 故事・典故の故の如し、先王の政教を言ふ。

【新】 新しく得たる所をいふ。

舊と古典に因りて學知せし所の古代の政教を、更に古典を以て温習してこれを己に熟し、而して又未だ聞知せざる所の新義を發明して、今日の實際の用に立たしむるやうに爲して、始めて人の師たることを得べしと。然るに學者徒らに温古にのみ偏して、知新の功を積まずんば、迂闊固陋の腐儒と化し了るべし。爲ぞ人の師たるを得むや。此の章、疏記、學記に「記問之學、不ㇾ足ㇾ以爲ㇾ人師。」とあると、互に相發すべし。

温、何晏、寒の義と同字なるを知らずして、「温は尋なり、故者を尋繹す」と註してより、朱子之に仍りて「タヅヌ」と訓ぜしは、虚説とや謂はむ。

以上の解釋、すべて舊説諸説解義より取れり。詳細を知らむと欲するものは、同書を一讀せられたし。以下數章皆然り。

由、誨ㇾ女 知ㇾ之乎

此の章は、孔子子路に教ふるに、眞に道を知るの工夫を以てしたるなり。

【由】 孔子の弟子、姓は仲、字は子路、魯人。孔子より少きこと九歳。

【女】 汝なり。

【之】 三の之の字は、皆、道を指す。論語には、單に之の字を用ひて、道の意を見はせること多し。

子路は勇を好み、自信の强き人なれば、未だ判明せざる事をも直ちに斷定するの弊あり。故に孔子之に告げて曰く、我れ汝に教ふるに道を知るの工夫を以てせむか、己れの知り居ることをば、之を知ると爲し、知らざることをば知らずと爲せ、是れ眞に知るの道なりと。凡そ人の學を爲すや、已知と未知との分界を明かにしてこそ、已知より進みて未知に至るを得るなれ。若し此の分界明かならずんば、進みて眞に知るの地位に至ること能はざるなり。荀子、儒效篇に「知之曰ㇾ知ㇾ之、不ㇾ知曰ㇾ不ㇾ知、内不ㇾ自ㇾ欺、外不ㇾ自ㇾ以ㇾ蔽。」とあるは、蓋し此の章に本づく。

此の章、知の字を重畳して、叮嚀多情。夫子亦女に老ゆとや謂ふべき。

予欲ㇾ無ㇾ言

言語は實行に若かざるを言ひて學者を警醒せしなり。

孔夫子の曰く、言ふとも其の益少ければ、予は今より後は、言ふことなからむと欲すと。子貢これを聞き、疑ひて問うて曰く、夫子若し言ひ給ふ所なくば、則ち小子共は、何を述ぶるとして夫子の道を述べ修むることを得むやと。(述は、一の根據とずべきものありて、之を敷衍するをいふ。)孔子答へて曰く、何も言ふことを要せず。彼の天を見よ。天は未だ嘗て何事をか言はむや。而も春夏秋冬の四時は、順序正しく行はれ、百物は天の惠を受け、日日に生じて已むことなし。天は未だ嘗て何事をか言はむやと。蓋し子貢は言語の士なり。言語に長ずる者は、或は實行に短なり。故に孔子之を言ひて導く警告し給ひたるなり。

文法上より一言せむ。「子曰、天何言哉」の一句は、子貢の語を承けて、「四時行焉、百物生焉」の二句を迫り出す。結末の「天何言哉」は、緊しく上の二句を承けて、其の言はざる所以を見はす。文法嚴密、一字の贅意なし。達人の言たる所以。

日知ㇾ其所ㇾ亡

子夏が、學者は一息の間斷なく、精進して已まざるを貴ぶことを語りたるなり。

【亡】 無なり。已れの未だ識らざる所をいふ。

【日・月】 互文なり。日日月月にといはむが如し。

子夏曰く、學者は、日日に其の已の未だ識らざる所を知り得て、新しき知識を積め、又一方には已の已に知り得て能くする所を忘るることなく、一息の間斷なく、進みて已むことなくんば、其の知識は益〻增して日日に新に、已に得る所は、之を守ること愈堅くして失はず。能く此の如くんば學を好むの士と謂ふべきなり。

好學の精神、全く「日月」の二字に在り。會「日知ㇾ其所ㇾ亡、

月無レ忘二其所一レ能」の二句の前後に注意せよ。

博學而篤志

【大意】　子夏學問の道を說きて、博學・篤志・切問・近思の四者を能くすれば、仁は求めずして自ら其の中に在ることを語りしなり。

【切問】　切實に切り込みて問ふなり。中庸の審問に同じ。己に適切なる事を問ふと解くは、非なり。

子夏曰く、學問は博きを貴ぶ。故に博く學びて其の見聞を廣くせむことを要す。されど何程博く學びて知りたりとも、其の志篤からずんば、之を實行すること能はず。故に篤く其の道に志さむことを要す。又學びて未だ心に了會し得ざる疑はしき事ある時は、決して之を捨て置くことなく、師友に就きて切實評議に問ひ質し、既に了會したる上は、徒らに心を高遠なる理想に馳せず、我が身に近切なる刺下の實際に就きて、工夫せむことを要す。此の四者は、直ちに仁とはいふべからざるも、仁の道は自然に其の中に在るなりと。中庸、第二十章の「博學レ之、審問レ之、愼思レ之、明辨レ之、篤行レ之」とあるは、亦此の章の義なり。

子夏は、孔門中、德行よりも寧ろ文學を以て聞ゆるものなり。然るに前章といひ、此の章といひ、其の言の眞摯、敬虔なること斯くの如し。後の徒らに訓詁詞章に馳せ、意を誠實に教さざるもの、豈反省せざるべけむや。

一三　勤學歌

【出典】　卷四第四課「司馬光相業」參照。

【大意】　世の子弟宜しく其の少年の時に於いて學問を勉強すべし。老齡に及んで自ら悔ゆる勿れとの意を見はす。「勉後生力求レ勤。投二明師一莫二自昧一。」及び「勉」旃汝等各早修、莫下待二老來一徒自悔上」の句に在り。

【父教師友兩無レ外】　「無レ外」は、其の方法を誤らざること。一說に殘る所なきを言ふとあれど、前說に從ふ。內には父母の教あり、外には師の敎誨ありて、敎訓の方法に於いて誤ることとなしとなり。

【暖衣飽食居二人倫一】　身には暖かに着、日には飽くまで食ひて、一生を修し得ず、平然として人倫に交はり居るを言ふ。ここは、孟子、滕文公上に「人之有レ道也、飽食暖衣、逸居而無レ敎、則近二於禽獸一。聖人有レ憂レ之、使二契爲一司徒一、敎以二人倫一。父子有レ親、君臣有レ義、夫婦有レ別、長幼有レ序、朋友有レ信」とあるに據る。

【眞レ我笑談如二土塊一】　無學衆味なる故に、賢者を視ても、之を尊敬する所以を知らず、自若として笑談し、土塊同樣に思へりとなり。ここを古文正宗註には、「視二賢者談笑一如二土塊一然。不レ知二所以一」と說きたれど、從はず。

【擧レ高不レ及下品流】　賢者を視て土塊同樣に思ふ程の人は、高位に擧ぢ登らむとすれども、終に及ばず、下品にたぐひすとなり。流は、「クグヒス」なり、又「列ス」なり。

【稍遇二賢才一無二與對一】　稀に賢才の人に遇ふも、與に對談する能はずとなり。

【後生】　後進の徒、卽ち若き者をいふ。論語、子罕篇に「後生可レ畏」とあり。

【投二明師一莫二自昧一】　投は遇なり。託なり。明師は學德秀でたる人を言ふ。身を明師に投じて道を學び、決して我が本性を昧ますこと勿れとなり。

【一朝雲路果然登】　一朝は一旦に同じ。論語、子路篇に「一朝之忿、忘二其身一以及二其親一、非レ惑與」ともあり。雲路は、天子の居處を天の北辰に喩ふる故に、凡そ人仕へて朝廷に上るを雲路に登るといふなり。古文正宗註に、「中二甲科一曰二登雲一。」

【姓名高等レ呼二先聖一】　我が姓名は、先聖孔子の門人の如く、先聖と等しく呼ばるるならむとの意。

【堂中若未レ結二親細一、自有二佳人求二匹配一】　折しも堂中未だ婚姻

の緣を結ばずんば、自然良家の佳人が配偶を求むるならむとなり。媚は妾の義。白虎通四に曰く、「婦人因レ夫而成。故曰レ媚」と。疇記、昏義註疏に曰く「婿曰レ昏。妻曰レ媚。婿以レ昏時一來。女則因レ之而去」と。佳人は才貌兼備の女。匹配は配偶なり。

【勉レ旃汝等各早修、莫レ待二老來一徒自悔と】　旃は、之焉に同じ。事問を指す。勉は勤なり、強なり。勉レ旃は、激勵の語。汝等事問を勉強せよ、各〻早くより勉強して、年老いて無益に後悔することと勿れとなり。結末勤勉の意甚だ懇懇、輕輕に視るべからず。

斯の文中、「一朝蓽路果然登。姓名直等レ呼二先聖一。若未レ結二縞紵一自有二佳人求二匹配一」の數句。眞宗勸學文中、「出レ門莫レ恨無二人隨一。書中車馬多如レ簇。娶レ妻莫レ恨無二良媒一。書中有レ女顏如レ玉」の數句は、稍〻陋なり。內田遠湖翁斯の二文を許して曰く、「眞宗司馬溫公等以二富貴之利一、妻妾之娛一勸二誘童蒙一何耶。僕之讀書、欲レ知二人倫之道一耳」と。此の見地甚だ高し。編者亦然るを知る。されど溫公の文、かの數句を除かば、他は一般世俗を敎訓するに足らむ。是れここに擧ぐる所以なり。

斯の文、古文眞寶に出づ。

一四　畫錦堂記

【歐陽修】　字は永叔、晩に六一居士と號す。宋の廬陵の人、仁宗に事へて諫院に知たり。朋黨論を上り、邪說を破る。好黨に忌まれて滁洲に貶せらる。後、朝に還り、貴事を知す。官を累ねて兵部尙書に至り、太子少師を以て致仕し、熙寧五年卒す、年六十六。文忠と謚す。修博く書籍を窮め、尤も力を文章に致し、昌黎遺稿を得て、尊讀玩味、遂に五代の衰を挽回す。其の六一居士と號せるは、集古錄一千卷、書一萬卷、琴一張、棋一局、酒一壺、靑一叟あるを言へるなり。著す所新唐書・五代史・歐陽文忠公全集等あり。

【仕宦】　仕宦して將相に至り、而も其の德や高く其の功や偉、名實愈ゝ備はり、錦衣晝に歸るは實に鄕里の榮たるのみならず、郭家の光なることを敍し、以て韓琦の人格及び功業を知らしむ。

【畫錦】　宋の神宗の時の宰相韓琦が鄕里に建てたる堂の名。二七頁の頭註を參看すべし。

【仕宦】　宦は說文に「仕也」とあり。卽ち仕へて官吏となる義。

【富貴】　貴は又貺に作る。昔「ヤク」「フサガル」と訓じ、幸吉することと。但し音「アイ」の時は、賜に同じ。

【鄕里】　むらざと。周禮に「五家爲レ鄰、五鄰爲レ里」と。又「五家爲レ比、五比爲レ閭」とあり。史記、袁盎傳に「盎病免居レ家。與二閭巷一浮沈」

【庸人孺子】　凡庸人と稚子。書經、洛誥に「孺子其朋」註に「孺子、稚子也」

【易而侮レ之】　易は輕んずるなり。侮レ之は無禮を以て其の人に對するなり。

【季子不レ聽二於其嫂一】　卷三に見ゆ。

【買臣見レ棄二於其妻一】　本課の自習文に見ゆ。

【高車駟馬】　「高車」は其の蓋高くして立乘する車。高車に駕するに駟馬を以てす。高位高官の人の乘る所なり。

【旌旗】　「旌」は熊虎を描き、大將の建てて、衆と其の下に期するもの。「旗」は燕「カラウシ」牛の尾を竿頭につけ指揮に用ふるもの。

【旌レ後】　後に從ふ義。旌は、字典に「儛也、童從也」

【肩レ肩累レ迹】　肩をならべ、足迹をかさぬといふ意にて、多人數の群集するさまをいへり。

【瞻望吾曉】　瞻望は、仰ぎ見るなり。吾曉は共になげくなり。

懐美の餘りに涙する貌。

【奔走曝汗】 其の人を見むとて奔走し、成功に喜きて汗を流すこと。

【俯二罪於車轅馬足之間一】 所謂高車の車前馬の足下に於て、己が罪を後悔するを言ふ。

【一介之士】 「一介」は一箇といふが如し。一人又は一夫の義。史記、藺相如傳に「大王遣二一介之使一至レ趙」一个といふに同じ。

【衣領之衆】 登第の項參照。

【大丞相】 大は官稱、丞相は宰相。

【衛國公】 韓琦をいふ。東都事略六十九、韓琦傳に「仁宗崩、英宗即レ位。加二門下侍郎兼兵部尚書一。進封二衛國公一云云。又封二魏國公一。」とあり。

【令儀】 令は善なり、美なり、美儀に同じ。容儀、君陳に「惟爾令儀孝恭。」とあり。令聞、令譽、令望の令に同じ。

【擢二高科一】 上位にて及第するを云ふ。仁宗の天聖五年、琦年二十にして進士の試に應じ、第二位に及第せり。事物紀原卷三に「漢之取レ士、其對レ策中者、謂二之高第一。隋唐以來、進士舉科、惡有二及第名一。」

【參二謀仕一】 高官に登るをいふ。

【聞二下風一望二餘光一】 「下風」は辭源に「在二風之下一曰二——一。」と。下風に居て君の言を聞くを言ふ。餘光」は餘輝なり。「餘光」はおかげ、あまりの恩をいふ。德澤の餘光を仰ぎ望むこと。

【猶恥人】 くるしむ人人。蔡襄・朱貫臣等を言ふ。亢倉子に「將阨則以レ命自寬」とあり。病阨の字、孟子、公孫丑上には「困病」に作れり。

【夸曜】 夸は音「クヮ」誇に同じ。誇張なり。功名をほこりて人にかがやかし示すなり。

【高牙】 二說あり。一は車輪の外に打附けたる牙齒の如きものなりとの說。古文眞寶註に「牙者車輪輻牙也」とある、是なり。一は高大なる牙旗なりとの說。牙旗は、文選、東京賦に「戈矛如レ林、牙旗繽紛」註に「天子出建二大牙一。旗竿飾レ之以二象牙一。」とあり。卽ち竿頭に象牙を飾りたる旗なり。今、後說に從ふ。

【大旆】 から牛の尾にて飾りし大なるさしもの。高牙も大旆も皆武官として高位に居る者の儀仗。

【桓圭袞裳】 「桓圭」は長さ九寸の玉、周代公爵の人が其の位のしるしとして持ちしもの。周禮、春官に「公執二——一、侯執二信圭一」「袞裳」は龍の繡ある衣。天子及三公の服なり。ここは

文官としての高位をさす。

【此意】 「此」は土神、「意」は穀神、國は土と穀とに實りて以て生を養ふ。故に立てて之を記る。轉じて國家の義とす。

【勒二之金石一】 勒は刻なり、雕なり。禮記、月令に「物二工名一」「金」は鐘鼎、「石」は碑碣なり。

【播二之夢詩一】 「播」は音「ハ」布なり。夢は音樂。其の功德を詩に咏じ、音樂に施すをいふ。

【武康之節】 「節」は節度使なり。武康軍の治所は河南の相州にあり。今その節度使として、故鄉相州に來り治むとなり。

【快二恩讐一】 なさけとあだと。白居易の詩に「一彈指頃報二——一。」恩ある者には報謝し、怨ある者には報復するを快しとするなり。

【出二入將相一】 入りて相となり、出でては將となる。仁宗の慶曆二年韓琦出でて邊帥たり。嘉祐三年入りて相たり。

【爽塏一節】 「爽」は平爽。太平の時をいふ。險は艱險。亂世をいふ。平時に在りても、亂世に在りても節操を一にしてその守る所を變へざるを言ふ。

【垂紳正笏】 「紳」は大帶、高貴の人の衣冠束帶の時に著くる大帶なり。論語、衞靈公篇に「子張書二諸一一紳一。」「笏」は天子以下公卿士大夫束帶の時、帶にさしはさみもつもの、周尺にて長さ二尺六寸、幅二寸。書名に「——象也。君有二教命一、及所二啓白一、則書二其上一、備二忘也」とありて、初は備忘錄の用をなししものなるべし。

【泰山之安】 泰山は五嶽の一、山東省泰安縣の北に在り。天下を泰山の安泰なるが如く、太平にする義。前漢書、嚴助傳に「天下之安、譬二泰山前四維一之」

【不レ動二聲色一】 音聲と顏色を變ぜず、從容自若たること。聲色は音樂と女色と解する場合もあれば、所によりて意を異にするを知らしめたし。

【社稷之臣】 國家の安危に任ずる大臣。論語、季氏篇に「是——也、何以レ伐爲」

【豐功盛烈】 豐は大なり、烈は功業なり。卽ち盛大なる功業を言ふ。

【銘二鼎彝一】 「鼎彝」は宗廟に備へおく常用の祭器。「彝」は常、尊彝なり。鼎も亦祭器。「銘」は刻みつくるなり。實註を參照すべし。

【養二秘歌一】 功德を詩歌に作り、音樂に和して歌ふを云ふなり。又琴に琴を彈き詩を歌ふにも云ふ。論語、陽貨篇に「子之二武城一聞二——之聲一」

【官】官に仕ふるなり。主に動詞として用ふ。「官官」は初に仕ふる官人なり。

【官】職なり。主に名詞として用ふ。

本文押註参照。

(一) 爲文之法

本課を批評して、作文の法を述ぶ。

【爲二上句一壓倒】壓倒は、他をおしたふすこと。「壓倒セラル」と訓むべし。

(二) 朱買臣

本課「買臣見レ棄二於其妻一」の故事の出典を示す。生徒に講讀せしむべし。

【負薪】荷物をせおふと、首にのするとなり。孟子、梁惠王上に「頒白者不レ[illegible]二道路一。」

【歌二謳道中一】漢書、朱買臣傳に、買臣が春秋を說き、楚辭を言ふを以て官に除せらるることを載せたり。されば楚辭を諳ひしものか。

【採歌】とく歌ふを云ふ。

【女功】汝の功績なり。長年、我が爲に盡しくれたる御前の言折といふ義。

【葬送】うらみいかるなり。晉書、慕容儁に「怪葬二——一人或投二諸水中一」とあり。

【衣錦夜行】錦のぬひとりしたる衣を着て、夜行くが如く少しも見榮えのせぬこと。二七頁上欄註参照。

【頓首】拜して頭が地を叩く、周禮、大祝に「辨二九拜一、一曰稽首、二曰——」

【除レ道】道普請するなり。辭源に「謂二治道路一也」

【後車】後に附き隨ふ車。

【自經死】自ら喉を絞りて死するを云ふ。經はくびること。

【故人】ふるきとも、ふるきなじみ。史記、范雎傳に「謝曰、雖有二故人之意一。」

【漢書】漢前書又は西漢書ともいひ、一百廿卷、後漢の班固字は孟堅撰す。前漢の高帝より平帝に至る十二世、二百三十餘年間の歷史、十二帝紀・八表・十志・七十列傳より成る。體例は、史記に比すれば、稍整齊すと雖も、其の文は郤つて及ばず。史記・後漢書と合せて三史と稱す。

一五　李氏山房藏書記

【蘇軾】字は子瞻、洵の長子。嘉祐二年弟轍と同じく制部に試し、還に入る。英宗の時史館に直たり。神宗の時王安石と合はずして黃州に貶せられ、室を東坡に築きて東坡居士と號す。哲宗の時召還せられて翰林學士・兵部尚書に累官し、建中靖國元年常州に卒す、年六十六。

古今勉學の難易を述ひ、學問道德の今の如つて古に如かざるを論じ、遊讀無根の徒を警戒し、一般に覺醒する所あらしむべし。

【李氏】李公擇なり。詩を善くす。東坡と交り善し。

【象犀珠玉】象は象牙、犀は犀角、珠は說文に「蚌之陰精」とあり、卽ち貝より出づる「タマ」なり。玉は說文に「石之美者」とあり、卽ち山に產する「タマ」なり。

【五經】安井息軒曰く「五經說多シ、當ニ春・禮・湘・樂・魯ヲ以テ正ト爲スベシ」と。

【讀レ書】讀讀を讀といふ。

【柱下史時】「時」は老子の名。史記、老子傳の「周守藏室之史也」の註に「藏室ノ史ハ乃チ周ノ藏書室ノ史ナリ」とあり。又張湯傳に「老子爲二柱下史一」卽ち藏室の柱下にて事務を執行せるに因り、以て官名と爲ししなるべし。柱下史は圖書を掌る官なり。

【韓宣子】名は起、晉の卿公に仕へて卿と爲り、韓武に代つて政を執る。左傳、昭公二年に「晉侯使二韓宣子來聘一、觀二書于太史氏一。見二易象與一レ魯春秋一曰、周禮盡在レ魯矣。吾乃今知二周公之德與一レ周之所二以王一也」とあり。

【易象】周易の象辭なり。象辭は、周公の作なりと云ふ。左傳、杜預の註に「易象、上下經之象辭也」

【魯春秋】魯の史記の名。隱公の元年より哀公の十四年に至るまで、凡そ十二公二百四十二年間の歷史なり。孔子の刪定に係ることは言はずもがな。魯の字を冠せしは、後晉、漢晉春秋・吳越春秋等の書出でしより、區別するためなるべし。

【季札聘二於上國一】左傳、襄公二十九年に「吳公子來聘、請レ觀二周樂一。」と是なり。上國は、卽ち中國なり。吳は東南卑下の地、故に中國を指して、上國と爲す。吳公子は卽ち季札なり。吳王壽夢の第四子。賢なり。延陵に封ぜられて延陵の季子と稱す。聘は問なり。禮記、曲禮に「諸侯使二大夫一問二於諸侯一曰レ聘」とあり。集說、聘禮に「大問曰レ聘、小聘曰レ問」

【詩之風雅頌】詩序に「詩有二六義一焉、一曰レ風。二曰レ賦、三曰レ比、四曰レ興、五曰レ雅、六曰レ頌」と。風は諸國の風俗を歌へるものにして、之に十五國風あり。詩序に「上以レ風二化下一、下以レ風二刺上一、主レ文而譎諫。言之者無レ罪、聞之者足二以戒一。故曰レ風」といへり。雅は朝廷の詩なり。士大夫が政治上のことを歌へるものにして、これに大雅と小雅とあり。詩序に「言二天下之事一、形二四方之風一。謂二之雅一。雅者正也。言二王政之所一レ由興廢一也。政有二小大一。故有二小雅一焉、有二大雅一焉」といへり。頌は宗廟に用ふる樂歌。詩序に「頌者美二盛德之形容一、以二其成一レ功告二於神明一者也」といへり。

【左史倚相】左傳、昭公十二年に「楚子曰、左史倚相能讀二三墳五典八索九丘一」とあり。左史は官名。漢書、藝文志に「左史記レ言、右史記レ事」とあり。人君の左右に在りて其の言行を記錄する官。「倚相」は人名。左氏會箋に「二字名。謂二倚能相一者非也」

【三墳五典八索九邱】邱一に丘に作る、同じ。左傳の杜註に「古書之名」とあり。左傳の序に「伏羲・神農・黃帝之書、之ヲ三墳ト謂ヒ、少昊・顓頊・高辛・唐・虞ノ書、之ヲ五典ト謂ヒ、八卦ノ說、之ヲ八索ト謂ヒ、九州ノ志、之ヲ九邱ト謂フ」とあり。

【六藝】詩・書・易・禮・樂・春秋なり。後漢のみ樂に亡びて傳はらず。

【紙與字並日漸二倚便一】紙は後漢の蔡倫、之を發明せり。後漢書、蔡倫傳に「自レ古書契多編以二竹簡一。其用二縑帛一者謂レ之紙。縑貴而簡重、並不レ便二於人一。倫乃造レ意用二樹膚・麻頭及敝布・魚網一以爲レ紙。元興元年（皇紀百五年）奏二上之一。帝（東漢和帝）善二其能一。自レ是莫レ不二從用一焉。故天下咸稱二蔡侯紙一」文字は西周の宣王の時、太史籀古文を改め大篆十五篇を著す。之を籀書といふ。周滅び秦興り、丞相李斯、大篆を省略して小篆を作り、同時に始皇、御史程邈をして篆を定めしむ。程が定むるところは乃ち隸字にして專ら簡便を主としたるものなり。或は云ふ、籀書（籀書ニ同ジ）は東漢の頃より起りしものと。

【苟簡】苟且「カリソメ」にして簡略なるなり。書物を寫すに忙して努力せざる義。

【自言】老儒先生自ら言ふこと。

【恐レ不レ及】逃亡せる者などを追ふが如く、只管勉强しても及ばざらむことを恐るとの意。

【筆削】原本にまれて印刻するなり。

【諸子百家】史記、賈誼傳に「賈生年少、頗通二諸子百家之書一」とあり。

【秦の間に出づる所の諸家の書を指す。百家とは其の大數を擧げたるなり。諸子を分ちて、儒家・道家・陰陽家・法家・名家・墨家・縱橫家・雜家・農家・小說家の十流とす。儒家は孔子を宗とすれど、其の書は六經と區別するものとす。

【日傳二萬紙一】日に萬枚も賣り出すとなり。

【倍蓰】倍は二倍、蓰は五倍。孟子、滕文公上に「或相倍蓰、或相什伯」

【後生】年少の者。論語、子罕篇に「後生可レ畏」何晏の註に「後生謂二年少一」

【科擧】唐始めて科目を以て士を取り、名づけて科擧といふ。即ち今の文官試驗の如し。其の科目は、秀才・明經・進士・俊士・明法・明字・明算等五十餘科の多きに達せしが、後世は進士一科と爲れり。

【游談無根】根もなき、つまらぬ事を、話し合うて其の日を送ること。

【李公擇】三一頁の頭註を看よ。尙、東坡の與二李公擇一の文一次二韻李公擇梅花一の詩を讀まば、其の識見の士にして、東坡と親しかりしを知らむ。

【山房】山中の書房の意。後世隱者の庵室又は書齋の名に用ひらる。

【涉二其流一探二其源一】其の書を讀み、其の書の思想の源流を探究し盡すとの義。こは水に譬へたるなり。

【探二制策實一】花實を採取し皮を剝ぎ去る如くに、書の精粹を拔びとること。ここは果物に譬ふ。

【咀二嚼其味一】「咀」は含味するなり、「嚼」は噛なり。書物は、滋味なり。ここは五穀に譬ふ。

【嗜】「耆」を正とし「嗜」を俗とす。今通用の廣きに從ふ。「嗜」等の關係も同じ。但し音の異なるを注意すべし。

【蔓】「布レ所二規倣一也」と註し、「ノウトル・ナラフ・ウツス」と訓ず。「摸」に同じ。「摸」は多く仕事の義に用ふれど「損傷也、罰也」と註し、「サグル」と訓ず。

【書固自如也】さ程に書物を讀みても、書物は依然書の如しとの意。此の句上の「用レ之而不レ弊、取レ之而不レ竭」に照應す。注意すべし。

【未二嘗少損一】未だ嘗て少しも消損せずとの意。未嘗の副詞甚だ强し。

【才分】才能性分。

【將レ老焉】行く行く此の書山に隱居せむとするの意。

【與二公擇之藏一】公擇の藏書をひらき讀むこと。

【拾二其餘業一以自補】　公擇の讀み書を拾ひ讀みて、自ら吾が學問を補ふとの意。

■　押註参照。

■

「黄香童二元一、士大夫三日不レ讀レ書、則義理不レ足三於胸中一、前レ言二古人一、後レ言二今人一、所レ謂レ人本無二貴賤一、物レ本無レ貴賤一、此之謂也。」は東坡の書にて胸気縦横、奔放自在、有余する所なく、よく才人の面目を具はせり。

■　故事三則

■　本課に因み、紙の由來と勉學の故事とを知らしめ兼ねて返點送假名の練習に資すべし。

■

【書契】　木を削して其の側に書し、以て事を約するもの。易繋辞下傳に「上古結レ繩而治、後人易レ之以二書契一。」又、孔安國、尚書序に「古者伏犠氏之王二天下一也、始畫二八卦一、造二書契一、以代二結繩之政一。」

【竹簡】　竹のふだ。孔安國の尚書序に「以二竹簡一寫レ之、增二多伏生二十二十五篇一。」

【縦横】　かとりぎぬのこと。

【蓋頭】　あさくづなり。

【三國志】　晉の陳壽撰す。魏志本紀四巻、列傳二十六巻、蜀志十五巻、呉志二十巻。その間、魏を以て正統とす、學者初を正統と爲さざるを刺る。蓋し陳壽晉に仕へて著作郎たり。魏を僞とすれば、其の祚を承けたる晉も亦僞なり。故に正統を魏に與へたるなるべし。頴裏評して曰く「事核文直、子長以後未ダ其ノ比ヲ見ズ」と。壽は元康七年(皇紀九五七)卒す、年六十五。劉宋の裴松之、補註を作る。

【黄初】　字は子桓、建安の初、黄門侍郎となる。時に獻帝廢を曹操に委ぬ。過日夕侍講し、天子の愛信する所となる。黄初中出でて郡守と爲り、明帝の時入りて侍中大司農と爲り、數年にして卒す。

【性實酌】　「酌」は酵舌のつたなきなり。論語、里仁篇の「君子欲レ訥二於言一而敏二於行一。」の包氏の註に「訥、遲鈍也」とあり。

【明帝】　諱は叡、青龍元年親ら呉を征し、三年大いに許昌宮を營む。在位十四年、景初三年崩ず。

【大司農】　秦の治粟内史なり、穀貨を掌る。漢の武帝、大司農と改む。詳しくは「故事成語大辭典」の「司農卿」の條を見よ。

【言】　昔より「トイフココロハ」と訓ぜり。「トイフ意味ハ」の義なり。

【苦渇】　映の「カツキ」苦しむこと。轉じて饑餓に思ふ事に用ふ。方幾の詩に「饑來——與二渇水一光芒錯出千丈虹」

【書言故事】　十二巻あり。宋の胡継宗の編する所なり。古來の有名なる故事に就きて出所を示せり。

【笑】　「ナヅナ」をいふ。

【苞】　眞分け。切りあくるなり。

【范希文】　希文は范仲淹の字也。大の岳陽樓記の作者及び上關參照。

【星霜】　一晩たちての意。

一六 岳陽樓記

范仲淹　字は希文、宋の吳縣の人、大中祥符の間進士に第し、慨然として當世に志あり。嘗て曰く、士は當に天下の憂に先ちて憂へ天下の樂に後れて樂しむべしと。仁宗の時右司諫となり、時政を極論す。又數州に歷任し、至る所惠政あり。龍圖閣學士を以て延州に知たり。西賊大いに懼る。召して樞密副使に拜し、參政知事に進む。未だ施す所を竟へずして卒す、年六十四。文正と諡し、楚國公に追封せらる。

前課の自習文に因みて、范仲淹の文を授く。仁人なるものは、天下の憂に憂樂するものにして、一己の喜憂を以て憂樂することなきを說く。佳句を諳誦背寫せしむべし。

【岳陽樓】 風土記に「岳陽樓ハ湖南省岳州ノ城西ノ門樓ナリ。下洞庭ヲ瞰シ、景物宜觀ナリ」と。

【滕子京】 名は宗諒、子京は字。河南の人。范仲淹と同年の進士。仲淹の推薦を受くること多し。其の徑州に在りて、公錢十六萬貫を費し、御史葉堅に彈劾せられし時も、仲淹の盡力に因り、僅かに一官を降さるるに止まりき。岳州に謫せられしは、實に之か爲なり。人と爲り剛直にして氣節を尚び、施與を好む。卒する時、家餘財無かりきと云ふ。其の傳、宋史卷三百三に在り。

【巴陵郡】 巴陵は卽ち岳州、宋の時これを岳陽といふ。

【百廢俱興】 凡百の廢れたる事が共に興りたる義。「俱」一本俱に作る、同じ。

【唐賢今人】 唐の詩人と、趙宋の詞人騷客。

【則】 音「コク」、說文に「法也」。爾雅に「水ニエルヲ則トイフ」

【屬予】 予に囑むなり。屬は囑の略字なり。言ひ託するなり、囑むなり。

【洞庭】 湖北省岳州府城の西南に在り。史記、正義に「洞庭湖名、在ニ岳州一、巴陵西南一里」とあり。水經の註に「洞庭湖周五百里、日月出ニ沒其中一」とあり。

【衔ニ遠山一】 衔は「フクム」なり。物を口に「クハヘル」なり。遠山水中に突起し、水其の下に滿つる所を觀るに、遠、口の物を衔むが如しとの意。衔の字甚だ佳。

【呑ニ長江一】 長江流れて湖中に入る狀は、恰も大湖、江水を呑むが如しとの意。呑の字甚だ佳。

【浩浩湯湯】 「湯」音「シャウ」、「浩浩」は水の廣大なる貌。「湯湯」は水の盛んなる貌、又は波の動く狀。書經、舜典に「浩浩滔ル天」詩經、江漢篇に「江漢湯湯」とあり。

【横無ニ際涯一】 「横」は字彙に「東西曰レ緯、南北曰レ横」とあり。横さまに遠く亙れる水のはてし無く廣き意。一說に、此の横の字、縱等の横にして「ホシイマヽ」なり。縱横の横に非ず、卽ち廣濶際限なき意なりと。亦通ぜり。

【朝暉夕陰】 「朝暉」の「暉」一に「輝」に作る、同じ。音「キ」、說文に「光也」。「夕陰」は、夕日の陰晴なり。日の出、日の入の景色なり。魏文帝の詩に「扶桑生ニ朝暉一」曹植遊の詩に「夕陰結ニ空雲一」

【氣象萬千】 「氣象」は景色「オモムキ」なり。萬千は千變萬化すること。文章軌範の評に「氣象萬千四字、包ニ許多景致一若在ニ他人一必費ニ許多閒說一」

【騷人之逸】 別したる唐賢今人の詩風をいふ。

【大觀】 大時の景色。

【然則】 讀ニ夫巴陵勝狀在ニ洞庭一湖ニ云云一を承くる辭なり。

【巫峽】 「巫」は山の名、雲雨の間に三峽あり。左思蜀都賦の「經ニ三峽之崢嶸一」の註に「三峽在ニ巴東永安縣一、謂ニ西陵峽・巫峽・歸鄉峽一也」。荊州記に「信陵縣西二十里有ニ巫峽一」

【通湘】 潭水と湘水との合流の處。大明一統志に「湘水至ニ永州一

臭ニ潭水一合、曰ニ潭湘一」。張晉彥の詩に「春過潭湘渡、長觀八景圖、雲藏岳麓寺、江入洞庭湖云云」とあり。

【遷客】 左遷流謫せられたる人。通鑑、後晉記の註に「以レ罪遷ニ降外州一者、其州人謂ニ之遷客一」

【騷人】 正字通に「屈原作ニ離騷一、言レ遭レ憂也。今謂ニ詩人一亦稱ニ騷人一」と。騷は憂なり。ここは遷客に對して、詩人と解すべし。

【覽ニ物之情一、得レ無ニ異乎一】 樣に登りて此の風景を目睹せば、其の人人の境遇に因りて、其の感慨も異なるなきを得ようか、得ないとの意。此の一句、下二段の文字を喚起す。

【霖雨】 長雨なり。「霖」は淫に同じ。爾雅に「久雨謂ニ之淫一」

【淒愴】 詩經、小雅采薇篇に「雨雪霏霏――其の註に「雨雪甚貌」とあり。

【連月不レ開】 開は霽ること。二三ケ月も月を連ねて開き霽れずとなり。

【陰風怒號】 「陰風」は北風なり、「怒號」は「イカリサケブ」。恐ろしき音を立つるなり。

【濁浪排レ空】 濁浪暗つて空をおしのけむばかりなりとの意。

【日星隱レ曜】 日も星も光を隱すとなり。曜は光のこと。

【前旅】 行商なり。易經、復卦の彖に「先王以ニ至日一閉レ關、――不レ行」また周禮、考工記に「四方之舟車以賣レ之、謂ニ之――」

とあり。

【檣傾楫摧】「檣」は「牆」に同じ、船の「カヂ」なり。風浪に帆柱は倒れ、櫂は折るるなり。林逋仲の「捲抑也、倒二其檣一抑二其櫂一、久泊不レ行之舟也」と解せしは、此の四字を以て商旅の行かざる所以を說明せるものと見たるなり。されど上の商旅不レ行は、湖上の風浪烈しきを以て、商旅は未だ舟に乘らざるなり。これは湖上に浮べる舟の擧けたる狀なり。林說の如くんば、「檣傾楫摧、商旅不行」とあるべし。

【雨雪冥冥】「雨」は迫なり。日の晩に迫るを雨暮といふ。「冥冥」は暗き貌。康熙に「日將レ沒曰二雨暮一」詩經、小雅の「無レ將二大車一、維塵冥冥」の朱註に「冥冥昏晦也」

【猿啼】この邊、最も猿多し。荊州記「古歌曰、巴東三峽巫峽長、猿鳴三聲淚沾レ裳」

【登二斯樓一也、則有下去レ國懷レ鄕、憂レ讒畏レ譏、滿目蕭然、感極而悲者上矣】滿月當然は、目の力の達する所、すべて皆さびしき處。ここは嘗に滕子京の心事を說く。感慨無限。

【春和景明】春、溫和にして、景色明かに晴れたること。

【上下天光】上も下もすべて空の光が滿ちわたるとなり。天光は空光のこと。

【一碧萬頃】一頃は百畝なり。ここは廣き湖面の一樣に凡て青青としたるをいふ。楊維楨の詩に「太虛一碧琉璃色」世說に「汪汪如二萬頃之陂一」

【沙鷗】砂洲に戲るるかもめ。沙は砂の意。

【岸芷汀蘭】曲禮、內則に「婦事レ舅二之義一、衿衣衣服布帶帨帷幕、蚤棗」とあり。芷は芷の古文。國歷通用す。本草に「一名芳香、一名澤芬、生二河東川谷中一云云」芷も蘭も共に香草、芷は「ヨロヒグサ」荀子勸學篇に「蘭槐之根、是爲レ芷」とあり。陶弘景曰く、「蘭槐當二是蘭芷別名一、故蘭槐之根是爲レ芷」

【郁郁青青】「郁郁」は香氣の盛なる貌。司馬相如、上林賦に、「郁郁菲菲、衆芳芬郁」「青青」は青青と生ひ生れる貌。韻會に「茂貌也」詩經、衞風淇奧篇に「綠竹青青」

【長煙一空】長き靄が一條天空に被ること。煙は「モヤ」なり。「ケムリ」に非ず。又「一に空しく」と讀みて夕靄の一帶して明月千里を照すと解するものあれど取らず。

【皓月千里】明月が千里を照らす卷。博雅に「皓明也」詩經、陳風月出篇に「月出皓兮」また文選、月賦に「皎二皓月一而長歎」とあり。

【浮光躍レ金】月が水面に浮びて「ユラメク」景色が、宛も黃金を躍らす如きをいふ。靜寂の詩に「浮光躍二日度一」

【靜影沈レ璧】水底に靜かにうつれる月影の宛も璧を沈めたるが如きをいふ。楊維楨の詩に「太虛一碧琉璃色」世說に

【心曠神怡寵辱皆忘】「曠」は「ヒロシ」と訓ず、大なり豁なり。怡は釋言に「悅也」玉篇に「樂也」とあり。心の廣廣として悅ばしく、榮辱も恥辱も悉く打ち忘らるとなり。老子に「是謂二寵辱若レ驚」

【把レ酒臨レ風】手に酒杯を把りて、淸風に臨みて快く酌むをいふ。

【洋洋】盛大なる貌。論語、泰伯篇に「——乎盈レ耳哉」また中庸に「——乎發二育萬物一」とあり。

【嗟夫】嗟呼と同じ。

【二者之爲】上文の物を觀て悲傷する者と喜樂する者との二つを斥す。爲は「シワザ」なり。

【不二以レ物喜一云云】物は外物なり、外物の喜ぶべきに遇ひても喜ばず、心中の悲愛を以ても悲しまず。虛心坦懷水の如きをいふ。

【廟堂】政事堂なり。政を爲して事を擧ぐるには、必ず宗廟に告げ明堂に議す、故にしかいふ。呂覽類似篇に「夫修二之於廟堂之上一、而折二衝乎千里之外一」「廟」一に「廛」に作る「廟」の古文なり。

【處二江湖之遠一】官を去りて遠く江湖のほとりに隱居するなり。「江湖」は三江五湖をいふ。轉じて世間の義。酵源に「按江湖本爲二隱者所一レ稱、如レ云二身在二江湖一心存二魏闕一是也。世俗轉爲二浪二跡四方一之語一」とあり。呂覽に曰く「身在二江海之上一、心在二魏闕之下一」

【先二天下之憂一云云】進窗日錄に「先憂レ事者後樂レ事、先樂レ事者、後憂レ事。此曾子立事篇語、大戴禮所レ載、則范文正公先憂後樂之語本レ此」「先二天下之憂一而憂」とは、天下の憂の起らざるやう、豫め憂慮するなり、「後二天下之樂一而樂」とは、天下泰平に至り、而る後、安心するなり。

【斯人】一方には古の仁人を指し、一方には滕子京を指す。

【嗚】歎息して氣の噎につまる聲なり。意甚だ强し。ここにては、嗚呼、嗟夫は適せず。

【微】無と同じなれど、實際有りしものを、萬一無かつたならばと假設する意あり。論語、憲問篇に「微二管仲一吾其被レ髮左レ衽矣」とあり。

【吾誰與歸】說記、檀弓に「丈子曰、死者如可レ作也、吾誰與歸」とあり。吾誰に歸從すべきの意。「與」は「歟」と同じ。「吾レ誰ニカ歸セン」と讀む。新人なくば吾は誰にか「タヨラン」といふ意。之を誰と與に歸らむか、相手無しと解したるものあれど取らず。謝靈山曰く「結句有レ力、勢重二萬鈞一」

【遊】音「タウ」の時は水名なり、姓なり、流水なり。音「シヤウ」の時は流説なり、彼動之狀なりと註す。

【沈】「沉」の俗字なり。

此の篇三段に分つ。起首より以記之までを一段とし、予嘗云云より、其喜洋洋者矣までを二段とし、嗟夫以下末尾までを三段とす。一段は、此の記を作る由を敍す。篇の一字は、篇中の眼目なり。下文の遷客騒人云云一節は、此の一字より出づ。二段は三小節に分つ。即ち予觀より、遊僧矣までを一節とし、然則より、喜者矣までを二節とし、至若より洋洋者矣までを三節とす。一節は、先づ岳陽樓の大觀を敍し、二節は、然則の二字を點じ、上文を承け下文に轉じ、更に南北の字を以て、其の形勢を示し、遷客騒人の物を覽るの情に異同あるを言ひ、以て下文慶喜の兩節を喚起す。得無異乎の句は、文勢一頓挫、一振して力あり、妙なり。若夫以下、滿目荒涼の景を云ひ、次に登斯樓也の句を著け、本題を二轉し、以て騒子京の身上に入り來り、遂に憂の字を點醒す。三節は朝暉夕陰の佳景を寫し、再び登斯樓也の一句を著け、子京の心事を寫し取り、遂に喜の字を轉出す。以上を二段とす。三段は、古の仁人を起し出す、蓋し一篇の正旨は、此の段に在り。嗟夫の二字を以て轉じ、何哉の二字を以て下文を喚起す。文調最佳なり。次に再び喜憂の二字を關系し、古仁人の心は、自ら遷客騒人と異なるを言ひ、以て下文の廟堂江湖の一件を推し出し、又憂字より、樂字を推し出し、上文の喜憂二字に對す。次に喜憂二字を撇脱し、憂字を反覆し、遂に樂字を跌出(ヲマグカセテ出ス)したり。然則以下は、是れ作者精神の集注する處、而して到底憂樂二字を脱せず。即ちこれ上文の喜憂の二字を覺じて、無憂の二字と爲し、これを以て全文を收結す。

本章有韻並に散言皆自然の妙を得、以て作文の法となすべし。又當氏の人格最高として推奨に生動す。其の先憂後樂の一語、以て其の抱負を見るべく、千古の名言として服膺せしめんことを要す。又本集には此の文の下に「時六年九月十五日」の字あり。即ち慶曆六年を歴むるの明年とす。

諸家評して曰く「文以二玲瓏飾奏一爲レ美。岳陽樓記、骨脚下絡竹雲奏、中有二希聲窈眇一、讀者悦レ耳。如下川流迅激、自有二湍狀委蛇一、讀者不レ厭。

清二田雯一評して曰く「先憂後樂兩言、先生生平所二持論一也。故レ情設レ景、景レ景引レ情、想二見高物一、慨與後。

先憂後樂

本課に連絡して范文正公先憂後樂の出典を示す。

【大節】大に節操を重んずる義。又國家の大事變をいふ。ここは前説に當れり。

【歎喊】よろこびとかなしみと。「歎」は「イタム」なり、又は「カナシム」なり。論語、八佾篇に「喪與二其易一也寧一」

【憮】口ずさむこと。即ち下の「先二天下之憂一而憂云云」の語を口ずさむなり。

【宋史】四百九十六卷、元の順帝の時、托克托等勅を奉じて撰す。十六本紀四十七卷、十五志百六十二卷、二表三十二卷、百九十七列傳二百五十五卷(内六卷實は世家なり)あり。此の書編纂の目的は、道學を表章するに在りて、其の餘は數に備ふるのみ。故に疎舛蕪蔓の譏あり。此の書を略抄せる宋史新編は、簡潔にして反つて要を得なり。

一七 五律二首

一 登岳陽樓

大意 前課に因みて、不遇の詩人の、壯大なる洞庭湖の景に對する感想を授く。前篇と比較考察せしむべし。

語句

【吳楚二句】東に吳國、南に楚國あり。されば吳・楚兩國も東南に拆け開けたりと、其の眺望の宏敞なるをいひ、水經註に「洞庭湖廣五百里、日月出ニ沒于其中一」といへる如く、天地も日夜湖上に浮べりと、極めて洞庭の幅員連亙の廣大を言ふ。拆浮二字は、句中の眼目なり。

【親朋云云】「無一字」とは、「一」字の存問するなきを言ふ。今や遠く岳陽に客遊すれども、親戚朋友の片信だにもなき孤寂の狀をいふ。

【老病】杜甫時に年五十七、老いて且つ病めるの身、僅かに孤舟に託するあるのみ、家なきを言ふ。尙顧註を看よ。

【戎馬云云】戎馬は兵馬なり。時に吐蕃京邑を犯す。按ずるに、嚴武の卒してより、蜀中大いに亂る。杜甫亂を避けて、雲安に往き、疾を得て夔に遷り、又岳陽に客たり。關山の北卽ち調中の地は、今や兵馬の巷となれるをいふ。

【憑ル軒云云】「軒」は欄干なり、樓上の欄干と見るべし。滃は「ナミダ」、潸は「ハナシル」と訓ず。滃潸流は極めて悲傷の狀を寫す、老病日に親しみ、佩帷未だ已まず、詩意哀にして傷なるも亦宜ならずや。詩經、陳風澤陂篇の「滃潸傍沱」の註に「自レ目曰レ滃、自レ鼻曰レ潸」

「樓」・「浮」・「舟」・「流」は下平十一尤の韻。

出典 昔洞庭の壯觀の話を聞きて憧憬し居たりしもの、今日始めて岳陽樓に登りて實地に見るに、聞きしに違はず、吳楚の大郡は東南に分れて開け、乾坤卽ち天地が日夜水面に浮び居るが如くなり。さて吾は鄕里を離れて、かかる天涯に羈泊せるが親類朋友よりは、一字の文通もなく、又老衰の病身を託するは、只孤舟のみにて、定まれる家居もなき境遇にあり。加ふるに吐蕃入寇して、關山の北は戎馬(イクサ)に鎭まらず、己を傷み時を哀みては、欄干にもたれて淚の滲つるを覺えざる程なりとなり。

評 徐薔山曰く「此律詩、二實二虛之法也。胡應麟曰、作レ詩不レ過ニ情景二端一、如ニ律詩一前起後結、中四句二言レ景、二言レ情。虛實相間、此篇ニ正則一。○又或三四句寫レ景兩實、五六句言レ情兩虛、恐前重後輕、多流ニ於腐一。試看此詩三四一聯、寫レ景何等雄壯。五六一聯、序レ情如レ此落莫。最妙ニ者下一、妙在ニ七句放ニ開手筆一寫ニ戎馬關山句一、使ニ尾聯氣勢振起一、精神倍增、但見ニ其雄壯一、不ニ見ニ落莫一也」と。唐子西も評して曰く「子美詩四十字耳。氣象開放、涵蓄深遠、殆與ニ洞庭一爭レ雄。太白・退之輩、牢籠ニ大篇一終不レ逮也」

又孟浩然の同詩「八月湖水平。涵レ虛混ニ太淸一。氣蒸雲夢澤。波撼岳陽城。欲レ濟無ニ舟楫一。端居恥ニ聖明一。坐觀垂レ釣者。徒有ニ羨レ魚情一。」の第三四句は杜詩三四句に比較するも、七八句に至りては遜色ありと評せらる。

二 春望

大意 杜甫の登ニ岳陽樓一の詩を擧げたるに因みて、更に其の春望の詩を出し、戰爭の悲慘を知らしむ。

語句

【感レ時】時世の非なるに感ずるなり。

【烽火】敵の來襲を報ずる「ノロシ」

【家書】家人よりの手紙。

出典 これ至德二年、賊中に在りて作る。國は賊に破られても、山河のみは依然として其の形を改めず、城中の人家は多く廢墟となりたれば、春となりても只草木の深く茂るあるのみ。平時に在つては、花は濺しむべきもの、鳥は愛すべきものなるに、今や時世に感じては、却つて花を看て淚を流し、鳥を聽きて心を驚かす。烽火は三月に連なつて戰亂息まず、他鄕に流浪して音信も通ずるに由なく、偶ま得る家の書信は、實に萬金にも當るべし。己は心配の甚だしき爲、短き白髮は愈〻短く、殆んど簪を挿むにも勝へざらむとする程なりと。此の詩、春望に因つて、家書の得難きを思ふ。皆烽火未だ息まざるの故に由る。後の四句は、三四兩句の意を申明せしなり。押韻下平十二侵。「深・心・金・簪」

評 俳人芭蕉が杜甫の詩を愛讀せしことは名高き話なるが、其の「奥の細道」中、平泉にて義經の跡を弔へる條に、此の詩を改めて、「義臣すぐりて此の城にこもり、功名一時の叢となる。國破れて山河あり、城春にして草青みたり」とせり。

補修漢文 詩話一則

出典 司馬溫公の春望に對する批評を揭げ、杜甫の詩の最も詩人の體を得たるを知らしむ。是れ僞に作詩の心得となるのみならず、又和歌・俳句を詠ずる者の座右銘と爲すべし。文辭平易にして、興義を要せじ。溫公の讀史話中に在り。

一八　范文正公文集序

岳陽樓記に因みて、范文正公文集序を授く。其の學問施設の處士中に成れるを知らしめ、其の修養の非凡、人品の高尚なるを知悉せしむべし。

【范文正公文集】　本集廿卷、別集四卷、附錄一卷あり。もと丹陽集といふ。本集は詩賦五卷二百六十八首、雜文十五卷一百六十五首を載す。此の外に詩文の補編五卷あり。東坡の序を卷首に附す。

【慶曆】　仁宗の年號。その三年は紀元一〇四三年、歲は癸卯に當る。

【總角】　「アゲマキ」、男女未だ冠笄せず、髮を結びて飾とするをいふ。その髮を總束して兩角とするなり。詩經、齊風甫田篇に「婉兮孌兮、——卯兮、未レ覯見兮、突而弁兮」とあり。三國志に「孤荒日、公瑾(周瑜の字)與レ孤有二——一之好一」とあり。

【京師】　宋都汴京、今の河南省開封縣の地なり。

【石守道】　兗州の人、徂徠先生と號す。少時胡安定等と同じく書を泰山に讀み、攻苦、淡を食ふ。慶曆中擢でられて太子中允となる。時に富・韓・范等政を執り、歐公、余靖と並びに諫官たり。乃ち慶曆盛德の詩を作り、時政得失を言はす。慶曆聖德詩は、宋文鑑七十四卷に見ゆ。四言、百九十二句の詩にて、前に長文の序あり。

【鄉先生】　鄉校の先生をいふ。古の制、鄉に鄉學あり。大夫の致仕して鄉に在るものを以て太師とし、また致仕の士を少師として其の敎授に任じ、名づけて鄉先生といふ。儀禮士冠禮に「冠者見二于鄉大夫鄉先生一」とあり。

【冠者】　冠に出して讀み熟すること。史記、儒林傳に「見二其行常冠一、止息則一一一之一」

【所レ頊十一人】　丞相韋得象・晏殊・參知政事賈昌朝・樞密使杜衍。副使富弼・范仲淹・韓琦・諫官歐陽修・余靖・蔡襄・王素。

【此天人云云】　これ天上界の人ならんには、强ひて知るを俟せず。若し人間界の人ならば、之を知るに、何の不可なることあらんとなり。

【何爲其不可】　「何爲ゾ其レ不可ナラン」と讀む。

【韓・范・富】　「韓」は韓琦、字は稚圭、相州の人、年二十進士に登り、第一たり。五代以來擧ぐ久しく廢す。琦、會を喜多く生に敎諭を課す。仁宗の朝累進して相となり、魏國公に封ぜらる。神宗熙寧八年薨ず、年六十八。「范」は范仲淹なり。仁

は岳陽樓記に出づ。「富」は富弼なり、字は彦國、河南の人、慶曆にして大度あり。仁宗の朝、樞密使となる。文彦博と並に相たり。天下稱して富・文と爲す。後、王安石と合はず、出でて汝州に判たり。筆いで洛に歸りて老を養ふ。司空に加拜し、韓國公に封ぜらる。家居十餘年にして卒す、年八十。文忠と諡す。

【了】　さとるなり。曉解の義。

【寶元】　仁宗の年號。その二年は范文正公卒去を距る、實に六年の後なり。

【進士】　進士の稱。もと擧記、王制に出づ。唐代士を取るに詩賦を以てするを進士といひ、經義を以てするを明經といへり。

【范公提】　仁宗景祐五年現す。嘉祐二年を去る五年前なり。

【集賢】　歐陽修の撰文、唐宋八家文に載す。

【吾鄉之賢云云】　歐陽修、年十有五年】　われ范文正公の性行を知りてより、茲し十五年間なりとの義。

【豈非レ命也歟】　豈に天命に非ずやとの意。一句無限の感慨。

【以二國士一待レ我】　國中をすぐりて第一流の士として丁寧に鄭重を盡遇するをいふ。史記、刺客傳に「豫讓曰、智伯國士遇レ我」とあるに本づく。

【許】　許州、今の河南省開封道許昌縣。

【仲子】　兄弟四人ある時は伯仲叔季といふ。仲子は第二子なり。其の叔は第三子、其の季は第四子なり。

【純夫】　名は純仁、仲淹の第二子。父卒後出でて仕へしが、王安石と合はず。哲宗の時、尚書僕射・中書侍郎に累遷し、卒して忠宣と諡せらる。

【參知】　名は純祐、仲淹の第三子。徽宗の朝、左朝議大夫を以て卒す。忠獻と諡せらる。

【德源】　名は純粹、仲淹の第四子。沈毅にして材略あり。神宗・哲宗の世を歷、徽宗の朝に致仕す。

【乃克負レ之】　乃ちやうやく序文を作れりとの意。

【三孤】　韓琦、富弼、歐陽修。

【同僚】　像は寮に同じ。同官衙に勤むるものを云ふ。左傳、文公七年に「荀林父曰、同官爲レ寮」詩經、大雅板篇に「我雖レ異レ事、及レ爾同僚」蓋州は今の江蘇省徐海道銅山縣の地なり。

【門下士】　門人弟子の意。門下に四等あり。(一)は門の下の義よりして其の家を斥す。戰國策に「齊人馮煖使二人屬二孟嘗君一願寄二食門下一。」(二)は食客の稱とするもの。史記、信陵君傳に「嬴門下、有レ數爲二魏王使一通者一死」(三)弟子の稱とするもの。後漢書、承宮傳の註に「宮師二虎所一愛厚一持嘯、尚分二門下一、敎レ復上レ師」(四)省名とするもの。黃門侍郎と侍中とは倶に黃門の

下の衆事を管す。故に門下省と云ふ。

【嗜煞】　前日なり。嗜は發語の辭。左傳、宣公二年に「羊斟曰、嗜昔之羊、子爲レ政」とあり。杜註に「——猶二前日一也」とあり。されどここは平生と解したし。顧註を參看せよ。

【伊尹】　名は摯、賢士なり、湯、人をして之を聘せしめ、五反してのち往けり。湯を佐けて海内を平定す。のち太甲を立てて天子とす。不明なり。伊尹之を桐宮に放つ。太甲悔いて自ら責む。伊尹乃ち迎へて政を還す。壽百歳にして卒す。

【太公】　實の姓名は呂尚といふ。東海上の人。渭水の陽に釣して、周の文王に知られ、後其の子武王を輔けて、天下に王たらしむ。

【王伯之略】　王者位に覇者の攻略なり。伯は覇に通ず。孟子、公孫丑篇に「以レ力假レ仁者覇也。覇必有二大國一。以レ德行レ仁者王云云」

【畋訊中】　「畋」は田間の「ミソ」、「訊」は田の「ウネ」なり。猶は田舍の間といふが如し。孟子、萬章上篇に「以事二舜於畋訊之中一」とあり。また告子上篇に「舜發二於畋訊之中一。」とあり。

【論二劍項短長一】　「劍」は劍邦（漢ノ高祖）、「項」は項羽をいふ。通鑑要に「韓信壞上對曰、項王喑嗚叱咤千人皆廢、匹夫之勇耳。見レ人恭敬慈愛、言語嘔嘔、婦人之仁也。漢二義帝一所レ過無レ不二殺滅一。百姓不二親附一。名雖レ爲レ覇、實失二天下心一。大王誠能反二其道一、任二天下武勇一、何所レ不レ誅。以二天下城邑一封二功臣一、何所レ不レ服。以二義兵一從二思二東歸一之士一、何所レ不レ散。且大王入レ關、秋毫無レ所レ害、除二秦苛法一、秦民無レ不レ欲レ得二大王王一レ秦者。今大王東而東、三秦可二傳檄而定一也。漢王大喜」

【三秦】　秦の亡後、項羽その降將三人を關中（卽チ故ノ秦ノ地）に分封す、之を三秦と云ふ。雍王章邯（廢邱ニ都ス）塞王司馬欣（櫟陽ニ都ス）翟王董翳（高奴ニ都ス）これなり。

【如レ指二諸掌一】　掌を指すが如く、事の甚だ容し易きをいふ。魏記、仲尼燕居に「治レ國其如二示諸掌一乎一而已乎」

【無二不レ酬者一】　漢中にて高帝に建議せしことが、後に至りて一として其の通りの結果に爲らざるものなしとなり。此の句漢文特有の句、注意せしむべし。

【先主】　劉備。其の子劉禪を後主といふ。

【劉璋】　劉焉の子、益州に刺史となる。曹操之に張魯將軍を加ふ。劉備成都を圍むに及び、出でて降り、南部に遷さる。後、孫權の荊州を取るや、璋を以て益州の牧と爲せり。

【規】　「ハカル」と訓む。計畫するなり。

【口傳耳受】　他人の口より傳へられ、吾が耳に傳へ聽く受け聞くこと。暗記たらざる意見をいふ。口耳の學といふ

語と、意味相似たり。

【僞善】　こぼれざいはひ。萬一にも成功するを冀ふなり。琉球、宛旨「儻有二不遇一。勿者有二——一」

【天意】　仁宗の年號。

【居二太夫人憂一】　「居レ憂」は喪に服するなり。太夫人は諸侯の母をいふ。宋の文官の母には四等あり、(一)某國太夫人、(二)某郡太夫人、(三)某國太君、(四)某郡太君とす。漢書の註に「列侯妻稱二夫人一。列侯死、子復襲二列侯一、乃得レ稱二太夫人一」

【舍出二此書一者と】　此の書の範圍外に出でたることは、更に無しとの意。

【矛楯說話】　楯は筆なり、筆を弄びて戲に書きし話なり。

【率然】　急遽の貌。

【有レ德者必有レ言】　德ある者は言を貴ばず、されど和順中に積み、外に溢れ、必ず善言ありとの意。有レ言は、善言あるなり。

【事則克云云】　禮記、禮器篇に「孔子曰、我戰則克、祭則受レ福。薦得二其道一矣」とあり。仲淹・韓琦と兵間に在ること最も久し。天下稱して韓范となす。邊人諺ひて曰く「軍中有二一韓一、西賊聞レ之心膽寒。軍中有二一范一、西賊聞レ之落破レ膽」と。

有德者必有言

(一)　有德者必有言

本文、孔子の言の全文を知らしむ。此の章、內は以て外を衆ぬることを得れども、外は以て內を信ずること能はず。卽ち內に德仁ある者は、必ず發して言勇となれども、外に見はるる言勇を以て、內に德仁あることを信ずることを得ざる

旨をいへり。

【有レ言】 善言の世の訓誡となるものあるを言ふ。言一字にて善言を謂ふは、猶、人才あることを、有レ人といふが如し。

孔夫子のたまはく、徳ある者は、其の中に積み蓄ふる所の和順の氣が、外に溢れ出でて、必ず善言となりて見はるるものなり。然れども能く善言を發する者は、必ずしも徳ある人たることを信じ難し。何となれば、言語は未だ必ずしも一一其の人の眞情より發する者とは斷定し難く、中には便佞にして口先ばかり巧に言ひ廻すものあるが故に、善言を發する者と雖も、必ずしも悉く有徳者たりと斷定すること能はざればなり。又、仁者は心に私欲なく義を見ては必ず斷行す。故に仁者は必ず勇氣ありと謂ふを得べし。然れども勇者の中には、正義に由らず、血氣の男にはやる者あり。故に勇者は必ずしも仁ありとは、斷定し難きなりと。

(二) 著書自樂

本文に因みて、書を著して、己の志を後世に遺すの必要なるを說く。

【得二志於當時一】 其の時世に於いて、自分の希望通りの事をなすこと。

【於二一世一則爲二不幸一】 學德を抱きながら其の時世に知られず、これ其の世より言へば不幸なりとの意。孔孟の一生の如き、亦此の類のみ。「古今此類不レ少」の一句、感慨あり。

一九 孟子抄

天時不如地利

此の章國を有つ者は、天時、地理を講まんよりは、人和を得るの永久の基本を見る所以なるを知らしむるを要旨とす。當時の諸侯仁政を務めず、唯戰爭を事とするが故に發せしなり。亦以て現代を戒飭するに足る。生徒をして此の語意を熟讀翫味せしむべし。

【天時】 寒暑・陰晴・風雨・晝夜・朝夕・干支・方位の類是なり。當時陰陽說盛んにして、兵家亦之を用ひ、日を占して以て向ふ所背く所を定めたり。

【地利】 山河の險阻、城池の固めの如き要害を謂ふ。

【人和】 「和」は和洽なり、民心歸附し上下相親むを謂ふ。

【三里之城七里之郭云云】 城は內曲輪、卽ち本丸。郭は外曲輪卽ち二の丸。三里七里はいづれも其の周圍をいふ。「環」は「メグル」と訓ず。正韻に「圍繞也」「環而攻レ之」とは包圍して之を攻むるなり。朱註に「三里七里、城郭之小者、郭、外城、環、圍也、言、四面攻圍、歷レ日持レ久、必有レ能二天時之善者一」とあり。支那の一里は、我が六町位に當ると云ふ。

【兵革】 「兵」は武器、刀戈劍戟の屬をいふ。「革」は甲なり、古は革を以て甲を造る、故に「函人」は皮を攻むるの工人なり。後世は金屬を用ひて鎧といふ。

【堅利】 「堅」は甲にいひ「利」は兵にいふ。下文單に「兵革之利」といふは文を省けるなり。

【粟】 穀なり、穀あるを粟といひ、穀なきを米といふ。

【故曰】 故に古語に曰くの意。古語「城民」より「威二天下一不レ以二兵革之利一」まで續く。

【城民】 城は「カギル」と訓ず、界限なり。民を集じて去らざらしむる所以なり。

【封疆】 國界をいふ。古者國每に土を封じて界となす。

【溝】 水の川に注ぐをいふ。

【威】 威服せしむるなり。

【助】 明瞭の意。

【親戚】 「ミウチ」玉親休戚相關する卷。孔穎達曰く「親ハ族內ヲ指シ、戚ハ族外ヲ指ス」と、秦觀書曰く「親戚者相親愛則相憂戚」と。

【叛】 背叛するなり。

【君子有レ不レ戰云云】 君子は上文の得道者を斥す。君子固より

兵革を用ひずして天下の民を悦服す。苟も已むを得ずして戰はば必ず勝つ。又何ぞ天時地利を待つことを爲さんや。唯、人和如何に在るのみとなり。朱註に「言不レ戰則已、戰則勝」、尹氏曰く「言得二天下一者、凡以レ得二民心一而已」

誠者天之道也

此の章、世に處し物に接するには、宜しく先づ身を誠にし、善を明かにすべきことを述ぶ。

【居二下位一而不レ獲二於上一】　臣下の位に居て上たる君の信任を得ざるを云ふ。「獲於上」受身の形なり。「獲二於上一」と調ぜぬやう注意すべし。

【誠】　眞實の義。

【反レ身不レ誠】　之を身に反求して其の善を爲す所以の心、眞實ならざる所あるなり。

【不レ明二乎善一】　事に即きて以て理を窮むること能はずして、以て眞に善の在る所を知ることなきなり。

【天之道】　上天の我等人間に賦與せられたる本然の道なり。聖人の至性は即ち此の道を完全に具へたるものなり。

【思レ誠】　誠は眞實無妄の謂なり。努力して眞實無妄に至らんことを思ふなり。これ人の當に爲すべきの道なり。

【至】　極なり。

【悦】　感服をいふ。即ち至誠の效驗なり。

本章は中庸第二十章の言と略んど相同じ。只「居二下位一」の語を彼には「在」に作り、「友」を彼には「朋友」に作り、「事レ親弗レ悦」を彼には「不レ順二乎親一」に作り、「反レ身」を彼には「反二諸身一」に作り、「思レ誠」を彼には「誠レ之」に作る。其の他は助辭に小異あるのみ。至誠云云以下は中庸と異なり。朱子曰く「此ノ章、中庸ノ孔子ノ言ヲ述ベテ、誠ヲ思フハ修身ノ本ト爲シ、明カニスルハ、又誠ヲ思フノ本タルコトヲ見ハス。乃チ子思ノ言ニ開ク所ニシテ、而シテ孟子ノ子思ニ受ケシ所ノ者ナリ。本大學ト相表裏ス。學者宜レク心ヲ潛ムベシ」と。蓋し大學の格物致知は、即ち明レ善の事にして、其の誠意正心修身は即ち誠レ身の謂なり。之を齊家治國に推し及ぼせば、則ち親に順ひ、友に信ぜられ、上に獲られ、民を治むる、皆其の中に在るといへるなり。

「至誠而不レ動者、未二之有一也。不レ誠未レ有二能動者一也」の句は、吉田松陰の遺失顯沛にも忘れざりし語、又杉浦重剛先生の臨終中にも往往見受けたり。

舜人也我亦人也

此の章、君子は其の心を存養し、其の身を反省し、大舜を以て師となすべきことを見はす。

【存レ心】　「存」は履軒曰く「存者謂二操而不レ舍也。以レ仁存レ心、是操二存其心一以二爲レ仁也。瞳亦放レ此。此與二孟心篇存レ心養レ性章之存心二義正同一」と。即ち其の固有の本心を操り存して放つことなきを言ふ。

【以レ仁存レ心】　側隱の仁を以て其の本心を操り存して放れしめざるなり。

【以レ禮存レ心】　辭讓の禮を以て其の本心を操り存して放れしめざるなり。

【待】　あひしらふなり。

【橫逆】　强暴にして理に順はざるを言ふ。或は侵し、或は傷りて、我を愛し我を敬せざるなり。

【君子必自反也云云】　君子はまず自ら反省して己を責めて曰く、我必や不仁にして彼を愛せざるならん。我必や無禮にして彼を敬せざるならん。左もなくばかかる橫暴悖逆の事が突ぞ宜しく我が身に至るべきぞと。

【物】　事なり。橫逆をさして云ふ。

【妄人】　狂妄の人なり。俗にいふ無法者なり。

【於二禽獸一又何難焉】　禽獸と異なる所なければ、又何ぞ其の橫逆の罪を非難して、之を責むるに足らんや、となり。

【終身之憂】　一生を通じて止まざるの憂をいふ。其の久しきをいふ。憂は、内より出づ。

【一朝之患】　一朝卒然として至るの患をいふ。其の近小を言ふ。患は外より至る。

【若レ所レ憂則有レ之】　君子は自ら反省して其の德の修まらざるを憂へて身を終ふるまで止まず。所謂終身憂ふる所の如きは固より之れ有るをいふ。

【舜發二於畎畝之中一】　舜は能く家庭の愛に處して、心を仁德に盡し、上は頑嚚なる父母を化し、下は傲慢なる弟を化し、人倫の法を天下に爲し、後世にまで偉ふべくす、となり。

【鄕人】　鄕里の常人。

初めに君子は仁德を以て心を存養して、我が持つに橫逆を以てする有るも、自ら反省して唯其の道を盡さんことを求むるを言ひ、次に君子自ら反省するの暇、常に大舜を以て師と爲すべきことを示す。舜人也以下尤も能く明瞭に體と爲す。韓退之原、此の篇の意を承く。頭註吉田松陰の說を參照すべし。

二〇　柳子厚墓誌銘

唐代第一の文章家韓愈の手になれる唐代第一の文章家柳子厚の墓誌銘を掲ぐ。子厚の一生は、文章・政論・交誼に分るれど、文章の其の第一に屬し、政論之に次ぎ、交誼又之に次ぐ。故に學問文章を論ずること他の二件に比すれば、詳細なるは之が爲なり。其の意圖へらく、子厚志を得て一時に將相たるよりは、學問文章を以て萬古不朽なるの愈れるに若かずと。是れ斯の文の精神なり主意なり。生徒をして反覆熟讀以て本篇の墓誌中の脈調たるを攷へ、其の立意結構を知悉せしめて、鑑賞を豐富ならしむるを要す。

【墓誌銘】　文體明辨に「按ずるに誌は記なり、銘は名なり。古の人、德善功烈の世に名づく可きありて、現すれば則ち後人之が爲に器を備て以て識し、而して無窮に傳へしむ。葬中即の集に載する所の朱公叔の鼎の銘の若きこれのみ。漢の杜子夏に至りて始めて文を爲して墓側に埋む。遂に墓誌あり。後人之に因る。其の體を論ずるに至りては墓誌銘といふあり。誌あり銘ある者是れなり。墓銘并に序といふは、誌あり銘ありて又先づ序ある者是れなり(中略)墓誌といへば誌ありて銘なし。墓銘といへば銘ありて誌なし。然れども亦單に誌といひてかへりて銘あり。單に銘といひてかへりて誌ある者あり。誌に誌といひてかへりてこれ銘、誌に銘といひてかへりてこれ誌ある者あり。皆別體なり」

【誌】　實名なり。死者の子孫は、其の父祖の名を忌みて言はざるが故に之を諱といふ。左傳、桓公六年に「周人以て諱事と神。名終將に諱に之」の疏に「自り殷以往、未だ有ず諱法ず諱祖ず於周。周人尊ぶ神之故、爲に之諱ぶ名」

【七世祖】　父子相繼ぐを一世とす。「七世祖」とは、己を一世として數へて、第七番目の先祖。

【崖】　柳崖、字は愼微。幼にして聰敏、學量あり。博く群書に渉り、章句を治めず。好んで酒を飲み、占對に擅ふ。初め北魏の文帝に事へ、相府東閤の祭酒に除せられ、度僧尚書、言語明辨、深く文帝に信任せられ、號令を宣する每に常に崖をして之を宣せしむ。宗帝の時、倉曹左僕射に累官す。

【拓跋魏】　北魏といひ、後魏といひ、又、元魏といふ。魏書、高祖孝文紀に「北俗謂ぶ土爲ぶ拓、謂ぶ后爲ぶ跋。故以爲ぶ氏」とあり。珪を祖とす。珪は鮮卑の屬なり。東晉の荷堅敗るるに及びて自立し、國を魏と號し、平城(山西大同府)に都す。之を太祖道武皇帝といふ。再傳して太武帝に至り、武略あり。全く北方を統一して、國威を四方に振へり。四傳して孝文帝に至り、專ら中華の文化を尚び、制度禮樂を改革し、都を洛陽に遷し、胡服胡語を禁じ、拓跋姓を元と改め、また其の臣民をして複姓を稱するを禁ぜしむ。帝の世は文化の極に達したれども、隨ひて中國優柔の弊をも併せ學ぶに至れり。帝崩じ、胡太后、政を攝してより、國大いに亂れ、終に東西兩魏に分るるに至れり。

【侍中】　官名。天子の左右に侍して、衆事を贊導し、顧問應對等を掌る。

【曾伯祖眞】　曾伯祖は曾祖父、卽ち「ヒイヂヂ」の兄をいふ。唐高宗紀に「武后以ず長孫無忌不ず助ぶ己、深忿ぶ之、顯慶四年倒ず無忌官ず齊州安置、遂良先一年卒、至ぶ是無忌與ず初議者柳奭・韓瑗ず皆被ぶ誅」

【宰相】　酈瑯に「宰相、謂ぶ輔ず相天子ず宰ず制天下ぶ者ぶ也。秦漢以來之丞相・相國及三公、唐宋之中書・門下・尚書三省長官及同平章事、明清之大學士皆是」とあり。我が國現在の國務大臣に當る。尙ほ我が國の古書に云ふ所の「宰相」は參議の異名にして、之と同じからず。

【柳遂良】　字は登善、褚亮の子。貞觀中、諫議大夫より黃門侍

郎に累進し、顧命を受けて高宗を輔け、尚書右僕射に遷る。高宗の永徽六年、帝、皇后王氏を廢し、武昭儀(卽チ則天武后)を皇后と爲さんとせし時、其の不可なるを言ひたるを以て貶せられ、顯慶三年卒す、年六十三。

【韓瑗】　字は伯玉、遂良と同一の理由を以て、顯慶四年、則天武后の爲に殺さる。

【武后】　則天武后。高宗の后なり。初め太宗に選まれて才人と爲り、太宗崩じて髮を剃りて尼と爲りしが、高宗の時復た書髮して宮に入り、皇后王氏を排して皇后となる。高宗崩ずるや、朝に臨みて制を稱し、中宗を廢して廬陵を用と改め、恣に淫虐を爲し、大いに唐の宗族を殺し、朝綱大いに亂る。武后老いて疾に寢ぬるに及びて、張柬之等迫りて位を中宗に傳らしむ。武后尋いで死す。則天武后と謚す。在位二十一年なり。

【皇考】　亡父の稱。禮記、曲禮の「父曰ず考ぶ」の文に本づく。李翰集中にも亦皇祖實錄一篇あり。歐陽公の龍岡阡表にも「惟我ず考ぶ崇公」とあり。明の英宗(一說宋の徽宗)の時之を禁止してより、人臣に用ひず。

【號】　柳號。天寶の末、亂に遭ひ、母を奉じて王屋山に隱れしが、後吳に徙る。肅宗號を卽ぐるや、闕上書して事を言ひ。

擢んでられて左衛率府兵曹參軍となり、郭子儀を朔方府に佐く。幕いで、殿中侍御史に遷りしが、軍を以て宰相盧杞の怒に觸れ、饒州司馬に貶せらる。後、侍御史に復して身を終ふ。

【以レ事レ母業二太常博士一】　孫汝聽曰く「鎭丁二母憂一服除、吏部命爲二太常博士一。鎭曰、有二拳老孤弱在レ吳、願爲二宣城令一。從レ之」と。「太常博士」は官名、職を掌る。六典に「太常博士掌レ辨二五禮之儀式一。」事物起原に「魏文帝初置レ之」

【求爲レ縣二令江南一】　柳鎭が宣城令を求めたるを言ふ。縣令は縣知事なり。但し唐の制、縣は州の下に在り。江南は揚子江以南の地。

【其後以レ不レ能レ媚二權貴一】　權貴は、權力ありて、顯貴なるもの、實李を指す。樊汝霖曰く「肅宗卒レ喪、鎭上書言レ事、擢二左衛率府兵曹一。佐二郭子儀朔方府一。三遷二殿中侍御史一。以レ事謫二巴東一、貶二澧州司馬一」と。

【失二御史一】　海保漁村の註によれば、侍御史を失ひたるなり。「侍御史は」殿中に在つて非法を糾する官なり。事物起原に「周爲二柱下史一。秦時張蒼爲二御史一。主二柱下方書一。是也。亦爲二侍御史一。是則侍御之官、始二於柱下一也」

【皆當世名人】　宗元先友記を作りて曰く「先君之所二與友一。凡天下之善士皆樂焉」と。杜黄裳、樊宗師等六十餘人を擧せり。

【子厚少精敏云云】　舊唐書、柳宗元傳に曰く「宗元少聰悟絶レ倫、文章卓犖、尤精二西漢詩騷一。下レ筆成レ章、人爭傳寫、一縣若二珠貝一。當時流輩咸推レ之。登二進士第一。鄭儋、韋宏夤二授二校書郎一。藍田尉一。」と。嶷然は石の高峻なる貌。楚辭の字面、石の高くそゆる如く衆に秀出せるをいふ。

【遂二其父一時】　「遂」は及ぶなり、其の父の存命中に及べる時をいふ。

【已自成人】　已に自然に成人の如くなりしを云ふ。

【取二進士第一】　「進士」は范文正公文集序の條に見ゆ。子厚は貞元九年年廿一歳の時進士に登第す。

【嶷然見二顖角一】　高秀の貌。楚辭莊に「嶷、石高貌」。集韻に「山高貌」とあり。見は露なり、顖角を見はすは、幼にして俊異の相あるを言ふ。顖角とは、顖上の骨の高く出づること、顖獸角の如きの意なるべし。

【衆謂柳氏有レ子矣】　衆人皆謂へらく、南家には立派なる子ありと。

【博學宏詞】　官吏登用試驗の特別科目。科擧の士、還未だ濟たずして文三篇を試みるを宏詞といふ。

【集賢殿正字】　集賢殿は圖書を掌り、文字を校正する處。玄宗の開元二十三年に置けり。正字は職名。子厚は貞元十四年年二

十六の時將仕郎を以て――たり。

【儁偉豪邁】　「儁」は俊と同じ。「豪」は秀なり、豪隽あるをいふ。秀でて「スグレ」「カドバリテ」強きをいふ。

【議論風發】　「踔」は「卓」と同じ。漢書の註に「高遠也」とあり。「風發」は風生と同じ。風の發するが如く、極めて敏疾なるなり。四字みな議論のすぐれて強く當るべからざるをいふ。

【諸公】　朝堂に立ちて政治にあづかる大臣連なり。

【要人】　權要の人。「人ヲ要シテ」と訓ずるあれど、受當ならず。

【欲レ令レ出二我門下一】　自己の子分として立身出世せしめむとするなり。これ諸公要人が其の勢威を增すの手段。

【貞元】　德宗の年號。

【監田尉】　「監出」は唐關內道京兆府の縣名。今の陝西省四安府監田縣治。「尉」は唐、隋の制に因りて、武德中、縣に尉を置き警察の事を掌らしむ。

【監察御史】　六典に「監察御史、掌レ分二察百僚一。巡二按諸州一。糾二視刑獄一。肅二整朝儀一。」とあり。

【禮部員外郎】　「禮部」は尚書省六部の一、天下の禮儀・祠祭・燕饗・貢擧等に關する事務を掌る。四局に分ちて其の事務を分掌せり。員外郎は、六典に「禮部員外郎、掌レ貳二尚書侍郎一、

掌二其儀制一而辨二其名數一。」とあり。員外郎とは其の定員外の官たるを言ふ。

【遇二用レ事者得レ罪一】　「用レ事者」とは、君龍を得て政事を專のまゝに行ふ者を言ふ。こは柳子厚の黨せし王叔文を指す。叔文罪を得るに因りて、子厚も之に坐して貶せられしを言ふ。舊唐書、柳宗元傳に「貞元十九年、爲二監察御史一。順宗卽レ位。王叔文、韋執誼用レ事。尤奇待二宗元一。與二監察呂温一。給引二禁中一。與レ之圖レ事、轉二尚書禮部員外郎一。叔文欲二大用一レ之。會居レ位不レ久、叔文與二同輩七人一俱敗。宗元爲二邵州刺史一。在レ道再貶二永州司馬一。」とあり。子厚が王叔文に黨して失敗せしは、宦官の橫暴を抑壓して、大いに改革する所あらむとせしが、其の主なる原因とす。世人多く子厚を譏るに、權勢を貪り、姦邪に與し、其の一身を謀るを以てし、韓愈の如きすら、本文中に「不二自願薄貴重一。」と咎めたれども、子厚としては、正當の事に出でしなり、强ち責むべきに非ず。明の張溥、柳子厚の晉文公問レ守一原議（八家文、文章軌範等に載す）を評して、詳細に辯護せり。文長ければ之を擧げず。

【例出】　例は同例の義。他の人人と同例に地方官となりしを言ふ。出は京官より地方官として出さるる意。

【爲二刺史一】　邵州刺史に貶せられたれども、未だ任地に至らざ

り、州名を略したるなり。刺史は、唐の制にては、太守の互名にして、州の長官なり。

【又例貶二永州司馬一】 貞治通鑑、唐記に曰く「貶二禮部員外郎一出爲二刺史一、貶レ之太輕。再貶爲二永州司馬一。」とあり。司馬は、刺史の下役にて、無州一人を置く。軍旅を掌る官。

【刺苦】 深く自ら攻苦するなり。刺は深なり、心を用ふることの深きを言ふ。宋史、楊徽之傳に「徽之幼刺苦學レ學」

【記覽】 記憶博覽をいふ。

【詞章】 詩賦雜文の類の總稱。また辭章に作る。

【汎濫群書】 諸子百家の學を渉獵し記憶する意。「汎濫」は大水の溢る貌にて、轉じて博く渉るをいふ。孟子、滕文公上篇に、「洪水横流、汎二濫於天下一。」とあり。「停」は渟と同じ、「停蓄」は貯へ置く義。

【無二涯涘一】 水の際限なきが如く、其の學の際限なきなり。「涘」は音「シ」、水厓なり。詩經、王風葛藟篇に「在二河之涘一」の註に「水涯曰レ涘」

【自歸二於山水間一】 山水の景を愛して、思ふ儘に之を翫びしを言ふ。永州諸記は此の時に成る。新唐書に「宗元既貶、寓斥、地又荒癘、丙自放二山澤間一、其通厄感憤、一寓二諸文一、做二離騷數十篇一、讀者咸悲惻」とあり。

【元和】 憲宗の年號。

【得二柳州一】 後の刺禹錫の爲めに柳州を以て播州に易へんことを請ふの一節を伏す。資治通鑑に「元和十年、王叔文之黨、坐誅レ官者、凡不二量移一。執政有レ憐二其才一欲二漸進一之者。悉召至二京師一。諫官爭言二其不可一。上奥二武元衡一亦惡レ之。三月乙酉、皆以爲二遠州刺史一。官雖レ進、而地往遠。永州司馬柳宗元、爲二柳州刺史一。」とある是れなり。「柳州」は、今の廣西柳州府柳城縣の西南に在り。子厚が柳州と號するは、此處に刺史と爲りしに因る。

【爲設二教禁一】 「教」は敎令、「禁」は禁制なり。

【前儒】 柳子厚に先ひたよるを言ふ。

【以二男女一質レ錢】 己の子女を以て抵當として金錢を借ること。「質」は音「チ」、辭源に「以二物典押貸レ錢曰レ質」唐書、柳宗元傳に、「柳州土俗、以二男女一質レ錢。過レ期則沒二入錢主一。宗元革二其毒法一、其已沒者、仍出二私錢一贖レ之、歸二其父母一。」

【子本相侔】 史記、貨殖傳の註に「子謂二利息一也」とあり。「本」は元金なり。侔は說文に「齊等也」とあり。償りて元金と同額になる義。

【不二時贖一】 期限内に返金して、其の抵當に入れたる子女を收

り還さざる義なり。贖は辭源に「凡取二還所レ質、皆曰レ贖」とあり。

【觀】 美收の意。俗にいふ「買ヲ得ガス」こと。

【是歲二方針一】 奥は「タメニ」と訓む。是に方法計略を設けての義。方法計略は、月號年號等の事を指す。

【今其舊】 負債者に日傭を爲さしめ、其の賃金を債額に記し償ひ、債額と同一額に達せる時、抵當の子女を還さしめたりとの義。

【無名氏】 姓名の傳はらざる者なり。諸之を識さず、位、爵屋敷に居ず。故に無名氏と稱す。又姓氏を知るも特に之を擧ず、一時或は他州を領し、刺史を經ずして、文學道學に「王績(隋末唐初)元年號——(略)——所謂詩人(中略)未曾有一是——」

【比】 他處の字典に「及ぶ」と註せり。

【是歲歸者且二千人一】 他州の民、悉く歸鄉許可に見ゆ。歸りたる方、四面均勻、往復貧困。如何與レ爲行。如何子厚の方、貧困と永訣、一吾於二馬關一爲二執友一。胡忍レ見二其如一是。物事レ美、歸レ以二物州一授二馬關一自往レ柳州。會朝廷亦美二其事一。馬關終身柳州。」とあり。柳州は今の廣西柳城縣。柳州は今の龍江省の通稱をいふ。

【凡在二永一者】 柳氏が柳州にて家に在りとの義。「永」は柳宗の省

羽化。

【大人】一般に父を尊すれどもここは母をいふ。後漢書、范滂傳に「滂將ㇾ就ㇾ誅、與ㇾ母訣曰、大人割ニ不ㇾ忍之恩。」とあり。以て證すべし。

【拜疏】章疏を奏進すること。疏は奏聞事具に「條陳也」。

【遇ㇾ有ㇾ以ニ夢得事ㇾ白ㇾ上者】前に註せし御史中丞裴度の事に上る。舊唐書、劉禹錫傳に「御史中丞裴度奏曰、禹錫有ㇾ母、年八十餘。今播州西南極遠、猿狖之所ㇾ居、人跡罕至。禹錫誠合ㇾ得ㇾ罪、然其老母必去不ㇾ得。則與ニ此子ㇾ爲ニ死別。臣恐傷ニ陛下孝治之風。伏請屈ㇾ法、稍移ニ近處。」とあり。

【士窮乃見ニ節義ㇾ】論明道の詩に「時危見ニ臣節、世亂識ニ忠良」とあり。論語、子罕篇に「歲寒然後知ニ松柏之後ㇾ彫也」とあり。皆此の意に同じ。

【徵逐】「徵」は召なり。招くなり。「逐」は從ひて其の家に至ること。招きたり招かれたり互に相往來するの意なること。

【詡詡】說文に「詡大言也」集韻に「和集貌」漢書、張敞傳の註に「北方人謂ニ相好ㇾ爲ㇾ詡」とあり。ニコニコ和らぐ貌。

【相取下】相互に其の心に取り入り、又互に相卑下して讓り合ひ、感情を害せざるやうにすること。

【出ニ肝肺ㇾ】心中を開放して誠を示すこと。

【指ニ天日ニ云云】天日の照すを證據とし、決して欺かずといふなり。

【毛髮比】比は類なり、毛髮程の義。

【反眼云云】反目に同じ。目をそむけて睨み合ふこと。詳解に、「反ニ其眼ㇾ以示ㇾ不ㇾ欲ニ相見ㇾ之意也」周易、小畜に「夫妻反目」とあり。當時宗元交遊中、實にこの事あり、故に韓愈特に感慨して、詳かに之に及ぶ。

【陷穽】おとしあな。詳解に「坑坎也。所ニ以掩ニ取獸ㇾ者也。因謂ㇾ設ㇾ計以陷ニ害人ㇾ者、曰ニ陷穽。」

【擠ㇾ之】「擠」はおしおとす。左傳、昭公十三年に「小人老而無ㇾ子、知ㇾ擠ニ于溝壑ㇾ矣」註に曰く「擠、墜也」

【皆】「ヨロシク」と訓むものあれども、「ホトンド」と訓むべし。

【可ニ少愧ㇾ矣】龜山楊氏この語を評して曰く、「皆於而無愧」と。

【勇ニ於爲ㇾ人】陳景雲曰く「史言王叔文誇詡ニ於朝、謂ニ人曰、定爲ニ死友ㇾ、勇ニ於爲ㇾ人、卽言ニ子厚爲ニ助叔文ㇾ而爲ニ其餌ㇾ也」と。

【不ニ自貴重顧藉ㇾ】自分の身を重んじ惜しまぬこと。韓文點勘に曰く「顧藉與ニ顧惜ㇾ同、公上ニ留守相公ㇾ啓云、無ニ一分顧藉心ㇾ、是或以ニ二字ㇾ屬ㇾ下非、沈懷顧亦云」とあり。卽ち「顧藉」は、顧惜に同じ、我身を顧み惜むなり。

【坐廢退】「坐」は連坐なり。「マキゾヘ」になりて官をやめ退け

られたりとなり。

【相知】朋友及び知り合の人。

【推挽】人を推薦するを謂ふ。「挽」は「挽」と同じ。後より推すを推となし、前より牽くを挽と爲す。左傳、襄公十四年に「衛君必入、夫二子者、或輓ㇾ之、或推ㇾ之、欲ㇾ無ㇾ入、得乎。」と王叔文の徒八人敗るるや、永く起廢せざるの命あり。後八人中唯程异のみ、大臣李巽の力めて薦むるによりて復進用を得たり。

【窮裔】裔のはて、邊境をいふ。ここは柳州を斥す。裔は說文に「衣裾也」とあり、轉じて邊緣の意に用ふ。史記、五帝紀に「乃流ニ四凶族ㇾ遷ニ于四裔ㇾ」とあり。

【臺省】揮塵錄に曰く「唐高宗改ニ門下省ㇾ爲ニ東臺ㇾ、中書省爲ニ西臺ㇾ、尚書省爲ニ文昌省ㇾ、故御史臺呼爲ニ南臺ㇾ。」と。ここの「臺」は御史臺にして、「省」は禮部省なり。子厚嘗て御史臺に監察御史となり、又、尚書省の禮部員外郎たりしに因りて斯く言へるなり。

【自持ニ其身ㇾ云云】子厚が臺省に在る時に、貶せられて司馬・刺史たりし時の如くに、謹愼以て身を持したらむには、自然斥けらるることは無かりしなるべしとの意。

【有ニ人力能擧ㇾ之】上の「無ニ相知有ニ氣力ㇾ得ㇾ位者推挽ㇾ」の句に照應す。

【有ニ以自於人ㇾ】其の學術、人品、人に拔け出づるを言ふ。

【將ニ相於一時ㇾ】生存中に大臣大將たること。一時の字、前の「必傳ニ於後世ㇾ」の後世に照應す。

【以ㇾ彼易ㇾ此】「彼」は爲ニ將ニ相於一時ㇾをいひ、「此」は文學辭章の後世に必傳するをいふ。

【孰得孰失、必有ニ能辨ㇾ之者ㇾ】將相と爲るの失にして、文學辭章の後世に傳はるの得なるを言ふ。不了語、味へば味ふ程、妙味ます。

【萬年】縣名。漢の太上皇陵墓の地。唐の時は、京兆郡の治下に屬し、今、長安縣に入る。子厚の先侍御史府君神道表に、「文惠葬は、長安の視仁里の節に卒し、萬年縣の棲鳳原に葬りし事を記せり。

【先人】亡父。詳解に「謂ニ先代ㇾ也。今俗多稱ニ亡父ㇾ爲ニ先人ㇾ。」

【季】兄弟の順序を伯仲叔季といふ。季は末子なり少子なり。

【河東君行立】河東は山西省西南隅の地、黃河の東なるが故にいふ。舊唐書、劉禹錫傳に曰く「裴度史館行立、孫勃、崔群、蔣秦、等皆ニ遊ニ於京師ㇾ時人慕ㇾ之」と。

【節槪】節操氣槪なり。舊唐の職に「俗有ニ——之風ㇾ」槪を傑に得れるものままあり誤なり。

【重ニ然諾ㇾ】人に許諾せし事は必ず重んじて之を實行する義。

「紙」一に立に作る。史記、陳涉世家耳傳に「此固將相王侯寧有種乎」と。

不し殺、當二誅罰一者也」とあり。

【厚之兄弟】　厚は柴の兄弟。厚郎は北方の俚語。厚郎は子厚の厚の子なり、故に厚郎と稱す。柳集に「柴氏兄弟」とあり。

【厚之子】　厚之子厚二柴氏兄弟一」とあり。

【厚】　厚時の柳州。民國に至りて縣に改め、今に因せしむ。

【徙而家】　徙ひ行きて其處に家を構へたるなり。

【置二紀其家一】　子厚の家を世話すること。柳集傳に「今人以二書記一屬二生一者、蓋二紀焉一」とあり。司馬、楊敬傳に「記紀振恤、皆好如し此」

【子厚之意】　意は「墓大」、詩經、皆風等生篇に「百歳之後、歸二于其室一」の意にいふ「室歸二紀焉一」と。

【柳國既安】　柳に柳國にして既に安穩なりとの意。文章轍例篇には「此謂二風水一」とあり。風水は、地理家の說に、墓を築くには、後に丘を負ひ、前に水を繞へたる地を以てすれば、生氣を散ぜざらしめて子孫榮ゆとの事なり。柳國既安の句に、此れ意の意味ありや否やは知らざれども、記して以て參考に供す。

【以二其人一】　專くは後嗣に福利を與へ、之をして榮榮せしめよの意。柳閉祭書記に曰く「子厚已矣、不二復能一伸二其志一

二一　始得西山宴游記

柳宗元　字は子厚、唐の河東の人。夙くして聰穎にして、最も詩文に長ず。進士に第し、貞元十五年監察御史となる。後已を信任せし王叔文の敗にあひ、永州司馬に貶せられ、元和十年柳州刺史となり、十四年卒す、年四十七。其の詳細を知らむと欲せば、前の墓誌銘及び唐書本傳を讀むべし。

【始得】　前條に因み、柳子厚獨往の境記文を授く。蓋山の絶勝【一快絶の狀を知ちしめ、題意と文章、且つ各段の照應を明にし、以て勉敎の資料、實際なる天工の如きを見らしむべし。

【西山】　湖南省永州城の西、瀟江の對に在り。

【始】　「始」は音「ヨク」、歌に同じ、唯なり。諸間へ遠ひ避けられたる身の上をいふ。柳宗の貞元中原を棄て永州の司馬に貶せられたるを以て云ふ。

【伐木】　元和四年、唐の憲宗時代なり。

【法華西亭】　法華は寺の名なり。四亭は寺の四なる小建築物。

【湘江】　洞庭湖に入る大河、湘水是なり。

【縈二染溪一】　一に冉溪といふ。永州府城の西に在り。溪は傳はりて行くこと。

【極淸】　極木繁草の生茂れるを云ふ。

【佳】　音嘉、一に美に作る、美麗なる貌。

「其來――」、傳に「蓋し造之意」、筆に「舒行伺レ間、猥來見レ己之貌」但し此の字、孟子、離婁下篇にも「施施從レ外來」とあり、朱註には「喜悅自得之貌」と解したれど、今、之に從はず。

【施施】　ブラブラ」と歩ふ貌。

【其徒】　己が仲間の意。其は、吾を客觀に見たるなり。

【隨流】　めぐり廻つて流るる谷川。

【無二遠不一到】　永州の山水は何程遠くとも遊ばざるなしとなり。

【夏相枕】　夏は「互ニ」なり。

【皆有レ所レ極夢亦同レ趣】　已の意に極めて滿足する所あれば、夢も亦同じやうなる面白き事を見るといふ意。

【怪特】　奇怪絶特なり。風景の他にすぐれて珍しき事。

【今年】　元和四年、唐の憲宗時代なり。

【法華西亭】　法華は寺の名なり。四亭は寺の四なる小建築物。

【湘江】　洞庭湖に入る大河、湘水是なり。

【縈二染溪一】　一に冉溪といふ。永州府城の西に在り。溪は傳はりて行くこと。

【極淸】　極木繁草の生茂れるを云ふ。

【佳】　音嘉、一に美に作る、美麗なる貌。

【蒿目而視】「蒿」は挙なり。先輩は、義者の注に「舉ㇾ仰ニ天ㇾ目、其形似ㇾ蒿」とあり。「蒿」は挙なり。足を投げ出して無精に坐して眺むる。

【作歌】しとねと訓ず。「作」は起に同じ。坐席なり。唐韻大意。玉篇「茅ニ王之藉ニ文選——茅席凡坐藉ニ」注に「——草席也」

【斗絶谷底】「斗」は谷深き状、「絶」に同じ。「底」に同じ。谷は上文の高字を承け、底は上文の下字を受く。

【蓋】音「ケフ」上の高きなり。孟子公孫丑上篇に「泰山之於ニ丘垤ニ。また一般に概約(アラヅカミ)なり。

【尺ニ寸千里ニ】尺寸の間に千里の地景を縮むる意。

【一郡県異ニ俗其ニ風気ニ】県きものも一郡に集まり納まり、参差ものも一所に集まり棲りて、千里の風物、世俗より隔れ隠るることを得るなしとの意なり。

【黄、青、黒、白】青き色の山と白き光の水を引き「メグラス」なり。青は山、白は水、山川の風景をいふ。

【小若ニ拳石ニ】小さき岩。楊子法言に「晋楚之間、某攻ニ某之城ニ、両書に又「小雲間ニ之境ニ」左傳、襄公二十四年に「——無ニ松柏ニ」。今木部集に作る。水経注。

【佐佐子】漸かにして限りなき状。

【山脚気】「脚」は落らくは「腰」の誤ならむ。「腰」は柳文の挂州曾侯清亭記に「列星下布、腰気環合」とあり、堅固の四都賦に「低回ㇾ腰ニ「腰」は日逸の気なり。

【浮浮乎】廣大の貌。ここは胸中洒濯として爽なるを形す。中庸に「——発ニ育萬物ニ」とあり。

【翛然】脱ひて塵のくづるる貌。

【心神形骸與ニ萬化ニ冥合】心神凝定し、形體解散して造化の心と暗合するなり。萬化は造化のこと。郭象に「ミトレ」て恍然だる有様をいふ。

【知ニ吾楽之未ニ始游ニ於是ニ乎始ニ】吾が是れまでの楽は、未だ始めより遊びしとは言はれず、眞の楽は今度より始まることを知るとの意。此れ斯の文の主意たり生命たり、注意すべし。

【志】底本字典に「記也。與ニ誌同。或作ニ識ニ」

本文挿註参照。

山脚又曰「高下之勢以下九句、古今詩文、似ニ造化風景之状ニ者、其ノ幽ニ於此ニ美ノ於ニ此ニ」と。沈徳潜曰く「似ニ始得ニ字ニ著ノ意、人皆知ノ之、著筆者鮮、一語ニ尤化ニ人工ニ即造物天工矣、此等ニ処學ニ記文ニ」

集山静曰「山氣ニ倫有、唯其至靜故耳。於ニ此ノ一段上ニ著ノ力ニ處ニ自覚ニ」

青歌は蛇の毒よりも甚なるを知らしめ、其の託事諷の結場を設けて、生徒の機智を富ましむべし。

【永州】今の湖南省永州府零陵縣の地。

【黒質而白章】黒體にして白き文飾あるなり。「章」は采なり。

【触ニ草木ニ皆死】「死」は枯るるなり、蛇の毒気、草木に觸れば草木皆に悉く枯るるをいふ。

【以ニ之互ニ乗人ニ】得は手に入るるなり。「乗」は乾肉なり。「乾」は薬餌なり。

【大風】「カツタイ」「悪疾なり。素問に「病ニ大風ニ骨節重、鬚眉落、名曰ニ——ニ」とあり。皮は云く、中風の類と。今、姑く後説に従はむ。

【聚毛】血肉仲ぶる能はざるなり。

【瘻・癘】「瘻」は頭腫なり。一に曰く、久瘍「癘」雷「ライ」「癘」に同じ。悪瘡なり。

【死人】腐爛のものにて、血気至らざる死肉なり。

【三歳】三戸蟲なり。柳子厚觸ニ戸蟲ニ文の序に「有ニ道士ニ言、人皆有ニ戸蟲ニ。三ニ歳ニ腹中ニ伺ニ人隙微失候ニ輒為記。日庚申、告ニ其人之罪過ニ出為ニ于帝ニ以求ニ増ニ。以ニ是人多請過候為ニ大死ニ」とあり。これ道家の説に本づく。また西陽雑俎に曰く「上戸尸姑、伐ニ人眼ニ中戸白姑、伐ニ人五臓ニ下戸血姑、伐ニ人胃命ニ」と。

【大曾】官中の倉庫なり。晏香に「天監十六年、敕ニ——木ノ部ニ以ニ生類ニ為ニ薬ニ」とあり。

【歳賦ニ其ニ】毎年ニ疋づつを永州に賦課する義。後文の「蓋一歳之賦ニ死者ニ」とあるに照す。

【當ニ其租入ニ】其の人の納むべき租税に充當するなり。

【莅ニ事者】「莅」は臨香に「臨也」とあり、政を行ふ者をいふ。

【更ニ若役ニ】汝の蛇取の仕事を變更せむとの意。若は汝なり。

【復ニ若賦ニ】汝の租税を、以前の通り出す様、取りはからひて遣らむとの意。

【狂顧】恐のさかんに出づる貌。

【若幹ニ歳而生ニ之乎】君は、吾が命懸の役を悩みて生かさむとし給ふとの意。暗にには廃蛇至當なりとの意を含む。

【若不ニ復ニ役ニ則已弁矣】従前此の役を免さざりしならば、久しく已に斃死せしなるべしとの意。

【殫賦之生日蹙】近郷の生活は日日に縮るとなり。

三三　葉公問孔子於子路

【疏】 注「葉公」至「之也」。○正義曰：此章論葉公問孔子於子路，子路不對之事。

【經】

【葉公】葉縣尹，楚僭稱王，其大夫僭稱公。名諸梁，字子高。食采於葉，因氏焉。

【問孔子於子路】葉公見子路而問孔子之為人。

【子路不對】子路不知所以對葉公之問。

【曰】「曰」，語辭。

【女奚不】「女」，汝也。「奚」，何也。「不」，語辭。

【其為人也】謂孔子之為人。

【發憤忘食】發憤於學，忘食於道。

【樂以忘憂】樂於聖人之道，忘憂貧賤。

【不知老之將至】不知年老之將至。

【疏】 注「葉公」至「之至」。○正義曰：葉公問孔子於子路，子路不對者，葉公見子路而問孔子之為人，子路不知所以對葉公之問，故不對也。

【葉公】葉縣尹，子路聞葉公之問，不對。

【問孔子於子路】葉公見子路而問孔子之為人。

【子路不對】子路不知所以對葉公之問。

【曰】「曰」，語辭。

【女奚不】「女」，汝也。「奚」，何也。「不」，語辭。

【其為人也】謂孔子之為人。

【發憤忘食】發憤於學，忘食於道。

【樂以忘憂】樂於聖人之道，忘憂貧賤。

【不知老之將至】不知年老之將至。

【疏】 注「葉公」至「之至」。○正義曰：葉公問孔子於子路，子路不對者，葉公見子路而問孔子之為人，子路不知所以對葉公之問，故不對也。

三四　葉田家

【經】 葉縣令，子路為政，使之為人。食采於葉，僭稱王，其大夫僭稱公。食，音嗣。

【疏】 注「葉縣」至「音嗣」。○正義曰：葉縣令，子路為政，使之為人。食采於葉，僭稱王，其大夫僭稱公。食，音嗣。

【經】

【葉公】葉縣尹，子路為政，使之為人。食采於葉，僭稱王，其大夫僭稱公。食，音嗣。

【問孔子於子路】葉公見子路而問孔子之為人。

【子路不對】子路不知所以對葉公之問。

【曰】「曰」，語辭。

【女奚不】「女」，汝也。「奚」，何也。「不」，語辭。

【其為人也】謂孔子之為人。

【發憤忘食】發憤於學，忘食於道。

【樂以忘憂】樂於聖人之道，忘憂貧賤。

【不知老之將至】不知年老之將至。

【疏】 注「葉公」至「之至」。○正義曰：葉公問孔子於子路，子路不對者，葉公見子路而問孔子之為人，子路不知所以對葉公之問，故不對也。

【葉公】葉縣尹，子路為政，使之為人。食采於葉，僭稱王，其大夫僭稱公。食，音嗣。

【問孔子於子路】葉公見子路而問孔子之為人。

【子路不對】子路不知所以對葉公之問。

【曰】「曰」，語辭。

【女奚不】「女」，汝也。「奚」，何也。「不」，語辭。

【其為人也】謂孔子之為人。

【發憤忘食】發憤於學，忘食於道。

【樂以忘憂】樂於聖人之道，忘憂貧賤。

【不知老之將至】不知年老之將至。

【疏】 注「葉公」至「之至」。○正義曰：葉公問孔子於子路，子路不對者，葉公見子路而問孔子之為人，子路不知所以對葉公之問，故不對也。

二五　賣柑者言

【劉基】字は伯温、明の青田（浙江省）の人。天文・兵法に精し。明の太祖の天下を定めしは、基の謀多しとなす。誠意伯に封ぜらる。太祖常に呼んで老先生と稱して名を言はず。後、胡惟庸に毒殺せられ、憂憤して死す。時に洪武八年にして年六十五。基、文章に工に、氣昌にして奇なり。宋濂と竝びて一代の宗たり。

【大意】賣柑者の言を假りて、世の外見を修飾して内實の伴はざるものを諷す。今日の時弊に中ること甚だ切なり。教授者も生徒も共に反省の資に供すべし。

【杭】浙江省杭州府をいふ。馬關條約に因りて開埠せる地。

【善藏レ柑】善は、副詞の時は、たくみなること、すぐれたること。詩經に「[illegible]」とあり。柑は蜜柑なり。藏は貯藏なり。

【燁然】玉篇に「光明之貌」、光澤の「ツルハシヤ」をいふ。「燁」音「エフ」。

【玉質】玉の如ききめ。質は肌なり。長恨歌「天生麗質」の質に同じ。

【賈】音「カ」、「アタヒ」、價に同じ。

【鬻レ之】受買するなり。

【貿】買ふなり。詩經、衛風氓篇に「抱レ布貿レ絲」集傳に「貿、買也」

【敗絮】「絮」は說文に「敝緜也」、古くして粗なる綿をいふ。

【籩豆】兩者何れも古の禮器。籩は竹を編みてつくり、果實又は脩脯を實つ。豆は木にて製し、菹・醢・羹・膾等の濡物を盛る。後世は兩者何れも祭祀にのみ用ふ。論語、泰伯篇に「籩豆之事、則有司存」とあり。

【衒レ外】「外ヲテラヒ」と讀む。外面を飾りて誇るをいふ。

【愚瞽】愚にして事理にくらきなり。瞽は「メシヒ」をいふ。

【吾業】「ワレスデニ」と訓む。

【售】賣るなり。廣韻に「賣レ物出レ手也」

【獨不レ足二子所一乎】吾子のみ彼此言はるるは、吾子の所存に不足とするものあるか、大方然るなるべしとの意。所は、所存又は思ふ所と解すべし。

【虎符】虎符は兵符なり。兵符を佩びて大將の位置に在るをいふ。虎符は、銅虎符の略、虎の形をなせる「ワリフ」。二分して其の一を王の所に置き、他の一は、將軍之を佩びて軍に赴くなり。史記、高祖本紀に「六年剖レ符行レ封」とあり。孝文紀には「初與二郡國守相一爲二銅虎符・竹使符一」の註に「張晏曰、符以レ代二古之珪璋一、從二簡易一也」とあり。師古曰く「竹使符與二郡守一各分二其半一、右留二京師一、左以與レ之」と。

【皋比】虎皮なり。將軍にいふ。左傳、莊公十年に「蒙二皋比一而先犯レ之」。杜注に「皋比虎皮也」

【洸洸】武なり、果毅の貌。詩經、大雅江漢篇の「武夫洸洸」に本づく。

【干城】「干」「タテ」は敵を扞ぐ所以、「城」は自ら守る所以。轉じて武夫を稱す。詩經、周南兎罝篇に「赳赳武夫公侯干城」とあり。

【授二孫吳之略一耶】孫子・吳子の兵法を臣下に傳授して敵を破り得るかとなり。

【峨】峨峨然として高き貌。ここは大冠を高く冠る意。

【拖二長紳一】「拖」音「タ」、拕又は拖に作る。同じ。「ヒク」と訓す。論語、郷黨篇「加二朝服一拖レ紳」。註に「引二大帶於上一也」とあり。

【昂昂乎】志行の高きをいふ。說文に「昂、擧也」。晉書、嵇紹傳に「昂昂然若二野鶴之在一レ雞群」。

【伊皐】伊尹・皐陶の二人なり。伊尹の事前に屢、出づ。皐陶は、虞舜の時、獄官の長と爲る。書經の皐陶謨は、皐陶が舜の爲に謀りし言を載す。

【糜二廩粟一】糜、音「ビ」、「ツヒヤス」と訓す。徒費するなり。何もなさずして、食祿を食むこと。

【醇醴】美酒なり。醇は厚酒、醴は甘酒。

【飫二肥鮮一】美食にあくこと。肥は肥えたる獸肉、鮮は新鮮なる魚肉、飫は飽くこと。

【何往而不金二玉其外一敗二絮其中一也哉】天下往く所、此の蜜柑の如く、外貌を美にして、中のくされざるものあらうか、決して無しとの意。

【是之不レ察云云】天下を擧げて皆是なるを見ずして、吾が蜜柑に就きてのみ之を見るかとの意。其の見識なきを嘲りしなり。「是之」の「之」の字は、一種の强勢助辭に使はれしなり。

【東方生】名は朔、漢武帝の臣。史記の滑稽列傳を看よ。

【滑稽】史記の索隱に「滑、亂也。稽、同也。以言二辯捷之人一、言レ非若レ是、說レ是若レ非、能亂二異同一也」又崔浩曰く「滑稽流レ酒器也。轉注吐レ酒終日不レ已。言出レ口成レ章、詞不二窮竭一、若二滑稽之吐一レ酒」要するに、滑稽は多智辯捷にして諧謔を交へ、巧に是非を亂るをいふなり。

【豈其憤レ世疾レ邪者耶】なんと其れ世の濁亂を憤り邪僻なるを疾むものかとの意。ここの豈は「なんと其れ」と譯すべし。

【是之謂】 其の創製なることに注意せしむ。此の時は是と之とを複合するを常とし、意甚だ重し。

第一段　数字を提出して主となし、通篇此より論を發す。

第二段　文武官に語る者の数を為すを歴説し、後に反結の語を為す。極めて冗長。

第三段　立言の旨を結ぶ。

【両形の形容詞を連用して示す。

【業】 是を業務とすること多事なりとの意。

【吾業領ル是以食ニ吾職一】 吾すでに是に領りて以て吾が職を食よとの意。

この業は「すでに」と訓む。「既」又は「已」に似たれども、既は過去に係り、已は過去より現在に係り、業は未来にもかけて言ふ。ここの如きも未来に係れり。

二六　送薛存義序

【吏ニ於土ニ者】 凡そ人、其の土地に吏と為る者はとの意。吏は地方官。

【養民之役、非ニ以役ニ民前已ニ也】 考ふるに人民に使役せらるるのものにして、決して人民を使役するのみのものに非ずとの意。此の句一篇の主脳なり、生命なり。大いに注意すべし。

【食ニ於土ニ者】 其の土地を併して生活するもの、農夫是なり。

【出ニ其什一ニ】 什は十に同じ。十分の一の租税を上に納むること。

【籍ニ于吏ニ】 籍は簿なり、官吏を簿ふこと。

【使レ同ニ平於ニ我ニ】 治平の善政を我が吏たるものに司らしむとの意。我の字、柳子厚、吏に代りて言ふ。

【受ニ其直ニ与ニ其事ニ】 今の人は、其の俸給を受けながら其の政事を与るとなり。直は価値なり、其の俸給を言ふ。何等の皮肉。

【善前後之】 慥ふに政事を与るのみならず、又従つて民の財を斂むとなり。斂の字、不当の租税をしぼり取るを言ふ。深刻の文字。

【前使レ籍ニ一夫於家ニ】 今、向に一の役夫を汝の家に備はしむと假定せむにとの意。以下皆喩言だ妙。

【貨財】 財貨、什物をいふ。

二七　種樹郭橐駝傳

【前置】　前置に囚みて、種樹郭橐駝傳を假りて、官治に於ても、敎養に於ても、學習所た修養に於ても、小事・姑息乃至助長の害を免らしめ、衆ねてその基礎に全力を注入すべきを知らしむべし。

【種樹】「種」は植うるなり。唐安仁の韻會に「蒔ゑ穜ーレー、植ゑ自得」とあり。ここは植木職といふこと。

【郭橐駝】　橐音托、「駝駝」は背屈に同じ、背肉隆起して駱に似たり、故に名づく。

【傳】　一木傳に作る。傳疾なり。

【傳然伏行】「傳然」は曲背の貌。伏行は地に俯して行くなり。

【固言】　固は「マコトニ」と訓む。實際相違せりとの意。

【長安】　秦漢唐時代の帝都。周の鎬京の地。陝西省長安縣。

【遊觀】　觀覧遊歩の意。座を作りて、四季の樂を取ること。

【貨と果者】　果物を賣るもの。

【爭迎取ニ養觀一】　爭ひて駝を家に迎へて、樹木の世話をなさしむとなり。一說に駝を養ふなりと解したれど如何あらむ。又

一說に「爭ニ迎ヘ取リテ養フ」と讀み。觀字を下に屬して他の植うる者と比べ觀る義とせり。從はず。

【移徙】　一本遷徙に作る。移植の義。

【根茂實密】　「根」は大なり。太り茂ること。「實」は早に同じ。早く實ること。

【窺伺候望】　駝の仕方を伺ひ見て、之を眞似るなり。

【其ニ能如ニ此也一】　能く駝に及ぶものなしとの意。

【孳】　繁殖なり。

【能順ニ木之天一以致ニ其性一焉爾】　能く木の自然に順ひて、其の持前を逃げしむるのみとの意。史記、扁鵲傳に「越人非ニ能生ニ死人一也。此自當レ生者、越人能使ニ之起一耳」とあるに同じ。ここ一篇の主腦、生命。大いに注意すべし。

【其本欲レ舒】　本は根なり、舒は展なり。根は窮屈にせずして十分に伸ばすを要すとの意。

【其培欲レ平】　土を培ふには、凸凹なく、平らに行き渉らむことを要すとなり。

【其土欲レ故】　故は舊なり、卽ちもとの土。木を移徙する時、もとの土の附着することを欲すとなり。一說にもとの土の實と同じからむことを欲すと解せり。亦通ぜり。

【築欲レ密】　「密」は根の土を「ツキカタメル」

義。移徙の時、根の土をつきかためては、其の密着を欲すとなり。

【既然已】　「スデニ然シテヲハレバ」と讀む。此の一句蓋注は衍としたれど、斯く讀めば容易に解せらるるに非ずや。

【去不ニ復顧一】　其の場を去つて、復た後ろをも振向く勿れとなり。

【其天者全而其性得矣】　木の自然は全うせられて發育の天性は遂げらるること必定なりとの意。

【根拳而土易】　「根拳」は上の「其本欲レ舒」に反應し、「土易」は上の「其土欲レ故」に反應す。「拳」は音「ケン」「カガム」と訓す。

【其培之也、若不レ過レ焉則不レ及】　其の培ふには、多過ぎずんば則ち足らずとなり。

【愛レ之太恩、憂レ之太勤】　之を愛して思を施し過ぎ、之を憂へて働き過ぐる意。

【旦視而暮撫ニ其生枯一】　木の前に爪を立てて、生きて居るや否やを觸し見るとなり。爪の字下し得て深刻。

【旣去而不ニ復顧一】　木の根を踏りて、根と土と能く着き居るや否やを顧るとなり。蓋はゆすり動かすなり。下し得て狀況觀るが如し。

【木之性日以疏】　木の繁茂せむとする性は、日に日に離るるなりとの意。

【不ニ我若一也】　他の植うる者は、何れも我れに及ばざるなりとの意。「不ニ我若一也」といへば「不レ若レ我也」より意强し。

【吾又何能爲哉】　此の外に、われ又何の爲爲があらうか、ありはしないとの意。

【官理】　理は「ナサム」と訓む。政治の義。唐人、高宗の諱を避けて理に作るなり。事文類聚後集卷六に「論ニ洛陽縣一云云、唐陸贄論ニ調中事一曰、臭レ理同レ道、同レ不レ異。諱レ理ニ體貴先事一狀曰、青徙同レ理。韓文進士策曰、堯舜垂ニ衣裳一而天下理。又曰、無爲而理、其理也易。治字皆易爲レ理。避ニ高宗諱一也」

【若ニ苦憊一焉。而卒以講】　苦だ人民を煩む樣なれども、結局講を爲へて居るなりとの意。

【促ニ耕穫一】　耕は人民なり。耕、人民が耕作の機に後れざらむ樣に催促するとなり。

【勗ニ植桑一】　勗音「キヨク」、勉むるなり、勵ますなり。植、人民の植桑を勵ますとなり。

【督ニ種樹一】　種は收穫なり。督は責なり、責促して責むること。種、人民が收穫の機を誤らぬ樣、督促するとなり。

【蚤繅ニ而緒ニ蚤織一】　「繅」は繭を煮て絲と爲すなり。「緒」は汝なり。汝の絲を繅れよとの後。「織」は布織なり。織

つて得たる絹を織物にせよとなり。

【字二前幼孩一遂二前意一歌】「字」は愛なり、養なり。「幼孩」は幼稚なり。禮記、曲禮に「人生十年曰レ幼」とあり。「孩」は咳なり、小兒の初めて笑ふをいふ。「遂」は成なり。生長せしむるなり。子を育し牧畜するために、今を煩にするをいふ。

【鳴レ鼓攻レ木】村人を召集せんとしてなり。「木」は板木なり。吊り下げて、之を撃ち以て人民を招集するもの。

【吾小人】吾吾小民。

【懷二惔慄一】「懷」は止なり、「惔慄」は飢食なり、飢を憂といひ、夕を惔といふ。

【嗤】一に喜に作る、嗤は笑なり。ここは感歎の餘り笑ひたるなり。

【吾聞レ養レ樹得二養レ人術一】吾れ樹木を養ふことを聞うて、料らず人を養ふの法を得たりとなり。此の一句莊子、庖丁牛を解くの一段を學びたるものなれども、少しく寢跡あるが如し。されば山陽は、補助者說の結法に如かずとなせり。

【官戒】官人の戒。

【故不二我若一也】倒裝たることに注意せしめ、肯定の場合の形を案出せしむ。

【其亦有レ類乎】感歎の形式にして「其」は「ソレ」と訓ずべきことを說く。

第一段　郭橐駝の種樹を善くするを敍す。
第二段　種樹の良法は自然に從ふに在るを說く。
第三段　他の種樹の能く及ばざるを說く。
第四段　官理も亦種樹に類するあるをいふ。
第五段　官理の眞を得て官戒と爲す由をいふ。

沈德潛曰く「樹ヲ養フヲ問ヒテ、人ヲ養フ術ヲ得タリ、古ノ帝王爲ニ詩ヲ所以ナリ」と。井弗元許す「此ノ篇ト梓人傳ト、(ママ)相表裏之ノ杓治傳ニ似タリ」と。

(一)　賣花翁

本課の文に因み、專門の學業に精しくとも、生計に損きは、宜しく減むべきことを知らしめ、廣く常識を修め、自己の生活を完全ならしむべきを覺らしむべし。

阪井葆　字は公實、通稱は百太郎。虎山又は臥虎と號す。廣島藩儒なり。尤も文章を善くす。賴山陽の長子聿庵と親善あり。嘉永三年卒す、年五十三。編著未だ其の文集を手

にせず。但し借月性編する所の今世名家文鈔には、其の傑作三十九篇を載せたり。

【洛陽】京都。支那の洛陽城に比したるなり。

【一家法】自家獨得の方法。

【眞且行】ふれ歩きて賣る。卽ち呼び賣りをしながら行くなり。

【補綴不レ抵一壜直】補ち補つる程花を撒ひて賣り歩きても得る所の金は少く、一壜の酒の價にすら當らざるなり。抵は當るなり、直は價なり。

【不レ須二獨爲一此翁一憐】獨り此の翁の爲に同情するを要せずとなり。

【蓄婦無レ衣匠家漏】蓄を飼ふ婦女は、絹を着る能はずして、却つて他人が之を着るとなり。又大工は他人の家を造れども、己が家の雨漏るを修理する能はざるに非ずやとなり。

【老圃人老草野間】園家を經綸する有爲の才を懷抱しても、不遇にして草澤ところに老死するもの多きは、いといと惜しむべしと。此の詩、要旨にいへるが如く、世の生計に損き徒を戒めたるものなれども、虎山の感慨は、此の一句に在るが如し。

「東」・「蓄」は上聲一東の韻。「十」は入聲十四緝、「法」は三十七洽共通。「生」・「行」は下平八庚の韻。「息」・「直」・「色」は入聲十三職の韻。但し直は上聲四寘の韻なれど通用せり。「然」は下平一先。「憐」は上聲十一軫。「間」は同十五刪の韻共通。

(二)　草木園山野之物

奇花異草が徒らに花賣りの利益と爲るに託し、人間亦判斷の拘束する所と爲りて、其の天を沒し其の行を汚すものあるを言ふ。但、新の章言ふ所頗る高尙、中學五年生にては解し難からむか。宜しく前の郭橐駝傳と參看せしむべし。

【得二此所一】其の物の當に居るべき場所に居るを言ふ。

【花匠】花屋。

【金錢】人の貴する金錢。

【於二花匠一爲レ幸】花屋に在りては、利益を得て幸福と爲すとなり。

【人事未就類レ此】解釋を要せじ。此れ新の章の主腦たり。生命たり。一言、唯此れを言はむとして新の章を作れるなり。

二八　雜說

前臺山曰く、此の篇の主意、英雄卓傑必ず己を知る者に遇ひ、之を拳ぶに高爵を以てし、之を食ふに厚祿を以てし、之に任ずるに重權を以てして、其の材幹に以て展布すべしと。是れ一篇の大旨なり。蓋し韓意は時に自己の不遇を歎ずるなり。

【雜說】　雜說とは、說に屬する文、種種之れ有り、其の文小品なるが故に、特に名を題するの要なし。因りて合稱して雜說と曰へるなり。本集には雜說數首と有り。文章軌範には其の二を取れり。ここには馬說を出せり。

【世有二伯樂一然後有二千里馬一】「伯樂」は、秦の穆公の時の人、姓は孫、名は陽。伯樂は本と天帝星の旁らに在る星の名なり。孫陽が善く馬を相するを以て、人之を伯樂と稱せしなり。戰國策、楚策に、伯樂嘗て虞坂を過ぎしに、駿驥ありて鹽車の下に伏す。馬、伯樂を見て長鳴す。伯樂車を下りて之が爲に泣けりと云ふ。以て其の善く馬を識りしを知るべし。この文、伯樂を以て人材を識るの意天子、宰相に喩ふ。「千里馬」は一日に千里を走るの駿馬。人材に喩ふ。荀子、修身篇に「駿馬一日而千里」と。駿は千里の馬をいふ。世に善く馬の良否を見分くる伯樂といふものありて、然る後、千里の馬ありとの意。此の一句一篇の生命。「然後」の接續詞甚だ重し。注意すべし。

【奴隸人】　賤者なり、しもべなり。說文に「奴給古之罪人」とあり。韓は左傳、襄公五年「皁隸之事」の註に「士臣皁、皁臣輿、輿臣隸」とありて、卽ち賤者をいふ。

【駢死】　駢馬と首を並べて死するをいふ。文章軌範註に「駢者併也。言與二凡馬一俱死一也」

【槽櫪】　槽は食器、「カヒヲケ」なり。櫪は厩の踏み板なり。

【馬之千里者一食或盡二粟一石一】　馬の中にて、一日千里の能ある者は、一回の食事に粟一石を食ひ盡すとなり。文章軌範註に「此謂二英雄譬喩、能立二大事一成二大功一者必得二尊位重祿一斯可二以展布一也」とあり。

【食レ馬】　馬を養ふなり。豐島洞雪曰く「食養也。與二孟子萬章篇食レ牛以養二犧牲一之食字一同」と。

【且欲下與二常馬一等不レ可レ得】　且つ新規に、馬を飼ひては、常の馬と同一の働きをせしめむとするも得べからずとなり。縱令如何程の俊才ありても、厚祿も重權も與へずんば、豈に材を展ぶる能はざるのみならず、反つて常材にも及ばざるを言ふ。

【策レ之不レ以二其道一】　二つの之は、馬を指す。人が馬を鞭ち、馬を養ふなり。

【鳴レ之】　之は人を指す。馬が人に對して鳴くこと。中井履軒曰く、「鳴レ之以喩二訴レ厩告レ餒之事一也」と。此の解中れり。

【執レ策而臨レ之曰、天下無二良馬一】　叔孫人、策を執りて、馬を臨視して、只今天下に良馬は無しと歎ぜりとの意。豐島洞雪曰く「執レ策句、斷然携二暗宰相睨寇正展論一天下一歎二天下無二人材一不レ知二眼前有二人材一之形容。筆力有レ神」と。評し得て痛快。

【嗚呼其眞無レ馬邪、其眞不レ識レ馬也】　さてもさても其れ眞實に良馬無きか、それ眞實に良馬を識らざるかとなり。中井履軒曰く、「結得有レ力」と。也は、邪に同じ。邪也の二字、古、兩句並べ用ふる者多し。實際鑑定之を論ずること詳かなり。其の說頗に渉れば擧げず。

「世有二伯樂一」より「不レ以二千里一稱レ也」までを第一大段とす。蓋天子、宰相ありて、然る後始めて賢材世に見はるるに喩ふ。

「馬之千里者、一食或盡二粟一石一」より「安求二其能千里一也」までを第二大段とす。賢材を任用するには、必ず高位重祿を以

てすべし。然らずんば其の材能を展ばす能はざるの意に喩ふ。

【策レ之不レ以二其道一】　より結末までを第三大段とす。凡相賢材を用ひず、用ふと雖も其の材を展ばさしむる能はず、其の材を展ばさざるを見て、天下賢材無しと歎息す。此れ賢材無きに非ず、賢材を知らざるのみとの意を言ふ。結末「嗚呼其眞無レ馬邪、其眞不レ識レ馬也」の二句無限の感慨を不了語に寓す。妙言ふ可からず。

(イ)不二常有一。
(ロ)(ハ)常不レ有。
(イ)は無き時もあり、有る時もある意。「常ニハ」と訓む時は此の意明瞭なり。
(ロ)は何時も無きなり、終始無きなり。二つの區別、打消の不の字の位置に因りて知るべし。

備員人曰く「滿濟機經、言之確然。浦二田曰一く「全注二意伯樂一對二短馭者一說レ愼。只起句正說。通身是慨、氣自蒼然。

(一)　附二驥尾一　展二驥足一

前者は、蒼蠅が、驥尾に附きて千里に進する意。後進の士が

先輩に問りて名を成すに喩ふ。後漢書、龍景傳に「帝嘗以二手書一曰、蒼鵬之飛、不レ過二數歩一。即託二景尾一得以遠挙。時、張敏書曰、蒼鵬之飛、不レ過二十歩一。自託二鉄驥之尾一、乃騰二千里之路一。」

後者は、秀傑の士が、十分に其の才を発揮するに喩ふ。蜀志、龍襄傳に「吳將魯肅遣二先主書一曰、龍士元非二百里才一也。使レ處二治中別駕之任一、始レ當二其驥足一耳」

(二)　驥一日而千里、駑馬十駕、則亦及レ之矣。

驥驥之妻也、駑馬先レ之。

前者は、愚者も勉強して倦まずんば、其の成功、賢者に劣らざるを言ふ。荀子、勧學篇に在り。

後者は、鉄驥（驥同類に、駿に作れり）は千里の馬なり。千里の馬も老衰すれば、駑馬が卻つて之に先んずるなり。人、少壮の時は、智慧もあり、精力もあれども、老衰すれば、智慧も精力も日に月に減じて彼に立たぬに喩ふ。戦國策に「驥驥之衰也、駑馬先レ之、夫賢之倦也、女子勝レ之」とあり。

二九　送二温處士赴一河陽軍一序

韓愈

【題意】　新の文は、大夫烏公數ミ東都の賢士を拔擢する所より工夫を起し、馬ありと雖も、良馬無くんば馬無しと斷じ、人ありと雖も賢者無くんば人無しと斷ずるを以て要旨と爲す。「大夫烏公一鎮二河陽一前東都處士之區無レ人焉」の一句、一篇の生命たり主脳たり。

【温處士】　名は適、字は貽典、洛陽の人。孝行あり。徳宗其の名聲を聞き、將に用ひて諫官と爲さむとせしが果さず。野に在ること多年。烏重胤（文中に在る烏公）の河陽を鎮するや、召して之を幕下に置く。新の文は、適が將に幕下に赴かむとするを送るの文なり。詳細を知らむと欲せば、唐書、列傳第十六を參看すべし。

【伯樂一過二冀北之野一而馬羣遂空】　伯樂は、古の馬の良否を善く知りし人。冀北は馬の産地にして、左傳、昭公四年に「冀之北土、馬之所レ生。」會笺に冀北出二良馬一。故良馬因謂二之驥一。」とあり。

【石生】　石洪なり。生は先生を略していへるなり。史書この傳多し。

【以二鉄鎖一鎖二河陽一】　河陽軍の節度使と爲りしをいふ。鉄鎖は其の野の馬の羣は、伯樂に取られて、遂に空しくなりぬと。

【多二於天下一】　天下中一番多しとなり。

【解レ之】　起手の馬羣遂空の語を解釋すること。

【冀北無レ馬】　傳聞を裏せじ。此の句古雋、味ふべし。

【無レ馬無レ馬、不レ復二識一レ馬】　虚語は空言の意。諺語にて、「ウソ」又は偽りと譯すれども、當らず。韓山陽この二句を評して曰く、「此等平淡、明人絶無」と。

【東都固士大夫之冀北也】　東都は河南省洛陽を指す。東都は、士大夫の多く居る處にして、馬の冀北に於けるが如しとなり。山陽この一句を評して曰く、「以下不二復說一二馬字一。是文品。」と。又曰く、「一句全體還依舊、警覚在レ此」と。

【特二才能一深藏而不レ市】　自己の才能を愛重し、深く身を藏して、世に市らざること。不レ市とは、聞達を求めざるに喩ふ。此の語は、練習、老子傳の語より脱胎したるなるべし。

【洛之北涯】　洛水の北のほとりといふこと。洛陽の名は洛水の北に在るよりして起るなり。

【石生】　石洪なり。生は先生を略していへるなり。史書この傳多し。

「嗚呼。邦伯師長、百執事之人」

【二縣之大夫】　大夫は汎く官吏を指す。他は頭註を参看せよ。

【後事】　政は國政、事は汎く行ふ處の常事を指す。論語、子路篇「子曰、何晏也」の朱註には、事を家事と解したれど、ここは家事にてはせまきが如し。

【暨】　語るなり、問ふなり。

【蒼黎】　官を去りて閭巷に居ること。蒼は禮源に「里中道也、直曰レ街、曲曰レ巷。今謂二大者一曰レ街、小者曰レ巷」とあり。

【小子後生】　年少後進の徒。

【徳】　道德。

【業】　事業。

【搢紳】　顯官や貴族をいふ。搢は挿なり。紳は大帯なり。禮源に「謂レ插二笏帯一間一也。古之仕者、垂レ紳搢レ笏。故稱二官族一曰二搢紳一。」とあり。搢又縉に作り、又縉に作る。意同じ。

【集レ所レ聞二於其廬一】　都を過ぐる者、道處士の廬を訪うて聴する所無からむとなり。

【若レ是而罷曰、大夫烏公一鎮二河陽一前東都處士之廬無レ人焉、豈不可也】　斯くなりし上は、罷して大夫烏公一たび河陽を鎮めて、東都處士の廬に人無しと曰ふも、何うして不可ならむや、決して不可に非ずとなり。此の句一篇の生命たり主腦たり。

り。而して却道「馬棄疲芻」の句に應じて、一大牧東（起首より此に至るまで）を結ぶ。筆力萬鈞。

【南面而聽二天下一】　以下、更に一歩を進めて言ふ。天子と雖りて天下の政治を聽きさばくこと。南面は天子政治を聽くの位をいふ。易經、繫辭傳に「子曰、聖人南面而聽二天下一、嚮レ明而治」諸暗、蓋也當に「子曰、聖也可レ使二南面一」とあり。

【託レ重】　重き國事を託すること。卽ち相をいふ。

【恃レ力】　其の武力を恃みとするなり。卽ち將をいふ。

【相將】　相は宰相、天子を相けて政を行ふ。將は將軍なり。外に出でて敵國又は不軌の徒を征伐す。

【領廷】　政治を執る所。禮源に「雲翔、臣下面レ君曰レ朝。朝廷卽二君子受レ朝之所一。而全國之要事、皆自レ此出。故沿用爲二代二表政府一之稱一。」とあり。

【倉廩二於菽一】　倉は穀粟之の名。廩は「ツナグ」なり。繩を以て牛馬を繋りつなぐこと。斯の文馬の喩を以て作れり。されば此の字と換あり。ここは、倉は、此の河南の令といふ役に東縛せらるること。

【實】　「タスケ」「モトヅク」等の意よりた「藉る意に用ひたり。

【有力者】　權力者。

【掌門】　管門をいふ。古、行軍の時、兩旌を樹てて門となせり。

【前所レ聞】　「夫南面」より「不レ可レ得也」までを指す。

【後所レ聞】　「意歟二於茲一」より「無レ介二然於懷一耶」までを指す。

【敎二私祭於豊取一】　轗軻は擧敷せる人物を屢く取られ、私に祭み居れりとの意を烏公に傳言し見れよとなり。私祭の字、上の「爲二有力者一奪レ之」の句に應じて妙。

【留守相公】　郭汾陽なり。舊唐書、肅宗紀に「貞元十四年七月、郭汾陽爲二中書侍郎同中書門下平章事一。」とあり。されば相公といふなり。

【四韻終】　長篇四段に作り、韻を四次易ふるもの。

【推二其意一】　相公の詩の意を推し伸べての意。

起首より「不レ爲二虚語一矣」までを第一大段とす。警喩を設けて、斯の文の材料と爲す。巧緻。

「東都固士大夫之冥北也」より「豈不可也」までを第二大段とす。第一大段の警喩を承けて本題に入り、以て主意を說く。

「夫南面而聽二天下一」より結末までを第三大段とす。豪言兩意を抒べて送別の情を見はし、以て全篇を結ぶ。十二分の筆力。

蘇老山曰く「文有二氣力一、若二先秦一。眞德秀穿、讀レ之快二人意一。可レ以發二人才思一。」と。

良貴深讀若し嗟、君子嗟嘆、容貌如し是。

大なる詩人は、貨物を店さきに置かず、奥深く蔵して何物も無きが如く、君子は、盛徳あれども、毫も之を外に見はさず、一見すれば其の容貌愚なるが如しとなり。史記、老子傳に在り。老子の語。

【三歎天下莫能之士】至者前後千數。

「歎譽」はおほめみと、こめみとなり。轉じてすべてをくるめ取ること。天下莫能の士をくるめ取りしかば、至るもの前後千数人なりとの意。漢書、王莽傳中に在り。

三〇 祭十二郎文

韓文中最も有名なる祭十二郎文を挙く。文公壮年にして、当愛の情を盡す能はず、遂に之をして死に至らしむ。而も南征惟一身、死時相聞知せず、喪葬き葬初の情景以て想ふべし。故に着丁寧反覆、筆毫をして其の側側たる情意皆を到すを味はしめ、且つ讀方に留意せしめよ。

【十二郎】韓愈の兄の會は子なし、弟介の子老成を以て後となす。十二郎これなり。「十二」は、同族間の輩行が第十二位に當るを言ふ。輩行とは、前輩後輩の順序なり。

【祭文】文體明辨に「按ずるに、祭文は親友を祭奠するの辭なり。古の祭記は、告饗に止まるのみ。中世より以還、乗ねて言行を讃して以て哀傷の意を寓す。蓋し誄文の變なり」と。

【季父】季は伯仲叔季の季。一番少きをぢなり。

【閏三月庚子之七日】計に接して七日目をいふ。報ずる所の月日符合せざるを以て、其の實を審かにせんと欲す。故に遥遥此くの如きなり。

【時羞之奠】其の時季の食物を靈前に供へ祭ること。「羞」は食物なり。「奠」は神を祭りて酒醴を靈前に据うることより、一般に物を神前に供へ陳ぬるに云ふ。

【少孤】幼童三歳、父仲卿を喪す。裏註を見よ。

【不レ省】不見なり。省み世話すらなり。又親の顔を知らぬなりとするあり。

【所怙】父母をいふ。詩經、小雅蓼莪篇に「無レ父何怙、無レ母何恃。出則銜レ恤、入則靡レ至」に出づ。成語考に「自ら父の死をいひて怙を失ふといひ、母の死を恃を失ふといふ。父母俱に死するを怙恃を失ふといふ」。上に「少孤」とあり、次に「惟兄嫂是依」とあり。然らば、「及レ長不レ省二所怙一」は、母に別れたるをいふなるべし。

【兄嫂】伯兄の會及び嫂鄭夫人をいふ。韓愈代宗の大暦三年に生れ、三歳にして孤となる。伯兄會が嶺表に貶せらるるに隨ふ。會卒して嫂鄭氏獨り之を撫育す。

【中年兄弟二南方一云云】中年は、四十歳前後をいふ。晉書、王羲之傳に「中年以來傷二於哀樂一」又、一年を隔つるを言ふ。嫂記、學記に「比年入レ學、中年考レ校」ここは後の義なり。大暦十三年、韓居舍人轉會、元載の事に坐して南方韶州の刺史に貶せらる。公時に年十一、從つて移る。會卒す。嫂と共に柩を携へて北歸、會を河陽に葬る。建中貞元の間、又地を江南

に遂く。

【置丁孤苦】 おちぶれ孤立して困難するをいふ。又遊行の説。又失ヒ志説。仲行に同じ。置者、李善傳に「――――、置ニ於成立ニ」

【三兄】 會と介と弁となり。弁の位地、未だ明かならず。

【兩世一身】 兩世は、二代、一身は各々一人の義。前代は舅舅、後代は十二郎あるのみを言ふ。世は父子相承くるをいふ。

【形單影隻】 單隻共に一個無對の義、卽ち孤立にて身寄のなきこと。

【韓氏兩世、惟此兩已】 韓氏の二代の間に唯此の二人あるのみとの意。

【未知ニ其言之眞ニ也】 幼少ゆゑ彼の言葉を餘り眞しきこととは思知せざりきとなり。

【置ヒ汝】 汝を見棄ひたりの意。

【歸ヒ歸取ニ其孥ニ】 歸りて其の妻子を伴ない來らむことを請ひぬとの意。

【佐ニ武徐州ニ】 徐州の幕府に佐官と爲りしこと。職莊を老看せよ。

【取ヒ汝者】 汝を迎ふる者。

【吾又誰望ニ】 吾又誰を頼めて去りぬとなり。

【東本客也。不ヒ可ニ以久ニ】 東は徐州汴等を斥す。余の汴州・徐州に在るや、心汝の來るを欲せしが、汴徐亦客遊の地にして、久しく住むべからず。故に迎へざりきとなり。

【四歳】 治讀に歸るをいふ。

【歸ニ戻ヒ家前教ヒ汝】 故郷に家を構へて汝を招き寄せむとせりとの意。

【斗斛之祿】 一斗一斛の祿の義、卽ち僅かの俸祿。

【高梁之六相】 高梁は天子なり。古、天子は、兵車一萬乘を出すの直轄地を有せり。因つて轉じて天子の義とす。「公相」は、「三公宰相」の約。宋史、王旦傳に「此兒當ヒ至ニ公相ニ」

【不ニ以一日輟ヒ汝而就ニ也】 一日も汝を置き離して仕官せざるなりとの義。

【孟東野】 唐唐書、孟郊傳に「孟郊者少隱ニ於嵩山ニ、稱ニ處士ニ。李觀分ニ司洛中ニ、與ヒ之遊。觀ニ於當今ニ稱ニ許與ニ甚佐ニ。性孤僻寡ヒ合。觀拿一見以爲ニ忘形之契ニ。常稱ニ其字ニ曰ニ東野ニ。與ヒ之唱ニ和於文酒之間ニ。」とあり。卷四の一八課「遊子吟」の作者の條に此の人の事跡を説けり。參看のこと。

【吾書與ヒ汝】 去年孟東野其の地に往きし時、吾は書信を汝に與へたりとなり。「書與ヒ汝」は、「與ニ書於汝ニ」の意なれとも、書の字を强めむとして、與の上に置けるなり。

【親花花】 廣遠の説。左傳、哀公四年に「花花爲師、食爲ニ九州ニ」又莞勞の説。孟子、公孫丑上篇に「花花然驚」ここは勞力の勞りてぼんやりすること。

【望ニ其來ニ】 望が赤白くなること。老ゆることを「來」は黒髪の白に化せんとして先づ赤白くきたなくなるをいふ。

【諸父】 父の兄弟、卽ち伯仲叔季父をいふ。說苑、小雅に「既有ニ配妻一以遠ニ諸父ニ」

【吾ニ且暮死前汝指ニ無ヒ歸之處一也】 僅かの間に歸家が死して生前會見せず、十二郎のかぎりなき悲歎をいだくを恐る、故に早く汝よりして來るべしといひやりきとなり。「旦暮死」は、死の近きをいふ。旦に死なずんば、暮には死ぬべしとの意。

【其信然邪其夢兆之非ニ其眞ニ邪】 十二郎の死は、眞か、夢か、或は誤り傳へたるか、如何しても已には其の死を信ぜられずとなり。林西仲曰く、「承ニ上文ニ作ニ疑詞ニ不定語ニ結ニ其。」と。

【信也】 「信ナリトセバ」と訓むべし。

【成鼎而夭ニ其嗣ニ子】 吾が兄の德義、神明の冥必ず其の子孫に幸福災禍を與ふる告なり、其の鼎鼎の若死を救す道理なしとなり。

【不ヒ克ヒ蒙ニ其賜ニ子】 汝十二郎のまじりなき賢明の質にして、

父の遺德の殘せる惠澤を蒙る能はざる告なしとなり。

【夢也傳之非ニ其眞一也】 「夢ナリトシ、之ヲ傳フルコト其ノ眞ニ非ズトセバ」と訓すべし。

【東野之書耿書之報何爲而在ニ吾側一也】 夢、又は誤報とせば、東野及び耿書の手紙、何故に吾が手許にあるか。して見れば、夢にもあらじ、誤報にもあらじとなり。耿書は十二郎の侍女。

【嗚呼其信然矣】 ここ俳諧を要せじ。此の句より以下數文字を連用し、前の子の字、耶の字と相應じ、悽惋極りなし。宜しく注意すべし。

【業ニ其家ニ】 業は繼ぐなり。

【所ヒ謂天者誣歟抑與ニ云云】 實明は鳴を受け又夭死すとすれば、上帝の意は誠に測り難く、神の所爲は誠に明かにし難きなり。書はゆる眞理は推量すべからず。壽命は人智を以て知るべからずとの意。

【脩何不ニ從ヒ汝前死ニ也】 吾が血氣志氣日に衰ふ、汝に從ひて死せざるもの幾何もなし。間もなく後を追ひて死すべしとなり。

【死有ヒ知云云】 死して靈魂が知る作用あらば、冥土にて進ふを得る故、汝と我とは離れて居ること幾何もなきなり。卽ち僅かの間に必ず遇ひて樂しまんとなり。

【其妻の知云云】死して靈魂知る作用なくんば、生別死別の差は來の間にして、差もなき未來は窮りなき譯なりとなり。

【猶還者又可ㇾ會二其成立一耶】二三歳の幼兒も、其の成人になるを企望することは能はざるべしとなり。吾が子、汝が子、亦能く成人すべきかは計り知るべからず。さても悲しき取締苦勞の多きこと哉。終に吾が家は斷絶すべきかと歎ずるなり。成立は成人することをいふ。文選の註に「能曰、成立謂二二十成立一也」。會註註を參看せよ。

【歎御病】御氣病。

【東野云、汝覆、以二六月二日一】東野は、汝は六月二日に覆せしといへりとの意。此の下に、其の誤謬や給するを要せすの語を入れて解すべし。

【不ㇾ知ㇾ書ㇾ日月一】死覆の日月を記すべきを省略かざりしならむとの意。

【東野奧二吾書一、乃問二使者一、使者去歸以聞ㇾ之耳】東野、吾に書簡を出す時、使者に月日を問ひたるに、使者は書い加減の事を言ひて之に應じたるならむとの意。

【吾使ㇾ建中祭ㇾ汝、弔二汝之孤奧一汝之乳母一。】吾れ建中を使として汝を祭り、汝の孤兒と汝の乳母とを慰問せしむとなり。弔は慰問すること。

【彼有ㇾ食】彼は十二郎の遺孤と乳母とを指す。「有ㇾ食」は、遺産有るをいふ。以下「其所ㇾ願」までは、建中に命ずる詞なり。

【守以終ㇾ喪】喪を守り、服喪の期間を彼の地に終へしむる意。

【取以來】十二郎の遺族を連れ歸れとなり。乳母も此の中に入る。

【吾力能改葬】吾が實力、能く汝を改葬し得ばの意。

【先人之兆】祖先代代の墓域。先人は亡父、兆は墓域。墓界。

孝經に「卜二其宅兆一」

【惟其所ㇾ願】二說あり。一は、其は奴婢を指す。奴婢は其の希望のままに行動せしめむと解す。一は斯くしてこそ(使二建中一祭ㇾ汝より終葬二汝於先人之兆一までの事を行うてこその意)吾が(其の字、吾を指す。)願の通りなる可けれと解す。何れにても通すれども、姑く前說に從はむとす。

【飯】棺に納むるをいふ。大斂小斂をいふ。大斂は浴せしめて以て死身を清むるをいひ、小斂は經絡を著けしむるをいふ。

【不ㇾ憑二其棺一】其の棺に近寄らずとの意。

【窆】棺を擴(クワフ)に葬り下すをいふ。

【天之涯地之角】天のはて地のすみに在るが如く、遠く相隔つるをいふ。徐陵の詩に「天涯舊識、地角故人」

【生前影云云】生ける時は汝の影吾が形と相依り親しむを得す。死しては、汝の魂吾が夢と交感なしとなり。因緣の薄きをいふ。

【吾實痛之】新く傷ましめたるは、實に吾にして、他人の罪に非ずとなり。

【蒼天蒼天、曷其有ㇾ極】天我を憐みざる義。蒼天は悠遠極りなし、仰いで天に訴ふれども、天答へず、唯、悲たり、悠たり、無情なる哉との意。又蒼天の限りなきが如く我が憂の盡きざるに取るも亦還す。詩經、巷伯、黃鳥篇に「彼蒼者天、殲二我良人一。如何ㇾ新兮、人百二其身一。」

【歲領之田】一頃は田百畝の稱。歲頃は其の四五倍の意なるべし。

【伊川】伊川と洛川。河南省に在り。

【言有ㇾ教前情不ㇾ可ㇾ說】言は限りあれども、情は盡し難しとなり。補二田云く「情不ㇾ可ㇾ說四字、包二全神一」と。

【食糧】神靈希はくは納受あれとの義。

【惟兄使是依】側妻なることに注意せしめ、兄嫂の字を重むる爲なることを知らしむべし。

本文押註參照。

熟語の本づく所を知らしむ。

比雅清云く「直學二詞章一、情理文也、是作文體說、亦是作文題目」。○新文義時、大體以來、無二不ㇾ用ㇾ諺者一。此以二說話一行之。故用二俚諺一。

眞山勝云く「此文古今所ㇾ稱」。而余不二敢以爲一ㇾ然」。以其叙二其大槪一、反不ㇾ見二其條一也」

大槪といひ、不ㇾ見二其條一といふは、洵に失せり。大槪の評は、反つて山陽の事蹟圖卷記に中れり。

靑谷直文集に祭十二郎文の譯文あり。試いて敎授の資とせられたし。

直文は三島中洲・內藤耻叟に漢文を學び、(耻叟には、國文詞史をも聞へり。)青年時代には漢文・漢詩なども作りしことあり。今の文士か西洋文學の素養のみありて、毫も漢文の力なきものと日を同じうして語るべからず。

三一　左遷王監關示姪孫湘

題意　前篇に接して、帰京の所信に関く、且つ感謝の念の厚かりしを知らしむべし。

語釈　【左遷】官職を降すこと。支那は、古は右を貴ぶ。其の秩を左に遷すは、官職を降さるること。【姪孫】明祢に「一一曰く兄弟之孫」と、「タニマゴ」なり。湘は即ち十二郎の子。字は北渚、進士に第し、官大理寺丞に至る。【九重天】天子の居城を尽す。王城の門の九重に作られたるよりいふ。楚辞九辯に「豈不二曖曖而日遠一兮。衆之門以二九重一」【潮州】今の廣東省潮州府潮陽縣。【藍關】夫に潮州に至る途中の地名。藍關は藍嶺山脈にはあらず。【瘴江】支那南方熱帯の氣深き所なれば、此の行は、とても生命を全くすることは出來ざるべし。されば、死したる後は、幸に吾の骨を瘴江の邊に、收めて埋めくれよ。これぞ汝に遺嘱しおくことなると。嗚呼公の誠忠此の如し。是れ其の詩文の、萬古に照曜する所以なり、世敬仰せざるべけんや。

「天」と「千」と「年」と「雪」と「滅」は下本一先の韻。

評釈　本篇は、一朝佛骨を論じたる表を九重の天闕、即ち朝廷に上りたる所、其の夕方には、八千里の遠方なる潮州に貶謫せられたり。三四の句、言ふは、盛明なる朝廷の爲に、佛骨を宮中に入るるなどの弊事を除き去らんと思ひて爲したることなれば、敢て此の衰へ朽ちたる身を以て、生ひ先き短き殘年を惜しむことをなさんや。即ち命は、固より主上にさし出ししものなりと、自己平生の決心を說き出したり。五六の句は、其の藍關にて見たる狀景を寫し出せり。言ふは、遙かに望めば、雪は秦嶺に横はり、さへぎりて、我が家は、何れの方にあるか、判らず、又近く藍關には、雪がふりつもり、關門を閉ぢ籠める故に、我が馬もすすみ得ざるなり。かかる艱險なる光景の中にありて、後を思ひ此を想へばただ感慨の情に忍へざるなり。七八の句に至り、本題の、姪孫に示せる正旨に說き入りて、言ふは汝湘よ、はるゝ〳〵我に就きここまで從ひ來れるは、定めて深意あることなるべし。吾は、もはや老年のこと、且つ潮州は、南方瘴氣の氣深き所なれば、此の行は、とても生命を全くすることは出來ざるべし。されば、死したる後は、幸に吾の骨を瘴江の邊に、收めて埋めくれよ。これぞ汝に遺嘱しおくことなると。嗚呼公の誠忠此の如し。是れ其の詩文の、萬古に照曜する所以なり、世敬仰せざるべ

評釈　幸先地日く「佛骨ノ一表千古ニ炳ス。而レドモ其ノ詩之ニ記ス。尤モ妙ナルハ許大ノ題目ニシテ、數字ヲ下スルニ在リ」と。

三二　與元微之書

白居易　字は樂天、唐の太原の人。元和の進士にして左拾遺に遷りしが、事を言ふを以て江州司馬に貶せらる。欣然として日く、臣慮念に在ること久し。今嵐月の主人と爲るを得たるは、何等の幸ぞやと。憲宗の初、知制誥より出でて杭蘇二州の刺史を經、刑部尚書に至り、遂に致仕す。年七十五。右僕射を贈られ、文と號す。晩年意を詩酒に放にし、其の東都に在るや、沼を疏して池を種ゑ、酔吟先生と稱し、又香山に居りし時、香山先生と號す。其の友元稹と歡苦しく、唱和絶ゆる時なし。其の詩麗悟平易を主とし、一篇成る毎に必ず其の家の老嫗をして之を讀ましめ、解すれば則ち之を錄し、解せずんば則ち之を易へたりと云ふ。其の作る所、長恨歌・琵琶行、最も人口に膾炙す。曾白氏文集に收む。本傳は文集卷四十五に在り。

中唐の大詩人白樂天の、其の親友に對する眷眷の至情と、俗謠を脫して悠然山水に放浪する高風とを味はしめ、以て人格向上の資に供せしむ。

【元微之】　名は稹、字は微之、河南の人。元和の初、對策第一に擧げられ、左拾遺に拜せしが、事を言ふを以て忌まれ、出でて河南尉と爲る。後又入りて監察御史と爲り、直言停らず。讒せられて江陵の參軍と爲る。長慶中、知制誥に擢んでられ、會昌元年に卒す。喜んで詩を賦し、白樂天と名を齊うし、世に元白と並稱す。其の詩の平易にして解し易きこと樂天と似たり。其の樂天に先もて、鄂に死するや、樂天之を哭して慟せり。會註註を參看せられよ。

【四月十日夜】　元和十年より十二年の間ならむ。恐らくは十二年なるべし。

【白】　「申ス」と訓む。玉篇に「告語也」正字通には「下告ゲ上曰ニ稟白一同輩述ル事陳ル義、亦曰ル白」とあり。

【差勝】　相離れて久しく音信なきなり。勝は疎遠なり。

【膠漆之心】　交誼の堅きこと、膠の如く漆の如く、決して相離れざるを言ふ。史記、蔡澤傳に「奚ニ有ン道之士ニ爲ニ膠漆一」

【胡越之身】　胡に北に在り、越は南に在りて相去ること遠し。因りて二人遠く相離るるに用ふ。

【幸擧垂憐】　幸擧は兩人の心の相引くこと。上文の「膠漆之心」に應ず。垂憐は兩身の相離るること。上文の「胡越之身」に應ず。

【白首】　白髪の頭。年老ゆること。

【謫居】　江西省九江縣の治。樂天、江州の司馬に貶せられて、ここに在りしなり。

【潯陽客】　白居易の友人。されど偉未だ明かならず。

【一札】　札は書簡。

【交分】　交際。

【死生】　懷は憂ふるなり。危ぶみ憂ふること。瀕死の重病をいふ。

【封題】　封じて其の上に要件の文字を記すをいふ。

【白二十二郎】　白樂天のこと。二十二郎は排行なり。元稹は元九といひ、其の排行は九なり。排行とは、兄弟を年齡の順序を以て排列して、某一、某二、某三と呼ぶなり。

【代書】　書簡に代へひとの意。

【左降】　左遷に同じ。古、右を貴重す。故に官職をおとすを左遷又は左降といふ。

【道侶棄捐・拍影僧牀】　僧侶は、火光落きて定まらざる能。消え滅りし後火は、始も動ちず、其の光はちらちら落きて定まらずとなり。

【坐厭聞思・九江】　此の物哀しき夜、吾は君が九江郡の司馬に左遷せられて出資せらるると聞きぬ。

【垂死病中強坐起】　吾は久しく病褥に臥して、今や死になりなんとして、身動きすら不自由なるに、此の報に接して、覺得の餘、覺えず起き上つて坐りぬ。

【朝朝吹ル雨入ル衰鬢ニ】　折ふし何處よりともなく、雨を帶びたる風、衰き鬢に吹き込み、物すごくして堪へられずとなり。樂天、此の詩を讀みて「此句使人愈不ル可ル聞。況使心哉」といへる譯にさもありぬべし。平聲江韻。

【側側】　傷痛なり。

【且】　「シバラク」と訓むべし。

【近侯】　近頃の意味。

【形骸】　身體のこと。

【方寸】　心のこと。列子、仲尼篇に「嘻、吾見ニ子之心一矣。方寸之地虛矣。勉聖人他」

【徐州】　今の江蘇省銅山縣の治。

【院】　寺のこと。

【提挈】　相扶持するなり。史記、張耳陳餘傳に「祝以ニ兩綬一左挈ニ右臂一」

【相府・李令尊】　頃は「コノゴロ」と訓む。近頃心にかけて憂慮したりし者の意。上文の「孤小弟妹六七人」を指す。

【瘴癘】　南方濕氣の地に起る流行病。

【鮑溶故鄉】 鮑は姓の佳字。溶は水純。鮑は姓なり。

【廬阜】 廬湖に産する魚のこと。廬湖は、廬口、又は湓江といひ、九江縣の西に在り、樂天の居に近し。

【江湖】 江州謫す所の湖。江州は九江縣にして、即ち潯陽の地。

【北地】 京師のこと。貶せられて南方に在る故、京師を指して北方といふ。

【門内之口】 宗族の人員。

【司馬】 官州一人あり。事を掌る。州の官吏は刺史一人（從三品）、別駕一人（從四品下）、長史一人（從五品上）、司馬一人（從五品下）にして、司馬は位卑く、俸祿も少なかりしなり。

【求ル人】 人に給與を求むるなり。

【廬山】 一に匡廬ともいひ、江西省の星子縣の西北、九江縣の南に位し、江西の名山。

【香爐峯】 廬山の北に在り、奇峯突出、狀香爐に似たるより、此の名あり。山下の瀑布、世に著はる。懷一に龍に作る。

【草堂】 茅屋と同じ。隱居自適の庵をいふ。白樂天のこれ及び杜甫の浣花草堂、皆然り。

【修竹】 長き竹。

【石橋】 石橋の花の紅なるをいふ。

【羅生】 羅列して生ずること。

【潯陽】 地のみぎりをいふ。潯は湓浦なり、「イシダタミ」と訓む。

【曾往】 從前を伴なはず、獨り飄然と往くこと。莊子に「出入六合、遊二乎九州一、獨往獨來、是謂二獨有一。」

【曾ニ旬月一】 十日又は一月に亘ること。曾は「ワタル」と訓む。

【衰レ老】 年老ゆるをいふ。

【事況】 事の狀態。

【依憑】 依怙憑恃にすること。

【借レ手】 借は「マカス」なり。註疏に、「有二放任之意一。如二借レ口、借レ手。謂二任二其自由一、不レ加二限制一也」

【歌歌】 鳥又歌の小聲にて鳴くこと。註疏に「鳴二玉聲之歌歌一。」

【故人】 ふるき友人をいふ。白樂天の「對レ月憶二元九一」の詩に、「三五夜中新月色、二千里外故人心」

【曾然】 ちらりと見るなり、ちよつと見るなり。註莊を參看せよ。

【聞之】 名利の念や、其の他世俗種種のおもひを言へど、ここは、唯元稹を懷ふの情をいふ。但し「曾然聞之」の語、元稹の詩に「曾依麗人到二江館一」とあるを、取れるなるべし。

【前言】 前より述べる言葉。

【三韻】 六句の詩のこと。既句に押韻する故、三韻の詩は六句となる。

【金鑾殿】 翰林院の美稱。時、もと金鑾殿あり、肅宗以後、翰林院を金鑾殿の西に置きしより、遂に翰林院の美稱となりしなり。

【歌レ明天】 夜の明けむとして空のあかるくなるをいふ。白樂天の長恨歌に「歌吹是何歌、歌レ明天」

【今夜封レ書在二何處一】 書て翰林院に在りて、君に與ふる書を封じたるに、今夜書を封するは、其れ何處ぞとの意。

【廬山雨夜獨宿】 上句の「在二何處一」を承けて、廬山の寺宇の中、夜明方に燈火をかかげて此の書を封ずとなり。

【猿鳥聞歌歌】 後我二人の燈邊に唱へたるなり。上文の「山猿谷鳥哀鳴歌歌」を承く。

【人間相見是何年】 此の人間界に於いて、吾吾が面會するは、其れ何れの年ぞとの意。一結無限の情あり。

【白氏文集】 樂天の詩文を集めたるもの。七十一卷あり。我が平安朝時代盛んに流行し、我が國文學に及ぼし影響の大なることは言はずもがな。

三三　香爐峯下新卜山居草堂　初成。偶題二東壁一

訓読　昔課に因みて、白樂天山居の詩を出し、其の人品の高きを知らしむ。世の名利の途に奔走して、超然たる胸懐なきは、其の氣品の高逸なるを見るべし。さて已の分を守り心泰かに身寧ければ、是れ我が身の適歸する處にして、必ずしも都の長安のみが故郷といふには非ずと。但諺の「住めば都」と同じく、安住すべき故郷を主觀的に求めたるなり。香爐峯の句は、清少納言が枕を褰げて才名を博したるに因りて特に名高し。唐宋詩話の評に、「讀二絶怡一情、及二時行樂、遲暮之感、毫不レ挂レ懐。全是一閑真趣、流二露筆墨間一。」と。「心泰身寧是歸處」の一句の如きは、誠に名言にして、一生之を服膺するも可なり。

訓読　前日は高く昇り、眠も十分足れるに、誰起くるにものうくして、小閤の上に夜書を重ねて寒を怕れず。遺愛寺の鐘の音は、枕を欹てて聴き、香爐峯に讀れる雪は、簾をかかげて看る。さて此の匡廬は復た名を逃るるに適當の地にして、司馬の官は閑散なれば、餘生を遂るに宜しと、些の肚裏不平の氣なきは、其の氣品の高逸なるを見るべし。さて已の分を守り心泰かに身寧ければ、是れ我が身の適歸する處にして、必ずしも都の長安のみが故郷といふには非ずと。但諺の「住めば都」と同じく、安住すべき故郷を主觀的に求めたるなり。香爐峯の句は、清少納言が簾を褰げて才名を博したるに因りて特に名高し。唐宋詩話の評に、「讀二絶怡一情、及二時行樂、遲暮之感、毫不レ挂レ懐。全是一閑真趣、流二露筆墨間一。」と。「心泰身寧是歸處」の一句の如きは、誠に名言にして、一生之を服膺するも可なり。

【香爐峯】廬山の一峯。白樂天の草堂記に「匡廬の奇秀は、天下の山に甲たり。山北の峯を香爐峯といひ、峯北の寺を遺愛寺といふ云云」

【斜支】茅屋といはむが如し。多く隱士の居る處。帥は草の本字。

【簾】音「シヨウ」「モノウシ」と訓む。懶なり。

【匡廬】廬山の一名。周の時仙人匡裕この山に廬す。故にしかいふ。

【司馬】州の軍事を掌るの官。樂天時に江州司馬たり。

【都府】都も著くべき處。

三四　爲兄弑下獄上書

訓読　崔瑗　字は子由、涿郡と號す。兄弑と共に進士に登り、又同じく銅峯に擧じ、事を給する精確、能を修むる倜儻、兄と並び稱せらる。屢官して門下侍郎に至り、後宗改和二年卒す、年七十四。文定と諡す。唐宋八家の一。瑗の事蹟は卷三、「上二瑯琊呉太尉一書」にも出せり。

訓読　瑗の兄、弑(東坡)が、其の作りたる詩の爲に罪を獲、御史臺の獄に下されし時、之を救はむとして上りたる文なり。瑗在身の官を納れて、弑の死罪を贖はんことを乞ふ文子の情を知らしめ、また發端照應を詳說すべし。

【崔瑗】文の一體なり。字書に「書は舒なり、其の言を舒布して衆聽に聞ふるなり」と。書の用は至つて廣し。下より上に對しては奏といひ、啓といひ狀といひ、疏といひ、謁といひ、牒といふ。皆書の別稱なり。

【銅峯】峯の一體にして、或は手節とも、小節とも尺牘ともいふ。かくて絶は奪ふ之を皇后・太子・諸王に用ふ。書に誥命・敕諭の二體あれども、共に詔文なり。凡そ書の體はもと言を

訓読　崔瑗　字は子由、涿郡と號す。兄弑と共に進士に登り、又同じく銅峯に擧じ、事を給する精確、能を修むる倜儻、兄と並び稱せらる。屢官して門下侍郎に至り、後宗改和二年卒す、年七十四。文定と諡す。唐宋八家の一。瑗の事蹟は卷三、「上二瑯琊呉太尉一書」にも出せり。

訓読　瑗の兄、弑(東坡)が、其の作りたる詩の爲に罪を獲、御史臺の獄に下されし時、之を救はむとして上りたる文なり。瑗在身の官を納れて、弑の死罪を贖はんことを乞ふ文子の情を知らしめ、また發端照應を詳說すべし。

【崔瑗】文の一體なり。字書に「書は舒なり、其の言を舒布して衆聽に聞ふるなり」と。書の用は至つて廣し。下より上に對しては奏といひ、啓といひ狀といひ、疏といひ、謁といひ、牒といふ。皆書の別稱なり。

【銅峯】峯の一體にして、或は手節とも、小節とも尺牘ともいふ。かくて絶は奪ふ之を皇后・太子・諸王に用ふ。書に誥命・敕諭の二體あれども、共に詔文なり。凡そ書の體はもと言を舒すにあれば、條暢優柔に、其の情意を盡すを以て主とすべし。

【國念】困難切迫すること。急は迫なり、甚なり。史記、周本紀に「裏王告二急于晉一。」

【疾痛】病氣苦痛のこと。史記、屈原傳に「疾痛慘怛、未レ嘗不レ呼二父母一也」

【草芥之微】草は雜草なり、芥は「アクタ」なり、「ゴミ」なり。雜草土芥の如き輕賤なるものの意。孟子、離婁上篇に「視二天下悅而歸レ己、猶二草芥一也」

【危迫之惡】「惡」は人に求むること、危急切迫の悪聞ありとなり。危迫二字下文「孤危迫切」を伏す。注意せよ。

【天地父母】皓に天子を指す。天子は其の最尊天地の如くにして、民の父母たる故、かくいふ。

【早失二怙恃一】父母を失ふをいふ。詩經、小雅蓼莪篇に「無レ父何レ怙、無レ母何レ恃」とあるに本づく。

【相須爲レ命】兄弟相互に依り賴みて存在するなり。須は待なり、賴なり。

【逮捕】逮書、王莽傳に「召二會吏民一、一一證左一」とあり。「逮」は及也、追也、事相連及するものは皆之を捕ふるなり。

【覆在二不測一】我は其の死刑に處せられざるか、と疑ふ意な

り。

【論古今得失】古今政治上の成敗是非を論議するなり。

【其言不一】其の論の諸般に渉るをいふ。

【狂狷】徒に理想に馳せて思慮に乏しきをいふなり。論語、子路篇の「狂狷」の註に「狂者志極高而行不掩、狷者知未及而守有餘」とあり。狷は褊急なり。

【天地包含之量】天地の物を包載するが如く、天量の廣大なるをいふ。

【抑畏】抑損畏敬の略。

【通判杭州】通判は貴州事記の條に解す。杭州は今の浙江省杭州府治なり。馬關條約に因りて開埠地と爲る。

【知密州】知は、知軍州事なり。宋の太祖、藩鎭を廢し、文臣を以て知軍州事となし、之に代らしむ。密州は、今の山東省青州府諸城縣。

【無狀】前後の思慮なく輕率しく發すること。

【誣臣家謗訕】蘇軾、湖州の知たりし時、新法を譏し、同僚の舒亶・李定等に彈劾せられたることを言ふ。「謗」は、「同官ヲ訕トナス」。「訕」は音「ケウ」、劉向曰く「訕謗爭言」と。集韻に「訕謗也」とあり。進は進奏なり。

【罪有異貴】「異貴」は處罰に同じ。「異貴」は昇進に同じ。「貴」は說文に「施也」、罪を宥す義。後漢書に「不敢望報力、負原貸」

【文字輕易】詩句の輕率不用意なるを云ふ。

【迹涉不遜】行跡の朝廷を敬畏せざる様に見ゆる意。

【刑辟】刑罰なり。「辟」は法なり。世說に「鼻陶造辟之制」

【死固分也】死は、吾が當然受くべき本分なりとの意。「分」は靜源に「位分也。如名分職分。言因其地位而各有本分爲限制也」

【不世出之主】世に稀なる名君の義。通鑑の註に「不世出者言世間不常生此人也」

【踊躍於當年】「踊躍」は昔の「クヒチガヒ」合はざることにて、志を當時に得ざる意。

【收尺寸於晚節】微功を晩年に收すなり。晩節は晩年のことなれども、一に晩年の節操の義にも用ふ。楊萬里の賦に「願竪——於晩寨」

【惟兄弟之親、試求哀於陛下而已】惟だ兄弟の親しき間柄のみは、試みに哀憐を陛下に求むる侍ありと。「試早哀多病」よりここまでを東坡の言とす。韓山謂曰く「擧兄師爲哀痛之言。動人處在此」と。

【手足之情】兄弟の至情をいふ。莊子に「兄弟爲手足、夫婦如衣服、衣服破時、更得新、手足斷時難再續」禮記に「骨肉之恩、手足之愛」

【淳于公】漢書、刑法志に「齊大倉令淳于公有罪當刑。詔獄逮繫長安。淳于公無男有五女。當行會逮、罵其女曰、生子不生男、緩急非有益也。其少女緹縈自傷悲泣。乃隨其父至長安、上書曰、妾父爲吏、齊中皆稱其廉平。今坐法當刑。妾傷夫死者不可復生、刑者不可復屬。雖後欲改過自新、其道亡繇也。妾願沒入爲官婢、以贖父刑罪、使得自新。書奏天子、天子憐悲其意、遂下令曰、（中略）夫刑至斷支體、刻肌膚、終身不息、何其刑之痛而不德也。豈稱爲民父母之意哉。其除肉刑、有以易之云云」

【官婢】女子罪あり、收められて官の女奴となれるもの。

【漢文】漢の文帝。

【肉刑】墨・劓・剕・宮の刑なり。文帝の除きたるは此の中墨・劓・剕の三なり。周禮疏に曰く、「文帝除肉刑、惟除墨・劓與剕三者。宮刑至隋乃赦也」

【蕭蕭之誠】蕭「ケラ」と蟻との如き誠にて、螻蟻を以て微者に比す。螻蟻なり。史記、伍子胥傳に「尚使伍子胥從者俱死、何異螻蟻。」

【求其罪】其の罪科を輕減するなり。左傳、昭公十四年に「三數叔魚之惡、不爲末減」杜預の註に「末、薄也。減、輕也」

【願有文字】明白に法律の條文あらばとの意。

【拒抗不承】「不承」は承服せざるなり。

【惟陛下所使、死而後已】惟だ陛下の御使役遊ばさるるままに從ひ、死して後始めて已み申すべしとの意。斯の句の如きは、漢文特有の簡勁にして、而も含蓄ある句、大いに注意せしむべし。

【孤危迫切】孤立危急にして心情の切迫せるを言ふ。上文「危迫之恐」に應ず。

【歸誠陛下】誠を致して陛下に御願ひ申す外無しとの意。

【寬其狂妄】臣の狂妄を寬恕せられての意。其の字は自己を指すなり。

【祈天請命】天命を祈請すること。互文なり。漢文には往往此の例あり。

【激切隕越之至】「隕越」は罪を負うて顚墜するをいふ。其の情願の切なる、罪を負うて顚墜するも憚らざる義。左傳、僖公八年に「恐隕越於下」

「不敢拒抗云云」の上の不の字は、「拒抗不承、以蒙得罪」の全體を打消すことに注意せしむ。

て最終と倚絶するなり。倚は倚に同じ、音「トウ」、擬聲に作る、同じ。

【横槊賦詩】 横槊したる歌と詩れたる歌。

【槊】 音「クワ」、包むなり。

【横槊】 たれすね、まく。横槊音、横矛作に「横陣ニ――大會ニ陳ス。」

【老瞞】 「ハヤブネ」、老、大姑を調ひて「瞞」といふ。杜佑曰く「老瞞妹上立ニ女旁ニ曼ニ換夫ニ多、戰字少。皆題ニ男力無能者ニ往往如ニ此稱ニ。乘ニ人之所ニ不ル及、全敗於戰、列ニ之於上ニ此戰始也」と。

【舊と我と陣】 「陣クント欲スルマネス」と調むべし。

【指ニ漢陣ニ】 「漢」は曹操なり。曹操の營中より指して曹操が陣參すといふなり。

【甘寧】 呉將にして勇猛なる兵士。

【矛と戟】 矛、槍に同じ、長んに大戟をうちて進むなり。胡三省曰く、「矛ハ刺ル戟ハ鉤也」と。

【孫仲謀】 仲謀は權の字。

【向者】 「サキノ」と調む。向は、曾に同じ。

【劉景升】 景升は表の字、兒子は其の二子劉琦・劉琮をいふ。

【厥大】 この故に因りて已の子を棄して厥大・厥兒といふ。

【漢建安十三年】 「建ニ春ヲ」とよむ、「建ノ春ヲ」とよむ場合は、「建之春」と書くなり。

第一段　劉備敗績し、諸葛亮爲に孫權の救を求めしことを敘す。

第二段　孫權曹操と決戰を期せしことを敘す。

第三段　孫權曹操と赤壁に對陣せしことを敘す。

第四段　魯の部將蔣欽か降らんとせしことを敘す。

第五段　呉軍大いに曹操を破りしことを敘す。

第六段　曹操孫權を呉務せしことを敘す。

迎　來る人を出迎ふるなり、歡迎するなり。

逆　我より進んで來る道まで迎ふるなり。

裏　字衣に从ひ、果に从ふ。衣は纏ひつつむ意。果は曹符なり。「クワム」と調む。

裏　衣服の内がは。音「リ」、「ウラ」又は「ウチ」と調む。

三五　前赤壁賦

【前赤壁賦】 前篇に接して、蘇軾の前赤壁賦を載く。斯の篇人宜しく身を人間世外に置き、心を風月の中に玩ぶべし。則ち死生榮辱一夢の如し。又何ぞ憂察せむ。是に於いて其の胸中は、天空海濶、一の塵の字あるのみとの意。塵の字一篇の字眼。但し結尾には塵の字に鼻ふるに趣を以てせり。反復熟讀、殆んと諳誦せしむべし。

【賦】 もと詩の一體にて韻語を用ひ、直ちに其の事を敷叙するものなり。されど同篇相如が上林・子虚の二賦、楊雄が甘泉賦、班固が兩都賦より、賈誼が鵩鳥賦、左思が三都賦の如き、歷代の作家多く力を此に用ひ、遂に文の一體となるに至れり。文選に載する所を見ても其の變なりしを推知すべし。歸文志に「不ル歌而誦ハ。謂ニ之賦ト。登ル高能賦。可ニ以爲ニ大夫ニ。言ハ感ル物造ル端。材知深者。可ニ與言ニ也。故可ニ以爲ニ列大夫ニ也」と、蓋し周の盛時に當りて諸侯卿大夫以下皆能く詩を以て相感じ、詩を誦して其の志を觀ししが、其の衰ふるに及び、聘問歌咏の事列國に行はれず、詩を學ぶの士は閉れて民間に在り。謂して賢人志を失よの賦由りて作るあり。楚の屈原忠を含み潔を懷みて世に容れられず、耿介の志通る所なく、之れを詩に寄し、遂に後世騷體の法門を開き、その弟子宋玉の徒、その遺響を聞ぎて賦體全く成るに至れり。後世漢の沈約書は、賦を以て古詩の流と爲して、其の遷本唐宋八大家文に採入せざりしは、古義に合せりといへども、これを古今に通觀する時は、稍偏狹に失するの憾なき能はず。

【壬戌之秋】 宋の神宗の元豐五年なり。續註を見よ。

【既望】 十五夜を「望」といひ、十六夜を「既望」といふ。尋名に「望月滿之名也。日在ル東、月在ル西、遙相望也」左傳、桓公三年の疏に「月體無ル光、待ニ日照ニ而光生、半照卽偏ル絃、全照乃成ル望」と。書經、召誥に「惟二月――」。註に「十六日也」

【扣舷】 舟の邊を叩くなり。

【屬】 もと詩の一體にて韻語を用ひ、直ちに其の事を敷叙するものなり。されど同篇相如が上林・子虚の二賦、楊雄が甘泉賦、班固が兩都賦より、賈誼が鵩鳥賦、左思が三都賦の如き、歷代の作家多く力を此に用ひ、遂に文の一體となるに至れり。文選に載する所を見ても其の變なりしを推知すべし。歸文志に「不ル歌而誦ハ。謂ニ之賦ト。登ル高能賦。可ニ以爲ニ大夫ニ。言ハ感ル物造ル端。材知深者。可ニ與言ニ也。故可ニ以爲ニ列大夫ニ也」と、蓋し周の盛時に當りて諸侯卿大夫以下皆能く詩を以て相感じ、詩を誦して其の志を觀ししが、其の衰ふるに及び、聘問歌咏の事列國に行はれず、詩を學ぶの士は閉れて民間に在り。謂

【客】 二人位ありしならむか、其の一人は道士楊世昌なり。

【清風徐來、水波不ル興】 徐は「オモムロニ」と調む。ここ解脚を要せじ。八字秋夜の光景を盡せり。

【挿ル江河ル者】 挿ル酒は倚讓、鄭玄曰讓の「挿ニ幣于賓ニ」の註に「挿ニ酒壺ニ旁ニ」。扇は注なり、酒を「ツグ」意。倚讓士昏讓の「卽ニ西階ニ東ニ面ニ於尊ニ」の註に「扇注也」とあり。

【望ニ明月之詩ニ云云】 前氏いふ、詩經、陳風月出篇に「月出皎兮、

佼人僚兮、舒窈糾兮、勞心悄兮」とあり、この詩は在位者の德を好まずして、美色を悅ぶを刺る。章中、月出皎兮は、美人の潔白に喩へ、窈糾はその姿の舒なるなり、佼人は則ち美人なり、彼老此を借りて賦す、亦暗に在位者の德を好まざるを譏るなりと。按ずるにこの說必ずしも拘すべからず、東坡ただ景に觸れて古詩を吟ぜしことを述ぶべしのみ。歌ニ窈窕之章ヲの五字は「望美人兮天一方」を伏す、詩の關雎に「關關雎鳩在河之洲。窈窕淑女君子好逑」とあり、窈窕は幽閑貞靜なり。

【月出於東山之上云云】明月の詩歌より、月上に轉入し、月光の明照を言はずして、自ら月光の明照を見る。斗牛は並に星宿の名、斗は北斗星、牛は牛星なり、前に清風を言ひ、此に月出を言ふ、一篇の張本なり。

【徘徊】進まざる貌。謝疊山は「斯月初出徘徊、漸進于二星之間。」と註せり。

【白露橫江】白き霧の如く立ち籠めたる露氣の江上にた靡けるをいふ。

【縱一葦之所如】小舟の行くがままに任すとの義。一葦は小舟をいふ。詩經、衞風河廣篇に「誰謂河廣。一葦杭之」疏に「言一葦者、謂一束也。可以浮之水上而渡。若桴栰然。非一根葦也」

【凌萬頃之茫然】一頃は田百畝なり。茫然は果てしもなく廣き貌。江水萬頃もある廣き處を凌ぎ進むとの意。

【浩浩乎】浩大なる貌。書經、堯典に「蕩蕩懷山襄陵、浩浩滔天」註に「浩大貌」とあり。但しここは心の浩大に用ひしならむ。

【馮虛御風】馮は凭りもたるるなり。乘るなり。「虛」は空なり。陸機の句に「嘗遺虛以游庭」。「御風」は風に乘ずるなり。莊子、逍遙遊篇に「列子御風、泠然善也」とあり。

【飄飄乎】風の吹く貌、飛ぶ貌。心の輕きを形容す。

【羽化而登仙】道家の說に、飛昇して遠く擧るを羽化と謂ふ。楚辭に「仍羽人于丹丘」とあり。登仙は天に上りて仙人となるを言ふ。莊子、天地篇に「千歲厭世、去而上僊」とあり。謝疊山曰く、「余嘗中秋夜、泛舟大江、月色水光、與天宇合而爲一、始知此賦之妙。」と。

【扣舷】「フナバタヲタタク」と訓む。扣は叩と同じ。

【桂棹兮蘭槳】桂は肉桂なりといひ、又、巖桂（木犀）なりといふ。蘭は木蘭なり。共に香木。楚辭、九歌に「桂櫂兮蘭枻」とあり。棹は櫂に同じ、「カイ」なり。槳も亦「カイ」なり。韻會に「前推曰槳、後曳曰櫂」とあり。

【擊空明兮泝流光】月の水中に在りて光るを空明といふ。謝疊山云ふ「秋水清見月在水中、謂之空明。月光與波俱動、謂之流光。逆水而上曰泝」と。

【渺渺兮予懷】「渺渺」は悠遠の貌。悠遠なるかな、予の心中に懷ふことはの意。管子、內業篇に「渺渺乎如窮無極」、「懷」は常に胸に着けて寸時も忘れざるなり。

【望美人兮天一方】楚辭に「望美人兮南浦」と。美人は天子をいふ。又賢明の君子を斥すと說くものあり。今、前說に從ふ。賦の眷眷帝宋を忘れざる意を見る。以上四句、楚辭より變化し來る。

【洞簫】漢の王褒に洞簫賦あり。註にいふ「洞ハ通ナリ、言フ心ハ、底ナクシテ、上下相通ズ、故ニ洞簫トイフ。大者二十三管、小者十六管」と、又尺八の如きもの、和漢三才圖會に、「洞簫未詳始于何世。唐明皇用之。玄宗皇帝吹之。長二尺、或一尺五寸、長短不同。表有四孔、裏上有一孔。此非簫笛。唯豎吹之而爲豎吹。本邦有一孔簫。普明禪師以傳之」。洞簫を吹く客は、李委なり。東坡與范子豐書に見ゆ。又客は道士楊世昌なりと、[illegible]集に見えたり。

【嗚嗚然】「嗚」は音「ヲ」、一に「烏」に作る、悲しげなる貌。集韻に「嗚嗚歌呼也」とあり。史記、李斯傳の「歌呼嗚嗚。快耳目者、眞秦之聲也」とあるは、耳に快き聲の意なれど、ここは全く其の反對なり。

【嫋嫋】「嫋」一に「裊」に作る。音樂の音の餘韻として絕えざる貌。楚辭、九歌に「嫋嫋兮秋風」

【舞幽壑之潛蛟】深き谿壑に潛める蛟。蛟は「ミヅチ。」說文に「龍屬無角曰蛟」

【嫠婦】「嫠」音「リ」、寡婦なり。左傳、昭公十九年の嫠婦の註に「寡婦曰嫠」とあり。

【舞幽壑之潛蛟、泣孤舟之嫠婦。】の二句は、洞簫の聲の悲哀の極、能く無情のものをして起舞し、有心のものをして落淚せしむるを寫し、以て下の愀然の問の下地を爲すなり。文章軌範註に、「吹洞簫而潛蛟亦舞、喩己潛伏于滿所也。寡婦聞此赤壁、喩己孤立不得于君也」とあるは、牽强附會に失せり。無情のものは潛蛟を指し、有心のものは嫠婦を指すなり。

【愀然】哀しみて容色の變ずるなり。禮記、哀公問に「——變色」とあり。

【正襟危坐】衣を正して正坐するなり。史記、日者傳の字面。集韻に「正其衣襟、謂端嚴而自飾也」と。

【問客曰、何爲其然也】客に問うて曰く、何すれぞ其れ斯樣に哀しき聲を出さるるぞと。

【月明星稀】 魏武帝(曹操)短歌行に「――――、烏鵲南飛、繞樹三匝、何枝可依」とあり。文選に出づ。李善の註に「喩二君子擇レ所而依一也」と。劉氏主の奔走を譬る。烏鵲は和名「カササギ」

【皇天無親】 即ち魏武帝なり。名は操、孟徳はその字。

【皇日】 今の湖北省夏口縣。魏志に「建安十三年秋七月、曹公南征。劉表卒。其子琮代竝二劉備一。備走二夏口一。公遂二至江陵一。下二荊州一。得二劉琮一。船不レ利乃歩」

【武昌】 今の湖北省武昌縣。三國時代には鄂縣といへり。

【山川相繆】 繆は「マトフ」と訓む。山川の入交りて相纏ること。

【周郎】 吳志、周瑜傳に「建安三年、孫策渡二歴陽一。瑜與二兵二千人騎五十匹一。時年二十四。呉中皆呼爲二周郎一」と。赤壁の戰、三萬の兵を以て魏八十萬の大軍を破れり。郎とは年少くして才ありしを以ていふ。ここに此の字を用ふる、甚だ面白し。

【破二荊州一】 劉琮降る。

【下二江陵一】 曹操江陵を下り、赤壁に至る。湖北荊州府江陵縣。

【旌旗千里】 旌旗、武帝紀の字面。註に「旗は紅後、旄を挿す處なり。旗は紅旗、旄を挿す處なり。その組の多き前後相衝みて、千里も絶えざるを謂ふ。

【謳レ酒】 詩經、小雅伐木篇に「伐木許許、釃レ酒有レ藇」註に「以レ筐曰レ釃」とあり。釃は酒を漉す義、ここは酌む義とす。酌みながら揚子江に臨むをいふ。

【横レ槊賦レ詩】 「槊」は「ホコ」と訓む。長さ一丈八尺ありといふ。孟康曰、杜預傳に「晉氏父子、被馬間雲レ文往往一レ――レ一」とあり。註參看。

【固一世之雄也】 固は「マコトニ」と訓む。一句上文を束ね、筆力萬鈞。

【而今安在哉】 解釋を要せじ。一句無限の感慨。

【漁樵】 漁は「スナドリ」、下の「樵二魚蝦一」に對し、樵は「キコリ」、下の「友二麋鹿一」に對す。

【魚蝦】 魚也「エビ」。蝦は「エビ」

【麋鹿】 麋は通常の鹿より大なるもの。孟子、梁惠王上篇に「鴻鵠麋鹿」

【一葉扁舟】 一枚の小舟。舟を木の葉に喩ふ。

【扁舟】 扁は「フクベ」、瓢箪として、酒を入れたるなり。

【蜉蝣】 小蟲、朝に生じ、暮に死すといふ。故に古來より人生のはかなきに喩ふ。爾雅の註に「似二蛄蟖一身狹而長、有レ角黄黑色」とあり、和名「カゲロフ」「イサゴムシ」の形化せるもの秋の半に、水邊に多く飛ぶ。長六七分、首は觸蜂の如くにして、苦だ小さく、觜尾くして四翅一齊に動なる。身狹く長くして、淡黄なり。尾甚だ長く細くして絲の如し。「寄二蜉蝣於天地一」は須臾にして死する小蟲の如き身を以て廣大なる天地に寄託するをいふ。淮南子、説林訓に「蜻蛉千歳以經二其時一、蜉蝣朝生而暮死、而豊二其樂一」

【渺滄海之一粟】 渺は渺茫と同じ、滄海の大なるを見はす。人間の微小なる、滄渺茫たる滄海中の一粟の如しとの喩。莊子、秋水篇に「計二中國之在二海内一、不レ似レ稊米之在二太倉一乎」とあり。此の意に本づく。

【長江之無レ窮】 揚子江の永遠に流れて已むことなきを言ふ。

【飛仙】 飛行する仙人をいふ。陳書、赤土國傳に「其王居二僧祇城一、有レ門三重、每レ門置二金飛仙若干像一」とあり。林四仲云ふ「船長往曾、船有二飛仙一面曰、我欲レ執二之而遊一遊人問「與二明月一共長久料不レ可レ得」と。

【驀然】 「驀」も亦遽なり。時經、那昆柏舟篇に「微二我無一酒以遨以遊一」とあり。

【逝者如レ斯】 逝は往くなり、日に遠みて止まざるをいふ。論註を見よ。この句、水を吊す。

【拖二明月一而長終】 萬古盡くることなき明月を拖いて、長く生きて身を終へんとする義。

【知レ不レ可二乎驟得一】 前の二句の如くするは、驟に得ること能はざるを知るなり。

【託二遺響於悲風一】 洞簫の遺れる響を秋の悲風に寄せ託して吹くなりとの意。悲風は秋風なり。古文析義の註に「故寄二此意於悲響中一也」とあり。前の如レ愚如レ慕云云の句に應ず。

【逝者如レ斯云云】 逝者は水のこと。論語、子罕篇に「子在二川上一曰、逝者如レ斯夫、不レ舍二晝夜一」ここの意は、水は斯の如く流れてやまざれども、萬古盡きずして流るれば、其の實は未だ嘗て往くものに非ずとの意。此の句水を說く。

【盈虚者如レ彼云云】 盈虚は「ミチ、カク」なり。易經、豐彖傳「日中則昃、月盈則食、天地盈虚、與レ時消息」とあり。また莊子秋水篇に「消息盈虚、終則有レ始」又、知北遊篇に「彼爲二盈虚一非二盈虚一」とあり。この句は月を說く。解釋を要せじ。

【蓋將自二其變者一而觀レ之云云】 變者は、上の逝者の類を指し、不レ變者は「未二嘗往一也」「卒無二消長一也」等を指す。蓋し天地間の萬物、すべて其の變る所の一部分に就いて考ふる時は、一瞬間と雖も同一狀態を續くるものなし。又其の變らざる所に就いて考ふる時は、唯に天地のみならず、萬物と我が身と、

皆眞古畫きざるなりとの義。以て東坡の哲學と爲すべし。清然齋雅談に云ふ「コレ蓋シ莊子ノ句法ヲ用フ」。德充符篇に「自ニ其異者一而視レ之、肝膽楚越也、自ニ其同者一而視レ之、萬物皆一也」とあるは、この段の本づく所なりと。

【何羨乎】何ぞ長江の窮りなきを羨まんや羨まずとの意。上の「羨ニ長江之無ニ窮」に接す。

【苟非ニ吾之所一レ有、雖ニ一毫一而莫レ取】かりそめにもわれの有する所の物に非ずんば、毛髮一筋と雖も取ること能はざるなりとの意。

【江上之清風與ニ山間之明月一、耳得レ之而爲レ聲、目遇レ之而成レ色】白氏文集卷十三、遊ニ雲居寺一詩に、「勝地本來無ニ定主一、大都山屬ニ愛レ山人一。」とあるに同じ。金臺紀云「深思ニ此二句一、豈復止是風月哉」と。評し得て一步を進むと謂ふべし。

【造物者】造化に同じ。列子に「造物者其巧妙、其功深、固難レ窮難レ終」また莊子、大宗師に「偉哉夫———、將ニ以レ予爲ニ此拘拘一也」故に「能造ニ化萬物一、故謂ニ之———也」

【無盡藏】何程取りても盡くることなき藏なり、佛語。盧藥宣州彌勒寺碑序に曰く「稱ニ能多藏一、獨ニ無盡藏一———」、獨ニ莊嚴」と。佛語には、此の外、無盡功德藏、無盡文宗、無盡財等あり。

【所ニ共適一】適は意にかなうて樂しむこと。此の字甚だ重し。吾と子と共同にて此の風月を樂しむとの義。

【更酌】更は「サラニ」訓むべし、「カハルガハル」と訓むは非なり。盞を洗ひてさらに酌み直す義。

【杯盤狼藉】史記、滑稽傳に「杯盤狼藉、堂燭滅」杯盤は杯や皿なり。狼藉は群鴨演義に「狼藉レ草而臥、去則滅亂、故凡物之縱橫散亂者、曰ニ狼藉一」とあり。

【枕藉】相重りて臥すなり。漢書、酷吏傳に「一發膩、皆相枕藉死」とあり。

本文押註參照。

【清風明月云云】李白の襄陽歌に見ゆ。風月を玩賞する快樂は一厘をも費さずして之を得べく、極めて清雅なる遊びなりといふ意。全篇は古文眞寶にあり、左に錄す。

落日欲レ沒峴山西。倒著ニ接䍦一花下迷。襄陽小兒齊拍レ手。攔レ街爭唱白銅鞮。傍人借問笑ニ何事一。笑殺山翁醉似レ泥。鸕鶿杓、鸚鵡杯。百年三萬六千日。一日須レ傾ニ三百杯一。遙看漢水鴨頭綠。恰似葡萄初醱醅。此江若變作ニ春酒一、壘麴便築糟丘臺。千金駿馬換ニ小妾一、笑坐ニ雕鞍一歌ニ落梅一。車傍側挂一壺酒。鳳笙龍管行相催。咸陽市中歎ニ黃犬一。何如月下傾ニ金罍一。君不レ見晉朝羊公一片石。龜頭剝落生ニ莓苔一。淚亦不レ能ニ爲レ之墮一。心亦不レ能ニ爲レ之哀一。清風明（明一作レ朗）月不レ用ニ一錢買一。玉山自倒非ニ人推一。舒州杓、力士鐺。李白與レ爾同ニ死生一。襄王雲雨今安在。江水東流猿夜聲。

參考として曹操の短歌行全篇を抄す。

短歌行　二首選レ一

對レ酒當レ歌、人生幾何。譬如ニ朝露一、去日苦多。
慨當ニ以慷一、憂思難レ忘。何以解レ憂、惟有ニ杜康一。
青青子衿、悠悠我心。但爲レ君故、沈吟至レ今。
呦呦鹿鳴、食ニ野之苹一。我有ニ嘉賓一、鼓レ瑟吹レ笙。
明明如レ月、何時可レ掇。憂從レ中來、不レ可ニ斷絕一。
越レ陌度レ阡、枉用相存。契闊談讌、心念ニ舊恩一。
月明星稀、烏鵲南飛、繞レ樹三匝、無ニ枝可一レ依。
山不レ厭レ高、水不レ厭レ深。周公吐レ哺、天下歸レ心。

蕭鳳山曰く「此賦學ニ莊騷文法一、無ニ一句與ニ莊騷一相似一、非ニ超然之才、絕倫之識一、不レ能レ爲也。瀟灑神奇、出塵絕俗、如下乘ニ雲御一レ風、而立ニ乎九霄之上一、俯ニ視六合一、何物茫茫、非ニ復不レ食ニ之煙火一、亦不レ足レ入ニ其靈臺丹府一也。」

彭同人曰く「出ニ入仙佛一、賦一變矣」土屋鳳洲翁の晩晴樓文鈔第二編を讀むに、「書ニ蘇東坡前赤壁賦後一」と題する文あり。本賦中の適の字に就いて一說を出せり。之を左に揭ぐ。

頃日讀ニ歐陽堂法帖中、蘇東坡自書赤壁賦一。末段我與レ子之所ニ共食一句。坊刻、食字皆作レ適。不レ知ニ何人所一レ改。或曰、食者食封之食、猶レ曰レ享。得レ之。即我與レ子、以ニ天地風月一爲ニ食邑一也。是一字、足下以見ニ蘇子氣宇超曠、直與ニ造物者一爲レ徒之槪一。且著ニ是一字一、下文客喜而笑、及枕ニ藉乎舟中一、不レ知ニ東方之旣白一等句、有ニ著落一、有ニ趣味一。若改ニ適字一、不レ知ニ客喜而笑者爲ニ何事一。而枕ニ藉乎舟中一、不レ顧ニ家之室一、亦不ニ了了一。後人不レ察、妄改レ之何也。庚子七月。或曰、子說雖レ奇。蓋作者初用ニ食字一。旣覺ニ其未一レ妥。自改レ之耳。且食字、從ニ子說一、則似ニ穩妥一。何如。予曰否。食字是作者用字巧處。況此段、首揭ニ天地之間、物各有レ主、苟非ニ吾之所一レ有、雖ニ一毫一而莫レ取之句一、則食字有レ所ニ由來一。決非ニ穩妥一。而適字則反不ニ永接一也。并識。南摩羽峰曰、所レ論得ニ太確一。所レ謂眼光透ニ紙背一者。曾ニ或說一附ニ後門一。亦當ニ列餘論一。

翁の此の說、以て卓見と稱すべし。但し翁に先だちて、三村竹山氏既に此の說を出せり。翁は之を知らざるが如し。

因に、凮凮翁は、食の字甚だ味あれど、適に作るも亦通ぜりといへりとぞ。編者姑く諸氏翁に從はむと欲す。

三六　後赤壁賦

蘇東坡、元豊五年七月、赤壁に遊び、賦あり。同年十月復た此に遊び、又賦を作る。因つて題じて後赤壁賦と曰へり。前の壁賦と同じく、巣の一字を以て主意とす。巣の字一篇の字眼。

【是歲十月】　元豊五年なり。中井履軒曰く「前ニ壁賦ニ言ヒ、近世文士、題辨ニ是歲ニ爲ニ今年ニ者多。往往無ニ前事ニ而直題ニ是歲某月ニ可ト矣之語。徂徠最多ニ此失。」

【雪堂】　蘇長公年譜に「公年四十七、黄州ニ在リ、臨皐亭ニ寓居ス、東坡ニ就キテ雪堂ヲ築キ、自ラ東坡居士ト號ス」とあり。堂は雪中に之を爲る、因つて雪を四壁に塗くといふ。入智記に「十九日、早遊ニ東坡ニ自ニ州門ニ而東、岡巒高下至ニ此ニ而勝ス」とあり。平野開豁、東起ニ一脈ニ頗高。有ニ屋三間ニ。一巻頁曰ニ居士亭ニ。亭下面南一堂頗建。四壁皆畫レ雪。堂中有ニ蘇公像ニ。烏帽紫袍、横ニ於胡牀ニ。是第ニ幾畫ニ。」

【臨皐】　今はじめ黄州に至り定宅院に寓し、のち臨皐亭に遷る。亭は門草院に在り。「皐」は「皐」の正字。東坡志林に、「臨皐亭

八十歩、便是大江、半部峨眉之雪水。吾取ニ飲全沐浴于斯ニ。何必歸鄉哉」と。以て東坡の此の亭を愛著せしを知るべし。

【二客】　古文眞寶の註に、郭遘・古耕道の二人といへり。

【黄泥之阪】　阪の名。東坡集、黄泥阪詞に「出ニ臨皐ニ而東行兮、並ニ幽澗ニ而北轉、走ニ雪堂之坡陀ニ兮、厭ニ黄泥之長阪ニ」とあり。其の道黄泥より成れるを以てこの名を得たりと云ふ。

【霜露既降、木葉盡脱、人影在レ地、仰見ニ明月ニ】　解釋を要せじ。四句其物を形容し、化工を奪ふ。妙妙。

【顧而樂レ之】　顧は二客を顧予の從字と相應す。二客を顧視し景色を見て樂しむなり。巣の字主意を提起す。注意せよ。

【今者】　今日の意。

【宵日橫槊云云】　後漢書、左慈傳に「曹操置ニ酒會ニ衆賓ニ曰、今日高會、珍羞略ボ備。所レ少吳松江鱸魚耳」とありて、註に、「松江、出ニ好鱸魚ニ味美ニ他處ニ」と曰へり。隋唐佳話に「吳郡獻ニ松江鱸魚膾ニ。煬帝曰、所レ闕金盤玉膾、東南之佳味」とあり。今の江蘇省江寧府事亭鎮に在り。「松江」とよむべし。

【顧安所レ得レ酒乎】　客の言此の句に止まる。

【顧而樂レ之歌】　史記、滑稽傳に「歌諧笑レ經計レ之」とあるに本づく。

【斗酒】　一斗は十升。我が五升五合八勺に當ると云ふ。

【不時之需】　時ならざるもとめ。

【江流有レ聲、斷岸千尺】　水瀦つれば聲なし、冬月は水少なし、故に聲あり。又水少なき故に岸高く見ゆるなり。此の二句と下の「山高月小、水落石出」と、冬月の夜景を描寫す。妙妙。

【山高月小、水落石出、曾日月之能何云云】　山は高く聳えて、月は小さく見え、水は落ちて淺くなりたるため、石は水面に露はれ出でたり。前の遊より、今日までの日月は、幾何なるぞ、固より少時なるに、江山の景色は、全く變りて復た前の景色を認むべからずとの意。曾は「不レ嘗之辭」とあり。ここも此の意にて思ひがけなかつたと解すべし。

【江山不レ可二復識一矣】　識は認の意あり。言ふ心は、風景此の如し、復た前遊高頃花柳の趣に非ず。されば前遊江山の景は認識すべくもあらずとの意。

【羽衣】　「羽」は鳥なり。鶴氅上籠に「鳥レ羽衣去レ足尺」註に「以二雨手一繋二鳥羽衣之兩旁一。又、史記日者傳に「於レ是繋レ羽衣而起」とあり。前遊は只舟中に在り。この遊は舟を舍て岸に上る。江山の景間じからざるのみならず、遊も亦一法ならず。

【戛然】　「戛」は「高」なり、嶮絶なり。巌石の高くそばだつなり。文選、高唐賦に「登二巌巒一而下レ顧兮」

【望美人】　草の眞生すら能く。蘭蕙の詩に「秋雨過——」

仙境に遊ぶ道士。井飲し魚井飲し客。井飲に赤壁。只有二一片光明一在上耳。遥二遥二田日一。「遥」とあり。此の詩に拘はるを要せず。

【羽化】 物の備る時登する者。ここは道家の語を以す。登仙。仙境に「羽化而登仙」

【扁舟】 舟とすれすれに横ぶなり。

【匏尊】 中井履軒云く「此句上下皆レ有二下レ舟歌レ客之事一。曹操詩「酌二酒以匏尊一」文通よりいへば略かに然り。されど、是れ文を多幻的ならしめんとして、強ひて省きしに非ざるか。

【客】 道教の信。即ち仙術に通ずる人。

【羽化】 はころも、道士の服。

【月明】 月夜に「星行也」とあり。ひらひらする袖。

【望美人】 望は「ユユ」といふ意。望は遠く意。宋玉文集記に「有二人見レ物皆異、曰——望二孝白作一物遠望一因用レ之」とあり。又晋書の意に用ひたることもあり。

【美人之死】 昨夜。曹記、曹丹上に「曹音之死」等註に「曹音曹操、音讀レ如レ曹也」とあり。

【開レ戸眠レ之、不レ見二其處一】 戸を開いて、よくよく調れども、道士と問答したる跡は、何れの處なりや、一向見えずとなり。

【師玄鶴に「開然而笑、象不レ知レ處」とあり。全意歌曰く、「世俗に拘泥し過ぎた道士に井飲し魚井飲し客、井飲に赤壁。只有二一片光明一在二上耳一。遥二遥二田日一。「遥」とあり。此の詩に拘はるを要せず。

本文押韻字調。

(一) 韻同人云く「前賦故云遥同等。此賦不レ遥二客一者歌レ客者。即客所之者。客二他客一外二考、與二前賦一有不レ同也」

(二) 第二回云く「後賦、井飲二魚文章色相一矣。未不二相類一。然仍其佳。前後並美、人境俱冥。嘉門子等レ之曰二文章前二後矣一。」

(三) 月東集云く「此賦前處、用二韓文公石鼎序開頭意一、指レ為二道士一、本晴後二両遊一青銭山僧佐師化レ為レ鶴一」

(四) 元豊六年、東坡自らこの賦の後に書して云ふ「江流の間、赤壁と指す者三あり。一は黄安郡の歩下に在り、即ち今の黄州。一は江夏の西南なる者、王に曹公敗るる所の地なり。三國志を按ずるに、樊、江陵よりして下り、備と魯と夏口より往いて逆へ戦へり。則ち赤壁は明かに荒陵の東と、黄安の歩下とに非ざるなり」と。

(一) 題「赤壁賦後」

前二賦を承けたる練習文なり。送假名を施さしむべし。或は題下しの漢字交り文に書かしむるも可なり。

【蘇軾】 蘇軾を云ふ。

【全石可動】 動音「ロク」「石の併歌するなり。周禮、考工記に「石有レ時以動」とあり。

【不朽之盛事】 魏の文帝の典論に曰く「文章者經國之大業、不朽之盛事。年壽有レ時盡、榮樂止二於其身一。二者必至之常期、未若二文章之無一窮」と。これに本づく。

【曹劉】 曹植と劉楨なり。曹植の小字を阿鄴といふ。

【三寸不爛之舌】 舌をいふ。蘇秦の説辞に「不費二斗糧一、不二人呼一、不二折一兵一、不二傷一人一、而成二其功一者、舌也」とあり。

【吟嘯徐歩】 詩歌に吟味してほめたたふること。

【況吾與子漁樵於二江渚之上一、侶二魚蝦一而友二麋鹿一】 舷は美なり。況や吾と君子の漁樵の美の、宇宙に顕映するものは、文章と雖も及ばずとの意。結末此の一句を下して、百尺竿頭一歩を進む。

【匏尊】 匏と同じ。長壽と解す。岩代國安積郡郡山の人。佐藤一齋に學びて卓び、事跡の歌官となる。嘉祥元年十一月卒す、年七十六。著す所長野文略・御前集・照明名賢録・長崎聞話等あり。本文は長野文略に出づ。長野が事実の外交家川路寛堂に與へて、存養省候の工夫を説ける書は、誠に大文章なり。

【市川世寧】 字は子静、又の字は嘉祥。通稱は小左衛門。寛堂・北江・江湖詩老等の號あり。上野の人。林正良の門に入り、昌

年進擧最長となる。貞觀三年吉山縣に徙され、文明三年卒す、年七十二。著す所、貞觀政要十卷あり。門人中、柏加亭・大雅詩佛・新地五山等最も著る。

起句は、被衾が孤舟に神し、水光、天に接して蒼茫を知らぬ長江の空明を擧も流光に泝るをいひ、承句は、千尺の斷岸に擧ゆる老樹は既に紅葩し、宛然、古戰場の荒涼を語るに似て、凄烈の氣分、悲壯の感慨、胸に迫るを覺ゆるをいふ。而して古今に名だたる古戰場も、一たび風流韻事の場の被衾に變じて、赤壁の鼠となりて世に傳はりてより廿、かの魏軍の死命を制せし花形作使、周瑜の戰功も、其の風流の摩價に壓殺されて、復、衆眼に上す人とては見出されすなりぬ。さても被衾三寸不作の力の偉なる哉となり。

「長」と「漲」と「郎」は下平七陽の韻。

三七 七絶二首

一、貴鄕僧惠云將歸之舊隱

貴鄕僧惠云將歸之舊隱の詩を送く。友人相別るるの情を叙らしむるを主眼とす。

【貴鄕僧惠】 開元貴鄕昌許江夏縣の西南貴鄕山上に在り。三才圖會に「貴鄕僧在武昌府西南、貴鄕里仙境、刺史彭勝之最。武昌、貴鄕、岳陽二縣民時。白居易詩序、貴鄕僧惠」と。梁簡幹曰く「貴鄕僧惠以山水名世」と。送別の詩に「客人日望白雲去、此地空餘貴鄕一步不出庵。白雲千載空自閉。明月長在虛堂」

【故人】 古き「ナヂミ」の友。孟浩然を指す。

【烟花】 烟は煙に同じ。煙霞・煙霧・煙雨などと通用す。「モヤ」「カスミ」。葛原詩話に「煙花ハタダ煙ナリ、花ハ飾字ニシテ眞ノ花ニアラズ、用處ニヨリ結ビ合セニテ人煙繁華ノ樣子ニモナリ、又幽寂ノ處ニモナル。(中略)揚州ハ、唐時、一盛二揚ト稱シテ、最ノテ繁華ノ地ナリ、劉郎古所ノ淮南部煙花。ノ題ノ如キモ、是ナリ。又唐詩ニ「煙花山陽重」「煙花象外出」ノ類、象外ト結ビ合セタル故、幽寂ナル景トナル、此等ハ、風煙トイフニ同ジ、總テ風景ヲコメタイフ云云」

【揚州】 江蘇省にあり。風流繁華の地。

故人は孟浩然なり。四の方貴鄕僧惠を去つて烟花三月の好時節、揚州の廣陵に下らる。吾は樓上より其の舟を見送りて、孤帆が遙かに碧山に映じてその影の盡くるに至れども、わが別を惜しむの情は已み難きなり。唯見るものは長江の水が悠々として天に接して流るるのみ。この絶話二句は、對歷の「二子乘舟、汎汎其逝、二子乘舟、汎汎其逝」の四節より來れり。妙法。

「樓」・「州」・「流」は下平十一尤の韻。

二、峨眉山月歌

赤壁の戦跡に同み、峨眉山月の詩を誦く。眼簾せしむべし。

【峨眉山】　四川省嘉定府眉州の南百里に在り。一に大峯山ともいふ。連綿蒼翠し、眉州城南に亙り、二峰對峙、宛然蛾眉の如し。故に此の名あり。李白に名山記を引きて「峨山相對如二蛾眉一故名」

【半輪】　上弦即ち陰暦の七八日頃の月。

【平羌江】　四川省嘉定府眉州に在り。青衣水は平羌山麓を經、平羌江と爲り、峨眉山麓を繞流して東南流して大江に注ぐ。後人云ふ、先武帝に入朝す、眉州亦此の地に於て之を平ぐ、因かて名づくと。

【清溪】　縣の名前蜀州の屬名。今の四川省青州内江縣の東北に在り。

【三峽】　江水の両の山間を奔流するに因りて名を得たるものにして、四州重慶府に在るを明月峽・石洞峽・黄猫峽と爲し、其の歸州に在るを圖經峽・巫峽・歸郷峽と爲し、並に三峽といふ。ここは前者を斥す。

【思ひ君】　君は月を指す。二字句等の情緒。

【渝州】　渓の巴郡江州縣にして陸に至りて渝州と改む。唐の時、蜀南道の屬州たり。今の四川重慶府巴縣始なり。

峨眉山の嶺には半輪の秋月かかり、其の清影は平羌江の水に映りて流るとなり（以上起承）さてこの夜にえもいはぬ月色を眺めながら、舟に乗りて清溪を出でて三峽に向へば、月影も前峰に隠れて見えずなりぬ。今一度見ばやと思へども見ること能はず、茫しく渝州に下れりと。此の詩二十八字中に、峨眉山・平羌江・清溪・三峽・渝州と地名五出すれども、吟誦して耳障せざるは、語調の流暢と、風韻の勝れたるとに由る。凡庸作者をして作らしめば、恐らくは渡跡に勝へざらむ。（以上轉結）

「秋」と「流」と「州」は下本十一尤の韻。

三八　陳情表

【李密】　字は令伯、蜀漢武陽の人。父早く亡し、母何氏更に人に適く。密、祖母に養はれ、孝を以て聞ゆ。祖母の疾に侍し、日夜衣帯を解かず。明亡ぶ、晉の武帝徴して天子洗馬と爲さんとし、郡縣下せしも應ぜず。郡縣の迫之を强ふ。乃ち陳情表を上る。武帝其の孝心を感し、奴婢二人を賜ひ、且つ郡縣をして其の祖母に扶供せしむ。祖母死し、仕へて漢中の太守となる。一年にして官を去りて卒す。詳しくは、晉書・李密傳参考に見ゆ。

【孝悌の至情を披け、孝道の至誠、鬼神を泣かしむるを見らしむ。】　出師表は最前、祭十二郎文は悲痛、此の文は李密の代表的文学たるを知らしむべし。

【況】　文選明詩に「況、況也、明也。増益事情、使之明白」以下上一也。古者歌言於前、詩詩言於後。漢定三歌詩、乃有二四品一其三曰レ表。然但用以陳請而已」とあり。

【温克】　温和にして能倹すること。

【成立】　一人前の人間になること。文選、張銑の註に「成立謂二能歸一家」とあり。

【夙遭二閔凶一】　「夙」は早なり。「閔」は「憂」なり、父の喪に丁るをいふ。左傳、宣公十二年に「軍君少遭二閔凶一不レ能レ文」とあり。

【生孩】　纔めて幼稚なる時なり。「孩」は說文に「小兒笑也」とあり、漸く笑ふ頃なり。禮記月令の「孩乳」の註に「言乳始生如レ孩也」

【舅奪レ母志】　「舅」は死なり。「文選の註に「舅曰、舅、死也」とあり。見は受身助動詞「ソムカル」と讀む。父に死なれたる義。舅父を見レ舅の上に置きたるは、わざと强めむためなり。此の見を尊敬の助動詞に解するものあれど、上表文に已れの父を尊敬して言ふは、如何あらむ。

【行年】　莊子、天道篇に「行年七十老二斯輪一」とあり。「行」は往なり歴なり。今より經過せしよはひの義。享年と似たれど、享年は死者に用ひ、行年は生者に用ふ。

【舅孝二愍志一】　舅、强ひてその母を他に再嫁せしめ、節を守ることを得ざらしむ。「舅」は母の兄弟、即ち母方の「オヂ」なり。

【孑孑】　「伶仃」に同じ。依倚する所なきなり。文選、張銑の註に「危弱貌」とあり。

【煢煢】　獨りにて能倹すること。

二十成人ニ也」とあり。神氏家訓に「成立之能、如ク升レ天」とあるは、成功の意味にて、ここより一層強きが如し。

【伯叔】伯は父の兄、叔は父の弟。倉頡、篇名に「伯叔之間」とあり。

【門妻許慧】家門整備して、許慧適當なるをいふ。

【能有ニ兒息ニ】晉書、李密傳に「二子郎・奥、時字宗石、少能属レ文。」農字倉石、亦有ニ文才ニ云云」息を挙ぐることはなはだ晩きをいふ。

【年功雖近】「年」は周年の際。叔父母、伯叔父母、兄弟の妻をいふ。「功」は大功と小功とあり、大功は九月、従父昆弟。小功は五月の服。再従兄弟、外祖父母の喪期。「雖」は強に同じ。最近にて、有力なる近親、即ち長壻の忌服のかかる親類をいふ。

【筆ニ誰門五尺之童ニ】文選に李を取り次ぐ童子。童は童僕の義。古者二歩を一尺となす。五尺之童は十二三歳の童をいふ。荘子、顔王篇に「故ニ為ニ誰門ニ」意し其の貴にして、取次の童子もなきをいふ。

【笑笑子立】「笑」音「ケイ」、單なり、兄弟なきなり。また心鋼く憂ふる貌。「子立」は孤立なり、女遂に子を猶に作る。左傳、哀公十六年に「笑笑余在ニ疚」また後漢書、蔡不章傳に「蔡子單特子立」とあり。

【形影相弔】他に人なく、唯我が形と我が影の相弔問するをいふ。「弔」は問なり。張九齢の照ニ鏡見ニ白髪ニの「夙昔青雲志、誰論白髪年、誰知明鏡中、形影自相憐」の詩と暗合す。

【清化】清明なる徳化の意。晉の武帝の政治をいふ。

【臣逸】臣は若に對していふ時に用ふる代名詞。逸は眞逸なり。字は梁道。河東襄陵の人。魏の文帝の時、豫州の刺史と為りて功あり。又河道二百里を開通す。河侯渠と稱す。

【羸】病気が附きまつはりて、長き年月癒えざること。老病者を言ふに通ず。ここ羸の字にては中らず。

【湯薬】薬をいふ。煎薬。

【家嗣】晉嗣を斥す。

【李勣】事物紀原に「漢氏取レ士、又有ニ孝廉・秀才ニ等ニ云云」。孝廉とは、孝行にして廉直なるものの挙げらるる科第をいふ。

【笑】顔笑なり。字は彦先。呉に仕へて黄門侍郎と為る。呉平いで後、陸機兄弟と倶に洛に入る。時人、呼んで三俊と稱せり。

【秀才】孝廉と同じく試験科目の名。海試せられて最初に挙げらるる科第を秀才といふ。前の事物紀原の説明を見よ。

【供養奉レ主】祖像を供養するに主たるべき人なきをいふ。文選注に「良曰、養レ主、謂レ無ニ人主ニ奉ニ供養ニ之事ニ」

【郎中】杜氏通典に「漢興以来尚書ノ属ニ或ハ侍郎アリ、或ハ郎中アリ、或ハ曾書郎アリ、務繁ハ則ヲカラズト雖モ、其ノ職ハ一ナリ、皆今ノ郎中ノ任ナリ」とあり。

【除ニ臣洗馬ニ】洗馬は太子の属官。太子に奉侍し、事馬の前駆たる役。文選注に「漢書曰、太子属官有ニ洗馬ニ。如淳曰、前駆也」と。除は官に任ずるなり。文選注に「漢曰、如淳漢書注曰、凡言レ除者、除ニ故官ニ就ニ新官ニ也」と。

【東宮】太子なり。

【頓レ首】身を投す義。「頓」は跪なり。その首を跪帰するもこの意を取る。即ちその意。前漢書、谷永傳に「一一レ下ニ公門ニ以報ニ厚施ニ」

【聞】天子に申し上ぐること。「ブンス」と読む。

【切峻】懇めて厳しきなり。迫切。峻厳の省略。

【逼促】「逼」は迫なり。「促」は俗なり。辞源には、「言レ不レ守レ法也」とあり。命を受けて速げざる義。

【郡縣逼迫】郡縣の官吏がしつこく迫ること。

【州司臨レ門】州の役人が門に来りて、厳に催ぜよといふなり。

【参ニ於星火ニ】火花の飛ぶよりも至急なるをいふ。蘇軾の詩に「願事星火会」一に、星火は流星なりと。亦通ず。

【狼狽】「アワテル」義。孔叢子に出づ。西陽雑俎に「或言狼狽是兩物。狽前足絶短、毎レ行常駕ニ於狼腿上ニ。狽失レ狼則不レ能レ動。故世事乖者稱ニ――ニ」とあり。此の解俗説なれど、且つ普通に従ふ。此の類の形容詞は、其の意、昔に在りて字に在らざるもの少なからず。然るに一概に之を字義に求め、附会牽強至らざる所なし。清人小学を精研し、此等の義、始めて明白となれり。

【堂構以レ孝治ニ天下ニ】支那は古より孝を以て天下を治む。天子の諡に多く孝の字を冠するもかこの意に出づ。但漢の文帝裏初を短くせしが、晉の武帝復た舊制に復し、三年の喪を行ふこととせり。故にいふ。孝経に「昔者明王之以レ孝治ニ天下ニ也」とあり。

【矜】「矜」は憐なり。「青」は姜なり。

【伯喈】司漢をいふ。晉に對して稱す。蔡いはざるを得ず。一説に一本克嗣に作る。伯嗣の字は晉人の改作せしものならんと。原註に「李善本蜀人、先主帝室之胄、紹ニ漢正統ニ名正言順。大非ニ曹操漢賊之比ニ。密又在ニ孝子順孫之列ニ。順亡諱レ晉。尤當レ不レ忘ニ舊君ニ。何忍ニ自稱レ蜀偽ニ伯喈ニ乎。予毎ニ読至レ此、為レ之不レ懌。情理」

【郎君】尚書郎をいふ。

【本圖ニ背違ニ不レ称ニ名節ニ】 本來仕官して圖遂せんことを欲り、圖遂して名節を以て自ら称らんとの心にはあらずとの意。

【圖遂】 孝養を圖して遂く祖母に離るるをいふ。

【烏鳥私情】 反哺の孝ある烏の如き區區たる一身の私情をいふ。文選註に「烏烏反レ哺其母ニ言我有ニ此烏烏之私情ニ乞レ畢ニ祖母之養ニ也」

【二州牧伯】 「二州」は梁州・益州をいふ。「牧伯」は前の太守夏侯と、後の刺史の顧榮とを斥す。

【皇天后土】 天地の神祇なり。皇と后は大なり、尊びていふ。后土は土の神なり。會昌、武成に「底ニ商之罪ニ告ニ于皇天后土所レ過名山大川ニ」とあり。

【結レ草】 死して恩を報ゆるをいふ。左傳、宣公十五年に「魏顆敗ニ秦師于輔氏ニ獲ニ杜回ニ秦之力人也。初魏武子有ニ嬖妾ニ無レ子。武子疾、命レ顆曰、必嫁レ是、疾病則亂、吾從ニ其治ニ也。及レ卒、顆嫁レ之曰、疾病則亂、吾從ニ其治ニ也。及ニ輔氏之役ニ顆見ニ老人結レ草以抗ニ杜回ニ杜回躓而顛、故獲レ之。夜夢レ之、曰、余爾所レ嫁婦人之父也。爾用ニ先人之治命ニ余是以報」とあり。顆は晉の大夫の魏武子の子なり。亂は正氣を失ふなり。治は正氣なり。「結レ草」は地上の草を結び合するなり。

【犬馬】 長れ入り、謙遜する辭なり。文選註に「史記丞相衛青

日、臣不レ勝ニ犬馬心ニ」とあり。

【拜表以聞】 謹んで表を上りて申し上ぐることなり。「以聞」は天子に申し上ぐること。「イブン」と讀む。

第一段、已と祖母と相愛ひ相依りて離るべからざる由を陳ぶ。

第二段、朝廷の召命を以て自己の逼迫苦だ離き事を述べ、固して苦衷を訴ふ。

第三段、朝廷の厚恩を乞ひて、自己の名節に称らざることを言ふ。

第四段、祖母を養ふの日は短く、國に報ずべき期は長きを述べ、孝養を終へんことを哀請す。

【臣密】 臣の文章表啓、同句老成。每不レ見レ棄ニ於大方家一者、以二一言之失一也。時レ此同類ニ全文。同学心服矣。

【前二日】～【前後同文】 二日、三日。何處者ニ一字称謂ニ。

(一) 解釋を要せじ

(二) 子路負米

【本論ノ陳情】 次に因みて、子路の至孝の行爲を記したる文を挙く。新の文は孔子家語より拜求に轉載したるものなり。

【負レ重渉レ遠、不レ擇ニ地而休。親老家貧、不レ擇ニ祿而仕】 重荷を背負うて遠方に赴き、疲勞せる時は、何所といふ事なく休息し、親老い家貧なる時は、祿の多少を問はずして仕官すとの意。こは當時行はれたる成語ならむ。されば最後の仕の字は「アカフト」と讀むべし。子路此の語を挙げ、我も其の頃が寒はしとの意なり。

【全ク總體ニ】 「アカダ」と「マメ」との實を食ふこと。

【遊】 他國に往きて仕官する義。

【往事】 幼少の事。

【積栗百鍾】 栗は穀米、鍾は六斛四斗。倉に積み備へたる穀米は數百斛ありとの意。

【養レ思】 追慕の情を盡すこと。

【列レ鼎而食】 鼎は鯛の一種。兩耳三足の器。多くの珍味を食する義。

【盡レ思】 追慕の情を盡すこと。

(一) 前先行の和歌要求は、要求を圖文に擧し、一幅毎に和歌を附したり。今、和歌のみを左に挙げむ。

たらちねの母は心の闇なれば
夜の間に迷る物かな

又、加納諸平も之を和歌に詠ぜり。左の如し。

笑よはははゝそしかばの歌こそ
未にもまさる孝行なりけれ

三九　五古二首

一、慈烏夜啼

題意　この時、慈烏の其の母を失ひて、哀音を吐くを聞き、以て烏中の曾参と為し、人の孝心無き者を反省せしむ。白氏文集巻一及び古文眞寶五言古風長篇の中に出づ。

語釈　【慈烏】烏の反哺するものを言ふ。爾雅に「慈烏曰二孝烏一。長則反二哺其母一。大雅烏否」和訓栞に慈烏「サトガラス」と。【啞啞】烏の啼く聲をいふ。淮南子に「烏之啞啞、鵲之喜喜」と。【反哺】哺は食を口中に含むなり。親に報いて親に食はしむるを反哺といふ。本草に「慈烏一名孝烏。此烏初生、母哺六十日、長則反哺六十日。可レ謂二慈孝一矣」と。【任】「クフ」と訓む。【吳起】周の衛の人。曾て曾子に學ぶ。其の母死すれども家に帰らず。曾子之を絶んじて絶つ。起乃ち身に往きて兵法を學ぶ。【曾參】史記、仲尼弟子列傳に「曾參南武城人。字子輿。少二孔子一四十六歳。孔子以為能通二孝道一。故授二之業一。作二孝經一。死於魯一。」と。魯中にも亦此の孝烏あり。故に曾參を以て比す。

評釈　慈烏あり、其の母を失ひ、思慕して哀しき音を出して啼き、常柄を去るに忍びず。年を經るまで故林を守りて、毎夜夜半に哀しく啼く。聞く者は、爲に涙を堕して襟を沾すなり。其の啼く聲の中に、未だ反哺の孝養を盡さずして母を失ひしことを悲しみて告げ訴ふるが如しと。百鳥以下は詩人の慈烏を賞美する辭なり。凡百の鳥、孰れか母なきの鳥あらむや。就中獨のみ獨り母を哀痛思慕するの情深し。想ふにこれ獨が母の子を養育するの慈愛重かりし爲に獨をして悲しみの情に任へざらしむるなるべし。吾吳起は一たび國を去つて他國に遠きてより、母歿しても歸りて喪に臨弔せず。哀しい哉、此の如き聲の人は、人の人たる道なくして、其の心は禽にだにも如かざるなり。慈烏また慈烏と再び呼びかけて歎美して曰く、獨が孝心の深きことは、烏の中の曾參と謂ふべきなりと。

二、燕詩示劉叟

題意　白居易　字は樂天、詩を以て鳴る。唐の元和の進士たり。左拾遺より江州司馬に貶せられ、後主客郎中に入り、刺

【引上鹿機枝】…親鳥が引率れて巣の前の鹿機に登らしむるなり。

【鳴喈】 小鳥の哀しみ鳴く聲。一に「鳴嗈」に作る。禮記に「至二于燕雀一猶有二鳴嗈之頃一焉」

【燕燕】 古人重言していふの例多し。篤重きなり。詩經に「燕燕于飛」

【顧當反自思】 汝振返つて同じく縁たりし時の事を思ふが至當なり。決して悲しむ勿れとなり。

【今日聞應知】 今日始めて「子を持つて知る親心」を覺るなるべしとなり。

序にいへる如く、一老翁に愛子ありしが、命を棄てて出奔せしかば、翁は甚だ之を悲しめり。されども此の翁も已の少年の時、亦逆れと同じく親を棄てたることあり。要するに已の不幸を見做ひたるなれば、深く悲しむを用ひず、寧しく自ら反省すべしと、燕を借りて諷ししなり。まて最上に唯燕二羽の燕ありて、時時飛びおりでは泥を銜み、雛後の間に巣を營み、巣の中に四羽の雛を生ぜり。其の雛は日夜に生長して食物を求むること切なり。まて雛の口は何を與へても與へても飽く時なく、常くて飛ぶべき青鳥は容易に捕へられず。晴も雨も風に弄れむとしても、雛の爲には必力の衰るを知らず。

青くの間に千度も往來して、食を探し求むれども、翁勝の巣の中に飢えんことを恐るるなり。青くの如く辛苦して諭むること三十日に及び、毛鳥は疲せて、聲は細く聞えぬ。更に喃喃と言葉を教へ、一一羽毛を吟ひ整へ、一旦羽翼成りて引き連れて庭の樹の枝に上れば、聲は嘆を挙げて調みもせず、風に任せて四方に散じ去りぬ。燕雀の親燕は空中に鳴き、夢のかるるまで呼べども聲は聞り來らず。却つて空虚となりし巣の中に入りて、終夜悲しみ鳴きぬ。されど開燕、燕よ。かくまで悲しむこと知れ開言に反りて自ら省み思ふべし。思ふに開が嫁にてありし日に、高飛して夢に青きし其の當時の開の父母の悲しき念は、今日開嫁に來し知るべし。要するに曾子が「開に即づる者は開に反る」といひし開言の理に外ならざるなりと。

【張守珪】 陝州の人。開元中、瓜州刺史と爲る。突厥來り襲ふ。守珪城上に置酒し、諸將を會して樂を作す。突厥その備あるを疑ひ、攻めずして去る。守珪兵を縱ち、擊つて之を破る。因つて名大いに著る。幽州大將軍に累官す。事に坐して招州刺史に貶せらる。疽背に發して死す。

【執散軍將安祿山一經二京師一】 初め守珪、平盧討擊使安祿山を愛して笑・契丹を討たしむ。祿山勇に誇りて輕進し、大いに敗を取る。守珪軍律に照して之を斬らむと欲す。祿山叫んで曰く、大夫(守珪を指す)笑・契丹を滅ぼさむと欲せば、祿山を措いて古より朔鮮及び我國に侵來して害く愛聞せらるる所なり。要するに漢天は將軍と共に中唐文事を振興したる大家なり。會、三二篇に出せる佛を參考すべし。

安史の亂

安祿山・史思明の亂を授け、顏杲卿・顏眞卿・張巡・許遠等の忠烈を知らしむ。

【幽州】 古の十二州の一。今直隸省北平附近の地。

【節度使】 高宗の永徽以後より都督の使持節を帶びる者をいひ、其の兵を方鎭といふ。遂に備へ夷狄を經略するを掌る。

共の人無きなりと。守珪この言に感ひ乃ち軟へて京師に送り、朝廷の裁断に任す。

【安祿山】 唐の営州柳城の胡なり。初の名は阿犖山又軋犖山。母に従つて安氏に適き、其の姓を冒し、名を祿山と改む。玄宗の時、平盧・范陽・河東の節度使と為り、深く帝貴妃に結び、寵遇比なし。天寶の末年、兵を挙げて反し、洛陽を陥れ、長安に逼り、系帝と称す。玄宗皇帝、蜀に幸して之を避く。祿山、後、其の子慶緒の殺す所と為る。蓋し天罰と謂ふべし。

【張九齢】 唐の曲江の人。字は子壽。進士を以て左拾遺に累官す。玄宗生誕の日、千秋金鑑録を進めて諷する所あり。後相と為るや、得失を極言し、巨人を推引し、大いに功あり。既にして李林甫の厄する所と為り、罷めて家居す。卒する後、天下稱して曲江公と為し、名をいふものなし。洵に唐代屈指の名相たりしなり。

【批】 他文の末尾に意見を添書きすること。唐代制敕に不便のことあれば、黄紙(敕を書ける紙)の末に批すること綱目の註に在り。

【上皆以其才勇】 玄宗皇帝その才と勇とを愛しむとなり。

【有反相】 謀叛の相ありとの義。

【営州柳城】 営州は古の十二州の一。今の直隷省朝陽府附近の地。柳城とは胡人の営州の案内に属するもの。

【琢郡遷安氏】 母は突厥人にして阿史徳といひ、巫なり。父は突人にして姓を康氏といへり。母、祿山を生む。康氏の死後、母再び安延偃に嫁せり。

【後、部落破散逃來】 後、営州の胡人の部落破れて、散り散りになりし時、祿山は安氏の子の思順と倶に営州に逃れ来りしとの義。

【狡黠】 悪智慧あつて、かしこく立廻ること。

【平盧】 本註に、「城在二漁陽一」とあり。漁陽は今の直隷順天府薊州治。

【傾巧善事レ人】 交際上手にして、うまく人を取成すこと。巻の字甚だ好し、能の字にてはここに適せず。傾巧は頭註を見よ。

【上左右至二平盧一厚賂】 帝の近臣、平盧に出張すれば、それ等に厚く賄賂を致せりとの意。

【三載】 天寶二年までは、年の字を用ひしが、三年より改めて載といふ。年は禾の熟する名。禾は一歳に一度づつ熟するより歳の名となれり。載は始なり、物の終つて更に始まるの意より歳の名となれるなりといふ。詳、頭註を参看せよ。

【楊国忠】 初の名は釗。後、今の名を賜ふ。楊貴妃の従兄。

少くして酒を飲み賭博を好み、細族に拘せられず。従父元琰、蒲州に死す。国忠其の家を籠り、鉢巻国夫人に通ず。玄宗の時、御史より宰相に進む。浮薄にして行檢なし。安祿山寵あり、国忠其の己の上に出づるを悪み、屢〻其の罪に反せむことを言ふ。祿山果して反し、帝蜀に奔る。陳玄礼軍士を率ゐて国忠を馬嵬山下に殺せり。

【左僕射】 僕射は尚書省の長官。唐宋の時、左右僕射は、宰相の任と為り、天子を輔佐して大政を議せり。之を僕射といふは、古武を挙び、射を主りて課を考することありしより起る。

【所部兵】 共の支配なる河東・范陽・平盧の兵をいふ。

【奚・契丹】 奚は種族の名。即ち今の匈奴の一種にして、今の東蒙古に居を占めたり。契丹は国名。東胡種族にして今の吉林省天地に住せり。

【歩騎相続】 歩といひ、騎といへ、共の兵精、共の統制しとなり。

【領蕃子弟】 人馬勇み進んで、留まる者無し。千里駆え聞なしとなり。

【兵革】 兵は、武器。革は甲冑。戦争の意。

【望レ風瓦解】 望レ風は、勢源に「仰二徒風勢一也」とあり。噂、様子等を聞いて自然にばらばら散ること。瓦解は、瓦の散るが如く、物のばらばら散乱すること。漢書、主父偃傳に「天下之患、在二於土崩一不レ在二於瓦解一。」とあり。

【太守】 地方長官の名。我が国の県知事に同じ。漢書、百官公卿表に「郡守秦官、掌レ治二其郡一。秩二千石。景帝更二名太守一。」

【顔真卿】 唐の臨沂の人。字は清臣。玄宗の時、平原の太守と為る。安祿山反するや、率先義を唱へて之を討つ。徳宗の時、刑部尚書に進り、魯国公に封ぜらる。徳宗の時、李希烈反を謀る。真卿命を奉じて之を諭し、其の殺す所と為る。文忠と諡す。楷書草書を善くし、筆力雄渾秀抜、後世以て師法と為す。

【河北】 唐の河北道は、今の直隷に山東の西部河南の北部を合む。

【二十四郡】 玄宗の時、州を改めて郡とす。河北道は二十四の郡を領す。

【曾】 「不レ料耶」と註す。思ひもよらぬといふ意。「スナハチ」と訓むも「カツテ」と訓むも同じ。

【辰不レ論二真卿何状一】 辰は真卿なる者は、如何なるものなるか、全然知らずとなり。

【顔杲卿】 字は昕、真卿の族兄。玄宗の時常山の太守となる。祿山反するや、兵を起して之を討つ。常山陥りて賊将史思明

に捕へられて洛陽に送らる。睢山其の已に反せるを覚む。果して仰薬然として曰く、われ国の恩に浴を討つ。汝を斬らざるを恨む。何ぞ反すといはむや。睢陽豎何ぞ速に我を殺さざると、睢山激怒、之を天津橋柱に縛す。果頭屠りて止ます。脱して其の舌を断して曰く、復た能く罵るや否やと。遂に死す。貞に忠臣といふべし。

【姓名明】 初の名は雄干。玄宗今の名を賜ふ。唐の宰州の亮にして、突厥種。即ち睢山と郷里を同にうす。果官して大将軍に至る。睢山反するや、思明之に従ふ。睢山其の子慶緒に殺さるるや、思明慶緒を殺して燕帝と称す。未だ幾ばくなら子して亦其の子の為に殺さる。睢山・思明共に其の子に殺さる。天道豈に狂ならむや。

【皇三英及已】 果物の雷山の太守となれるは、睢山の推薦に因れればなり。皇は其の罪を一千列挙して責むること。

【睢陽翁】 睢は睢なり。匈奴貴族は吉類の肉を常食とするよりしか言ふ。翁は胡の尊名。三字を連ぬればなほさゐ男の匈奴との意。睢山は雷州の維初なれば、此の罵言甚だ痛快。

【翁】 雷ハクツ属に作るものあれど、乃を正しとす。人の肉を咬き取りて雷に至るなり。睢測慨まる刑。

【比之死】 「死ニオヨブマデ」と訓むべし。

四〇 張中丞傳後序

【張巡】 張巡と張巡伝を読むに従りて、巡・許遠・南霽雲等に関する当時の傳説浮説を駁し、以て其の誤を明かにす。生徒をして能く是等忠臣の行事を記し、忠誠の念を涵養せしむべし。

【張中丞】 張は姓、中丞は官名（御史臺に大夫・中丞等の官あり）、名は巡、鄧州南陽の人、博く書籍に通じ、戦陣の法を暁る。志気高邁にして、節節を略す。交る所、必ず大人長者。開元の末、進士の称に擢でられ、清河の令となり、其徳の令に聞す。安祿山の反、巡吏士を率る、玄元の廟に哭し、兵を起して賊を討ち、睢陽に至り、太守許遠と合す。睢陽を固むること四十日、城陥り囚せず、遂に害に遇ひ、南霽雲等と死する者三十六人なり。詳しくは旧書等の一百九十二、旧唐書の一百八十七の下の忠義伝を見よ。

【後序】 文題明弁に「凡例傳子史諸文題書之類、前有序・引、後有・後序・可レ謂二叙事一矣」所の篇、幸神の著せる張巡伝に対して、已の所見を述べ、以て其の誤を補ひ、当時の傳説浮説を

【雷巡】 唐の南陽の人。開元の末の進士。官真源令に至る。睢山反するや、吏民を率ゐて老子の廟に哭し、兵を起して賊を討ち、雍邱に至る。直ちに賊陣に迫り、大小三百餘戦、賊遂に敗走す。後、許遠と共に睢陽に據り、御史中丞に拝せらるも城陥りて殺さる。張巡の事蹟は人の多く知る所なり。且つ三二誤謬中丞後序にも見えたれば、今茲た贅せず。

【玄元皇帝】 十八史略、高宗紀に「乾封元年、上封二泰山一至二亳州一謁二老君一号二太上玄元皇帝一」とあり。尚頭註を参看せよ。

【睢陽江・淮之保障】 睢陽は江淮（長江淮水間の地方）地方のかこひなりとの意。保障は保護障蔽の略にして、かこひのこと。

【蔓延】 遠くまで敵を追ひかくる義。

【蟻聚】 蟻を聚めて捕ふること。

【国恥】 虜れ果つること。

【鼠輩】 鼠は浮ばれやしてたたりをなすこと。鬼は死霊。頭註を見よ。左傳、昭公七年に「今夢二黄熊入二于寝門一、其何鼠鬼也」

【張巡】 字は文昌、和州烏江の人なり。進士に第し、時事の論に依りて国子博士と為り司業に遷る。左僕射を以て致仕す。旧書、巻百八十五に其の傳あり。ここに張巡の字を出せるは、前来の張巡云の三字を伏す。尚文章執戟に倣の「代二張籍一与二李浙東一書」を読す。教授者必ず一読すべし。

【李翰】 李華の子、張巡の友なり。睢者、巡が睢陽を守りて去らざるを罪す。翰為に傳を立て上表して世に天下を全うするの功を称す。是に於て衆議始めて已む。（備考参見ㇾ）官左補闕翰林大学士と為り、大歴中病みて免ぜらる。新・旧唐書巻二百三、文藝傳を見よ。尚、翰は、雷に倣に作るべし。

【自名】 「ミヅカラ名ヅク」と読む。自ら文章家を名のる義、自命と同じ。一説に「オノヅカラ名アリ」と読み、自然に文章家たる名ある義とす。今、従はず。

【許遠】 杭州盧官の人。吏治に明かなり。睢山の反、召して睢陽の太守に拝す。大厦中、巡の子去挨、上書していふ、遠、国恩を負戻し、巡の功業を堕敗せしむ、請ふ遠の官爵を追奪せむと。聴されず。

【不ㇾ識ニ雷萬春等首尾ㇾ】 雷萬春は遠に事へて歸附と爲る。今其の弟は帶話なり。

【歸服】 罪を認びて降服するなり。

【號孽嫡子之援】 大將と嫡の子となり。「號孽」は大なる嚆。禮記曲禮篇に「號孽大喪」とあり。疏に「嫡大者、別名ニ——ニ」嫡一四種の援兵もなきこと。

【號諭以ニ國亡主滅ニ】 號將令狐潮が書を張巡に與へ、玄宗蜀に幸せし故、降を勸めしを言ふ。貞治通鑑に曰く「令狐潮圍ニ張巡於雍丘ニ相守四十餘日。朝廷警問不ㇾ通。潮聞ニ玄宗已幸ニ蜀、復以ㇾ書招ㇾ巡。有ニ大將六人ニ官皆開府特進。以ニ兵勢不ㇾ敵、且上存亡不ニ可ㇾ知、不ㇾ如ㇾ降ㇾ潮。巡謂許遠、明日堂上、設ニ天子畫像ニ、輔ニ翼士ニ朝ㇾ之。人人皆泣。巡引ニ六將於前ニ、責以ニ大義ニ斬ㇾ之。士心益勵」とあり。但し此の事たる、同書及び唐書に據れば、巡が雍丘に在りし時のことにて、睢陽の時のことに非ず。新の文によれば、睢陽に於いても亦勸降のことありしものか。疑意の誤謬とは思はれず。

【外無ㇾ待而死守】 死守は死を期して城を守ること。外には救援の待つべきなくしても猶死を以て城を守るとなり。

【人相食且ㇾ盡】 人相食は、妻妾や奴を食ひ、更に城中の婦人を殺して食ひしこと。新くして人人且に盡きむとすとの意。悲

慘倍倍の極といふべし。

【數ㇾ日前知ニ死處ニ矣】 「數」は計なり、日を計へて守る「所」の地は、これ死する所の地なるを知り、他の望あることなきなり。守りし時の死を長れざるを以て、その執へられし後の、必ず死を長るる心なきを斷ずるなり。

【烏有、城機其徒俱死、獨蒙ニ詬恥ニ求ㇾ活】 「其徒俱死」は、前の自縊文の結末の張巡、南霽雲等三十六人皆殺されたることをいふ。烏んぞ城は既に破壞し、其の同志の徒は俱に死したるに、遠のみ獨り勝と爲ることを甘んじて、恥を蒙りて活くることを求むるあらむや、決して無しとの意。「烏有」は反語にて、「城機」より「求ㇾ活」までを否定するなり。ここ冷語悪罵。注意すべし。

【嗚呼、面縛ニ遠之質而爲ニ之辭ニ】 面は「シカルニ」と訓む。ここは降虜を要せじ。此の句、許遠・張巡の子弟が二父の志を知るや否やして、巡は死して、遠の降に就きしは死を長れて賊に降服するを是ふの非なるを斷ず。沈德潛曰く「以上詳辨ニ許遠ニ降ニ李嗣業所ㇾ未ㇾ及ニ」茅坤曰く「以上張巡ニ許遠之罪ニ遠者ニ感而直ㇾ之。以下總辨ニ入張巡ニ益論ニ本末ニ」

【說者】 世の說くものといふこと。

【城之將自ニ遠所ニ分始】 賊兵の遠が分ち守りし處より城に入りしをいふ。

【以ㇾ此語ㇾ遠】 「語」は言なり。城の陷るを以て罪を遠に歸し、罰をして之がために命を立つること能はざらしむるに至る。

【人之將ㇾ死、其藏腑必有ニ先受ニ其病ニ者ㇾ】 人の死なむとするや、其の藏腑中に、必ず先づ其の病を受くることありて然る者にして、何事もなくして突然死する者に非ずとの義。

【引ㇾ鏡前照ㇾ之。其鼻必有ㇾ異】 又二人あり、左右に立ち、一本の鏡を引きて之を照ち切る時は、其の鏡の照ゆるに必ず其の處ありとの義。

【觀者見ニ其然ニ從前尤ㇾ之。其亦不ㇾ遠ㇾ於ㇾ理矣】 觀る者は、其の然る、卽ち人の死すると鏡の照ゆるとを見て、其の先づ病を藏腑中に受くると、人の鏡を引きたるとを問はず、其の死し又照えたるに從つて之を尤むるは、其れ亦道理に遠せざる者なりとの義。面して時に城の陷るは賊勢は日に强大にして、我が軍の日に衰弱するに由るにて、決して遠の罪に非ざることを言ふ。

【小人之好ニ譏論ニ不ㇾ樂ㇾ成ニ人之美ニ如ㇾ是哉】 成は成就するなり。「如ㇾ是哉」は「是ノ如キカナ」と讀むべし。卽ち哉を感歎と見るなり。此の句は論語、顏淵篇の「君子成ニ人之美ニ不ㇾ成ニ人之惡ニ。小人反ㇾ是」より出でしものなるべし。

【如し此者之所ㇾ成就ㇾ如ㇾ此云云】此就ㇾ上ㇾ二公之成功名之句ㇾ而反ㇾ此云云也。【雖ㇾ然】雖ㇾ然ㇾ此ㇾ者、猶ㇾ言ㇾ雖ㇾ如ㇾ此ㇾ也。【其能知ㇾ人之卒不ㇾ救ㇾ城而遽遁ㇾ之】「ナンゾ能ク人ノ卒ニ城ヲカヂルヲ知リ、城ヲ棄テテ走ル遽ニ遁レンヤ」と讀む。卒は遽遁ま[illegible]を否定す。遽は驟なり。倉卒なる張巡の歸の結末二句を見ても、最初援兵の來るを待ちし意を察すべし。【創痍餘喘】「創痍」は戰ひて傷つきそこなはれたるもの。「餘喘」は息なくしてうごめつかれたるもの。【二公之貴其ㇾ能ㇾ守ㇾ之精矣】著註に「當時必有ㇾ謂ㇾ二公當ㇾ去之ㇾ大夢ㇾ而守ㇾ之、不ㇾ計ㇾ守ㇾ能與ㇾ否、以自固ㇾ者、故并論ㇾ之」とあり。【得ㇾ天下ㇾ心】得は助辭なり。天下の敵を防禦する意。【以ㇾ千百說ㇾ卒之卒、戰ㇾ百萬日滋之師ㇾ】僅かに千人か百人の弱兵、而も日に死に近づき行くものを提げて、百萬人の大敵、而も日に增加し行くものと戰ふとの意。對照法だ妙。人をして慷慨たらしむ。【遽ㇾ遁江淮ㇾ云云其難之功也】遽遁に「城中全盛、讒ㇾ棄ㇾ城東走」「張巡・許遠棄ㇾ城而遁」「城必乘ㇾ虛長驅。是無ㇾ江淮ㇾ也。且我衆鬪氣走必不ㇾ遽云云」とあり。沈德潛曰く「若當日無ㇾ二公死守、江淮以下俱爲ㇾ賊有、李郭亦難ㇾ收ㇾ功矣」【沮遏】妨止といはんが如し。【遽ㇾ張兵】張兵を手に持ちながらの意。【亦見ㇾ其自比於逆亂ㇾ設ㇾ淫辭ㇾ而助ㇾ之攻ㇾ也】「見」は作者が見るなり。「其」は論者を斥す。「比」は傚り集するなり、「淫」は放蕩なり、「淫辭」は姦辭と同じく、邪なる議論。「助ㇾ之攻」とは、城の二公を攻撃するを加勢するの意。以上張巡の戰ひ守りは、遽と逃と城を分ちて守りし違にあらざるを辨ず。遽を讒する人を把りて、一たび之を斥けて兒童と曰ひ、再たび之を斥けて小人と曰ひ、三たび之を斥けて逆亂といふ。一層は一層より累し。すべて遽が偉の言に補ふべきを言ふ。顧山陽「守ㇾ一城ㇾ捍ㇾ天下ㇾ」より「設ㇾ淫辭ㇾ而助ㇾ之攻ㇾ也」までを評して曰く「大聲一鳴、聾ㇾ衆口ㇾ而奪ㇾ其氣。見ㇾ比ㇾ逆亂ㇾ設ㇾ淫辭ㇾ助

句訓頗痛快。是韓公本色。此ㇾ史遷ㇾ「其筆ㇾ生氣」ㇾ也。【是事於汴徐二府ㇾ】「是事」は首名。是皆なり。「汴」は河南汴州府。「徐」は江蘇省徐州府なり。倉卒間に事へ、汴州の度推官となる。張建封に事へて、徐州節度推官と爲る。汴・徐二府は共に唐の河南道に屬す。【適】由なり。往來なり。【貞觀】當時號して、遙に前州大都督を踏り、曾輩を壓倒に立て、歲時祭を致す。號して貞觀といふ。【其老人往往說ㇾ巡遠時事云云】其の地の老人は往往巡遠の時の事を話せり。其の話に云くの意。云の字、沈本及び古文眞寶には、時事の事字に句をなして、云字を下句に連ねて讀めり。八家文精選・韓文起・古文眞寶には、云字にて句を施して上句に屬せり。儒者案ずるに、上句に屬するも可なれど、下句に屬する方、老人に據して、聽あるが如し。今、姑く下句に屬せむと欲す。【南霽雲】前州睢丘の人なり。步くして千餘里なり。睢山の反すること、人の傳に見えて遠を見る。還いて曰く、張公心を開き人を待つ。其に非ざる所なりと。遠に曾る、巡圍を被り、十萬を衆うて萬死一生の書を募る、數日戰て勝つ者なし。倘にして、暗鳴して來る者あり、乃ち睢遠なり。

【賀蘭】名は進明、時に臨淮に守たり。【靡從】擧名威望。【不ㇾ肯ㇾ出ㇾ師救ㇾ】不ㇾ肯は「ガヘンゼズ」と訓む。承知せぬこと。此の句上文の「擅ㇾ强兵ㇾ坐ㇾ觀ㇾ成ㇾ敗者」に應ず。【明】「クヤ」なり。食物を進ずる所をいふ。氣息の通ずる喉と異なり。【浮圖】說文に「浮ㇾ屠」。塔は梵語窣堵波なり。ここは「タフタフ」と呼す。【以示ㇾ賀蘭ㇾ】史を按ずるに、雲、賀蘭に謂つて曰く、雲既に主將の意を通ずること能はず、請ふ一指を留めて以て信を示して歸り報ぜんと。蓋し圍の兔に身を委せざるに因る。猶ほ申包胥が秦の廷に立ちて哭し、勺水口に入らざるが如し。敵を空むの切なるなり。勇壯の最も甚しきを見る。【佛寺浮圖】浮圖は寺塔なり。又僧者なり。ここは寺塔の意。【矢盡ㇾ其上數ㇾ寸許ㇾ云云】鏑鏃を要せじ。「一說に音鏃破喉云云」の十四字を以て、半截の篇中に寫在して記と爲す。口宣せしには非ざるなりとなすあり。されど口宣と見る方、勝負なるが如し。志は「シルス」、後日の記念なり。「上數」は塔上の「カハラ」なり。「日晉鄴云云」の十五字勇壯絕倫。【貞元】德宗の年號。

【河州】　唐の河南道の州名。今の安徽省の鳳州。

【諱道因相繼】　諱は上の天の字をし給を指すなり。以上は諱道が跡を乞ひし事を述ぶ。「高貴元年」より「諱道因相繼」の十五字、皆ち自己を神な。前の條の傳を開ひて、儒教を敬ふ体五に現に自己が實見したる意味を以て其の事の虚ならざるを示すなり。此の法は後れに在りては史記中に毎毎之を見る。我に在りては日本外史の論文中往往之を用ひたり。

【南八、男兒死耳】　諱道は南氏の家に於て、第行第八に在り。故に南八といふ。男兒は丈夫なり。之を誡するの辭。

【我ト將ニ以有ラ爲也。矣有レ言。雖敬不レ死】　我は少々考ふる所あれど、（我國の策を工夫せむとすること）公が新く制注等ある以上は、雖何ぞ死せざらむや。必ず死すべしとの意。

【卻不レ肯】　以上諱道が部に死せし始事を述ぶ。二の始事は、諱道會が汴・徐の老人及び開府の僚上の人より聞きしもの。

【是歲冬日】　この歳、張巡が于光に開きし所によりて巡の始事を載し、時の未だ及ばざる所を補ふ。

【大曆】　代宗の年號。

【以道初】　巡の下、道字を補ひ、「以二道德一」の意に解すべし。

【能決疑辭】　能決は唐の河南道商州に屬す。今の安徽省鳳陽府商州の屬州に在り。時は盛なり、所を誤まて民を擾め安んずる意。

【許レ能決レ所レ不レ能】　能辭を重ぜじ。此の句も、上の「得二能決一」と同じく、「能決」にも、共に于巡の事を敘するなり。誤解する勿れ。

【能事】　能決の職務(字ハ去聲)に當す。班固は安徽の人、仕へて河南の令史と爲り、永平中明帝の詔を受け、漢書を作る。固晩を惜め夙を積むこと二十四年、建初中に至り漸んと成る。高祖に起り、王莽の誅に終る。紀・表・志・傳を爲る、凡そ百篇。而して八表天文志未だ竟へやして卒す。和帝、固の妹昭に詔して續ぎて之を成さしむ。其の體例、史記より整齊すと雖も、文章の雄活は遠く之に劣れり。

【誤】　誤るなり。

【暗中】　むやみに搶き出すこと。

【衣物】　帙は書衣、即ち書物を包む被なり。ここは搶書の佛候のこと。

【笑】　書架。

【僧二萬人一】　僧は近に還す。柳子厚の海譯師碑に「佛之生也、逢二中國一僧二二萬里一。其沒也、距二今茲一僧二二千歳一。」と同じ。又、「ボトンド」「ボッソ」等の訓を施し、訓詁に取扱ふものあり。亦通ず。

【且將と發】　「マサニマサニ發セントス」と訓む。且と將との重複、意甚だ重し。

【起座】　「座」は後世するをいふ。左傳、定公三年に「裏糾結(人名)座」とあり。ここは刑戮に就く用意に小便したるなるべし。

【哀哭泣】　起つて之を哀し、泣いて之を哭むなり。

【諱謂加二平常一】　諱謂は自得の統。又平氣の統。真に命を知る者と謂ふべし。以上曾子嘗が言ひし所の巡の始事、輪が尊に未だ曾て聞せざる所なり。

【統加二其心一】　事統も、其の心の實際(實大通厚)なるが如く、統におとなしく和ぎたりとなり。

【死時年四十九】　此の一句を以て張許二公を合併して之を敘む。何等の妙筆。漢文を作るもの此の敘法を知らざるべからず。

【諱ノ州從理】　州の役所に至り、職務して事を理めむとすとなり。

【張鎬云】　「嵩貞元初」より「嵩無レ子」までは張鎬の言なり。此の三字を以て上文の「張鎬曰」に應じ、更に遠かに起首の「吳郡張鎬」の字を回顧す。これ起筆の法。何等の妙。

【其之初前後其下】　「之ニ初ヲ」「之ヲ初ヲ」の相違に注意せし

【何苦】　「何」の「何ゾ」「何ヲ」と訓する異同を辨ぜしむ。

【著二其上第一半筒日】　「半筒」を上句に附するものと、「半筒日」と下句のものとするあり。其の文意の相違を考察せしむべし。

【爲レ所レ殺】　「爲所」の間に來るべき語を補填せしめて、受身の形式を完成し、「何ノ爲ニ殺サル」「何ノ殺ス所ト爲ル」の訓讀あることよりして「爲所殺」の兩樣の訓讀をなさしむ。

諱註參照。

井西仲曰く「諱謂は今の師範所(河南省)と爲す。李翰乃ち巡の女人なり。讀者巡が諱謂を守りて去らざりしを評し、其の人を食はんより甘し、人を食うするに易者その說あるに因り、故に當に傳を作り、表して之を上り、進んにその天下を全うせし功を稱し、而して來識始めて見みね。これはその傳中に聞くる所あるに因りてその後に序するなり」と。

【諱謂加二平常一】　諱謂は自得の統。又平氣の統。真に命を知る者と謂ふべし。以上曾子嘗が言ひし所の巡の始事、輪が尊に未だ曾て聞せざる所なり。

【統加二其心一】　事統も、其の心の實際(實大通厚)なるが如く、統におとなしく和ぎたりとなり。

【死時年四十九】　此の一句を以て張許二公を合併して之を敘む。何等の妙筆。漢文を作るもの此の敘法を知らざるべからず。

【諱ノ州從理】　州の役所に至り、職務して事を理めむとすとなり。

【張鎬云】　「嵩貞元初」より「嵩無レ子」までは張鎬の言なり。此の三字を以て上文の「張鎬曰」に應じ、更に遠かに起首の「吳郡張鎬」の字を回顧す。これ起筆の法。何等の妙。

【其之初前後其下】　「之ニ初ヲ」「之ヲ初ヲ」の相違に注意せし

守睢陽作

本篇の文に連絡して、雲濤が睢陽城死守の時の作をあげ、其の忠義の氣の凜然たるを知らしむ。

【孤城】 救援なくして孤立せる城。

【月暈】「暈」音「ウン」、月が周圍の水蒸氣の光を受けてかさをなすを云ふ。

【魚麗】 陣の名。陣形扁くして、少しく長く、魚の附麗して進むが如き故に取る。「左傳、桓公五年に「爲二魚麗之陣一、先二偏後一伍、伍承レ彼」」

【白刃】 白刃鳴なり。短兵亮、司馬錯と前後に戰ふや、白刃鳴を持して三軍を指揮す。柔軟其の進止に關ふとあり。

【裹創】 創をうけては之をつつみてなほ陣に出で、血を飲みて氣を忍びながら城のひめがきに登りて賊を拒ぐをいふ。

賊と抗戰して春來關苦の中に此の城を守り、救援なき此の孤城は日一日に危くなれり。賊軍の包圍することあたかも月の暈の如く、我は野道と城を分ち守ることさながら魚麗の陣を立つるが如し。是、賊勢の盛にして貴軍の起るを厭ひ、白刃鳴を以て之を挫かんことを力め、而して兵を指揮せり。かくて創をうけては之をつつみて猶ほ出陣し、血を飲み、氣を忍びながら、城のひめがきに登りて賊を拒ぐ其の忠節の眞心には感ずること無く、我が誠實なる忠眞の心は賊に固くして抜し難き勢ひとなし。されどこの苦戰の狀を天子に報ずる術なし。されば我が心中の計畫も遂に施す所なかるべしとなり。

此の詩五言排律にして上平「文」韻を用ふ。

四一 弔古戰場文

李華 字は遐叔、趙州の贊皇の人。少くして博通、進士博學宏詞の科に中てられ、官、吏部員外郎に至る。晉て宰相を排斥す。安祿山の亂に當り、文宗朝に奔りし時、華母を棄して以て過れ、從の爲に幷せ得られ、僞陽令人に僞著せらる。華自ら節を完うする能はざるを愧み、江南に歸居す。大曆の初に卒す。詳しくは、唐書、列傳百二十八、文藝傳を參看すべし。

極力戰爭の悲慘惨憺を說き、結末「守在二四夷一」の一句に至りて、主旨を發揮し、唯當に守るべく、當に戰ふべからざるの意を見はす。

【古戰場】 古來戰爭の有りし處、原と一定の地名なし。

【弔】「トムラフ」と訓む。戰死したる靈魂を問ひ慰むるなり。

【文】 句尾に韻を押むものとす。

【平沙】 平かなる沙原。

【無垠】 垠音ギン、界なり、限なり、何所までもはてしなきこと。

【蓋】 蓋は、遮なり、「ハルカニ」と訓む。

【系帶】 河の水が巡り流れて帶を引くが如きこと。古文眞寶の註には「環繞也」といへり。尙頭註を看よ。

【紆鬱】 入り亂れたるなり。蜀都賦に「鬱紆陳鬱」呂延濟註に、「紆鬱繚亂也」とあり。

【黯慘】 深慘の色なり。韻會には「黯」くらき色。「慘黒也」とあり。

【悲悽】 古文眞寶の註に、「悽は「悲也、痛也」悽は「愴也」とあり。痛み愛ふること。

【愴】「クモル」又は「クラシ」と訓むべし。頭註を看よ。

【覆三軍】「覆」は沒なり、皆殺しにすること。三軍は三萬七千五百人。大軍を皆殺しにする義。

【鬼哭】 幽靈亡魂の哭泣する意。杜甫の詩に、「新鬼煩冤舊鬼哭」とあり。

【秦城、漢將、將近代焉】 辨解を要せじ。自問自答註を以て此の三句を通り出し。以て下文の網領と爲す。甚だ妙。

【蒼茫】 蒼は蒼なり、茫なり。遠にて眼に作る。漢宣帝紀に、「增二與二師役一」とあり。公事科役に使はるる意。茂は說文に「守邊也」「モル」と訓す。敵國の境、塞に軍等の所に番兵を置くを言ふ。

【荊楚】　荊は楚なり。大清一統志に、「禹貢荊州之域、周爲楚」　等は三晉の一。

【召募】　財を以て廣く兵士を招き求むるなり。召は招に同じ。

後漢、光武紀に、「選二練武藝一招二募猛士一」とあり。

【募兵】　募音「ボク」、俗に「メク」さらすなり。露はおほひなきなり。二字にて「サラス」の意訳。眞朋にさらさるる義。史記列傳本紀に、「身被二堅執一銳、首二奪於外一三年」とあり。

【沙漠草飛】　牧は草を馬に食はしむるなり。沙漠の草原に於いて、朝は馬に草を食はしむる義。

【乾糧】　裹飯すること。詩經、大雅に「乾二糗下士一」とあり。必ず眞註を看よ。

【無二甘無一之】　四方の爽欲を征伐する事が多くなり、中國の菓餅する事、代代之れ無きは無しとの意。これ漢文特有の修辭。

【我夏】　我欲と華夏となり、共に爽欲。

【文教失一宜】　文教は仁義道徳の教をいふ。宜は布なり、ひろめ行ふこと。失は能はざるに至るを言ふ。宜の字、漢文章執筆には、宜に作り、古文析義・古文眞寶には宜に作れり。

【武臣用一奇】　武臣謀道に走り、奇兵を以て戰ふこと。

【奇兵】　敵の不意を討つ兵を言ふ。孫子兵勢篇に「凡戰者以一正合、以一奇勝」

【王道】　仁義の教化。詳しくは孟子梁惠王篇に出づ。

【嗚呼嘻嘻】　皆歎息の時、複用するは、意甚だ重ければなり。

【募二良】　募は三晉の一。

【召募】　財を以て廣く兵士を招き求むるなり。召は招に同じ。

後漢、光武紀に、「選二練武藝一招二募猛士一」とあり。

【募兵】　募音「ボク」、俗に「メク」さらすなり。露はおほひなきなり。二字にて「サラス」の意訳。眞朋にさらさるる義。史記列傳本紀に、「身被二堅執一銳、首二奪於外一三年」とあり。

【沙漠草飛】　牧は草を馬に食はしむるなり。沙漠の草原に於いて、朝は馬に草を食はしむる義。

【乾糧】　裹飯すること。詩經、大雅に「乾二糗下士一」とあり。必ず眞註を看よ。

【無二甘無一之】　四方の爽欲を征伐する事が多くなり、中國の菓餅する事、代代之れ無きは無しとの意。これ漢文特有の修辭。

【我夏】　我欲と華夏となり、共に爽欲。

【文教失一宜】　文教は仁義道徳の教をいふ。宜は布なり、ひろめ行ふこと。失は能はざるに至るを言ふ。宜の字、漢文章執筆には、宜に作り、古文析義・古文眞寶には宜に作れり。

【武臣用一奇】　武臣謀道に走り、奇兵を以て戰ふこと。

【奇兵】　敵の不意を討つ兵を言ふ。孫子兵勢篇に「凡戰者以一正合、以一奇勝」

【朔門】　朔は北なり。大清一統志に、「禹貢荊州之域、周爲楚」　等は三晉の一。

【召募】　財を以て廣く兵士を招き求むるなり。召は招に同じ。

後漢、光武紀に、「選二練武藝一招二募猛士一」とあり。

【募兵】　募音「ボク」、俗に「メク」さらすなり。露はおほひなきなり。二字にて「サラス」の意訳。眞朋にさらさるる義。史記列傳本紀に、「身被二堅執一銳、首二奪於外一三年」とあり。

【沙漠草飛】　牧は草を馬に食はしむるなり。沙漠の草原に於いて、朝は馬に草を食はしむる義。

【乾糧】　裹飯すること。詩經、大雅に「乾二糗下士一」とあり。必ず眞註を看よ。

【無二甘無一之】　四方の爽欲を征伐する事が多くなり、中國の菓餅する事、代代之れ無きは無しとの意。これ漢文特有の修辭。

【我夏】　我欲と華夏となり、共に爽欲。

【文教失一宜】　文教は仁義道徳の教をいふ。宜は布なり、ひろめ行ふこと。失は能はざるに至るを言ふ。宜の字、漢文章執筆には、宜に作り、古文析義・古文眞寶には宜に作れり。

【武臣用一奇】　武臣謀道に走り、奇兵を以て戰ふこと。

【奇兵】　敵の不意を討つ兵を言ふ。孫子兵勢篇に「凡戰者以一正合、以一奇勝」

【枹鼓】　弓の枝の切れたるなり。

【雨草連】　雨草迫り戰ふこと。

【蕭蕭】　風雨のあはれに寂しき聲。杜甫の詩に、「朔風鳴浙浙、衆雨下蕭蕭」

【鬼神】　ここは戰死者の幽靈と解したし。

【吾聞レ之】　李素言て之を聞けりとの意。「還二逃匈奴一」までに係る。

【牧】　牧は趙の良將、趙の軍兵數千萬を率ゐて雁門を守備し、大いに匈奴を破りて、北方の地を開くこと千里。事、史記、李牧傳に見ゆ。文長ければ之を擧げず。

【林胡】　史記、匈奴列傳に「晉北有二林胡、樓煩之戎一」註に「正義曰、括地志云、朔州秦秋時北地也。衆經曰、加淳云、林胡即流林。爲二李牧所一レ滅也」とあり。

【力盡】　精は病なり、力盡き弱る意。詩經周南に、「我僕痛矣」

【任レ人而已。其在レ多乎】　成功は、良將(李牧の如きもの)を拔擢して任用すると否とに在り。其れ豈に軍勢を用ふるの衆多に在らむやとの意。

【周遮二險狹一】　周の宣王の時、北狄中夏に入りしかば、尹吉甫大將として之を伐ち攘ひ、北太原まで至りしとなり。事、詩經小雅出車篇に見ゆ。尙頭註を看よ。

【都尉】　軍門の官なり。晉治通鑑「秦二世元年七月、楚陳勝自立爲二將軍一、吳廣爲二都尉一」註に「都尉秦官、職掌二征伐一。漢武帝屬二大司馬一。」とあり。都は總なり、尉は平なり。軍中に在りて人衆を總べて、亂を平ぐるを掌るの義。

【長城之篇】　長城は、秦始皇の二十四年、太子扶蘇をして蒙恬と倶に築かしめし城。今夏ことごとしく說く必要もなかるべし。ここは長城附近の穴の意。

【朔方】北方の地。今の甘粛省寧夏府の地。

【飲至策勲】飲至は師旅を率ゐて帰り、宗廟に至りて告げ、飲酒する義。左傳、隠公五年に、「三年而治レ兵而振旅、鄭而飲至、以数二軍実一」とあり。(軍実は敵の車馬や、其の他の分取品)策勲は勲労を策に書きおくこと。以て有功を永遠に傳ふるなり。(策は竹簡、国史に載するをいふ)

【薄伐】詩経文王篇に、「薄伐二玁狁一」とあり。鄭箋和敬の義。以て儀容のおく深きを形容す。

【徐徐】詩経鄭風桟舟篇に、「檝楫徐徐」とあり。風情に容与せる状を見はす。

【荼毒】苦しむること。書経湯誥に、「罹二其凶害一弗レ忍二荼毒一。」とあり。

【時耶命耶】従レ古如レ斯】斯る大役の起るは、時節の然らしむるものか、将た天命の然らしむるものか、そはともかく斯る大役起りて、人民を苦しむることは、秦漢より今日に至るまで、上文述ぶる所の如しとの意。

【為レ之奈何】自ら問ふなり。此の一問によりて、人をして一大注意を起さしむ。軽軽に観るべからず。

【守在二四夷一】自ら答ふるなり。これ全篇主意の帰着する所、筆力高約。言ふ心は、唯当に徳化を以て中国を和同し、更に進んで外夷に及ぶべし。さすれば、外夷自ら天子四疆の守護と為るべしとなり。此の句、左傳、昭公二十三年の「古者天子守在二四夷一」の句を、其の儘用ふ。而も痕跡無し。老手と謂ふべし。

【如レ足如レ手】晋書、郗鑒傳に、「兄弟如二左右手一」とあり。

【生也何恩】此等の死者は、生前君王より何等の恩に与りたるや、考も与らずとの意。

【悁悁】詩経陳風澤陂篇に「寤寐無レ為、中心悁悁」註に「悁悁猶二悒悒一也」とあり。又「涓涓」に作るものあり。意同じ。尚頭註を看よ。

【布レ気】気は霧なり、布は陳なり。供物を神前に陳ねること。

【弔祭不レ至、精魂無レ依】精魂は精霊と同じ、たましひなり。張衡賦に「魂子懐レ帰、精魂回移」とあり。祭祀主催ならざれば、死者の精霊も依り附き安んずる所なしとの意。

【為レ之奈何】自ら問ふなり。此の一問によりて、人をして一大注意を起さしむ。軽軽に観るべからず。

【守在二四夷一】自ら答ふるなり。これ全篇主意の帰着する所、筆力高約。言ふ心は、唯当に徳化を以て中国を和同し、更に進んで外夷に及ぶべし。さすれば、外夷自ら天子四疆の守護と為るべしとなり。此の句、左傳、昭公二十三年の「古者天

四二 七絶三首

【解題】 前課に因みて、戰爭の悲慘を詠ぜる詩三首を出す。生徒をして諷吟せしむべし。

一、涼州詞

【涼州詞】 唐の明皇の時、樂曲多く邊地を以て名と爲す。涼州・伊州・甘州の如き、開元・天寶間の作なりとす。涼州は唐の隴右道に屬す。今の甘肅省涼州府武威縣。

【葡萄美酒】 西域の名酒。史記に「大宛葡萄を以て酒を爲る。富人酒を藏する萬餘石に至る。久しき者は數十歲にして敗れず」と。葡萄一本に滿桃に作る。

【夜光杯】 白玉にて作りし杯。西域より出づ。東方朔の十州記に、「周の穆王の時、西胡、夜光常滿の盃を獻ず。盃は是れ白玉の精、光明夜照す」と。

【琵琶】 胡人馬上にて奏する樂器。手を推して前に向くるを琵といひ、手を却けて後に向くるを琶といふ。

【沙場】 流沙の邊地、沙漠なり。

【征戰】 戰に行くなり。

此の詩は樂府題を用ひて北邊征戍の情況を敍す。實に初唐七絶の第一なりと評せらる。葡萄の名酒を、夜光の玉杯に「ナミナミ」と注いで飮まむとすれば、既も好し琵琶を馬上に彈じて、共の興を催し給ふるものあり。(以上起承)因つて興に乘じて大醉して、共の邊沙場に倒れ臥したるが、苟(誰)く他の人を笑ふ勿れ。昔より征戍に來りし者は、多けれども、幾人か生還せし者が、美人膝あらむか。多くは戰死又は病死して仕舞ふなり。吾も明日の命の知れざる身なれば、せめて酒にても飮みて樂しまざるべからずと、極めて悲壯の詩なり。

平原友朋。

二、出塞

【出塞】 匈奴の築きし塞外の城。

【飛將】 漢の大將軍李廣をいふ。

【敎】 「シム」と訓む。他をして爲さしむる義。使と同じ。

【陰山】 萬里の長城と戈壁の沙漠との間にある大山脈。

明月も關門も、悉皆の昔と變らざれども、萬里外の匈奴を征伐に行きし人は、未だ還り來らず。唯古の飛將軍の如き良將の今しもあらば、

胡人の馬をして陰山を越えて來寇せしむることは無からむものを、今の良將なきを歎じたるなり。起句は明月關の字を折用(ワカチモチフ)したりとの古人の說は、非なり。

平原評釋。

三、己亥歲

【己亥歲】 唐の德宗の貞元六年、黃巢の亂の時なり。

【準圖】 準備なる地。ここは黃巢の掠めし荊楚江淮の地方を指す。

【植柘】 木こりと草かりと。

【封侯】 封ぜられて大名となること。

江淮一帶準備の地は、今や賊徒の包圍内に入りて、土民どもは、木を伐り草を刈りて生活を樂しむ計をなし居し。君にたのみたき事は、何とぞ戰功を立てて大名に封ぜらるるなどの話を爲すことを休むることなり。何となれば、一人の大將の功を立てて大名に封ぜらるるに至る裏面には、萬人の骨を戰場とせし悲劇を演ぜられればなりと、痛めて比喩の作にして、結句七字は、尤も警拔の妙句とす。

平原友朋。

四三 兵車行

【題意】 此の詩は、玄宗の朝、盛んに兵を邊境に用ひ、民の大いに苦める狀を敍す。第四十一課、第四十二課に因みて、教授する所以なり。

【語釋】

【牽來】 牽車の聲。
【道傍】 馬のしづかに嘶く聲。
【耶孃】 父母のこと。古樂府に「不ㇾ見耶孃哭ㇾ子聲」耶娘は爺孃に同じ。
【咸陽橋】 元和郡縣志に、「咸陽縣の西南十里に在り」
【牽ㇾ衣】 征夫の衣を引くこと。
【頓足】 足ずりして躓ること。
【攔ㇾ道】 道を遮るなり。
【千二百萬ㇾ】 天にまで響く。
【點行】 兵士の徴集されて交代すること。
【防河】 吐蕃の河右を侵擾するを防ぐをいふ。一說に黄河の隄を築きて河水の汎決するを防ぐなりと。
【營ㇾ田】 屯田兵なり。無事なれば耕し、事あれば戰ふ。
【皇正】 俗にいふ庄屋。海錄碎事に「唐制凡そ百戸を一里となし、里に正一人を置く」と。
【裹ㇾ頭】 布にて頭をつつむ。丁年に及び、元服するなり。
【還】 又ぞろ。
【邊庭】 邊境。
【武皇】 漢の武帝、邊郡を開き廣むるを事とし、士卒多く死亡すれども尙悔いず。借りて玄宗を指す。
【開ㇾ邊】 邊疆を經略すること。
【漢家】 漢の皇室、武皇といふにより用ふ。
【山東二百州】 函谷關の東を山東といふ。十道四蕃志に「關以東七道、凡そ二百十一州」と。
【荊杞】 荊は「イバラ」、杞は枸杞、共に刺ある灌木。
【隴畝】 すき(鍬)
【棄兵】 兵士が苛酷に取扱はるるにより、比していふ。
【關西卒】 關西より戍卒を徴集すること。
【比鄰】 近所鄰り。
【隨ニ百草一】 草の如く枯れて仕舞ふこと。
【青海】 哥舒翰が神威軍を置き、吐蕃を防ぎて功を立てし地。隨西城傳に「吐谷渾城は、青海の四四十里に在り」唐書哥舒翰傳に「翰、神威軍を青海の上に築く。吐蕃攻めて之を破る。

更に龍駒島に築き、人二千を以て之を戍らしむ。是に由りて吐蕃敢て青海に近づかず」

【頻】 遂といふに同じ。
【頻笑】 問えて屢することを。
【嗷嗷】 衆聲の號。

此の詩、「車轔轔」より「天塞黒上千二百骨」までを一段とし、兵車行の事實を敍す。車は轔轔と響き、馬は蕭蕭と嘶き、行人は各〻弓箭を腰に帶びて、急ぐ出征の途に上らむとす。父母妻子は、見送りの爲に走り來り、共の塵の爲に、さしも大いなる咸陽橋も見えずなりぬ。まて見送りに來れる父母妻子は、いづれも兵士の衣を牽き、足ずりしつつ、道を遮いで號哭し、共の聲は、直ちに上つて雲霄に徹するばかりなり。「道傍過者」より「被ㇾ驅不ㇾ知ㇾ大與ㇾ歸」に至るを第二段とし、「長者雖ㇾ有ㇾ問」より以下を第三段とす。此の第二段は、道傍を過ぐる者が兵士に對れ、兵士が問に對して己の苦境を語ることを敍す。前段は過去より現在に至り、後段は現在より未來に至るまでを敍述して結ぶ。所しも道傍を通りかかりし人は、その兵士に向ひて、何故に泣く聲(サヘ)かなすかと問へば、兵士は答へて、徴集安代が煩雜なるが爲、已むを得ず、出で行くなり。多くの者の中には、或は十五の時より、北の方、河有の防衛に赴き、四十になりても、又ぞる屯田兵として遠邊に戍らるる者もあり。共の始めて兵役に從ひし時は、未だ幼年にして前髪姿なりしを、村長が官帽となりて元服をさせ呉れし程なりしが、やつと、役を濟まして白髪頭になりて歸れば、更に又再び邊境の守備に赴かざるを得ず。卿ち邊境に於ては、攻戰絶えず、流血は海を爲す程なるが、天子の邊を開き給ふ志、未だ止まざれば、少しも戍卒の苦を察せられず、かくは鄰りに點行するなり。今や山東二百州の地は、遠く荒れ果てて、到る處の村には、荊杞の生ひ茂れるあるのみ。たとひ健なる女が、出征の夫に代つて田を耕すとするも、到底十分の事は出來ず、稻は關狀に東西の昇もなく亂生する有樣なり。その上、衆卿ち長安邊の兵士は、苦戰に慣れ、思ひやりもなく、こき使はるることは、犬や馬の如くなり。かくて時に偶〻同情ある上長官の色を見ひ哭するあるも、兵士は格別不平を伸べて、十分に思ふ事を言ふこともならず、恐びてその役に服し居るなり。況して今年の冬の如き、關西に於て又徴集を休めず、更金に點呼せらるる上に、民の苦を察せざる地方官は、租税を責めたてること甞聞なれども、前に述べし如く、男子なき農家は、租税の出しやうがなきを奈何ともし難し。かかる惡政の下にては、男子を生むは宜しからず、女子を生みし方がはるかに好し。女を生めば、近所へ嫁にやりて、親子兄弟が納豫相會して樂しむことを得れども、男を生めば兵に取られて、行く來は戰死して、草野に屍をさらすあるのみ。彼の青海の邊などには、晝昼よりの白骨が、共の儘に取り收めもせず、新鬼は冤を、舊鬼は泣

いて哭し、ことに哭泣りて聲遠く徹しき夜などは、其の聲嗚咽として、聞くに堪へず。成宇の薨命は大方此の如し。是れ皆ち年齢若干の僧兒して別を惜しむ所以なりと。唐仲言の評に、十呼式を調ずること此の如くにして聞を亡ぼさざる者は鮮し。此れ安史の亂の由りて起る所以なり」と。

四四　孟子抄

亦有仁義而已矣

人君として庶民の上に位する者は、實に躬ら仁義の大道を行ふべきものにて、徒らに功利の事をのみ務むべからざるを言へるなれば、勉強せしめて、以て仁義の一日も離るべからざるを知らしむべし。

【孟子】　孟は姓。子は男子の尊稱。夫子といふに同じ。

【梁惠王】　魏侯罃なり。魏この時、梁を遷けて都を大梁に遷す。僭して王と稱す。惠は其の諡なり。故に梁惠王といふ。史記魏世家に「三十五年、惠王數と軍旅ニ敗ル。謚ヲ卑クシ幣帛（ツカヒモノ）ヲ厚クシテ、以テ賢者ヲ招ク。鄒衍・淳于先・孟軻皆梁ニ至ル」とあり。

【叟】　長老の稱。古人年を尊ぶ。故に臭・老を以て相尊ぶの稱と爲す。

【亦】　「モマタ」なり。他の諸説の士の如くにの意なり。時に梁は諸君を用ひて、國を富まし兵を強くせり。魏の都を遷したるも、それが爲なり。故に諸君の梁に於けるが如くに、先生も亦わが國を富ましめ兵を強くせしめんとの思召なるかとの意なり。

【利】　國を富まし兵を強くするの意。單に財利を指すに非ず。

當時は、戰國時代にて、敎化衰微し、王道行はれず。人人功利を貪んじて、仁義を口にする者なし。時に梁惠王數ゝ軍旅に敗れたるを以て、國を挙くし帑物を厚くして以て賢者を招く。孟子は道を守りて、自ら貪んじ、諸侯に仕へずして家に在りしが、之を聞きて梁に至りて、惠王に謁見せり。蓋し此の機會に乘じて、其の道を行はむが爲なり。惠王一たび孟子に面會し、因りて問うて曰ふ、先生此の遠路より梁に至るまで、遙遙たる千里の途き路をも厭ひなく、數回に來られたるは、先生も亦定めし他の諸説の士の如く、奇策妙策を用して、吾が數國を利せんとせらるる思召にや何如と。

豈不レ遠二千里一而來の一句、惠王慇懃の意を見る。王亦國を知らざるものに非ず。

【何】　目上の人の問に應じて己の意見を述ぶるに用ふ。答の字より重し。

【亦】　古の聖王の如くにの意。古の聖王は皆仁義を以て名と爲せり。

【仁義】　仁は博く人物を愛する德、義は事を行ふに理非を分

別して、各〻其の宜しきを得るやうに経綸する謂。仁を行ふには、義を以てこれを宜しくす。故に仁義といふ。中庸に「仁者人也、……義者宜也」とあり。仁者人也とは、蓋し人は皆天地が萬物を生生する理を具して、自然に惻愛の徳あるを言ふ。

【矣】 猶、也の如し、決する辭。但し也より意強し。

【而已矣】 「而已」は「ノミ」と訓ず。之に「矣」を添へたるなり。此を舎てて決して他の道なきの意。意強し。

孟子、梁王が言固無兵を以て利と為さむと欲するを知る。故に試へて曰ふ、王若し民を治めむと欲せらるれば、何ぞ必ずしも利を以て言ふことを為さむや。古の聖王の知く本至誠なる仁義の道を以てするあるのみ。此の二義の道を除きては、他に国を治むる方法あることなし。蓋し仁義て人を愛すれば、則ち国境の民を懐け保んずべく、義以て事の宜しきを制すれば、則ち萬機の政を処理むることを得べし。これ則ち治を求むるの要道なり。奈何ぞ此の治国の要道たる仁義を舎てて、利を言ふことを為さむやと。

以上は第一段にして、開巻の大旨を掲げたり。而して「王何必曰利亦有仁義而已矣」の二句は、一章の骨子なり。以下詳かに其の意を申明す。

【大夫】 家老なり。卿をも兼ぬ。

【士】 大夫に次ぐ身分の者。

【庶人】 平民なり。

【上下交征利】 交は交互の意なり。「コモゴモ」と訓ず。征は取なり。「トル」なり。上は王より下は庶人に至るまで、上の人は下に向ひ、下の人は上に向ひて互に利益を取り合ふ。故に「上下交征利」といふ。

【乘】 一車を乗といふ。

【萬乘之國】 天子の畿内の方千里あるものは、戦争の時、兵車萬乗を出す。（古は戦に車を用ひたり。故に封土の大小を車の数にて示す。兵車一乗は士三人卒七十二人なり）されども、ここの萬乗は、当時の大国たる齊・楚の如き諸侯の国を指していふなり。

【千乘之國】 諸侯の重臣の国を指す。方百里にして車千乗を出すもの。晉の六卿、魯の三桓、齊の田氏の類なり。故に家といふ。方百里とは方千里の百分の一なり。朱註に十分の一とあるは誤れり。

【百乘之家】 諸侯の大夫をいふ。

【弑】 下の者が上の者を殺すなり。

【取】 得の字と倣して看るべし。

【苟】 誠なり。

【慊】 飽なり、満足の意。

此の一節は、上文の「何必曰利」の意を承けて、利を求むるの害を詳説し、王の会城徳望と思ひ居たる利の一字を排斥して、徳地を開めず。其の利を求めて止まざれば、遂に弑逆の禍あるに至ることを結言して、王の所謂を塞からしめ、惕然として猛省する所あらしめんとす。夫れ王は一国の主にして、大夫以下士庶人の標準として則り効ふ所なり。今、王は仁義を捨てて利を貪んじ、自ら儉徳を蔽らし、何等かの事を以て吾が国を利益せんと曰ひ、一たび利を求むるの端緒を開く時は、人人皆之に效ひ、大夫たる者も何を以て吾が家を利せんと曰ひ、士分の者も庶人の者の為す所を挙げて何を以て吾が身を利せんと曰ひ、此の如く各吾を利せんとのみ思ふ時は上たる者は利を下の者より取らざるを得ず、下の者は利を上たる者より取らざるを得ず。上下相互に利を取り合ふの結果は、簒悦となり国家となりて危亡の禍、請に此より起らんとす。かくして利を挙ふの論は、軟道の大罪を致てするに至る。されば萬乗の国に於ては弑は其の君を弑する者あらば、必ず其の君の臣人に非ずして其の郡大夫たる千乗の家より出でむ。何となれば彼が利する所は、萬乗に在るを以てなり。又千乗の国に於ては弑は其の君を弑する者あらば、必ず其の臣人は其の家老たる百乗の家より出でむ。何となれば、彼が利する所は、千乗に在るを以てなり。呼かかる軟道の大悪を犯すに至るは、畢竟其の貪欲の見らざるが為に外ならず。否否国の

【遺】 忘れ棄つるなり。

利を求むるの害は、上文に説く所の如し。因りて前の有仁義而已矣の句を承けて、さて仁義の道に至りては、一寸迂闊にして益なきが如くなれども、其の実は未だ曾て利ならずんばあらず。何となれば不仁の人は其の心測背にして其の親を忘れ棄つる者あれども、仁者に至りては、親を愛するの誠心、天性より出づれば、未だ古より仁にして其の親を棄つる者は一人もあらざるなり。君臣は義を以て合す。義は上下の分を正し、事の宜しきを制するものなり。不義の人は其の心意猜にして其の君を慢る者あれども、義を好む人の如きは、君を敬ふの念厚くして、能く臣たるの道を盡す。故に未だ

古より稀にして其の言を信用にし、先づ自己の私利を計るが如き者は一人もあらざるなり。故に言たる者故く仁義を行へば、大夫士庶人に至るまで、皆これに見習ひ、國中擧く仁義の民となりて、各〻其の親を愛する孝子となり、其の言を敬ふ忠臣となるに至る。然れば則ち其の國を利すること此より大なるものなし。安んぞ他の大利大益ある仁義を舍てて、彼の有害き所の利を言ふべけむや。

以上第二段は全章の本論にして、利を言ふの害と仁義の利とを擧げて以て前の骨子たる二句の意を申明して、梁王の反省を望めるなり。

【亦】 勞及の辭。古の梁王皆仁義を言ひて之を行へり。王も亦といふの意。

孟子對曰王何必曰利亦有仁義而已矣

【孟子對曰】 さて利の大害あること、既に前に述べたるが如く、仁義の大利あることも、亦前前に說く所の如し。然れば王若し國を治めむと欲し給はば、古の堯王の如く、王も亦唯仁義と言ひて之を行ひ、國人をして各〻其の親を愛し、其の君を敬はしめむのみ。何ぞ必ずしも利と言ひて、以て人の爭奪狹狀の心を導き、危亡の禍を招くことを恐るむやと。

以上第三段、重ねて骨子の二句を言ひて全章の意を結ぶ。

勞頭の一句は、王の問を承けたるものにて、利が主となるが故に、「何必曰利」の句を前に置きたり。ここは仁義が主となるが故に、前句を倒置して「曰仁義而已矣」の句を前に出したるなり。此の二句は、既に屢しく言句に現じて全章の意を結ぶ。

本論中、利の害を說くの一節は甚だ長く、仁義の利を說くの一節は、甚だ短し。是れ詳略の法なり。

又、亦辭・矣・何必・而已矣などの、虛字を以て語意を幹旋するなり。注意すべし。

案ずるに、通儒に、此の章の文を述べ、其の末に「王曰善」の三字あり。されば梁王、孟子の言を聞いて、已の非を悟りしものか。然れども必ずしも其の言を用ふること能はず。故すべし。

參前倉卒の間、皆眞用を主とし、識見の卓越を以て感せらる。嘗て梁王を評して曰く、「惠梁王も決して馬鹿にはならぬよ。孟子屋を逃しとせずして來る。亦將に以て我が國を利するあらむとするかといふ質問を發した。今時の大名に此の位の質問を發し得るものはあるまい」と。衆の言、亦傾聽すべし。記して以て此の章に關する逸話となす。

天下惡乎定

人君生を好むを以て心と爲し、人を殺すことを嗜まざれば、天下の民悅びて服せざることなきを言ふ。孟子の所謂王道を順序正しく、且つ極めて具體的に說明せり。

【梁襄王】 惠王の子嗣なり。

【望レ之】 遠くより見るなり。

【就レ之】 側に近寄るなり。

【不レ似二人君一】 不レ見レ所レ畏 人君たるの態度に似ず一威儀の具れ備るべき所あるを見ず。

【卒然】 全通なる語。此の副詞、梁王の人物活現す。

【惡乎定】 何れの所に落ち着きて定まるべきかとなり。

【定二乎一一】 一統に歸して然る後定まるべしとなり。

【不レ嗜レ殺人者能一レ之】 仁政を行ふ者、能く天下を一統せんとなり。

【孰能】 孰レ之 朱子曰く「孰誰也」とあり。略方する意。

【七八月】 周の七八月は夏暦五六月に當る。

【油然】 雲の盛なる貌。

【作】 興すなり。

【油然】 雨の盛なる貌。

【沛然】 興起する貌。

【人牧】 民を牧する君なり。「牧」は養なり。放し畜ひの意。牧人の牛羊を牧養するに比す。此の二字、その用法の巧妙を見るべし。

【如】 「モシ」と訓ず。普の似たるより「若」に通じて用ふ。論斷、泰伯篇にも「如有二周公之才之美一」と。

孟子見梁襄王出語人曰望之不似人君就之而不見所畏卒然問曰天下惡乎定吾對曰定於一孰能一之對曰不嗜殺人者能一之

【引レ類】 首を延ばすなり。辭源に「延レ首遠望、望之切也」「翹」は朱註に「擧也」とあり。

【由】 猶に通ず。孟子に此の用例多し。公孫丑上篇に「以レ齊王、由レ反レ手也」

孟子の言狂闊なるに似たり。然れども其の實確然として易ふ可からざる千古の定論なり。蘇軾曰く、「予孟子ヨリ以來ヲ觀ルニ、漢ノ高祖ヨリ光武及ビ唐ノ太宗及ビ我ガ宋ノ太祖皇帝ニ至ルマデ、能ク天下ヲ一ニセシ者四君、皆人ヲ殺スコトヲ嗜マザルヲ以テ之ヲ取セリ。其ノ餘ハ人ヲ殺スコト急ニ、多クシテ、而シテ天下急ニ亂ル。秦・晉及ビ晴ハ力能ク之ヲ合セシモ、而モ殺スコトヲ好ミテ已マズ。故ニ或ハ合シテ復分レ、或ハ絕ニ以テ國ヲ亡ボス。孟子ノ言、豈ニ偶然ナランヤ」と。

明治天皇御集を拜讀し奉るに、明治三十七年の御製に、

國のためあだなす仇はくだくとも
いつくしむべき事な忘れそ

の御製あり。是れ豈に殺を嗜まざるのみならず、更に進んで慈愛を施すの意に非ずや。かしこしともかしこし。

自條然後人條之

此の章は諸侯の不仁にして以て自ら滅を取るを戒むる